
-月のカケラ-

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 月のカケラ -

【Nコード】

N9168H

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

今から八百年前。この星【ルーファ】で世界中を巻き込む大戦争があつた。その戦争で人間が犯した最大の過ち、それは――月の破壊――。後に【月の裁き】と呼ばれることとなるこの出来事の後、破壊され地上に舞った月の破片を人々はこう呼ぶこととなる。――月のカケラ――と。

A c t 1：男と少女とクマのぬいぐるみ（前書き）

以前、投稿していた内容をそのままに誤字などを修正し、再投稿しています。かなりの長編ですが、自信作ですので是非読んでみてください。設定をかなり練りこんであるSFファンタジーです。

A c t 1：男と少女とクマのぬいぐるみ

街の片隅のとある場所に、それは建っていた。

その建物のドアの上には^{ルティ}UTEという文字の看板が掛けられている。その建物は外壁が白いレンガで組まれていて、パツと見綺麗に見えるのだが、よく見るとそれほど綺麗でもない。どうやら洗ってもすぐには落ちないタイプの汚れがついているらしい。

そんな建物に近づく七、八歳ほどの一人の少女がいた。少女は少し困惑しているかのような顔つきで、恐る恐るその建物のドアを開ける。中はさらに殺風景。部屋の中央に机と椅子があるくらいで他にあるものと言えば……冷蔵庫だろうか。生活用品がほとんど揃っていないんじゃないかと思えるようなくらいなものもない。

そんなことを思いながら部屋の中を見渡していると、部屋の奥に見えるドアが開き、中から若い感じの男性が上半身裸で出てきた。なかなかの体格をしている男は銀色の髪をしていて、その瞳は金色だった。少女は見たことのないその瞳の色に少し驚きながらも、男性を見ていた。

「はあ……なんか腹の調子が悪いんだよなあ。やっぱり胃薬ちゃんと飲まないで駄目だな」

ため息をつきながら独り言を言い終わった後、その男は目の前にいる少女に気がついた。

「あれ、どうしたのお嬢ちゃん？　かくれんぼで人の家に勝手に入り込んできちゃ駄目だよ」

「か…… かくれんぼじゃないもん！ ここつて依頼すればなんでもやってくれるお店なんでしょ？」

少女は少し怒り気味で言い放ちながら、疑問に思ってることを聞いた。

「そうだけど、かくれんぼの隠れ場所にするって依頼はちょっと……」

「だから違うってば！」

少し怒り気味だった少女は遂に本気で怒り出した。

「あ、そうなの？ じゃあ何かな？ 依頼を受けるっていつでもお金がいるんだけどな」

「お金は後で払うから。だから、セリナと一緒に来て」

セリナというのは少女の名前らしい。自分のことを名前で言う辺り、やはり子供だ。

「ちよつと待ってよ。来てってどこに？ なんで？」

セリナは少し沈黙した後に言った。

「あのね。セリナが大切にしていたクマのぬいぐるみを失くしちゃったの。お願いだから一緒に探して」

どんな依頼かと思いきや、クマのぬいぐるみを探してほしいということ。男は少し緊張感が溶けたような面持ちになった。

「んー。探してやりたいのは山々だけど。お兄ちゃんも忙しいからね。そういうのは家族の人とか、警察の人に……」

警察の人になんて言ったけど、警察に言ったところで相手にされないのは同じだろうと男は思った。

「嘘だー。ほんとに暇なんでしょ？ お腹壊して独り言とか言ってるくらいだもん。お母さんが言ってたよ。独り言を言う人は寂しがり屋さんだから、話し相手になってあげてねって」

「あ、そう……。やさしいお母さんだねえ。だったらそのやさしいお母さんに一緒に探してもらいなさい」

男は少しムキになっているようだ。

「駄目なの。あなたじゃなきゃ駄目なの！」

芝居染みた台詞を言うセリナを横目に、ため息をつく男。

「なんなの？　なんか訳ありってやつ？　話してみ、お兄ちゃんが聞いてあげるよ」

そう言うときセリナは男に向かってその訳を話し出した。

セリナによると、失くしたクマのぬいぐるみは誕生日に親からもらった大切なものだという、友達の家遊びにいった帰りにどこかで失くしたようだ、どこで失くしたのか分からないという。そこでなんでも依頼すれば引き受けてくれるという男の元へと、一緒に探してもらったために来たそうなのだ。

「えーと。今の話の中に俺じゃなきゃ駄目だつて言う部分があったか？」

「いいから、とにかく一緒に探してよ」

このままではラチがあかないと、男の心はセリナの強引な押しに遂に折れた。

「分かったよ。探せばいいんだろ。探せば」

「ホント？　やった。ありがとう。そうだ。お兄ちゃんの名前はなんて言うの？」

「俺か。俺の名前は”ティキ”だ」

「なんか、気の抜ける名前だね……」

なんかこの子、時々カチンと来るんだよねと思いつつもティキは上着を羽織ると、セリナと一緒に街へと足を運んだ。

ティキが住む街は、なかなか活気のある街だ。国の中央には中央官邸という役所の大きな建物があり、ティキ達のいる場所からもその建物がよく見える。その中央官邸はある意味では国のシンボルとも言える。

「それで、どの辺で失くしたの？　正確な場所が分からなくてもだいたいこの辺かなあってのがあるでしょ？」

「んー。わかんない。でも、あの日は帰りにあっちにある倉庫のほ

うへ行つたの」

そう言いながらセリナはその倉庫があるほうを指差した。

ティキはその方向を見る。セリナが指さす方は、賑やかな街の中心街からはずれたあまり人が近寄らない場所だ。というか近寄る理由がない。今は、朽ちた建物が少し残されている程度で、不良や、若い怖いもの知らずの連中が集まるような場所だ。そんな場所に十歳にも満たない小さな少女が一体なんの目的で行くというのだろうか。そんな疑問を抱きながら、ティキはセリナが示す方へと足を進める。

しばらくいくとセリナが示した倉庫が見えてきた。この辺は街の中とは違い人の気配がまったくない。当然といえば当然なのだ。

「おいおい、ほんとにこんなところに来たのか？ よく一人で来たもんだな」

「うん、ごめんね。セリナも来たくはなかったんだけど……」

「あん？ どういう……」

ティキがセリナの言う言葉の意味を聞こうとした時、背後に殺気に似たものを感じ、とつさに身体を引いた。そこには黒い服を着た人間が数人立っていた。

「おいおい、こりゃあどういうこつた？」

ティキの放った疑問を聞いていたのか、目の前にいた黒い服を着た男の一人が言う。

「フフフ、まんまと罠にかかったな。その少女はお前をおびき寄せるための罠だったのさ」

「罠？ おいおいあんた等、誰かと人違いでもしてるんじゃないか？ 俺はお前らのことなんて……」

すると、黒い服を着た男は、ある物を取り出した。それに少女は反応する。それは、クマのぬいぐるみだった。

「これを探していたその少女と偶然ここで会ったんだ。そこでそ

の少女と約束した。お前を連れてくれば、このクマのぬいぐるみは返してやるとな。”銀色の髪 of 戦士”……”

その言葉にティキは反応する。

「なるほど、クマのぬいぐるみを人質にしたってわけか。相変わらずやることがセコいんだよ。”星の導き”」

「人質？ 勘違いするな。ただのぬいぐるみだぞ。お前さえくれば、こんなぬいぐるみなんかに用はない」

そう言うのと、男はぬいぐるみを地面へと落とし、足で踏みつけた。

「あ、ひどい！ 返してくれるって約束したのに」
セリナの目からは雫が零れている。

「約束？ 覚えてねえなあ」

黒い服を着た男は笑いながら言う。しかし、その笑いはすぐにかき消される。

ティキの拳が男の頬を真芯で捕らえたからである。殴られた男はその勢いで仰向けに倒れる。それを見ていた周りの奴がティキのほうを睨みつけて言う。

「き、貴様っ！」

「俺も、約束の一つも守れねえような奴だから、約束は守れとは言わねえ。……けど、本当に大切なものが何かってことは痛いほど分かっているつもりだ」

「あ？ なに言ってるやがる」

「わかんねえか？ お前らじゃ俺には勝てないって言うてんだ」

ティキの言葉を聞く間もなく、その場にいた数人の男がティキに向かって殴りかかってきた。あるものはナイフを取り出し、あるものは銃を取り出し。しかし、ティキはそんなことにも怯むことなく、次から次へと襲い来る男達に拳を浴びせ、気絶させていった。そして、その場にいた黒い服を着た男達全員を気絶させるのに五分とからなかった。

「よう、大丈夫か？」

泣きじゃくるセリナにティキは話しかけた。セリナは泣きながら、ティキのほうを見た。そして、ティキの後ろで倒れてる男達を見てティキに言った。

「あのヒドイ人達、みんなやつつけたの？」

「ああ、お仕置きしてやったぜ。ホレ。探しもんだ」

ティキはそういうとクマのぬいぐるみをセリナに渡した。

「……ありがとう」

セリナは涙を拭き、笑顔で答える。

「それ、大切なもんなんだろ？」

「うん、お母さんとお父さんからもらったんだよ」

「そうか。自分の大切なものを見つけたんなら、絶対離すんじゃないねえぞ。そんなもんそう簡単に見つかるもんじゃないんだ。少し汚れたけど、お前がそいつを想う気持ちは、決して汚れてねえんだからよ」

セリナはキョトンとした顔をしている。でも、子供ながらにその言葉を理解したのか。笑顔になると、頷いた。

「さて、依頼終了っ！ んじゃあ帰るか。送ってってやるよ」

ティキは、セリナに手を差し出す。セリナは、差し出された手を掴むとティキと一緒に歩いていった。

——その背に確かな想いを乗せて。

Act1：男と少女とクマのぬいぐるみ（後書き）

設定資料は以下のサイトにて公開中です。

<http://www13.atwiki.jp/riku-u/>

Act 2：複雑な目的

——ルティー。

そこには、様々な依頼が舞い込んでくる。金さえ払えばどんな依頼でやる。それがルティーの方針だった。数々の依頼、そのほとんどが警察を頼りに出来ないような依頼だ。

この星”ルーファ”にはもちろん、国が存在する。そして、その中心である政治が存在し、それに従事し人の治安を守る警察なども存在する。国は島ごとに分かれている為、政治は島ごとに違う。島は主に地上から伸びた土台の上にあり、そこは天空の楽園という意味から”サガルマータ”と呼ばれている。サガルマータは、ルーファに100以上存在している。そして土台の数だけあるサガルマータの中層に存在するのが”ストラム”という場所である。それよりもさらに下いわゆる土台がある地上は、アंकレストと呼ばれる場所。人間はおろか生物すら一切存在していない。

なぜ生物が一切存在していないのか。それは、遥か昔起きた大戦争で起こった”月の裁き”。その出来事により破壊された月の破片が地上に降り注いだのだ。そして長い年月をかけ月の破片は粒子となり、地上を太陽の光がほとんど届かない霧が覆い尽くす暗闇の世界へと変えた。地上で暮らしていた生物達は地上を追われ、霧がなく太陽の光が届く遥か上空に、サガルマータを創った。

ティキもそんな地上から伸びるサガルマータの国の一つである、リシュレシアという国の街に住んでいた。そして、そこでルティーを営んでいた。ティキの目的は月の復活。月の破壊により、ルーファ

アの重力バランスが崩れ、星が崩壊への道を歩んでいるのだ。それを救うには、月を復活させるしかない。そして、その目的のためにルティーを開いて、情報を集めていたのだ。

そんなルティーに現れた一人の男。見た目には、特に特徴のない黒髪の普通のどこにでもいるような男だ。ティキは自分が椅子に座り、男に立たせたまま男の話を聞いている。このルティーには椅子は一つしかないので、必然的にティキが座る形となるのだろう。

「それで？ 依頼はなんだ？」

「ああ、俺の家の近くで暴れまわってる暴走族の奴らを追い払ってほしいんだ。金なら出す」

男は机の上にカバンを置き、中身を開けた。そこには大量の現金があつた。軽く500万オールドラムくらいはあるだろうか。（オールドムはこの星の共通通貨。aurum。略称はAU）

「お前、これ……」

ティキは大金を目の前にして目を丸くして驚いている。

「頼む。奴らを追い払ってくれたらこれを全部やる。だから、奴らが俺に近づかないようにしてくれ」

ティキは男のほうを見る。そして、椅子から立ち上がると男の肩を掴み男を移動させた。移動させた先は、椅子。そして、ティキは再び男の前に立つ。

「いやー。失礼しました。このルティーを営むティキ。お客様の依頼にはどんな内容でも快く引き受けさせていただきます。あ、お茶も出さずに失礼しました。今、お持ちしますんで」

どうやら、お金に釣られたようだ。単純というか非常に素直で分かりやすい。ティキはお茶を男に出すと話の続きを始めた。

「それでえーと、お宅の家の近くで暴れまわってる暴走族を追い払えばいいんでしたっけ？」

ティキの顔はとてもニコニコしている。

「あ、ああ。奴らなんだか知らないが急に現れて、俺の家の周りで暴れまくってるんだ。迷惑したらありやあしない。だから追い払って欲しいんだ」

「おまかせください。この僕に不可能なことなどないので、すぐに追い払って見せますよ」

「ありがとうございます。じゃあ、地図を描くからすぐにでも頼む」

「え？ あなたは一緒に来られないんですか？」

「あ、ああ。追い払うことに関わってるなんて思われたら嫌だしね」
男の額からは汗が染み出してきていた。よほど、その暴走族達に会うのが嫌なのだろうか。

ティキは、男から地図を受け取ると店の外に出た。そこにはティキ自慢の愛車が置いてあった。愛車とはいっても車ではない。この世界でのシェアは世界一。この世界の主要の乗り物『リバティー』と呼ばれる小型の飛空型のバイクだ。それは白く輝き、研ぎ澄まされたフォルムはまるでダイヤを思わせる輝きを放っている。

ティキはそれに跨りエンジンをかける。エンジン音は凄まじいほどの快音を出す。それにまたがっているティキは、サングラスをかけるとハンドルを捻る。同時に左右にあるマフラーが火を噴く。しかし、このリバティーにはタイヤは存在しない。島である各国を自由に周れるように、空中を走るのだ。それは、空中を最高速度300キロで自在に飛び回る隼のような乗り物。ティキはそのリバティーに名前を付けていた。

その名前は『ファルコン』。改造を重ね最高速度600キロを誇るティキの愛車の名前である。とはいえ、実は違法改造をしまくりなのだが。

男が書いた地図の場所へとやってきたティキは、辺りを見回した。すると、辺りからリバティー特有とも言えるエンジン音が聞こえる。入り組んだ街中のある一角のこの場所は、いくつかの家が密集していて、住人からすればそのエンジン音は騒音以外の何者でもないだろう。男の依頼ももつともだと思ったティキは、そのエンジン音のするほうへと向かった。

そこは、少し開けた公園のような広場だった。そこには、リバティーに乗った何人ものいかにも暴走族ですと言わんばかりの人間が群れていた。ティキはファルコンから降りると、その群れへと向かって歩いていく。

「あ？ 誰だあいつは？」

ティキの接近に気がついた族の一人がティキのほうへと向かってくる。

「おい、おめえ誰だよ？ なんか用か？」

ティキの目を睨みつけながら言う。ティキはその族の目を見て笑顔になる。

「ああ、お前らの頭に用があんだよ。呼んできてくれねえか？」

「ああ？ 何言ってるんだお前？ 俺らの総長に用だ？ 俺達が誰だか分かってんのか？」

男はティキの顔に自分の顔を近づけて言う。

「分かってねえのはお前らだろ？ お前らに話したって仕方ねえから頭を叩いて言ってるんだ」

「なんだと！ この野郎っ！」

男はティキの服に掴みかかり、ティキを締め上げる。

「……一度しか言わねえぞ」

「あ？」

「離せ」

ティキは掴みかかっている男の目を睨みつけた。男はティキの気迫に押されるように、まるで蛇に睨まれたカエルのように動けなく

なり、ティキの服を離した。ティキは、掴みかかれていた部分を手で払う。

「早く、頭を呼んでこい」

「てめえ調子のんじゃねえぞ！」

ティキと男のやり取りを見ていた他の族達が、ティキの周りに集まってくる。ティキはため息をつく。

「やめろ」

今にも飛び掛りそうな男達を止めたのは、その族達を率いるこの暴走族の総長だった。他の野生の獣のように殺気だった男達とは違い、これだけの人数をまとめているだけあってさすがといったところか、男は冷静そのものだった。

「ラルさん。でも……」

「わかんねえのか？ お前達が束になってかかった所で、この男にはかすり傷一つ付けられやしないさ」

「あんたが、頭か」

ラルと呼ばれた男は一人前に出てくる。

「ああ、俺が頭だ。俺達になんの用だ？」

「俺はティキって言うんだ。ルティーっていう、まあいわゆるなんでも屋をやってる。その俺の店に依頼があつたんだよ。この辺りで噴かしている族共がうるさいから追い払ってくれってな。なあ俺も無駄な争いは好きじゃないんだ。大人しくここから立ち去ってくれよ」

「……そうか。この辺りに住んでる人達には迷惑をかけちまったなけどな、悪いがその頼みは聞いてやれそうにない。まだ目的を果たしてないからな」

ティキはその言葉に疑問を浮かべた。

「目的？」

「ある男を捜してるんだ。そいつはこの辺りに住んでる。だからそいつを見つけるまでは、この場所から去るわけにはいかない」

ティキは腕を組み、足の先をリズムよく上下させる。

「んーじゃあ、俺もそいつを捜してやるよ」

「……？ 捜すって、あんたには関係のない話だろ？」

「いや、関係ないって言いたいんだけど、俺も報酬500万オーラムがかかってるからなあ。なんとしてもお前らをこの場所から追い払わなきゃいけないんだよ」

ティキの言葉にラルはハツとする。

「500万？」

「そうなんだよ。なんか見た目はパツとしない奴なんだけどな。依頼してきたと思ったら、いきなり目の前に500万オーラムもの大金が現れたんだよ。ビックリしたんだけど、お前らをこの場所から……」

ラルは突然、ティキの肩を掴みティキを揺する。

「どこだっ！ その男はどこだっ！？」

「お、おい。ちよつと」

「俺達が捜してるのはその男だ。あいつは、あいつは仲間を……仲間を殺しやがったんだっ！」

男の声は、周りのエンジン音にも負けないくらい大きな声で、遙かな空に響き渡った。

Act 3：仲間と復讐と楽しさ

ラルは、ティキの肩に掴みかかったまま話を切り出した。

「昔は大きくて青い海つてもんがあつたらしい。けど、俺達はその海を写真でしか知らない。その代わりに俺達にはこの青い空がある。リバティーに乗ってこの空を駆けるとき、嫌なこととか全部忘れるんだ。とつても気持ちが良くて、俺はこの空をリバティーで駆けるのが好きだった。……今みたいにこいつ等が集まる以前から二人で一緒に、この空を駆けてた奴がいたんだ」

ラルはティキの肩から手を離すと空を見上げた。

「そいつの名前はレイ。いつもそいつと一緒に空を駆けていると、いつの間にかこんなに仲間が集まって、いつしか人の迷惑も考えずに、こいつらと一緒に空を駆けるのが楽しくって仕方がなかった。滅び行くこの星でこんな楽しいことがあるんだって。レイともこいつ等共いつも一緒に笑って楽しんで」

ラルはその心に昔のことを思い出していた。

「レイは、リバティー乗りの才能があつたんだ。あいつの腕は確かだった。俺達の誰もあいつに勝つたことがなかったんだ。で、小さい大会だけと他の国で行われてるリバティーのレースに出場するこゝとが出来た。期待なんかしてなかったんだけどな。あいつ、その大会で優勝しやがったんだ。その賞金で、宴も開いてすげえ楽しかった」

ラルは再びティキのほうを見る。

「でも、その次の日レイは変わり果てた姿で発見された。そして、俺らの仲間の一人が消息を絶つたんだ。レイが得た500万オーラムもの大金と共にな。消えたのはサニエルっていう男だ。俺は、あいつを絶対ゆるさねえ。必ず見つけ出してぶつ殺してやるんだ」

ティキは、腕を再び組み、目を閉じてなにか考え込んでいるよう

な姿を見せた。

「んーでもなあ。どんな理由があろうと、俺はお前らをここから追い出さなきゃならねえからな。そうしねえと、あの金も貰えねえわけだし」

「だから、あいつの場所を教えろつて。そしたら俺らがここにいる理由もなくなるだろ」

「んーでも、クライアントの情報をそう安々とは……」

「さっきからさんざん報酬やらなんやら話てんじゃねえか」

ティキは手を頭の後ろにしながら笑った。

「あはは、確かに。んー、あ、そうだ。だったらこうしよう」

「あ？」

ティキは自分が乗ってきたリバイターを指さす。ラルもティキの指す先を見る。

「お前もリバイター乗りなんだろ？ 俺もそうだ。どうだ。リバイターのレースで勝負しよう。俺が勝ったらお前らは大人しくこの場から去る。お前が勝ったら、クライアントの居場所を教えてやる。どうだ？」

ラルは眉間にシワをよせて、ティキのリバイターを見る。

「……わかった。いいだろう勝負だ」

「よおし、男ならそうこなくっちゃな」

ティキは嬉しそうに笑う。ラルの顔は真剣そのものだった。

ティキもラルも自分のリバイターに乗り、エンジンを噴かしながらスタートの合図を待っている。

「ゴールはさっき渡した地図の場所だ。いい勝負をしようぜ。ラル」
ティキは笑顔でラルに話しかけるが、ラルはひたすら前を見ていてティキの声は聞こえていないようだった。

「あら、随分真剣なのね。まあいいけど」

族の男がスターターをやるようだ。手に持っているタオルが振り下ろされた時がスタートの合図となる。

男がタオルを振り下ろすと同時に、ハンドルを捻った二機のリバティーが火を噴く。

スタートを先行したのはラルだった。ティキもその後ろからついていく。

「おお、なかなかやるじゃねえか」

ラルは、スタートのスピードを生かすようにそのまま加速をさらに付ける、最初の角が見えてくると、ほとんどスピードを落とすことなく流れるように角を曲がっていった。ティキはその後ろをついていっている状態だ。

「おほっ、すげえこいつぁ遊んでたら負けちゃうな」

ラルは後ろからついてくるティキをミラーで確認すると、追い抜かれないように自分に出来る最大限のコースを位置取り、リバティーを走らせた。すると次のカーブが見えてきた。ラルは再び体勢を倒し、そのカーブを攻めていく。その瞬間ラルは、後ろからの巻き込み風を感じた。何事かと横を見ると、ティキがいたのだ。驚くことに、直線ではなくカーブで差を縮めてきたのだ。ティキはそのままラルを抜き前へと出る。

「くっ、なんてヤロウだ」

ラルはティキの背中を見ながら、再び前に出るために、タイミングを見計らっていた。だが、ティキは抜かせない、一度前に出たらもう二度と抜かせない。その背中はどう言ってるように見えた。

「なめるな。負けねえぞ。あいつは、レイはこんなもんじゃないんだ。俺は絶対に負けない。負けるわけにはいかねえんだ！」

ラルの気迫がティキを上回ったのか、ラルが再びティキを抜いた。「へえ。マジでやるな。おもしれえ、おもしれえじゃねえか。いくぜええええ！」

ティキはハンドルを思いっきり捻った。その瞬間、時速600キロとも言われるティキのリバティーのファルコンが大きく加速した。

これが本領だと言わんばかりの加速。そのまま一気にラルを抜くと、大きな差を付けて引き離れた。

「すげえ、あいつ、なんて奴だ」

ラルはティキの背中を見て言う。それと同時にラルの心臓は鼓動を早くしていた。真剣だったラルの顔が少し緩む。

「おもしれえ。楽しいよレイ。お前にもこいつと勝負させたかったな」

ラルの顔には笑顔が満ちていた。ティキはそんなラルの表情をミラー越しに見ていた。するとティキが突然本来の進路から逸れて行く。

「……？ あ、あいつどこに？ まさか勝負を放棄する気か？ 逃がさねえぞ」

ラルも、進路を逸れたティキの後ろをついていく。ティキは後ろからラルがついてきていることを確認しながら、大きく進路を逸れていく。

いくつかの角を曲がり、ついたのはルティー……を大きく越えてさらに遠くへ。さらにいくと目の前には男がいた。手にはかばんを持っている。先ほど、ルティーに依頼にきたサニエルとか言う男だ。ティキはその男を見つけると、大きくクラクションを鳴らした。その音に気がついたサニエルは後ろを振り返る。その瞬間、ファルコンがサニエルの顔面にぶつかった。

ぶつかった衝撃でサニエルは吹き飛ばされ、しりもちをついた。ティキはリバティーから降りると、倒れているサニエルの前に立った。

「よう、どこにいくんだ？」

猛スピードで顔面にリバティーを当てたれたサニエルは鼻から血を流しながらも、なんとか意識は保っていた。ティキの存在を知る

と、少しニヤつきながらティキを見る。

「あ、いや、ちょっと用事を思い出して」

「それは、仲間よりも大切な用事かい？」

その時、後ろからエンジン音がする。それは、ティキの後ろからついてきていたラルの乗るリバティーのエンジン音だった。ラルはそこに倒れているのが、サニエルだとすぐに気がついた。

「サ、サニエル。てめえ」

「ひっ、ラ、ラルさん。ひえごめんなさい」

ラルはサニエルの言葉などまるで聞いていないかのごとく、眉間にシワをよせ凄い形相で、サニエルにむかつていった。しかし、それは途中でティキによって止められた。

「邪魔するなっ！そこをどけっ」

「……こいつをどうするつもりだ？殺すのか？」

「当たり前だ！そいつは俺の仲間を、レイを殺しやがったんだ」

「お前の気持ちは分からないでもない。けど、こいつを殺したところでレイは帰ってこないんだぞ」

「うるせえ！お前に大切な仲間を殺された俺の気持ちが分かっただまるかっ！」

「わかるさ……。俺も、俺も大切な仲間を失ったからな」

ティキとラルのやりとりを見ていたサニエルが、突然立ち上がりカバンを開ける。そして、中のお金を取り出す。「お、お願いだ。これをやる。だからそいつをやっつけてくれ」

ティキはサニエルのほうを見ると、お金を手で受け取る。そして、そのまま札束を握った拳で、サニエルの顔をぶん殴った。殴られたサニエルはそのまま仰向けの姿勢で倒れる。今度は、完全に気を失ったようだ。

「いるかよ。この金はお前のもんじゃねえだろ」

ティキは再び、ラルのほうを見る。

「復讐なんか止めとけ。憎しみは憎しみを生んで、その連鎖は永遠に終わらない」

「そんなこと分かってるさ。けど、けど、こいつは……」

「憎しみが止まらないんだったら、連鎖が止まらないんだったら、第三者を頼れ。その連鎖を打ち切ってくれる第三者をよ。復讐なんか空しいだけだぜ」

「でもそれじゃあ、俺はあいつに会わせる顔がない。死んだあいつに、どういふ顔で会えばいいんだよ」

ティキは笑顔でラルの後ろを指さした。ラルはティキの指さしたほうを見る。そこにはラルが乗ってきたリバティーがある。

「あるじゃねえか。そいつがよ」

「え？」

「そいつに乗ってレースをしてるときのお前の顔、すげえ良かったぜ。すげえ楽しそうだった」

「……俺が？」

「なんだよ。自分で気がついてなかったのか？ 顔なんてよ。笑って会えばいいんだよ。大切な仲間が死んじまって、悲しいのも殺した奴が憎いのも分かる。でも、それを理由にいつまでも人生を楽しまねえのは損だぜ。お前の仲間は死んだけど、そいつの魂も死んだのか？」

ラルは、リバティーのほうへとむかっていく。そして、リバティーに手を乗せる。

「……いや、レイの魂はここにある。あいつの魂は死んでない」

「だったら、そいつと一緒に楽しもうぜ。空を駆けるのが好きなんだろ」

ティキは笑顔で言う。ラルは一瞬笑うとリバティーに乗る。

エンジンを噴かしたリバティーは空中に浮き、そして加速する。風が全身に当たる。それはとても気持ちがいいもの。ラルが乗っているかつてレイが乗っていたレイの魂が乗り移ったこのリバティーと共に、空を駆け抜ける。

ティキはそれを見えなくなるまで笑顔で見送っていた。

Act 4：化け物退治

空中にいくつも存在するサガルマータ。その中でも特別大きい国家都市、リシュレシア。遙か以前、月の復活のために各国に共同支援を要請した国である。月の復活計画の先導国だ。ティキもそんな国の一角でルティーを開いていた。

国の中央に存在する中央官邸。上空にあるサガルマータから伸びるさらなる巨大な建物。その景色は近くで見ると圧巻の一言がよく似合う。

「プレシデント。来られたようです」

プレシデントと呼ばれた男はきつちりとした身なりをしている。スーツを着て、ネクタイを締め、背筋もしっかりと伸ばしている。口元は整えられたヒゲをしており、目元は少しきつめだ。

「そうか。通せ」

プレシデントと呼ばれた男の言葉と共に、ドアが開かれる。そのドアから男が一人入ってくる。

「ようこそ。久しぶりだな。ティキ」

「なんのようだ？」

部屋へと入ってきたのはティキだった。ティキは明らかに嫌そうな顔をしている。

「まあそう毛嫌いするな。私はなにもお前に喧嘩を売ろうというわけではない」

「よく言うぜ。お前が俺達に何をしたか。忘れたとは言わせねえぜ」「ちよつとあなた、口が過ぎますよ。この方がどんな方が分かっているのですか？」

横にいた秘書のような男がティキの態度に驚き、とっさに横から話に割りいる。

「よい。気にするな。それよりティキ。今回呼んだのは他でもない。

お前に依頼したいことがあるからだ。報酬はちゃんと出す。お前もそれが分かっているからここへと来たのだろう」

ティキは何も言わずプレゼントを見ている。

「依頼の内容はある女を捕まえてもらいたい」

「女？」

「そうだ。我々が日々開発研究をし、進めていた月の復活手順書の資料データー。つまり”紙碑”（しひ）が盗まれた。それを取り返してほしいのだ」

「そんなもん。あんたの兵隊にやらせればいいじゃねえかよ」

「資料を盗まれた時、現場を抑えることはできたが、捕まえることは出来なかった。我々の兵隊達ではとても歯が立たない。これ以上兵隊達に怪我をさせるわけにはいかない」

ティキは眉間にシワをよせる。

「自分の兵隊のことを”駒”程度にしか思っていない奴の台詞かよ」

「まあそう言うな。私も変わったんだ。お前達の犠牲のおかげでな」
ティキはその言葉に、前へとつめよりプレゼントの服に掴みかかった。それを見ていた秘書の男が止めに入る。

「ふざけんなっ！ お前が……」

「月のカケラ」

「ん？」

「女は月のカケラより出来た”月の産物”を所持していた。それが我々の兵隊が手も足もでなかった理由だ。女はアンクレストへと逃げた。お前なら女がどこにいるか分かるはずだ。捕まえてくれ。あれは、この星を救うための大切な資料だ」

ティキは服から手を離すと、後ろを向きドアの前までやってくる。
「報酬は？」

それを聞いた秘書はティキのもとへと駆け寄り、ティキに紙を渡す。そこには、報酬やらなにやら契約書のようなことが書いてあった。ティキはそれを見た後、その紙を丸めて床へと捨てた。

「依頼は受けてやる。金はちゃんと払えよ」

そう言つと、ティキはドアを開けて部屋から出て行つた。

秘書はそれを確認すると、床に捨てられた紙を手にとり広げる。

「プレシデント。ほんとにあんな方に依頼して大丈夫なんでしょうか？」

「私の前ではあんな態度を取るがね、悪い奴じゃない。それに実力は確かだよ」

「はあ……」

「彼は、我々の最終兵器なのだ」

「兵器……ですか？」

プレシデントと秘書の会話は余韻を残したまま終了した。

ティキはリバティーに乗り、地上を覆いつくす霧の中を地上目掛けて飛んでいた。リバティーのライトが乱反射していることからその霧の深さがよく分かる。ティキはそれに恐れることなく霧のさらに奥へと進んでいく。しばらく進むと、霧が薄い少し晴れている場所へと出た。そこは地上だった。地上は多少霧の粒子が薄いようだ。

ティキはリバティーから一旦降りる。そして首から提げている小さな剣のキーホルダーのようなものを手に取る。ティキはその剣をしばらく眺めると、再びリバティーに乗り地上の霧の中を走る。しばらくいくと首から提げている小さな剣が光を放ち始めた。それに気がついたティキは、進路を変えリバティーを走らせる。そしてある丘の上でリバティーを止めて、丘の上から景色を眺める。ティキの見える先を、リバティーに乗る人間が走っている。それを見つけたティキは再びリバティーに乗り、そのリバティーを追跡する。

ティキは前に見えるリバティーに向かって、ライトを当てる。前にいるリバティーはそのライトに気がつく、懐から突然拳銃を出し、自分のリバティーのミラー越しに前を向いたままで発砲する。

ティキはそれに多少驚いたものの、それをうまく避けると、ハンドルを握り差をつめた。

「おい、リバティーを止める」

声が聞こえると思われる範囲まで接近すると、ティキは出来る限りの大声で呼びかける。前のリバティーに乗っているのは、肩よりも少しだけ長いセミロングくらいの長さの髪を持つ黒髪の女性だった。その女性は、ティキのほうを横目で見る。

「あんた、国の差し金でしょ？ 悪いけど捕まるわけにはいかないのよ」

女性は、今度は拳銃を至近距離でティキ本人に向けた。それに驚いたティキは避けるように、後ろへと下がる。女性は発砲することなく、ティキが後ろへ下がったその隙に、ハンドルを捻りリバティーを加速させる。

「ちつ。いきなり拳銃を撃ってくるなんて、なんて女だ。けど、それで俺が怯むと思ったら大間違いだぜ」

ティキはファルコンのハンドルを捻り、一気に加速した。それは僅か数秒で時速600キロものスピードに達し女性の乗るリバティーを追い抜くと、そのまま車体を滑らせ、女性のリバティーの進路を妨害するかのように前に停止した。それに驚いた女性はリバティーをティキの前で停止させる。

「俺から逃げようなんて100年早いんだっての」

「……やるじゃない。それであたしに何の用？」

「何の用じゃねえよ。お前だろ？ 国から紙碑を盗んだのは。返せよ」

「さあてなんのことやら。証拠はあるの？」

「とぼけんなよ。お前、月の産物を持つてんだろ？ アンクレストにしながら、マスクもなにもせずにいられるのは、月の産物を持つてるやつだけだ。それに」

ティキは自分が首からさげている小さな剣を見せた。それは眩い光を発していた。

「へえ、あんたも月の産物を持つてんだ」

「ああ。月の産物でも持つてなきゃ、あの嚴重な国のセキュリティから紙碑を盗み出すなんてこと簡単には出来ないからな。さ、紙碑を返しな」

ティキの言葉の余韻が消えかけたその時、突然地響きが鳴る。すると、ティキの前方、女性の後方に光が突然収束し始める。それは徐々に集まり、固まっていく。そして、少しずつ形が形成されていく。それは角を持ち、牙を持ち、爪を持ち、二足で歩行する3メートルはあるつかという巨大な化け物へと姿を変えた。それに気がついた二人はソレを見るのが初めてではないのだろうか、とても落ち着いている。

「あらら、オームが現れたわね」

「こんな時に、めんどくせえな」

「どう、今はいざごさは忘れて、二人でこいつを倒すことに集中しない？ 他に気を捕らわれてたら危険でしょ？」

ティキは女性のほうを一瞬見る。そして、すぐに化け物のほうへと目をやる。

「分かった。足を引っ張るなよ」

「あなたこそ。じゃあ、こうしましょう。あなたが、隙を作ってちょうだい。その隙にあたしがあいつの脳天に一発ぶち込んでやるわ」
「おっけえ、そんじゃあいくぜ！」

自分に言い聞かせるようにティキは、その化け物へと向かっていく。化け物は、ティキの接近に気がつき巨大な腕を振り下ろす。ティキはそれを紙一重で避けると、その腕に飛び乗り、化け物の顔面目掛けて走っていく。そして、まったく防御のされていない。喉の部分へと強力な蹴りを入れ、一撃を加える。さすがに効いたのか、化け物は喉を両手で押さえうずくまる。見事に化け物の隙を作ったティキは、今が好機と女性のほうを向き合図を送る。

「よし、今だ。やれっ」

女性はリバティーに乗り、すでに遙か遠くまで離れていた。

「なにいいいいい！ おおおい、コラツアアッ！」

ティキの叫びも空しく、女性はどんどん離れていく。ティキは化け物を目の前に一人にされたのだ。

「あの女ああ。ハメやがったなあ。くそっ」

ティキは再び化け物のほうへと向きなおし体勢を整える。化け物は再び、強烈な殺気を放ちながらティキの前に立っている。

「ちっ。たかが、オームの一匹や二匹に俺がやられるわけがねえだろ。一人でやってやるさ」

ティキは首から下げている小さな剣を手にとると、化け物のほうへと向けた。それは、握られた手の中にも分かるくらいの光を放っていた。

Act 5：謎の女

ルーファの地上。アंकレストは月のカケラの粒子が、深く濃い霧を形成している。その霧は人体が吸い込むと有害であり、マスクでもしなければ、後に重い病氣へと陥ることもある。

そんな深い霧の立ち込める地上には、それ以上に恐ろしい”オーム”と呼ばれる生物が存在する。いや、生物とは言わないのかもしれない。それは、月のカケラの粒子が集まって出来るモノであり、非常に狂暴で好戦的である。ある程度のダメージを与えれば、ソレは再び粒子化する。ある意味では自然災害と同じようなもので、突然現れ、大きさや形態は様々である。

地上アंकレストまで、ある女性を捜しにきたティキはオームを目の前にしていた。お互いに目を離すことなく睨みあっている。するとティキは、首からぶら下げている小さな剣のキーホルダーのようなものを、手に取るとそれを拳の中へと握った。拳の隙間からは、銀色の光が漏れている。

「悪いな。俺はあの女を追いかけていけねえんだ。お前とちんたら遊んでいる暇はない。さっさとケリをつけようぜ」

するとオームは突然雄叫びを上げた。その声は、遙か先のサガルマータまで聴こえるのではないのかというほどの大きな声だった。ティキはその声に恐怖することなく、オームから目を離さない。

するとティキの拳の中にあつた小さな剣が、突然大きさを变更后いく。そしてそれは、身長が160センチのティキよりも巨大な剣へと変貌した。それは約180センチの巨大な大剣だった。ティキはそれを両手でしっかりと握りこむと、オームへと向かっていく。

オームは向かってくるティキに照準を合わせて、腕を振り下ろす。ティキはそれを確認すると、その大剣で受け止める。激しい音と共に、その風圧が辺り一面に砂埃りが起きる。すると、ティキの持つ大剣は銀色の光を放ち始める。オームがその光に気を取られ、一瞬隙が出来た時ティキはオームの懐へと潜り込む。そしてその大剣を横なぎに振りぬくと、オームの身体を真つ二つに切り裂いた。

切り裂かれたオームは、全身が砂状の粒子へと姿を変え消えていく。それを確認したティキは、剣を再び小さな剣に戻すと、首にぶら下げる。そしてリバティーにまたがり、女を追いかけた。

女はティキを振りきりアンクレストをひたすら走っていた。時々、ミラーで後ろを確認している。

「大丈夫かな、あいつ。ちよつとやり過ぎたかな？　いくら月の産物を持っていたても、オーム相手に一人じゃただじゃ済まないだろうし」

女がそんなことを考えていると、後ろから声が聞こえる。その声に気がついた女は、ミラーで後ろを確認する。見ると後ろから声をかけているのはティキだった。

「うそ、あいつ。一人でオームを倒したの？　しかもこんな早く」
ティキは時速600キロものスピードで女に近づいてきている。

そして、あつという間に追い抜くと停止した。女もその姿を見て停止する。ティキはリバティーに乗ったまま女へと近づく。

「このくそ女あ。もう逃がさねえぞ」

「……あんだ、オームを一人で倒したの？」

「あ？　当たり前だろ。それよりもなあ。この俺をハメやがって、もう紙碑を返すだけじゃすまさねえぞ」

女はティキの顔を見ながら、驚きの表情をしている。ティキは女のその表情に気がつく。

「……？　なんだよ？　俺の顔になんかついてるのか？　あ、もし

かしてアンクレストに来る前に食べたメシのご飯粒とか?」

ティキは、自分のリバイターのミラーで口周りを見渡す。

「なんだよ。なんもついてないじゃねえか」

ティキは再び、女を見る。女はまだティキを見ている。すると、女の口が緩む。

「あはっ。あはははは、おかしい。あははは」

「な、なんだよ。なんで笑うんだよ?」

「あははは、ごめん。だって、あなたあたしを追いかけてきたんでしょ?」

「あ、そうだ。紙碑を返せよ。お前が盗ったんだろ?」

女は笑っている。それが落ち着くまで少し時間がかかった。ティキはその間、笑う女を見ながらなんだこいつと思っていただろう。

「ごめん、ごめん。あんた、ほんとに国の兵隊なの?」

「あ? 違うぜ。誰がそんなこと言ったんだ?」

「だって、あんた紙碑を取り返しにきたんでしょ?」

「そうだけど、それは国に依頼されたんだよ。俺はルティーっていうまあ簡単に言えば、なんでも屋をやってる一市民だよ。分かったなら早く紙碑を返せよ」

「へえ、なんでも屋か。でも、信じられないなあ。一市民が月の産物を持っていたり、オームを一人で倒してきたり。第一国から依頼されるような一市民なんか聞いたことないよ。あんた、なんか特別なの?」

ティキはなにも答えず、沈黙している。

「……別に、普通の人間だよ」

ティキは笑顔で言う。

「ふうん、なんか子供みたい」

「ああ? 俺はこれでも21歳だぞ」

「あら、じゃあ、あたしの方が年上ね。22歳だもん。やっぱあたしより子供じゃん」

「お前な……。いいから、早く紙碑を返せよ」

「返してあげてもいいけど、その代わり名前教えてよ」

「名前？ ティキだ」

「ぶっ！ あはははは。何、その名前？ほんと子供みたい」

名前を聞いた途端、女は再び笑いだした。

「お前な、ほんとぶん殴るぞ」

ティキは胸の前に拳を作る。

「あははっ。ごめん。だっっておつかしいんだもん。いいよ。返してあげる」

女は懷からCD-ROMを出すと、ティキに渡す。それを受け取ったティキは疑問を抱く。

「お前、なんで国から紙碑を盗み出したんだ？ 国からの窃盗は一級容疑。下手すれば終身投獄だぞ」

笑っていた女は、急に静かになった。

「関係ないよ、そんなん。あんたじゃなきゃ捕まるつもりもなかったし」

「どういう意味だ？」

「ねえ、国の嚴重なセキュリティから一部とは言え、紙碑のデーターを盗み出したあたしの実力は、証明されたよね？」

「あ？」

「ねえ、あんたから頼んでよ。あたしを国の特別仕官にしてほしいって」

「お前、何を言っ……」

「ねっ、お願いティキちゃん」

「おいコラ、ちゃん付けで呼ぶな」

「いいじゃん。子供みたいだし。年齢もあたしより下だし、身長だっであたしの方が高いし。お願い頼んでよ」

「馬鹿言っな。なんで俺がそんなこと、だいたい俺は……」

「あっそ、じゃあコレいらなんだね」

その言葉にティキは女が胸の前に出した手を見る。そこには先ほ

ど返してもらったはずの紙碑があった。ティキは今度は自分の手を確認する。そこには紙碑はなかった。

「お前いつの間に？」

「あたしの実力を舐めちゃ駄目だなあ。国の仕官にしてくれるように、頼んでくれるなら返してやつてもいいよ」

「お前なあ。だいたい俺は国の人間じゃないんだ。俺が頼んだところでそんなモンになれる訳ないだろ」

「そ、じゃあ、また逃げよ」

そう言つと、女はリバティーのエンジンをかけようとする。

「あ、待て待て。……分かったよ。頼んでみるよ」

ティキはまた逃げられては面倒だと仕方なく女の条件を飲み、女を制止する。

「ほんと？　ありがと。ティキちゃん」

「ちゃん付けで呼ぶな」

ティキはリバティーのエンジンをかける。

「先にいけよ。また逃げられたらたまったモンじゃないからな」

「大丈夫。もう逃げる理由なんかないから逃げないよ」

ティキは少し複雑な表情を見ると、先陣をきつてリバティーを発進させた。女もちゃんとティキの後ろからついて来ているようだ。

ティキは女のほうを見る。

「おい、女。俺は、頼むだけだからな。頼んだ後、仕官になれようがなれまいが知らないからな」

「リディア」

「あ？」

「リディア・セリタ。あたしの名前だよ。リディアって呼んで。ティキちゃん」

「ちゃん付けで呼ぶなつて」

アंकレストからサガルマータへと上がってきたティキとリディ

アは、中央官邸へと着くと中へと入っていった。そして、プレシデントの部屋まで来るとドアを開けた。

「おい、プレシデント。女を捕まえてきてやったぞ」

ティキに気がついたプレシデントは、ティキの横にいたリディアの存在にも気がつく。そしてリディアを見た瞬間、驚きの表情を見せた。

「あ、あなたは……」

「捕まえてきたはいいが、こいつがさ。なんか国の特別仕官になりたいんだとよ。まあ無理なのは分かっているが一応約束だからな。頼んでるだけだ」

「わが国の、仕官に？」

ティキは驚きの表情をしているプレシデントの顔を見る。

「やつば、無理だわな。残念だけど、お前は一級の窃盗で、終身投獄だな」

プレシデントは驚きの表情から、笑顔へとなる。

「分かりました。とりあえず話を聞きましょう。こちらへ」

「え？」

プレシデントの言葉にティキは驚き、目を大きく見開く。

「おい、ちよつと、なんで？」

「ティキ、任務ご苦労さん。お金は、秘書より受け取ってくれたまえ。では」

プレシデントはそう言いながら、ティキを部屋の外へと押しだし、ドアをゆっくり閉めていく。リディアはその姿を見ていた。

「じゃあまたね。ティキちゃん」

そう言いながら、リディアは胸の前で軽く手を振る。

「あ、お、おいっ、ちゃん付けで！……呼ぶな」

閉められたドアの前で、ティキは一人沈黙していた。

「……なんなんだ、一体？」

疑問を抱きながらもティキは、報酬を受け取り、帰路へとついた。

Act 6：昔からの親友

ティキはルティーにある、唯一の家具である机に足をのせ椅子に座り、両手を頭の後ろで組みながら、静かに無言で天井を眺めていた。いや、良く聞くと小さくつぶやく声が聞こえる。

「暇だ……」

どうやら、何もすることがないので暇らしい。ティキは、ルティーに依頼が来ない限り、他に仕事もしていないのでかなり暇なのだ。おまけにこのルティーには、なにもない。机が一つ、椅子が一つ、冷蔵庫が一つ、後は別の部屋にシャワールームとトイレがあるだけだ。

「暇だ。暇だ。……ヒマだあああつ！」

ティキは机の下に手をやると、まるでちゃぶ台をひっくり返すかのごとく机を放り投げた。それは床へと着地すると、その衝撃で崩壊した。ティキはソレが起こった後で、自分がしてしまったことの重大さに気がついたようだ。ただでさえ少ない家具がさらに減った瞬間だった。

「やつちまった」

ティキは机をひっくり返したままの体勢で固まっている。そんなティキの脳裏にあることが思い出される。

「お、そうだ。前の国からの依頼るときに貰った報酬があったな。

これで、机を新しく買って」

そう言いながら、ティキはルティーの中を見渡す。

「そついや、いまさただけどこってなんもないのな。机以外にも新しい家具でも買うかな。……いや、テレビを買おう。テレビがあれば少しくらいは暇さがマシになるかも。さすがに本なんて柄じゃないしな」

そついいながら、ティキは再びルティーを見渡す。ティキの視線は冷蔵庫へと向かった。冷蔵庫の上には、この間の報酬が入った袋

が置いてある。ティキは冷蔵庫へと向かうと、その袋を手にとり封をあけ、中身を出す。そこには報酬である20万オースラムがぎっしりと入っていた。

「おおっ、入ってる。入ってる」

「へえ、結構大金もってんだな」

ティキは突然後ろから聞こえたその声に驚き、後ろを見る。そこには黒い髪が肩まで伸びた男が立っていた。

「リ、リクっ」

「よう、久しぶりだな、ティキ」

ティキの前に現れたリクという男は、昔ティキが国の組織で訓練を受けていた時、一緒に訓練をしていた仲間だった。ティキは懐かしい顔に自然に笑顔がこぼれる。

「ほんと、久しぶりだな。何十年ぶりだ？」

「何十年って、俺らまだ20代前半だろ……」

「ハハッ。まあいいじゃねえか。それにしても久しぶりだな。今、どうしてんだ？」

ティキは久しぶりの仲間との対面に浮かれているようだ。

「いや、ちよつとこの辺りに用事があったな。近くにお前の店があるの思い出して寄ってみたんだ」

「へえ、そうなんだ」

ティキはそう言いながら、椅子へ座る。

「まあ立ち話もなんだし、お前も座れよ」

リクは、頷き辺りを見渡す。

「……座るってどこに座れば？」

この部屋には椅子が一つと壊れた机、そして冷蔵庫しかなかった。

「あ、ハハッ。悪い、悪い」

「まあ、いいさ。そんなに長居もしてられないしな」

「え？ もう、行くのかよ」

「ああ、お前の元気そうな顔を見て安心したよ。その金を見る限り、仕事もうまく行ってるみたいだしな。何もない部屋だけど」

ティキは椅子から立ち上がる。

「そつか、まあ仕方ないか。また、寄ってくれよ。暇だから」

「暇だからって。お前、仕事があるだろ？」

「なんもない時はほんと暇なんだって」

「ハハッ。まあ、また寄らしてもらうよ。そんな時は、飲み物くらい出せよな」

「あ、悪い」

リクはそう言うと、片手を挙げルティーから出て行つた。ティキは久しぶりの顔に機嫌が良い。気分もよくティキはお金を持って、ルティーを出て買い物へと行く。

買い物を終えたティキは、目当てのものも買え、気分が良い。買った商品は、後から店の人が搬送してくれるらしい。ティキはそれを楽しみに、ルティーへと帰っている最中だった。

突如、ティキが向かう方向とはまったく別の街の端のほうから、激しい爆発音が聞こえ、それに伴い地響きが起こった。それに驚いたティキは、その方角を見る。するとそこには、天まで昇る黒煙が立ち昇っていた。突然の爆発、なにかの事件だろうか。それとも事故だろうか。周りにいた人は、野次馬になることも恐れずに、その爆発が起こったほうへと向かっていく。いずれにしてもティキは、たいして興味も示すことなくルティーへの足を休めることはなかった。

ルティーへと着いたティキは、ワクワクしながらたった一つの椅子に座って、店の人の到着を待っていた。そんなティキの心境に答えるかのように、ルティーのドアが開き、人が現れた。ティキはそ

の姿に愕然とする。

「リクっ！」

「よう、また寄ったぜ」

そこには、肩からも頭からも血を流し、服も見た目もボロボロになっっているリクの姿があった。

「な、なにがあったんだよ？」

「ちよつと、ミスってな。へへっ、情けねえな」

ティキがリクの姿に驚いてる時、リクの後ろから大声が聞こえた。その声にリクが気がつく。

「ちっ、ティキ。悪い、手を貸してくれ」

「え？ 手を貸すって」

ティキもリクの後ろから聞こえる大声に気がつく。そして、すぐに状況を理解し、リクの手をとり走り出した。ティキ達の後ろから大声が聞こえてくる。どうやら、リクを追いかけてきたようだ。突然のことに困り果てたティキはリクと共に、とにかく走り走る。

普段からこの周辺を散歩していたティキは、この入り組んだ街の構造を理解していた。おかげでなんとか、その声の主達をやり過ごすことが出来た。

「ふう。なんとか、撒いたみたいだな。リク、大丈夫か？」

「ああ、悪いな。巻き込んだって」

「ほんとだよ。一体なにをしたんだ？ あいつらは何モンだよ？」

その言葉にリクは、壁へと寄りかかりため息をつく。

「奴らは、星の導きだ。ついこないだこの近くに、星の導きの支部アジトがあることを突き止めたんだ。それで、そのアジトを爆破しに行ったんだが、ざまあねえ。ミスっちゃってよ」

「星の導きのアジトを？ …… お前まだ」

リクは壁に寄りかかったままティキを見る。

「当たり前だろ。奴らは、奴らは俺達から大切な仲間を奪ったんだぞ。まさかティキ、忘れたなんて言わねえよな？」

ティキは、リクの目から視線を外す。

「……忘れるわけないだろ。あいつは、ヴァイスは俺達の大切な仲間だったんだ。俺は今でも、ヴァイスを奪ったあいつ等を捜してるんだ」

リクもティキの顔から目線を外す。

「ふん、お前もなにも変わってないな。安心したよ。とにかく、俺の目的は星の導きを潰すことだ。そのためにはどんな手段をもいとわない」

リクは寄りかかっていた壁から離れ、ヨロヨロと歩きだす。ティキはそんなリクの姿に気がつく。

「どこに行くんだ？」

「また、姿を暗ますさ。傷が癒えるまでな。ティキ、お前も気をつけろよ。この近くには星の導きのアジトがある。奴らも当然、お前の命を狙っているはずだからな」

リクはそういい残すと、ティキの元からゆっくりと去っていった。

ティキはそんなリクを、姿が見えなくなるまで静かに見ていた。

Act 7：思い出のモノ

新しい机と椅子、そしてテレビが来た。ティキは暇潰しにテレビを見ている。するとルティーのドアが開き、一人の男が入ってきた。男は、眼鏡をかけていて、身体は少しやつれて病弱な感じがした。ティキはそれに気がつくとも男のほうを見る。

「すいません。依頼しにきたんですが」

男の弱々しい声にティキもテレビの電源を切り、男をティキと対面している椅子へと座らせる。

「それで？　どんな依頼？」

ティキはいつもの客を迎える態度で男を迎える。

「はい、そんなもの警察に頼めと言われそうですが、実は失くした指輪を見つけてほしいんです」

「指輪？」

「はい、実は私これでも、結婚してまして、もう別れたんですがね。まあ、こんな私が結婚なんて出来たことが不思議なくらいで、別れて当たり前なんです…… すいません。そんな話どうでもいいですよ。とにかく、その時の結婚指輪を、その先の川にかかっている橋の上で落としてしまい、そのまま川へ。一応探しはしたんですが、見つからなくて、その時に、ルティーがあることを思い出しまして指輪を探してもらいにきました」

「なるほど、ね」

男はポケットを探る。そして、そこからは、袋が出てきた。それをティキの方に差し出す。

「ここに五万あります。これで、探してもらえませんか？」

ティキは椅子から立ち上がる。

「おつけえ、分かった。探してくらあ。その金は見つかるまで取っとけよ」

「あ、ありがとうございます」

男は立ち上がりティキに頭を下げる。ティキは、ルティーから出て指輪を探すために川へと向かった。

男は、そんなティキを見送ると、安心したかのようにため息をついた。

「よう、うまくいったみたいだな」

突然の声に驚いた男は後ろを見る。そこには、二人の黒ずくめの男と、二メートルはあろうかという巨大な男がいた。だが、その男は、巨大な身体には変わりないのだが、大部分は脂肪で占められているようだった。

「あ、アールさん」

「ほれ、約束の金だ。これを持ってさっさと失せろ」

そう言つと大男は、男に金を渡す。金を受け取つた男は、アールという大男を見上げる。

「あの、アールさん。彼を少しばかり傷付けるだけですよね？ 殺したりしませんよね？」

「あ？ そんなの決まってるだろ？ 奴は、俺達星の導きの敵だ。敵は殺してこそ、意味がある」

「そ、そんな約束が違います」

「約束う？ 金なら、払ってやつただろ。もう、お前に用はない。さっさと失せろ」

そう言つとアール達は、ティキが向かつた川のほうへと向かつていった。男は、少し放心状態だったが、自分がしてしまったことに気がつき、アール達よりも早く川へと向かえるように急いだ。

ティキは、すでに川へと到着していた。流れる川、そして服が濡れることもいとわずに、川の中に顔を入れ、石を丁寧の一つ、一つ避けては指輪がないか探り、なければその横でまた同じことを繰り返す。

「くそお、ねえな」

ティキの口から思わず零れる言葉。それは、ティキの感情を素直に表した言葉だった。そこへ、先ほど依頼にきた男が、息を切らして現れた。どうやら、相当急いできたようだ。男は辺りを見渡すが、まだアール達は到着していないようだ。それを確認すると、ティキがいる川の方へと視線をやる。

「すいませんっ！」

その声に気がついたティキは、男のほうを見る。男は橋の上からティキに呼びかけている。

「おう、おっさん。悪いな、まだ見つかってないんだ」

「そんなのいいです。早く逃げてください。あなたの命を狙ってる奴らが、ここへとやってきます。すいません。実は、彼らに頼まれたんです。あなたをここへ誘導するように。誘導したら、お金を貰える約束で。でも、まさかあなたの命を狙っているなんて、思わなくて」

ティキは探すのをやめると、男のほうを見る。

「でも、ここで指輪を失くしたのは本当なんだろう？」

「え、それは。……いえ、でも、それはもう五年も前の話なんです。とても見つかりっこない。それよりも、早く逃げてくださいっ」

「ばあか。逃がすわけにいくかよ」

男は、聞いたことのあるその声に横を見る。そこには、先ほどのアールという大男がいた。

「余計なことを喋りやがって。さっさと帰ってればいいものを」

アールは男に詰め寄る。巨大な身体を持つアールの迫力に、男は立っていらなくなり尻餅をつく。

「ふん、まあいい。貴様の始末は、後でだ。先に、貴様をやらなければなあ。銀色の髪 of 戦士よ」

アールは男の恐怖に歪んだ顔を見た後、再び視界をティキのほうに戻した。ティキは、そんなアールに気がついていないのか、川の中の石をどけて指輪を探している。

「ふん、無視か。だが、これでも無視なんてしてられるかな？」

アールは片手を上げる。それを合図に、横にいた二人の黒ずくめの男が懐から銃を出し、ティキに向ける。さすがのティキもそれに気がつき、探す手を止めてアールのほうを見る。

「もう逃げられんぞ。橋の上と川の中。これだけの距離があれば反撃もできまい。お前はここで終わりだ。死ね」

アールは上げていた手を振り下ろす。それが合図なのか、その瞬間二人の男はティキのほう目掛けて銃弾を発砲する。銃弾は、ティキの周りにも着弾し、水柱を上げる。そして何発も何発も銃を撃ち続ける。やがて、銃弾が切れ、撃つのを止める。銃弾の衝撃で上がっていた水柱も、やがて、重力に引かれ落ちていく。

「残念だったな」

そこには、ティキが剣を持ち構えていた。

「馬鹿な。まさか、全ての銃弾を撃ち落したというのか？」

ティキはその問いに答えることなく、アールの方に視線を送った。

その視線に恐怖を感じたのかアールは、橋から飛び降りると、その巨体を駆使してティキに飛び掛った。ティキはそれをなんなく交わすと、拳をアールの腹に突き立てた。腹に衝撃を受けたアールは、その場で転がる。

「くそ」

アールは腹の痛みに耐え、すぐに起き上がる。しかし、その時アールは異変に気がついた。アールは自分の足元を何度も確認する。そこには、あるはずの水がなかった。川を流れるはずの水が完全に無くなっていたのだ。アールは視線を再び、ティキのほうへと向ける。その時、アールは信じられない光景を目にした。

「な、なんだ。それは？」

アールが驚くのも無理はない。そこには、ティキが手にしていた剣が、川の水を完全に遮っていたのだから。さきほどティキが持つ

ていた剣とは、大きさも何倍も違っていた。

「俺のこの月の産物である剣”ルナフォース”は大きさを自由に變えることが出来るのさ。それこそ、キーホルダー並みの大きさからこの川を遮ることが出来るほどな」

ティキは自らの剣の上に立ちながら、アールを見る。

「今、遮っている水がこつちで溜まつてる。いまこれを開放したらどうなるかな？ 特にお前のようなデカブツに耐えることが出来るかな？」

「や、やめろ」

「悪いな。今は、お前にかまつてる暇はないんだ。依頼が残ってるんでな」

そう言つと、ティキは剣を小さく変化させた。その瞬間、剣によって止められていた水が、まるで龍が暴れる濁流のごとく勢いでアールに迫る。その津波のような水はアールを飲み込むと、そのまま遙か下流まで流していった。それを見ていた二人の黒ずくめの男達は、アールを助けるためにすぐに後を追って行つた。

一部始終を見ていた男は、ティキのほうに視線をやる。そこには、穏やかに戻つた川に立つティキの姿があつた。ティキは再び指輪を探し始める。男は、黙つてそれをジツと見ている。すると、ティキはなにかを発見したかのような反応を見せ、川に顔を突っ込む。そして、手で石を避ける。

「おつしやあああああつ！」

ティキは大きな雄たけびを上げ、片手を空高く上げる。男は、そのティキの行動に驚き、ティキの上げた片手の先を見る。そこには、太陽の光に輝く指輪が握られていた。

どうやら、川をせき止め、一気に流したことで、土の下に埋まっていた指輪が現れたようだ。そして、ティキは運よくそれを発見したのだ。ティキは川から上がると、男の元へと近寄っていく。

「ホレ、見つかったぞ。これで、間違いないか？」

ティキは男に指輪を手渡す。男はその指輪を見て、視線が固まる。それは、男が5年前にここで落とした指輪に間違いなかった。当時付き合っていた女性と結婚し、その時に買った思い出の指輪。今はもう別れてしまったが、男にとってこれは、人生の大切な思い出の品。男はこれを落とし、失くしてしまい。全てを諦めていた。指輪を探すことを諦め、女性とやり直すことを諦め、人生を諦めていた。

でも、男の目の前には、決して諦めることなく必死に探し出してくれた男がいた。男はティキの顔を見ると、自然に涙が零れる。それは目から溢れ、決して止まることのない思い出の涙。全てを諦めていた自分に、希望を与えてくれた男に対する感謝の涙だった。男は指輪をその手でしっかりと掴む。

「ありがとうございます」

「なあおっさんの人生、なにかあったのが良く知らねえけどさ。人生諦めるのはまだ早いんじゃないか？」

「え？」

「俺わかるんだよ。人生諦めて、ただなんとなく生きてる奴ってさ。俺がそうだったから」

ティキは、少しだけ悲しそうな顔をした。

「死んだらなにも出来ないだろ。生きててもなにもしなけりゃ、それは死んでるのと同じなんだよ。おっさんは”英雄”って興味あるかい？」

「英雄？」

「ああ。英雄ってなんだと思う？俺は思うんだよ。必死に生きて生きて。全力でぶつかってさ。自分の人生に自分の全てをかけられる奴。そいつは英雄なんじゃないかって。それで失敗することもあるかも知れない。損することもあるかも知れない。それでも、自分の力を全て出し切ったら、絶対に後悔はしない。そういうことが出来る奴、全部が英雄なんだよ。きつと」

男はティキのその言葉に、静かに耳を傾けている。

「おっさんも。英雄になつて見ねえか？」

「私が……英雄に？」

「ああ、俺も英雄になりたいんだ。俺は、一人だけ知ってるんだ。英雄を。そいつは俺の憧れの存在で。俺に生きるための力を与えてくれた。だから、俺も英雄になつて、立派になつた姿を見てもらつて、その人に安心して眠つてほしいんだ」

ティキは橋の上から川を眺めている。

「私は、なにかも諦めていた。この指輪を失くした時も、本当は探すことすらしなかった。見つかるわけがないと、最初から諦めていた。その時点で、私は英雄になかなれる器じゃなかった。でも、今日あなたを見て分かった。諦めなければ、いつか叶うこともあるのだと。時間がかかっても諦めなければいつか報われると。だから、私も挑戦してみようと思います。ここから先の人生。だから、それも含め。ありがとうございます」

男が自分の気持ちを言い表した言葉は、最初の頃よりほんの少しだけ、力強くティキには感じられた。

男は、ティキの頭を下げると、ティキの元を去つていった。その指には、指輪がしっかりとめられていた。

Act 8：謎の病気

「よし、綺麗になったな」

ティキは、店の前でリバティーの洗車をしていた。綺麗に仕上がったリバティーは、再びその光沢を取り戻し、輝いていた。ティキは額から流れる汗を拭くと、洗車に使った道具を片付け始める。その時、ティキの後方から声がした。

「へえ、ほんとにお店やってんだ。L・U・T・E・E。ルティーかな？」

声に気がついたティキは後ろを見る。

「げっ！ お、お前なんでここに？」

「やつほお、ティキちゃん」

それは以前、国の重要なデータである紙碑を盗んだリディアという女だった。

「ほんとにお店やってるんだね。ねえルティーってどういう意味なの？」

「……ルナ（月）・ティキ（自分の名前）を略しただけだ」

「ぶっ！ あはは、ほんと子供みたい。ってかセンスないんじゃない？」

リディアは、来るなりそうそうティキを笑い飛ばした。

「お前な。なにしに来たんだよ。笑いに来たら帰れよ」

「あはは。ごめん。ごめん。もちろん笑いに来たわけじゃないよ。ちやーんと用事があつてきました」

「用事？」

「うん、まあ立ち話もなんだし、家の中で話すよ。お茶でも出してそう言つとリディアは、ティキの横を通りルティーの中へと入っていく。ティキは、その姿を見て大きなため息をつく、ルティーの中へと入っていった。

ティキは、リディアにお茶を出すと、リディアとは対面となる所へと座った。

「それで、用事ってなんだよ？」

「うん、それにしてもなーんもないね。どうやって生活してるの、コレ？」

「ほつとけ。お前の方こそ国の仕官になれたのかよ？」

「もつちろん。あたしの実力をなめたら駄目だって言ったでしょ？」

「馬鹿ヤロウ。俺だって元々、国に仕えてたんだ。実力だけで国の仕官になれないのは分かってる。お前ほんとに何者なんだ？」

リディアはお茶を一口飲む。

「まあ、そんな話はいいいじゃない。それよりも、国の仕官になったあたしは、ある任務を任されたの」

「任務？」

「うん、だからあたしはこれからその任務をしにいくんだけど」

「へえ、そうなんだ。じゃあ早く行けよ。俺だって暇じゃないんだ。いつまでもお前の相手をしてる場合じゃねえ」

「嘘ばっかー。知ってるのよ。あんた依頼なけりややることもなくて暇なくせに。そんなティキちゃんに朗報ーっ。なんと、あたしの任務に同行することが許可されましたー。おめでとうございまーす」

リディアは笑顔でティキを見る。

「はあ？　なんで俺がそんなメンドクサイことしなけりやなんねえんだよ？」

リディアはポケットから紙を出してティキの目の前で広げる。

「はい、これが国の正式な同行許可書だよ。ねっこれであなたはあたしに同行しなきゃ駄目なんだよ」

そこには、しっかりとティキの名前が書かれていた。ティキはそれを見て一瞬沈黙するが、その紙を持っているリディアの手をのけるとリディアの顔を見る。

「ばあか。俺は、国の命令なんかには従わねえよ。俺のこと聞いて来たんなら知ってんだろ？」

「……ほんと、子供ねえ」

「お前な……」

「いいわ、それじゃあこれでどう？」

すると、リディアは封筒を出した。そこには、大金が入っていた。「ここに五十万オーラムある。これで手を打たない？ あんたからすれば、いい話でしょ？ あたしについて来るだけで五十万オーラムも貰えるんだもん。ね？」

ティキはその封筒のお金を確認する。

「目的はなんだよ？ お前についていくだけでこんな大金が貰えるなんて、話がうますぎるぜ」

「簡単な話よ。その大金の価値があるだけ危険な任務ってことよ。普通の人じゃまずいけない場所」

「どこだよ？ まさか、アंकレストか？」

「……ストラム。無法の漆黒地帯」

ティキは、その言葉に驚きの表情を見せる。

「中層域か。確かに危険な場所だが、あんなところでなにをするんだよ？」

「それは、ついてくれば分かるよ。さ？ どうする？」

ティキは一瞬考え込むが、すぐに答えを出す。

「いいぜ、行つてやるよ。なにがあるのか知らねえが、面白そうじゃねえか」

「その言葉を待ってたよ。じゃあさっそく行きましょ」

リディアはお茶を全て飲みほすと、コップを机に置き椅子から立ち上がる。そして、ルティーを出る。ティキも、リディアの後に続く。

二人は、リバティーに乗って中層域である。ストラムへと向かっていた。

——ストラム。

上層域であるサガルマータ。下層域であるアンクレスト。その中に位置する中層域であるストラム。そこは、無法の漆黒地帯。生物のいないアンクレストとは違い、ストラムには人が住んでいる。それは、サガルマータに住むことが出来なかった人達の集まり、地上から伸びる土台に洞窟のような住まいを作り、生活をしている。そこは、日の光はほとんど届かず、そしてアンクレストほどではないが多少の月のカケラの粒子が漂う世界。

「見えてきた。あそこよ」

リディアは、ティキのほうを一度向き、目的の場所を指で示す。そこは洞窟のような場所で、ストラムに入るための場所のひとつだった。ティキとリディアはその洞窟のように開いた穴の中へと入ると、リバティーを停めた。

「ここは、住居区じゃないな。どこだ？」

ティキは辺りを見渡しながらリディアに質問をした。

「ここは、準一級病煉区よ」

「準一級の病煉区？ それって」

「まあ早い話、隔離病院つてわけね」

リディアはティキの質問に答えると、先頭をきつて歩き出した。ティキもその後をついていく。

「なあ、そろそろ教えてくれよ。一体ここになにがあるんだ？ 準一級の病煉区なんて並のことじゃないだろ？」

リディアは、ティキの質問に答えることなく足を進める。しばらくいくと、通路が閉められ、入場管理をしているようなところが見えてきた。そこには、複数の男性と女性がいた。リディアはそこで足を止めるとそこにいた人に声をかけた。

「すいません。さつき連絡してたりディア・セリタというものです
が」

リディアの声に気がついた女性の一人がリディアの元に寄ってくる。

「あーはいはい。聞いてますよ。えっと、身分証明書はお持ちですか？」

リディアは、身分証明書と聞いて、国から受け取った特別士官証明書を提示した。それを受け取った女性は後ろにあるパソコンで身分番号を調べていた。それが終わると、リディアに証明書を返し、通路を開けた。かなりの警戒といったところか。きちんと身分を証明しないと入ることもできない。それだけのものがここにはあるということになる。

リディアとティキはそこからさらに奥へと進む。かなり複雑に造られた施設内は、入り組んでいてしつかりと道を覚えていないと、すぐに迷子になりそうになる。リディアはその間一言も話すことなく、足を進める。いつもと違うリディアの雰囲気を押されたのか、ティキもなにも話すことなくリディアの後をただついていく。

「あ、ここだ」

リディアは一つの部屋を見つけると、その扉の前で足を停めた。そこには、” 第一種隔離病室1 ” と書かれていた。ということは、隔離しなければならぬような病気を持った患者がいるということだろうか。リディアはその扉を開けると、中へと入っていった。ティキもその後が続く。しかし、中に入ったティキが見たものは想像を絶する光景だった。

「こ、これは……」

ティキは驚きのあまり、それ以上の言葉が出なくなってしまった。そこには全身が赤く腫れ上がり、その赤味が鼓動しているように波うつている人が、何人もベッドで寝かされていたのだ。何人かはうめき声を上げ、激痛のあまり眠ることもできないほどの症状の人

いるようだった。

「驚いたよね。なにも言わずここに連れてきてごめんね。でも、そのほうがインパクトがあつて忘れにくいかと思って」

「ど、どうということだよ？」

「ここにいる人達は、見れば分かると思うけど、全員ある症状を持つてる人達なの。症状の名前は、”月斑症候群”（つきはんしょうこうぐん）。月のカケラの粒子が引き起こす”第二の月の裁き”と呼ばれる病気なの」

リディアは、ベッドにいる人達の姿をしっかりと見ている。そのリディアの表情は、どこか悲しい表情をしているようにティキには感じられた。

A c t 9：月の裁き

ティキがリディアに連れられてやってきた場所、それは中層域であるストラムにある病棟だった。そこでティキが見たのは、“月斑症候群”という病気が発症した人達だった。

「第二の月の裁き？」

「そう。この世界は八百年前に起きた大戦争で月が落とされた。それが、“月の裁き”と呼ばれる大事件。それから長い年月を経て、破壊され地上に落ちた月の破片は、月のカケラとなり、そして月のカケラは粒子となり、この世界を深い霧で覆った。月のカケラの粒子は、時にはオームとなった。けど、それを人が吸い込めば、人体に有害な粒子は病気を引き起こす」

ティキは、リディアの説明をリディアの顔を見ながら聞いていた。
「それが”第二の月の裁き”、――月斑症候群」

リディアはそれを言い終わると、しばらくの沈黙に入った。その間、聞こえてくるのは患者達のうめき声だった。うめき声というのは聞いてて当然良いものではない。時には耳を塞ぎたくなるような声を出す。それでもリディアは決して耳を塞ぐことなく、患者達を見ていた。

「今、世界で月斑症候群の患者達が、急激に増え始めてるの。感染はしなくてもその数は増すばかり、治療法も見つかっていない。致死率80%を誇るこの病気は、まさに悪魔の病気なのよ。ヒドイと思わない？ 治療法もなく、突然発症し発症すれば8割は死ぬ。その数は増え続け、その対処に迫られた国は患者達をストラムへと強制隔離しているの」

「え？」

ティキはその言葉に驚きを隠せないでいた。

「一度発症すれば、治療は出来ない。感染しないとは分かっているも、万が一も考えられる。だったら、月のカケラの粒子がほんの少しとはいえ漂うこのストラムに隔離するのが、一番だと国は思ったんじゃないかな。国は共同で、月斑症候群の患者達を強制的に各国のストラムへと移送した。もう二度と家族と会えないかも知れないのに、そんなことを考えずに……ね」

ずっと、患者を見ながら話していたリディアがティキのほうを見る。ティキもリディアのほうを見ていたので眼が合う。

「ティキ、あなたの目的が月を復活させることだってことはプレシデントから聞いた。戦争により破壊された月。月が無くなったが為に、この星ルーファは重力のバランスが崩れ、少しずつ崩壊への道を歩んでる。それを救うためには、月を復活させるしかない。そして、月の復活手順書である紙碑の製作。それらは、この星そのものを救うためには必要なこと。でもね。あたし達月の産物を持つ者はこれ以上、患者に近づくことはできないの。なんで分かる？」

ティキはなにも答えることが出来ず、沈黙する。

「答えは、月斑症候群が月のカケラに反応するから。月のカケラから出来た月の産物。それは、患者の体内に入った月のカケラの粒子と反応し、症状を悪化させる。それは、ある一つの事実を指すの。それは、月を復活させるということは、彼らを殺すことに繋がるということ」

ティキは、衝撃を受けた。今まで目的としてきた月の復活。それは、この星を救うため。全ての人が幸せに暮らせるように。それは、間違っていない。でも。

「さっき言ったように国は、患者達をストラムへと強制移送した。これがどういうことか分かる？ 国は天秤にかけたのよ。月斑症候群の患者達全てと星の命をね。そんなものどちらが多く死ぬかは火を見るより明らか。星が死ねば、彼らもあたし達も全て死ぬ。それなら、患者達は見捨て、星を救おうと。……その様子だと知らなかったよね」

リディアの言っていることは当たっていた。ティキは、この事実を知らなかった。月を復活させることこそが、全ての人を救うことになると思っていた。今それが、まさに崩された。

「知らなくて当然だけだね。国は、このことを隠してるんだもの。患者が発見されればすぐにストラムへ。家族には多額な金額を渡し、口止め。しかもそれを国ぐるみでやってるもんだから、分からなくて当然ね」

ティキは黙って、患者達を見ている。

「ティキ、別にあなたがやろうとしている月の復活が、間違ってるって言ってるわけじゃないの。月を復活させなければこの星の死により多くの人が死ぬんだもの。ただ、その裏にはこういう事実があることも知っておいてほしいの。それに、悪いことばかりじゃないのよ」

ティキは、リディアのほうを見る。

「あなたもあたしも持つてるその月の産物。あたし達はアンクレストにマスクを付けずに行っても平気でしょ？ 今はまだ理由がよく分かっていないんだけど、月の産物を持っていると、月斑症候群にはならないらしいの。月斑症候群を発症すれば脅威になる月のカケラも、発症する前だと味方になってくれるみたいね。そして、これこそがこの病気の謎を解く大きなキーワードになると思うの。もしかすると、月斑症候群の人達を治すことが出来るかも知れない」

「そんなことが？」

「まだ、可能性の段階であって。実際にはどうなるかは分からないけど、調べてみる価値は十分あると思うの。だから、あたしは国の仕官になりたかったの。この患者達を救いたかったから」

「え？」

「この国が、いえ世界中に100以上もある国のほとんどが手を結び、ストラムに強制移送した患者達。国から見捨てられたはずの患者達。でも、ここの施設は全て国からの援助金で賄われてるの。国も本当はまだ諦めてはいないってことよ。この国はまだ……希望が

ある」

「この国は？ どういうことだよ？」

リディアは沈黙した。

「お前、本当にいつたい何者なんだ？ お前の目的は分かったけど、お前の正体が全然見えてこない。この病気となにか関係があるのか？」

「……まあね。でも、教えてあげない」

「な、なんでだよ？」

「あたしが抱えてることは、そんな簡単に人に話せることじゃないのよ。あなたの過去と同じで」

その言葉にティキは反応する。

「勘違いしないでね。あたしはあなたの過去を知らない。ただ、プレシデントからあなたは大きな闇を抱えてると聞いただけ。あなたが国に従わないのも、国に所属せず一人で月の復活への情報を集めているのも、全てその過去が原因なんですよ？ あなたにとっては触れられたくない過去があるように。あたしにとってもそれは触れられたくない過去なのよ」

ティキはその言葉になにも言うことが出来なくなった。

「ティキ、たぶんこれからこの世界には大きな変化が訪れると思うの。それは、人にとって良い方向なのか、悪い方向なのかかわからないけど。その時、あなたには正しい選択をしてほしいの」

「正しい選択？」

「悪いけどもう一つ、ついて来て。こっちもとても重要だから」

そう言うのと、リディアはその部屋を出て、入場管理場へと向かう。ティキもその後に続くが、そこを出る前にもう一度その目で、その真実をしっかりと焼き付けて部屋を出た。

Act 10：正しいこと

ティキとリディアはリバティーに乗り、今度はストラムを出てサガルマータへと向かう。

「ねえ、ティキはなんで星の導きの奴らに狙われてるの？」

「あ？ 知らねえよ。月を復活させようとしてる俺が邪魔なんじゃねえか？」

「それにしたって一個人を狙うのは、どう考えても不自然よ。だって、もし仮にあなたが月を復活させることが出来る手がかりを手に入れたとしても結局は国に渡すんでしょ？ だったら、狙うべきはあなたじゃなく国のはず。あなたを倒したところで国が月を復活させようとする動きは変わらない」

ティキはなにも答えず、沈黙している。

「ティキあなた、一度でも直接星の導きからどうして狙われてるのか聞いたことある？」

「あ？ いや、ないな。あいつ等、問答無用で襲ってくるし、追いつ返して終わりだしな」

「だったら、直接聞いてみたいと思わない？」

「あ？」

「こないだ爆発事件があったの憶えてる？」

ティキはすぐにそれを思い出した。爆発事件、それはティキの親友であり、昔からの付き合いのあるリクの仕業。リクは結局あの後逃げ、あの日以降会ってはいないが。リクは確かに星の導きのアジトを爆破しに行ったと言っていた。

「ああ」

「あの事件で爆破されようとしていたのは、星の導きのアジトなの。だっていつても、国も捕捉していたんだけど」

「え？」

「星の導きは、巨大な組織になっているのよ。国内外問わず、彼ら

は存在する。そして、彼らとは均衡を保ってる状況なの。小さな争いこそあるものの、基本的にはお互いに手を出すこともなく。彼らは悪の組織なんかじゃないの。やり方が少し過激なだけで、彼らも彼らの目的があつて動いてる」

「それが、月の復活をさせないことだろ？」

「そう、彼らは月の復活を望まないもの。じゃあ、その理由はなに？ 月を復活されて困ることってなんなの？」

ティキはしばらく考え込む。しかし、今日の経験からティキはすぐにその答えを導きだした。

「まさか、月斑症候群？」

「そう。まさにそれ。彼らは月斑症候群の患者を救うつもりなの。月を復活させれば、月斑症候群の患者は死ぬ。死なせないためには月を復活させるわけにはいかない。でもそれは、国の考えとは反対のこと。でも、それだつて直接あなたを狙う理由にはならないですよ？ 彼らが”あなたを”狙う理由は他にあるとは思えない」

「理由かー。なんかいろいろあり過ぎて訳分からんようになってきた」

「あらあら、子供の頭じゃ少し分りにくかったかしら？ ティキちゃん」

「おい！」

「あはは。まあそれは置いて、とにかくその爆破事件で、一人の男が国に保護を求めてきたの」

「保護？」

「星の導きの人間よ。いまは、国がとりあえず保護してる。直接会つて話すことが出来るから、話してみたら？ っていうか強制ー」

そんな話をしてるうちに、ティキ達はサガルマータの国の施設へと着いた。そこに、男が保護されているのだ。

ティキ達が着いたのは国の中心にある中央官邸のすぐ近く。遙かな空まで伸びる建物から、さほど離れていない距離にそれは存在する。それは、いわゆる犯罪を犯したものに対しての収容所だった。保護という名目だが、国にとっては敵である星の導き。その人間であるかぎり、収容所に送るのは当然だった。だがそれでも、外よりは安全なことはまず間違いない。

ティキはリディアに連れられ、その中を進む。だが、ティキが案内されたのは収容所ではなく、客室間だった。面会室とも違う。ここに来た客を迎えるための部屋だった。リディアが、その部屋の扉を開けると、一人の男が椅子に座っていた。目の前の机には水が置いてあり、少し飲んだのか減っている。

「おまたせ。連れてきたよ」

リディアのその言葉に、男はティキのほうを見る。

「彼が、保護を求めてきた星の導きの人間。ハルトさんよ」

ハルトと言われた男は立ち上がり、ティキに頭を下げる。

「はじめまして、あなたがティキさんですか。なるほど写真と同じだ」

「ねえ、ハルトさん。話してくれる？　なぜ、星の導きが彼を狙うのか。そして星の導きの活動の理由」

ハルトは少し沈黙すると、机に置かれてある水を飲む。そして、一息つくと、言葉を発した。

「ええ、まず何から話せばいいのか」

「じゃあ、彼を狙う理由から教えてくれる？」

「狙う理由ですか。正直申し上げて、理由は知りません」

「知らない？　どうということ？」

「我々はただ、ティキという人物は最重要人物であり、隙があれば命を狙うこと。そして、それを達成したものには階級の特進と、莫大な報酬を約束すると言われてきました。そして、死体は必ず持ち帰ること……と」

「それじゃあ、お金のために彼を狙っていたということ？」

「……お恥ずかしい話なのですが、私は特別裕福な家庭ではありません。いえ、星の導きにいる者のほとんどが、裕福な人間ではありません。しかし、どこにでもある普通の家庭を持ち、家族もいる」

ティキとリディアは静かにハルトの話を聞いている。

「私にも、娘がいます。兄弟もない、一人娘なのですが。私にとってはとても大切な娘です。でも娘が3歳になろうかという時、月斑症候群にかかってしまいました」

その言葉にティキとリディアは驚く。

「月斑症候群は、現在では治せない病気です。でも、その病状を一時的には抑えることができる。ただ、その薬を手に入れるためには莫大な金がいる。私は、いや我々のほとんどは家族を守るために、あなたの命を狙っています。莫大な金を手に入れるために。自分勝手なことだとは、分かっています。娘の命を救うために、一人の命を奪おうというのですから。でも、娘に少しでも生きていてもらうためには、それしか方法がないのも事実です」

「……それじゃあ、あなたはほんとになぜ星の導きが彼を狙うのか知らないのね？」

「はい。ただ、我々の中には”七曜”^{しちよう}と呼ばれる与えられた任務のみを遂行する狂部隊^{きやうぶたい}がいるのですが、その狂部隊と我々の支部のリーダーである。アール様が、話しているのを少し聞いてしまいました。なんでも、数年前に起きた事件がなんと。確か”悲劇の第九候補生”がどうか……」

その言葉を聞いた瞬間、ティキが前に出て、机の上に思いつきり手をついた。

「第九候補生だとッ!？」

ティキの行動に驚いた男は、少し身構える。そして、その衝撃で机にあった水が零れた。

「ほんとに、そいつは第九候補生と言ったのか？」

「え、ええ。詳しい内容は知りませんが、確か昔、国にあった機関

がその事件で潰れたとか。そして、その時星の導きも大打撃を負ったとか、なんとか。すいません。あまり、詳しく聞いていたわけではないので」

ティキはしばらくその場で沈黙したあと、後ろを向き壁のほうへと歩いていった。リディアはそのただごとではないティキの様子を一部始終見ていた。

「と、とにかく、詳しい理由は知らないってわけね。じゃあ、星の導きの活動理由もやはり、月斑症候群？」

「いえ、星の導きの本当の目的については知りません。我々はいわば捨て駒。ティキさんの命を狙うために用意された駒なんです。たぶん、星の導きの本当の目的を知っているのは上の人間の極一部だと思います」

「そう。わかった。ありがとう。また、なにか思い出したら教えてくださいね」

リディアは、ティキの肩をポンツと叩くと、ティキと共に部屋を出て行った。リディアはそのままティキを先行し、見晴らしのいい場所へと連れて行った。

「ティキ、大丈夫？　ねえ、どうしたの？」

ティキは俯いたまま、沈黙している。しかし、一息つくとリディアのほうを向いた。

「……大丈夫だ。もう落ち着いたよ。悪いな急に」

「ううん、あたしはいいけど。ごめんね。今回の依頼はコレで終わりよ。家に帰ってゆっくり休んで」

「……リディア。俺、”本当に正しいこと”選択出来るかどうかなんて自信ねえわ。結局、なにが正しいかなんて誰にもわかんねえもんだろ」

ティキは、自分のリバティーのほうへと向かっていく。リディア

はそのティキの姿を見ている。ティキはリバティーの前までくると、立ち止まる。

「だから、俺はいままでと何も変わらない。自分を信じて、自分が正しいと思うことを選択し、行動する」

ティキはリディアのほうは見えていない。それでもリディアはティキに微笑みかけた。

「……うん」

ティキは、リバティーにまたがるとエンジンをかけて、一気に加速して飛び出していった。リディアはティキの後姿を見えなくなるまでずっと見ていた。

風が、リディアの髪をなびいて行く。ふと、首筋に古傷が見える。リディアは、傷を隠すように髪を手で直す。

「もしかしてあたし、余計なことしちゃったのかな？」

リディアは、振り返ると再び建物の中に入っていた。

Act 11：盗まれた銅像

今日もルティーには依頼者が来ていた。髪に微妙に混じった白髪と顔のシワの寄り方から見て、おそらく初老と思われる男は、ティキの前に座りながらとても申し訳なさそうにしている。ティキもその男を見てどうしようものかと悩んでいた。

「あー、悪いけどもう一度だけ言ってくれる？」

「あ、はい。えっと、お金をくれませんか？ 5000万オーラムほど……」

ティキは男の言葉に、驚くのも忘れて聞き間違いだと思い込もうとしている。

「えー、俺はと言えばいいんでしょうか？」

二人の間に沈黙が走る。無理もない。ティキからすれば、そんなことを言われたのは始めてだろうし、初老の男からしても、常識の範疇を越えていることに気がついていてた。

「……すいません。なんでもやってくれると聞いたので、依頼してきましたがやはりさすがに無理なお願いですよね。他をあたります」

そう言つと男は椅子から立ち上がると、ルティーから立ち去ろうとした。

「ちょ、ちょっと待った。お金はやれないけど、なにか訳ありなんだろう？ 理由くらいは聞いてやれるよ」

ティキは、残念そうに肩を落とす初老の男の姿を見て止められずにはいられなかった。男は、ドアに向けていた身体をティキのほうへと向けると、その大金が必要な理由を話し出した。

「実は、数年前に家に強盗が入ったのですが、その時ある大切な品物を盗まれたのです」

「大切な品物？」

「それは息子が死ぬ前にくれた大切なモノなのですが。盗んだ者が

売り払った後、長い年月をかけてあちこちの家を回ったみたいでしてつい先日偶然にも、もうすぐ開催される世界最大のオークションに出品されることを突き止めました」

「世界最大のオークション？　なんか聞いたことあるな」

「有名なオークションですからね。それで、なんとかして買い取りたいのですが、そのオークションの最低落札価格が5000万オールドラムなのです」

ティキは、その時にふと思った。

「盗まれたものなんだろう？　だったら、事情を話して返してもらえばいいんじゃないか？」

男は、顔をしかめると俯いた。

「ええ、私もそう思い、事情を話したのですが、なにしろ相手はあの世界最大のオークションニア”サミュエル・クリス”。すでにカタログも発行しているようで、出品者や落札者の信頼を守るためそのようなことは出来ないと思われしました。なんとか取り返したいのですが、5000万オールドラムなんて大金持っているわけもなく。どうしようかと悩んでいます」

「ってことなんだが、なんとかならねえかな？」

『うーん、なんとかしてあげたいけど難しいかな』

ティキは、店の外で携帯電話で話している。電話の相手は、リディアだ。リディアは国の仕官なので、国関係のことならなんとか出来るかも知れないと思い、聞いてみた。もちろんそうは言っても、かなり無理があることだというのは、理解していたが。

『サミュエル・クリスって言えば、世界中から名品中の名品が集められ、出品される世界最大のオークションだよ。一年に一度しか開催されない権威あるオークションだしね』

「なあ、じゃあそのオークションに出品される品物って、どこに置

いてあるのかな？」

「え？ そりゃあ、オークションが開催されるのはサリユレシラ国なんだし、もうオークション開始まで一週間もないでしょ？ だったら間違いなくサリユレシラのオークションハウスにあるはずよ」

「サリユレシラか」

「それにしても、世界最大のオークションに出品されるほどの品物ってなんなの？」

「ん？ ああ、銅像らしいぜ。なんか、超有名な奴が作った最初の作品らしくてな。でもそいつは、数年前に他界。まあいわゆる形見だっただけのことだな」

「ふーん。わかった。こっちもなんとか出来ないか一応やってみるけど期待はしないでね」

「ああ、ありがとう。頼んだ」

ティキは携帯の電源を切ると、携帯をポケットへとしまった。そして、手で頭を掻く。

「うーん。どうしようかな。やっぱアレやるしかねえかな」

ティキは空の天気を確認める。空は、少し曇っていた。

夜の闇に紛れて動くものが一人。黒い服に身を隠すその人物はティキだった。ティキは、見つからないように静かに、闇を利用し動く。ティキの前には、五メートルほどの高い塀がある。そこは、世界最大のオークションハウスの前だった。そのお城のような景観から、夜はライトアップされているのだが、深夜ともなればそのライトアップも消され、闇が支配する。

ティキは草むらに隠れ、期を伺う。

「見つかったらどうなるんだろうな。一生牢獄は間違いのないな。品物が品物だから、極刑も……」

捕まった時のことを思うと、ティキは身体が震え、鳥肌が立った。

「やっぱ、やめようかな……」

弱気になるティキの脳裏に過ぎるのは、依頼主の言葉だった。自分が大切にしているものを盗まれ、さぞ悔しかっただろう。やっと見つけたと思えば、それは遙か手の届かない場所にある。ティキには、その悔しさがとても他人ごとだとは思えなかった。

「いや、ここまで来たんだ。やってやるさ」

ティキがやろうとしていること、それはオークションハウスから銅像を盗み出すこと。5000万なんて大金はティキに出せるはずもなく、国も手が出せない。だとすれば出来ることと言えば盗むしか方法がなかった。

ライトアップも消された深夜。ティキはルナ・フォースを出すとそれを地面に突き刺した。そのまま剣を塀を越えられる程の長さまで伸ばすと、剣を元に戻し、塀の向こう側へと着地した。暗闇ながらもティキは容易に着地することが出来た。それは、ティキの足元がライトで照らされていたからに他ならないだろう。

「あっ」

ティキが、塀を越えて着地した場所に、偶然にも警備員がライトを持って見回りをしていたのだ。ティキは、あることが侵入したのと同時に見つかったのだ。警備員がティキの侵入に気がつき、ティキを捕まえようとティキを見るのと同時に、ティキも警備員を見る。そして、お互いに目が合ったのを合図とばかりに、ティキは一目散に逃げ出した。

間一髪でティキを捕まえ損ねた警備員は、腰につけていた警報装置のボタンを押す。その瞬間、オークションハウス全体がライトアップされ、高々と警報が鳴り響く。その音を合図に、異常に気がついた他の警備員達も、辺りを警戒する。

「なんて、こつたああああ！ いきなり見つかるなんて予想外だああ」

ティキは必死に走りながら、とにかく隠れることが出来る場所を

探したが、警報が鳴り響くこの場所は、複数の警備員に、複数の力メラでまさに死角がなく、隠れることは不可能だった。ティキは瞬時にそれを判断し、頭を切り替えた。隠れることが出来ないのなら逃げるしかない。捕まることは許されない。なんとか、この高い塀の外へと逃げるしかない。

その時、複数で行動していた警備員が、ティキを発見した。

「見つけたぞ。逃がさん」

警備員が、ティキを取り押さえようと向かっていく。ティキは、警備員の突進を避けると、その隙間から逃げようとした。しかし、すぐに他の警備員がその逃げ道を塞ぐ。その瞬間、ティキは警備員の目の前で地面にルナ・フォースを突き刺すと、塀よりも遥かに高く伸ばした。ティキの身体も剣が伸びるのに比例して上がって行く。そして、入ってきた時と同じように剣を元に戻すと、ティキは遥か上空から塀の向こう側へと、飛び出していった。

外まで逃げれば、隠れることが出来る場所はいくらでもある。逃げたティキをさらに追ってくる警備員達を、ティキは木陰に隠れてやり過ごした。

「くっそー。まさかいきなり見つかるなんて、さすがにもう警戒されて無理だろうな」

警備員に見つかる前にティキは、その場を後にした。

「と、いうことで盗むのは無理でした」

「そんなことまでして頂いたなんて、ちょっと驚きました」

ティキは、ルティーに呼んだ依頼主の男に盗みに入ったことを教えた。依頼主の男もティキの行動に非常に驚いていた。

「けど、どうしようかな。金もない。盗むのも無理。これじゃあどうしようもないぜ」

「そのことなんです、もう諦めようかと思ってます」

「え？　なんで？」

「ティキさんが盗もうとまでしてくれたのは、ありがたいんですがこれ以上迷惑はかけられません。お金も払ってないですし」

ティキは、ため息をつく。

「おいおい、なにを今更言ってるんだ。それに別に迷惑なんかじゃねえよ。俺はあんたの話を聞いて協力したくなったから勝手に協力してるだけだ。俺が勝手にやってることなんだから、あんたが気にすることなんかじゃないぜ」

「……しかし」

「まあ、あんたがどうしてもって言っんなら止めなくもないけど」

「なあに、弱気になってんの？　ティキらしくないなあ」

その声にティキは入り口のほうを見る。そこには、手に紙を持ったりティアが立っていた。

「リディア？　どうしたんだ？」

リディアは、ティキのほうへと向かっていく。その途中で目があった依頼主に軽く会釈をした。依頼主もそれにつられるように会釈をする。

「電話で言っただしょ？　こっちはこっちでなんとかしてみろって」

「あー。そんなことも言ってたかな？　……ってことは、なんとかあったのか？」

「まあ、なんとかあったって訳じゃないんだけど。とにかくコレ」
そう言いながらリディアは手に持っていた紙をティキへと渡す。

ティキはそれを受け取ると、紙に書いてある内容を確認する。そこには住所のようなものが書かれていた。

「これは？」

「ある金持ちコレクターの住所だよ」

「コレクター？」

「そ、今回の依頼主さんの息子さんの作品が好きで集めてるコレクターがいるの。その人は毎年必ずと言っていいほど、このオークシ

ヨンに出品される作品を落札しているの。聞いた話だと、息子さんの作品の九割はこの人が持つてゐるらしいよ」

ティキは、リディアの説明を聞きながら紙を見つめている。

「へえ、そうなんだ。それで、そいつの住所を知ってどうするんだ？」

「鈍いなー。やっぱりティキちゃんは子供だなー。決まってるじゃない。そのコレクターが落札したそのお目当ての品物を譲ってもらふのよ」

リディアの言葉に、ティキも依頼主も一瞬固まる。

「ど、どっちが子供だよ。そんな常識で考えて無理に決まってるだろ？ 最低でも5000万オーラムの品物だぞ。ただで譲ってくれると思つてんのか？」

「そこが、あなたの腕の見せ所でしょ？」

「お、お前なあ。簡単に言うけど……」

「じゃ、あたしはコレで。コレでも結構忙しいから」

ティキの言葉を遮り、リディアは再び入り口へと向かっていく。

途中依頼主の男と再び目が合う。

「依頼主さん、彼に頼まれてあなたの息子さんのこと調べました。

ほんとに凄い息子さんですね。亡くなられたのが惜しいです」

「いえ、そう言つて頂けて息子もきつと喜びます。協力して頂きありがとうございます」

リディアはニッコリ笑うとルティーを出て、リバティーへと乗り、空高く飛び去つていった。

ティキはその紙を見つめている。

「しゃあねえか。今はコレしか方法ないしな」

ティキは、リディアの考えた作戦を実行してみることにした。そして、依頼主と共にその紙に書かれている住所へと向かった。

Act 12：作品の想い

ティキと依頼主は、紙に書かれた住所を頼りに依頼主の息子の作品のコレクターである男の家へと向かっていた。そして、ようやくその住所の場所へとたどり着いた。

「へえー、ここがそうか。ってすげー豪邸」

ティキ達の前には、一市民がとても買えないような大豪邸があった。高級住宅地であるこの場所の中でも特別目立っているような、そんな雰囲気を持った場所だった。ティキは、門の前に付いていたインターホンを押す。すると、正面のドアが開き、黒ずくめの男が数人出てきた。

「なにかようですか？」

出てきた黒ずくめのうちの一人、サングラスをかけたスキンヘッドの男がティキに問いかける。

「あ、俺達ここに住んでるえっと、デリユームさん？ に会いたいですけど」

「デリユーム様は、どこの馬の骨かも分からない連中に会う予定はございません。お引取りください」

「まあ、そう言うなって。ここにいまするんだろ？」

「決して通すわけにはいきません」

黒ずくめの男達は断固として、意見を譲らなかった。ティキはどうしたものかと考え込んでいると、さっきリディアが来た時、一緒に渡されたバッジがあることを思い出した。それは、国の高官の証となるバッジでとても信頼のおけるものだった。

「あ、これなら信頼できる？」

ティキは、黒ずくめの男にそのバッジを渡した。バッジを受け取った黒ずくめの男は、そのバッジをジッと見つめるとティキに言った。

「少々お待ちください」

その言葉を放つと、軽く頭を下げ、サングラスの男は再び豪邸の中へと入っていった。その間も、他の二人の男はティキと依頼主を見張っている。しばらくすると、中に入っていたサングラスの男が戻ってきた。

「失礼しました。中へとご案内します」

どうやら、リディアから貰ったバッジが役にたったようだ。ティキと依頼主は、サングラスの男に連れられ豪邸の中へと入っていた。

ドアの前まで案内すると、サングラスの男がドアを開ける。

「さあ、どうぞ。デリユーム様がお待ちです」

ティキと依頼主は、招き入れられるままにさらに中へと入っていた。そこには、タキシードに身を包んだきりつとした顔の男が立っていた。

「いやいや、お待ちしております。私がデリユームです。国の高官の方でしたよね。一体なんの用でしょう？ 国に対する融資の件ですか？」

「あ、違った。俺達は、そんな用で来たんじゃないんだ」

ティキは、デリユームにことに全てを話した。今度のオークションに出される品物のこと、それが依頼主の息子の作品であること、それを譲って欲しいということ。

「なるほど、事情は分かりました」

「え、じゃあ……」

「しかし、それは無理な話です」

一瞬、期待はしたのだが、予想していた通りの答えが返ってきたので、ティキは心の中で『やはり』と思っていた。

「やっぱ、いくらなんでも高額な物を他の人に譲るなんて出来ないよな」

「あ、いえ。そういう意味ではありません。ただ私は、その商品を落札する気がないのです」

「え？」

ティキも依頼主もその言葉には、さすがに驚いた。なにしろ前提がまず、落札するだろうから。ということだったからだ。落札しない。その言葉の真意をティキも依頼主も聞いてみたかった。

「あなた達も知つての通り、私は彼の作品が好きで集めているコレクターです。世界的にも高い評価を受ける彼の作品には、その視野の広さがあります。視野の広さは心の広さ。万人に受け入れられるその作品のテーマが、ここまで高く評価される理由でしょう。しかし、彼のその一作品目の作品。私も、オークションのカタログで始めて見た時は心を奪われましたが、すぐにそれは違うと気が付きました」

依頼主は、デリユームの言葉をすっかり聞いている。

「一作品目の作品には、彼のテーマであるはずの視野の広さ。心の広さがない。あれはまるで、一個人のためだけに造られた作品のようだった。それに気が付き分かったのです。あの作品は私が持つべきものではないと。それが、私があの作品を落札しない理由です。しかし、彼の一作品目。プレミア的な意味での価値は非常に高い。彼のファンは私だけではない。きっと他の誰かが落札するでしょう。ですから、他の誰かに頼まれたほうが良いかと思えます」

ティキは、もう半ば諦めていた。落札するつもりがない。すでに前提として違っている相手に、品物を譲ってくれというのは、服を着ていない者に服を脱げと言うもの。不可能だ。そして、ティキは他の方法を取ろうと帰ろうとしたとき、先ほどまで黙っていた依頼主が口を開いた。

「すいません。息子の作品を見せてはいただけないでしょうか？」

デリユームは依頼主の言葉に笑顔で答えた。

「ええ、いいですよ。ギャラリーにご案内します」

ティキと依頼主は、デリユームに連れられギャラリーへとやってきた。そこは、依頼主の息子の作品が多数並べられていた。しかも

像を保存する上で最も適した方法で保存されていたのだ。

「へえ、綺麗なもんだな」

ティキには、芸術に対する知識はほとんど皆無だが、そんな素人のティキでも綺麗だと分かるくらいしつかりと保存されていたのだ。依頼主は、作品の一つ一つをしつかりと見るように眺めていつている。しばらく眺めていると、ある作品の前で立ち止まる。

「これは……」

「それは、彼の五つ目の作品ですね。テーマは翼ですね。彼の全体のテーマである広さが、より顕著に出ている名作ですよ」

その作品は人と翼が融合し、まるで天使のように描かれた銅像だった。

「この作品を生み出すのに、彼がどれだけ苦悩したのか。我々コレクターの間でもよく討論されます。そもそもその作品は……」

「……違うんです」

デリュームの言葉を依頼主の言葉が遮った。

「この作品は、息子の夢でした。小さい頃からの夢。地上を追われ空に住まうようになった私達が、それでもなお青い空へと飛び立てない。しかし、翼があれば、空へと旅立てる。息子がずっと言っていたことです。この作品は、そんな息子の夢が詰まった作品なんです」

依頼主の言葉にデリュームは返す言葉がなかった。コレクターである自分よりも、作品のことをよく分かっている。しかも芸術としての評価ではなく。心のありかとしての評価。見るところも感じることも違う。しかし、デリュームの心には、それは確実に響いていた。

「すばらしい。一つお願いしてもいいですか？ 他の作品についても、あなたの知ってる彼の心を教えていただけませんか？」

「え、ええ？ 大したことは出来ませんが、それでもよろしければ」「是非、お願いします」

依頼主とデリュームは、作品について語りだした。芸術に関して

はまったく無知であるティキは完全に蚊帳の外。ティキはなにかを確信したのか。なにも言わずにその場を静かに去っていった。

帰り際にサングラスの黒ずくめの男に会った。

「おや、もうお帰りですか？」

「ああ、俺は必要ないみたいだから帰るよ」

「そうですか。お気をつけてお帰りください」

ティキは、サングラスの男に見送られ一人先に、帰っていった。

ティキは、リバティーの洗車をしていた。

「おーす、ティキ」

突然、背後からかけられた声に驚き、ティキは後ろを見る。そこには、リディアがいた。

「なんだ、リディアか。てかお前ってなんかいつも突然現れないか？ 忍者か、お前は」

「失礼ね。それより、あの依頼はどうなったの？ あの銅像のやつ」

「あー、あれか。昨日手紙が来てたんだ。ちよつと待ってな。持ってきてやるよ」

そういうとティキはルティーの中へと入り、手紙を持って出てきた。そして、それをリディアへと手渡す。リディアは、それを受け取るとその内容を読み始めた。

要約するとそこには、あの後無事に銅像を譲り受けることができたということが書かれていた。

「へえ、じゃああたしの作戦は成功したのね？」

「ああ、でも俺は途中で帰ったからよくわかんねえんだけどな」

「え？ なに、仕事放棄？」

「違っつて今回実質、俺は必要なかったのさ。依頼主のおっさんが

ほとんど一人でやったんだ。おっさんとお前が紹介したコレクターと作品について語り合ってたから。たぶん、気が付いたんじゃないかね？」

「気が付いた？」

「ああ、芸術なんてまったく無知な俺でも気が付いたよ。おっさんの息子の一作品目の作品は、おっさんのためにだけに作られたんだ。あの作品を持つべき人間は、他の誰でもなくおっさんだったんだ。きつと、あのコレクターもそれに気が付いたんじゃないか？　だから、落札しておっさんに譲ったんだと思うよ。ま、あるべき場所へ返ったってことだな」

ティキは、少し嬉しそうな表情で言う。

「ティキ、なんだか嬉しそう」

「う、うるせえ。いいから読んだならその手紙返せよ」

ティキは、リディアから手紙を奪い返した。ティキがまったく否定をしなかったということは、やはりティキも嬉しかったのだろう。「それより、お前なにしにきたんだ？　だいたい、お前が来るとろくなことがないんだけど」

「あら？　この間は誰のおかげでコレクターの元にたどり着けたんだっけ？」

「……」

ティキは、なにも答えない。

「まあいいけど。今日はね。あんたに依頼を持ってきてあげたのよ。ありがたく受け取りなさい。どうせ、この間のもただ働きだったんでしょ？　まあ、外で立ち話もなんだから、中でコーヒーでも出して」

そういうと、リディアはルティーの中へと入っていった。

「あのな。それはお前が言う台詞じゃないだろ？」

ティキも、リディアの後を追ってルティーの中へと入っていった。

ルティーの横には、今日も綺麗に磨かれたリバティーが太陽の光

に照らされ、まぶしいくらいに輝いていた。

Act 13：階下より聴こえる詩

——ある街の一角。夜も遅くなり、街の騒音も静まり返った時間。

そこに住む少年はいつも、夜寝る前になると二階の窓を開けて外の音に耳を傾けている。

「ニコル。まだ起きてたの？ 早く寝なさい」

ニコルという少年の後ろから声をかけたのはニコルの母親だった。ニコルは身体を半分母親の方へと向けた。

「うん、ごめんなさい。でも、そろそろだよ」

「あら、その時間かしら？」

ニコルの母親もニコルの元へと近づいていき、窓の外を眺め外の音に耳を傾ける。深夜に近い時間である夜は、さすがに街の賑やかさはなく静まり返っている。

そんな時に、どこからともなく声が聞こえてきた。それはよく聞くところやら歌声のようだ。誰かが歌っている。その歌声はとても綺麗で澄んだ声だった。まるで陽気のいい日に、自然の中で太陽の光を浴び、自然の音を聞き、いつのまにか眠ってしまえるような、そんな安心という言葉がそっくりそのまま当てはまるような歌だった。

ニコルも、その母親もその歌に聞き入っている。まるで癒しの効果を全て含めたような声に、心を奪われていたのだ。

その歌は街全体に広がっていた。その声に誘われ何人も人間が窓を開ける。まさに、深夜のライブショーだ。だが、他の人間が窓を開けたのは別の理由もあった。それは、この歌が消えかかるときには必ず起きる出来事に備えるためだ。

そして、街全体に届いていた歌声はやがてゆっくりと聞こえなくなる。その瞬間街の地下から、振動が伝わってくる。それは確実に、

星の内部から伝わってくる振動。心臓の鼓動のように幾重にも重なり、現れる衝撃。

——この揺れを人は地震と言った。

それほど大きな地震ではない。だが、毎晩ほどに起こるこの地震に不安を抱いている人も少なくはない。そのため一部の人の間では、この歌声を悪魔の歌声とし、聞かないようにしている人もいた。そして、歌声が消え地震も収まると、再び街は静かな夜を迎えるのであった。

その地震が起きる国よりもはるか遠くにある国リシュレシア。ここはティキが住んでいる所である。リシュレシアは、数多く存在するサガルマータの中でも特別大きく、リシュレシアという国の名前と共に、街の名前にもなっている。故に国家都市とまで呼ばれ、繁栄を刻んでいる。それは、やはり月の復活をしようと他の国の中心になっていることが大きいだろう。リシュレシアをはじめ、月の復活をしようと同盟を組んでいる国は多数存在する。

「それで一体どんな依頼を持ってきたんだ？」

ティキは、ルティーにやってきたリディアから話を聞いていた。リディアはどうやらティキのために依頼を持ってきたというのだ。

「うん、最近地震が頻繁に起きてる国があるのは知ってる？」

「あー、なんかニユースかなんかで言ってたな」

「へえー、ニユースなんて見るんだ。えらいえらい」

リディアはそう言いながら、ティキの頭をなでる。

「……てめえ、今すぐその手をどけねえと殺すぞ」

ティキは頭をなでられ、子供扱いされたことに気分を害したようだ。

「まあ、知ってるなら話は早いよ。その国から、地質調査の依頼があつたのよ」

リディアはティキの気持ちを横に置いて話を進めた。

「地質調査？ そんなもん、その国の奴らにやらせりゃいいだろ」

「あのね。依頼をしてきたメセアニス国は、リシュレシアの同盟国でもあるの。そんな無碍に断れるはずがないでしょ。それに、今回の地質調査はアंकレストなのよ。普通の人間は、マスクをしなきゃ行けないし、オームもいる。それならマスクもせずに、しかも自らの身を守る術も持つてる月の産物を持つあたし達が行ったほうがいいじゃない」

——月の産物。

それは、月のカケラより創られた武器や道具などの総称である。

月のカケラは月の破片から出来た鉱石で、そのほとんどは長い年月をかけ粒子となっている。また、月の産物の精製には多くの月のカケラを要し、月のカケラそのものが貴重なものとなっている。それ故に月の産物を持つものは非常に少なく、またソレ自体が非常に大きな戦力となるため、月の産物を持つ者にも特別な者が選ばれる。

ティキやリディアがいるリシュレシアのように、一個の国に二人もの月の産物の所持者がいるのは非常に稀である。

「まあ、金が貰えるなら俺はどんな依頼でもいいんだけどよ」

「そうこなくっちゃ。それでね、その地震が起きる国なんだけど、地震が起きる前にその前兆のような現象が起きるみたいよ」

「前兆？」

「そう。歌が聞こえるんだって。遙か階下アंकレストより聞こえ

る謎の歌声。その澄んだ歌声が聞こえた後起きる地震。人はそれを悪魔の歌声と呼んでるそうよ。あたし達の見解では、その歌は大地の裂け目を風が通って奏でる旋律だと思ってるんだけど。今回の調査は、その歌と地震の調査なの」

「歌……か」

「じゃ、説明は終わり。さっそく出発するから準備して」

「え、今から出るのか？」

「当然。歌が聞こえるのは夜なのよ。結構遠いし、今から出ないと間に合わないしね」

リディアに促されティキは準備をし、さっそくりシュレシアを飛び出した。今回の依頼は国外なので、結構な距離がある。目的地であるメセアニスは、リシュレシアの隣にある国のさらに隣にある。

しばらく行くとリシュレシアの隣の国が見えてきた。ここも中央に官邸がある。それはリバティーに乗り上空から見えているティキ達にはとてもよく分かる。だが今回はこの国に用はないので、そのまま上空を通過する。通過する際に領空を支配しないように、サガルマータから離れて飛ばなくてはいけない。

なぜなら上空はリバティーだけではなく、大型の飛行船である”ヴィマーナ”という乗り物も飛んでいるからである。リバティーが一人乗り専用なのに対して、ヴィマーナは一度に五百人も人間を乗せることができるため、気軽に遠くにいくにはこのヴィマーナが最適である。

その隣の国も通りすぎさらに飛んでいくと、見えてくるのが今回の目的地であるメセアニス国。国土はそれほど大きくなく、主に商業が盛んな国である。そのため、投資関連の事業主の多くが住んでいる。上空を流れる気流を切り裂き、ティキの髪もリディアの髪も

乱れる。ティキもリディアもリバティーに乗る時はゴーグルサングラスをかけている。というより、リバティーに乗る時の法律としてゴーグルサングラスをかけることが、義務付けられている。

ティキとリディアは、国にある広場を見つけ降り立った。とりあえず現地で地震に関する聞き込みをするためだ。そのため人の多い広場を選んだ。そこにいる人は夕方が近いからなのか、帰ろうとするものがほとんどだった。そんな人達を呼び止めティキとリディアは別れて地震について聞いて周る。

何人かに聞いた後、ティキとリディアは再び合流した。

「ふう、何人かに聞いたけどみんな大体同じ答えだな。天使の歌声か、悪魔の歌声か」

「うん、あたしが聞いたのもだいたいそんな感じだった」

「ま、綺麗な歌である天使とその後に来る地震が悪魔ってどこか。やっぱ実際に歌聞いてみないとほんととも言えないな。それからいいんだろ？ アンクレストにいくのは？」

「うん。歌が聞こえてくるのがだいたい、いつも23時から0時までの間らしいから、それまでどこかで時間を潰してましょ」

そう言って時間を潰せる場所へと移動しようとした時、ティキの後ろから声が聞こえた。

「ニコル、それなんだよ？」

声につられて興味本位からかティキは後ろを振り返る。そこには少年が二人ボールを持ってベンチに座っていた。

「これはね。歌を歌ってる人にあげるんだ。いつも綺麗な歌声を聞かせてくれてありがとうって」

「歌って。お前あれは悪魔の歌なんだぞ」

「悪魔なんかじゃないよ。あんな綺麗な歌声の人が悪魔なわけじゃない」

「でもみんな言ってるよ。あれは悪魔の歌だって」

少年が手に持っているのは、小さな手作りの人形のようなものだった。ティキはその少年達に近づいていく。

「なあ、君達も歌のこと知ってるのか？」

突然声をかけられ少年達は一瞬驚いたようだが、ティキの質問に答えた。

「うん、毎晩聴こえてくるから。この街で知らない人なんていないよ」

「そうか。それ、歌ってる人にあげるのか？」

ティキは少年の持っていた手のひらサイズの人形を指差した。

「うん、でも歌は下から聞こえてくるんだ。歌ってる人に会いたいんだけど僕は下にはいけないから」

「だったら、俺が渡してきてやろうか？」

「え？」

少年はティキの言葉に驚く。

「俺達は、これから下に行くんだ。その歌ってる人を探しにさ。だから見つけたらソレ渡してやるよ」

「ほんとう！？」

少年は嬉しそうにティキに確認する。

「ああ、約束するよ」

「絶対だからね」

ティキは少年から人形を受け取ると、ポケットへとしまった。少年達と別れたティキ達は、夜になるまで時間を潰すために街を歩き回っていた。

「ティキ、あんたもいいところあるじゃん」

ティキの横にいたリディアがティキに話しかける。

「あ？」

「さっきの人形。人形を渡してやるなんてさ」

「ああ、そんなことか。ついでだよついで。どうせ下に行つて歌の現象を突き止めるんだろ？ アンクレストに人なんかいるわけない

と思うけど、一応ああやって信じてる奴がいるんだから、叶えてやれることは叶えてやりたいじゃねえか」

ティキ達は、街を見て周り夜まで時間を潰した。そしてついに歌が聞こえるという時間になり、ティキ達はその歌を聞くため郊外の丘の上まで来ていた。

Act 14：唄う少女

街の明かりが一望出来る丘の上。そこは風も心地よく当たり、夜の街の明かりがまるで散りばめられた宝石のような輝きを放っていた。そんな丘の上にティキとリディアが、アンクレストより聴こえるという歌を聴くためにやってきていた。

「聞いた話だとそろそろだな」

ティキ達は耳を澄まして、自然の音に耳を傾ける。夜にも関わらず多少の街の音は聞こえる。そして、風の音も。風の音に混ざって心地よい音が聴こえてくる。その正体にティキもリディアもすぐに気が付いた。それは、この街で噂になっている歌声に間違いなかった。

とても澄んだ歌声は耳から入ると、脳でそれを受け取り全身で感じる事が出来る。まるで、全身が歌に支配され、身体全体がその歌という空間に包まれてしまうような、他の全てを忘れて思わず歌を聞き入ってしまうほどの歌声。ティキもリディアもこんな身体の隅まで響き渡るような歌声を聞いたのははじめてだった。

普段歌を聞かないティキにも、それがどれだけ素晴らしい歌声なのか理解するのに時間はかからなかった。リディアの目からは思わず涙が出てくる。それが感動によるものなのか、リディア自身にも分からなかった。

——ただ、自然に出てくる涙。

そして、しばらくその歌を聴いていると突然地面が微かに動いた。いや、それはほんの一瞬だった。次の瞬間、さらに大きな地震がティキ達を襲う。歌に聞き入っていたため警戒するのを忘れていたテ

イキは、その地震に足を取られ倒れる。リディアも歌に聞き入っていたようで、地震に対処出来ずに倒れてしまう。

それほど長い地震ではない。それほど大きな地震でもない。地震が収まった時、歌声はすでに聞こえなくなっていた。そして何事もなかったかのようにいつもの夜に戻る。

「リディア……聞いたか？」

「うん」

「すげえ綺麗な歌声だった。ほんとに誰かが歌ってるようだ。自分のボキャブラリーの少なさに後悔するぜ。俺の知ってる言葉じゃ言い表せない。俺としたことが聞き入って地震に対処出来なかった」
ティキは少しの間沈黙した。そして地面からお尻を離し立ち上がった。

「よつし。俄然やる気出てきた。俺もこの歌の正体が知りたくなかったぜ」

ティキの顔には笑みが零れていた。

ティキとリディアは、リバティーに乗ってアンクレストへと向かう。夜でも当然のように月のカケラの粒子が覆っているので、その粒子を越えてアンクレストへと向かう。リバティーのライトがその暗く見えにくい視界を照らす。

アンクレストはかつては繁栄を極めた地上である。そのため忘れられた文明が今も多く存在する。ほとんどは崩れて土に返っているのだが、大昔のビル郡それがこのメセア二ス国の下のアンクレストにはあった。それはとても不気味な雰囲気放っている廃墟そのものだった。

「それで、多少なりと事前調査はしてるんだろ？」

「ええ、歌の発信源を音波で確かめてるの。それによると、地上の

F231 - 632654 地点。間違いなくこの下に見えるビル郡のうち、あの半分崩壊しているビルね」

ティキとリディアの前に現れたのは多くの忘れられた文明だった。ティキ達が目的としているのは、その中の一つ。ティキ達はその目的地の前にリバイターを止めるとビルの前に立った。

「近くで見ると迫力っていうか、不気味だな……」

「ほんとね。あ、気をつけて。あたし達の見解では地面に開いてる亀裂から風の音が漏れて音を発してるって予想だから」

「その亀裂に落ちないようにってか？ 馬鹿言うな。俺がそんな失敗するわけないだろ？」

ティキはそう言いながらゆっくりとビルに近づいていく。

「お前こそ、亀裂に落ち」

ティキは、あるはずであった地面がないことに気が付いた。しかしその時すでに遅く、ティキは地面に吸い込まれるように下へと落ちていった。

「ティキっ！」

「んなあああああつ！！」

リディアの叫びが空しく木霊する。ティキは重力に逆らうことが出来ずにどんどん落ちていく。その亀裂からの穴は相当深く、浮遊感を感じることが出来るほどだった。

次の瞬間ティキの全身を冷たいものが包み、息をすることが出来なくなった。ティキはそれを一瞬で水だと理解し、息を止め浮上する。

「ぷはあ！」

浮上して空気を確保したティキは、息が上がっているが岸まで泳いでいく。そして岸に上がると辺りを見渡す。

「はあ、助かった」

まずティキは上を見渡した。ここは空洞のような場所で天井は暗くて見えない。どれほどの高さから落ちたのかすら分からないほどの高さだった。

「くそ、まさか落ちるとは思わなかったな。ここはなんなんだ？」

こんどは辺りを見渡す。するとティキの目に光の粒が入ってきた。その光に誘われその方向を見る。ティキが見た方向は先ほどティキが落ちてきた水溜りだった。そこは相当な深さを持った泉だった。

「水が……光ってる？」

その泉は眩いほどの光を放っていた。暗いはずの空洞内が多少明るく照らされ、周りが見渡せるのはこの泉から発せられている光のおかげだ。それに共鳴するようにティキが首からさげている月の産物も光っている。それに気が付いたティキは月の産物を手に取る。

「これは共鳴……。この光は月のカケラか」

そう、この泉に溶け込んだ月のカケラの粒子が、互いに共鳴し輝きを放っていたのだ。それは暗く深い穴の中にある太陽のような光生命を彷彿させるような光だった。その泉を見ていたティキの眼にふとありえないものが映った。一瞬ティキは幻かと思いい目を拭う。そして再びそこを見る。だが、それは幻ではなく確かに存在していたのだ。

——そこには、泉の横にひっそりと座る一人の少女がいた。

それは信じられない光景だった。月のカケラの粒子が蔓延している地上アンクレスト。生物は存在できない。そこはオームのみが生存できる世界。動物や植物は死滅した死の世界。そこにいるはずのない一人の少女。ティキはあまりの驚きに一瞬人形のように固まってしまった。

少女はその真っ直ぐな目でティキを見ている。その視線に気が付いたティキは平静を取り戻し、少女に問いかける。

「キミは……どうやってここに？」

ティキの問いに少女は無言でひたすらティキの目を見ている。

「名前は？」

ティキは質問を変え再び少女に問う。

「……ディアナ」

少女は、その小さな身体に見合った澄んだか細い声でティキの質問に答えた。

ティキには名前よりもいろいろ疑問があつた。一体このディアナという少女はどうやってここにきたのか。このオームしかない死の世界でどうやって生きてきたのか。

だが、ティキの疑問の一つはすぐに解消されることとなる。

ティキの耳に聞きなれた声が飛び込んできたのだ。それはアंकレストでのみ聞ける特有の声。いや、これは雄たけびというのだろうか。ティキはその声を聞くと声の方向を向きすぐに身構えた。

「この声は、まさかオームか？」

一瞬、この場所にはオームはおらずそれ故に、ディアナはなんとか生き延びてきたのではないかというティキの考えは、その声により打ち消された。そしてその声によりティキの疑問はさらに深まったのだ。オームの足音は少しずつティキ達のいる空洞へと近づいてきていた。ティキは月の産物を手に構えると、戦えるように巨大化させる。そして、この空洞にある唯一の入り口の奥から聞こえる足音に耳を傾ける。

暗闇の中から徐々にオームが姿を現した。それは猛獣のような姿をした二足歩行のオームだった。

「ちっ、猛獣型か。だが一匹ならなんとかなるか」

ティキはルナフォースを構えると戦闘体勢になった。そして一瞬ディアナのほうを見る。

「おい、ディアナ。そこにいると危ないから下がってな」

ティキの呼びかけに相変わらず答えないディアナ。ティキがディ

アナに巻き添えがいかないように、オームを誘い込むように移動しようとした時、ティキの耳に声が入ってきた。

それは地上で聞いた歌声。地震の原因であり、今回の調査の対象。ティキ達がアंकレストにきた目的。ティキは一瞬耳を疑ったが、その歌声が聞こえる方向へと顔を向けた。そこにはディアナが立ち上がり、そのか細くも力強い声で、歌を歌っていたのだ。一瞬、ティキは再びその声に耳を奪われてしまった。目の前にオームがいることなど忘れ、聞き入ってしまったのだ。

だが、戦闘の経験からティキはすぐに意識をオームへと向けた。すると、オームはまるでその音楽を嫌っているかのように少しずつ後ずさりしていた。そして再び唯一の入り口から、ゆっくりと姿を闇に消していったのだ。ティキは戦闘体勢を解く。そして再びディアナのほうを見る。ディアナは歌うことを止め、再びその場に座り込んだ。ティキはルナフォースを元の大きさに戻すと、ゆっくりとディアナのほうへと近づいていった。近くまできたティキは気が付いた。ディアナは自分と同じ銀色の髪に、金色の瞳をしていたのだ。

「……ディアナ。キミは一体何者なんだ……」

ディアナは相変わらずティキの質問には答えず、そのまっすぐな目でただティキを見ていた。

Act 15：知能を持つ怪物

そこはアンクレストの遙か地下にある空洞。そこにある泉は月のカケラの粒子の共鳴で光っている。そして、この空洞はその光だけを頼りに明るさを保っていた。

「とにかく、ここに居るのは危険だ。立てるか？　ここから移動するぞ」

ティキはディアナに手を差し出す。だが、ディアナはティキの手を取ろうとはしない。そして今度はディアナのほうから口を開いた。

「……だめ」

「え？」

ディアナの言った言葉をうまく聞き取ることができなかったティキは、もう一度聞き返す表情を見せた。

「だめなの。私はここから動くわけにはいかない。私は……この場所以外では生きられない」

ティキは差し出していた手を戻すことも忘れてディアナに聞く。

「どういうことだ？」

ティキがその疑問を口にした時、ティキの足元から衝撃が振動してきた。ティキはその振動に気がつき地面を見る。

その瞬間、オームの手が地面から出てきた。それはそのままティキの顔面目掛けて飛んでいく。突然の出来事にそれを避けることが出来ず、そのままティキのいた位置から考えると、十メートルはあろうかという空洞の一番端まで吹き飛ばされる。端まで飛ばされたティキは壁に当たると、そのまま崩れていく。ティキの当たった壁も同じく崩れ、ティキの髪や身体に破片や塵が被さる。

それを見ていて驚いたのは、ディアナである。ティキが飛ばされるのを目の前で目撃したディアナは、一瞬なにが起こったのか理解

できないでいた。だが、それを考えるまでもなくディアナの身体を手が覆う。それは人の身体よりも遥かに巨大な手で、ディアナはその手に包み込まれたのだ。それはオームの手だった。

ディアナを掴んだオームは、地中からその巨大な身体全体を表す。それは先ほどティキ達の前に姿を現したオームだった。一度引いたと見せかけて地中から襲ってきたのだ。

壁まで吹き飛ばされ意識を一瞬失っていたティキも気がつき顔を上げる。ティキは頭から血を流し、それは顔の正面を伝って顎まで流れてきていた。顎まで流れた血は行き場を失くし地面へと落ちる。ティキは目を凝らし前を見る。そこには先ほどのオームと、そしてオームに掴まれるディアナの姿があった。

「く……そ……油断した」

その時、ティキの耳に聞きなれない低い声が聞こえてきた。

「ついに」

一瞬、幻聴かとティキは思った。頭を打った影響で少しダメージがあるのか。だが、それが幻聴ではないということをティキはすぐに知ることになる。

「ついに、手にいれたぞー！ これで、俺は最強だあ！」

その目ではつきりと前を見ていたティキには、その言葉を誰が発したのかが見えていた。その言葉が聞こえていたとき、口が動いていたのはもちろん自分ではない。そしてディアナでもない。残るはただ一つ。

——それは、オームの口から発せられた言葉だった。

言葉を話す。知能を持ったオーム。こんなことは今だかつて前例のないことだった。オームとは、月のカケラの粒子が結合して出来る無機物生物。ただ、破壊のみを行いオームを破壊すればそれは再び粒子に戻る。ただ、それだけのはず……だった。

だが、今ティキの目の前にはそれを遙かに凌駕する事実があった。ティキは驚き言葉を失うが、今この状況はそれどころではない。自分はおームの攻撃をまともに喰らってしまい、しかもディアナはおームの手の中。

ティキは、ふらつく頭を必死に動かし立ち上がる。相当なダメージが残っている。本来、おームというのは相当な怪力だ。人間がまともに受けてはひとたまりもない。だからこそ、一撃を喰らう前に一撃で仕留める。それがおームと戦う時の定石だ。ふらつく足をなんとか手で支え立ち上がったティキはおームのほうを見る。

「その子を……離せ」

ティキの声に気が付いたおームはティキのほうを見る。

「おまえ、さつきもいたな。人間か？ 人間だったらこいつと一緒に喰ってやろう」

「いいからその子を離せ」

「そいつは出来ないな。こいつはオレがさらに進化するために必要なんだ。オレはこいつを喰ってさらなる知能を付ける。邪魔するな」

「……喰うだと？」

おームは、ディアナを持つ手を前に差し出す。ティキはその行動に疑問を抱きながら見つめる。

「そう。こつやってな」

そう言うとおームは口を開け、ディアナを口に入れようと自分の手を口に持っていった。

その瞬間、おームの腕に激痛が走る。その痛みには耐え切れずおームはバランスを崩す。おームの腕は切断され、切断された腕はディアナごと地面に落ちる。おームは叫びながら落ちた腕を見る。そこには、肩まで伸びた黒い髪をなびかせる女性の姿があった。女性がおームのほうに視線をやるとおームと目が合う。その瞬間、おームにむけて一閃が放たれる。だが、それはおームの胸部をかすめただけだった。おームの野生の本能が無意識のうちに身体を引かせてい

ただ。

予想もしていなかった状況に、オームは自身が出てきた穴から逃げ再び消えていった。

ティキもその満足に動けぬ身体で、その光景を見ていた。突然現れた女性はオームに掴まれたディアナを助け出すと、ディアナを担いでティキの元までやってくる。

「珍しいね。あなたがここまでやられるのは」

「へっ。ちよつと油断しちまってな。お前こそ来るのが遅いんじゃないか？ リディア」

「なーに言ってるのよ。あんたが勝手に落ちるからいけないんじゃない？ 降りれる場所探して、ここもちゃんと見つけたんだから感謝しなさい」

リディアはディアナを降ろすと、ティキの顔を見る。

「それより、一体これはどういう状況なの？ この子は一体誰なの？」

「説明は後だ。とにかくまずはここから離れよう。降りてきたってことは出口も分かっているんだろ？」

「ええ、ここは昔の隠れ聖堂みたいよ。ここは礼拝が置いてあった場所みたいね」

「そうなのか。この空洞はそのためか。ちようどいいところに亀裂が入ってみたいだな」

「それより動ける？」

「ああ、俺は大丈夫だ。リディアすまないがその子を頼む」

リディアが、ディアナの手を取り担ごうとした時、ディアナは目を覚ました。

「う……。駄目」

ディアナが気が付いたことに、リディアとティキが気が付く。

「私をここから出さないで。私はここでしか生きられないの」

「どうということ？」

リディアがその言葉に疑問を抱く。一方先ほども同じ言葉を聞いたティキは、ディアナが自分と同じ髪の色と瞳の色をしていることからある仮説を頭の中に描いた。

「ディアナ。お願いだ答えてくれ。きみはいつからここにいます？」

ディアナはティキのほうを見る。

「私は、生まれた時からずっとここにいます」

その言葉にリディアは驚く。ティキはまるで、予想通りの言葉のように冷静でいる。

「やっぱりそうなのか。きみは……」

「やっぱりってどういうこと？」

リディアがティキに聞く。ティキはリディアのほうを見る。

「言い方は悪いかもしれないが、この子は……オームと同じなんだ。オームと同じように月のカケラの粒子から生まれた人間だ」

「え？」

予想もしていなかったティキの言葉にリディアは思わず声が出してしまった。

「厳密にはオームとは違う。けど、生まれ方はオームとまったく同じ。生まれ方以外はどこも人間とは変わらない。この子はここで生まれたんだ。これで全てのことに説明がつく。この子は月のカケラの粒子を栄養源としている。恐らく、その月のカケラの粒子が染みこんだその泉があれば生きられ、その泉がなければ生きられない」「ちよつと待つて。月のカケラから人間が生まれるなんてこと……」

「前例が……あるんだ」

「え？ 前例があるってそんな話聞いたこと……」

ティキはディアナの元へと歩いていく。

「ディアナ。事情はわかった。確かにきみはここから出ることは出来ない。けど、ここにはオームがいる俺達二人でオームをやっつけるから、出来るだけ離れていてほしい」

ディアナはティキの目を見てなにも言わない。

「リディア、この先はどうなってるんだ？」

「え？ えつとこの先はいくつか道が分かれてるんだけど、地上へ出るだけならそんなに時間はかからない」

「そうか。なら、なんとかしてオームを地上におびき寄せよう。そこならここで戦うより安全だ」

「でも、おびき寄せるってどうやって？」

「それなんだが、聞いて驚くなよ。ここのオームは知能を持ってるんだ。人の言葉を話し理解もしている」

「うそ？」

「俺もさすがに驚いたよ。まさか言葉を話すなんて思わなかったかな。でも事実だ。それでオームは俺達を喰うと言ってた。だから俺達が地上に向かっていることを示せば追ってくると思うんだ。俺はリディアがオームをおびき寄せるまでディアナのそばにいる。危害が及ばないように。だからちよつと危険だけど先におびき寄せておいてくれないか？」

「うん、任せて。あたしだって月の産物持つてるんだからオームの一匹くらい倒せる」

そう言うのと、リディアは手に持っている武器を振った。それは、槍のような形状をしていた。

「それが、リディアの月の産物か？」

「そうよ。あたしの月の産物”ルナ・スペリア”。槍なんだけど、あたしの意味一つでムチのようにもなる中距離武器」

「誘い出せたら携帯を鳴らして合図してくれ。それと気をつけろよ。あいつは、頭を使ってうまいこと隙を突いて攻撃してくるからな。俺もそれでやられた」

「あなたと一緒にしないで。じゃあ行つて来るね」

リディアは、暗闇の中を消えていった。

Act 16：怒れる者

そこは暗闇が支配する空間。そこに片腕を落とされたオームがいた。

「グググ。オレの腕が……ゆるさん。あの人間共喰ってやる」

その時、オームの耳にリディアの声が聞こえてきた。全員で地上へと逃げるというリディアの声。怒りで理性を保てなくなっていたオームはそれが自分を誘い出すための言葉だとは知らずに、その声に誘われてリディアを追う様に行った。

ティキは自分の月の産物を手で持つと、それを自分の身長とほぼ同じくらいに巨大化させ大剣にした。そしてディアナのほうを見る。「ディアナ、リディアの合図があったら俺はリディアと一緒にオームを倒しに行く。万が一危険が及ぶといけないから、泉の近くにいてくれ。泉の近くにいればなにかあっても大丈夫だろ？」

ディアナは相変わらず頷きもせずにジッとティキの目を見ている。「なんだよ？ 最初に会った時からずっと俺の顔を見てるよな？

俺の顔になにかついてるか？」

ディアナの小さな口がそつと開く。

「同じ。私と同じ瞳^めをしてる」

ティキはディアナの顔を見つめ返す。

「ああ、俺もディアナと同じだよ」

ティキは優しい笑顔で答える。

その時、ティキの持つてる携帯の呼び出し音になった。どうやらリディアからの合図のようだ。つまりオームをうまく地上におびき寄せることが出来たということ。ティキは無言でディアナの頭に手をやると、頭をやさしく撫でてたった一つの出口から暗闇の中へと

消えていった。ディアナはその後姿をずっと見ていた。

「……私と同じ」

そこはティキが落ちてしまった地面に亀裂があるビル郡のすぐ近く。リディアは作戦通りオームをおびき寄せオームを目の前にして対峙していた。リディアは月の産物であるルナスペリアを出し構えている。しかし、オームはリディアに襲いかかるうとはしない。

「どうしたの？ 知能があるから警戒してるのかしら？ それとも本能で実力の違いを感じとって動くこともできない？」

「オレの腕をよくもこんなにくれたな」

そう言うとおームは引き裂かれた腕を上げて見せた。

「驚いた。本当に話せるのね。まああなたがただのオームじゃないのは分かるけど相手が悪い。月の産物を持つ者を二人も相手しなきゃならないんだから」

リディアがその言葉を言い終わるのとはほぼ同時にティキもその場に到着した。ティキの目の前には、オームとリディアが正面を向き対峙していた。

「リディア、待たせたな。うまく誘い出せたみたいだな」

ティキがオームのほうを見ながらリディアのほうへと移動していく様を、オームはなんにも言わずに見ていた。ティキはルナフォースを構えると戦闘体勢になった。

「ティキ、あなたはまだダメージが残ってるでしょ？ そこで休んでなさいな。あたし一人で十分だから」

二人のやり取りをみていたオームが口を開いた。

「二人が相手。オレはここへ誘き出されたのか？」

オームの言葉にティキもリディアも集中する。

「それとも、オレが誘き出したのか？」

オームの言葉の不可解さに二人が気が付いた時、オームの腕は高く上げられていた。そしてその腕をそのまま地面へと振り下ろす。

オームの巨大な拳が地面をとらえた瞬間、地面に衝撃が走る。そして衝撃は地面を伝い、ティキやリディアの元へ。そして地面は崩れる。

突然、自分達のいた地面がなくなりティキもリディアも焦る。

そこはさっきまでいた空洞の真上。オームが地面を崩したことで天井となっていた場所が崩れ、再び空洞へと落ちていく。二人を強烈な浮遊感が襲う。

とつさにティキがリディアに手を差し伸べた。リディアは差し伸べられた手を取る。するとティキはルナフォースを伸ばし、それを遙か下の地面へと突き刺した。そして落下を防ぐとゆっくりと元の大きさへと戻していった。

ティキのとつさの機転で地面への落下は防ぐことが出来た二人が地面へと降り着いた時、目の前にはあつてはならない光景が広がっていた。

そこには腕が再生され、そしてディアナを片手にティキ達を睨みつけるオームの姿があつた。オームが落ちたのは最初にティキが落ちたところ。つまり、月のカケラの粒子が溶け込んでいる泉だった。そこから這い上がってきたオームはリディアに落とされたはずの腕も再生し、ティキ達が降りてくるまでのわずかな隙の間にディアナを捕らえていたのだ。

「人間って馬鹿だよな。まさか自分達が誘き出されたとは思ってもしなかったみたいだな。オレの目的は最初からコイツを喰うこと。コイツさえ喰えばお前ら二人など相手にもならないようになる。そして、この泉があればオレは不死身に近い存在となる」

「まさかあたし達が誘い込まれていたとはね」

オームは片手に持っているディアナを見る。

「クク。遂にコイツを喰える時がきたか。また邪魔されたらたまら

んからな。まずは潰すか」

その言葉の瞬間オームは手に力を入れる。オームの手の中にいる小さな身体のディアナはその力に締め付けられた。

「あ……あああああああつ！」

締め付けられたディアナは奇声のごとく声を上げる。その声に耐え切れずリディアは目を逸らし耳を塞ぐ。オームはそれでもなお締め付けをやめようとはしない。そして、ディアナの小さな身体はそれに耐えることは出来ず。遂に、不快な音が空洞の中を響き渡る。それは紛れもない。ディアナの身体の骨が潰され折れた音だった。意識を失いディアナはもう声を上げない。

それを確認するとオームはようやく締め付けるのをやめた。そして、潰されたディアナを食べようとした瞬間、オームは寒気に襲われ行動を制止した。

オームは恐る恐るその寒気を感じたほうを見る。リディアもその気配を感じその方向を見る。

「……やめろ」

リディア達がいる空洞の地面を風が伝う。それはどこから発生したのだろうか。リディアは、その風を受けた瞬間鳥肌が立った。この場にいたくなくなるような冷たい風。悪寒。殺気。それはリディアに放たれた者ではないだろう。だが、リディアはその殺気をまるで自分に放たれているかのごとく感じ取ることができた。

その殺気を放っている者それはティキだった。ティキの放つ殺気は場の空気を凍りつかせる。ティキの金色の瞳がさらに鮮やかになる。当のティキは静かにその場からはまったく動いていない。だが、確実にオームは感じていた。

圧倒的な圧迫感。それはオームが始めて感じた恐怖だった。

ティキの足が一步前へと動く。ただ、それだけなのに重力が崩壊したかの如く空気が重くなる。オームは理性的に一步下がる。だが次の瞬間にオームは本能的に動いていた。それは野生の動き。殺される前に殺す。オームはディアナを手を持ったままティキに襲い掛かる。

オームの左腕がティキ目掛けて振り下ろされる。だが、そこにいたはずのティキの姿は消えていた。手ごたえ無く消えたティキの行方を知ろうと、オームが辺りを見渡そうとした時、背後から圧迫感のある声が聞こえた。

「こつちだ」

オームがその声に導かれ後ろを振り返ろうとした瞬間、オームは自分の身体そのものの制御がきかなくなったのを感じた。オームの身体は左肩から、右腰に向けて切り裂かれたのだ。あつけないほどの刹那の間に。

「くそおお。くそおおおおおおオオオオオオオオッ！」

雄たけびに似た叫び声を上げて、オームは再び月のカケラの粒子へと戻っていった。ティキはその鋭いまでに研ぎ澄まされた金色の眼光で、オームが月のカケラの粒子に変わるのを見ていた。

ティキの圧倒的な強さに驚き、ただ見入るだけになっていたリディアが地面に倒れるディアナの元へと駆け寄った。リディアはディアナが痛みを感じないようにそっと抱き上げる。

「体中の骨が折れてる。早くサガルマータに連れて行って手当をしないと」

ティキは、さきほどよりは穏やかになった目でディアナを見る。

「……駄目だ。ディアナはサガルマータへは連れて行けない」

そう言うと、リディアの腕の中でいたディアナをティキが抱き上げる。そして、そのまま月のカケラの粒子が染みこんだ泉へと持つ

ていく。泉の前に立ったティキはそつとディアナを泉の中へと入れた。

するとディアナの身体から光が発せられた。月のカケラの粒子が染みこんだ泉も光り輝く。

「光が……」

その光景を見ていたリディアがそつと呟く。

「共鳴してるんだ。月のカケラ同士が……」

リディアの疑問を解決するかのようにティキも呟く。

泉の中へと入ったディアナの身体から、傷が見る見るうちに治っていくのが分かる。ディアナのいつ死んでしまってもおかしくない身体の傷が完全に治るまで五分とかからなかった。傷が治ったことを確認したティキは、ディアナを泉から上げ地面へと座らせる。

「ディアナ。ごめんな。痛い思いさせちゃって」

「ううん、大丈夫」

ディアナの言葉を聞いた後、後ろから見ていたリディアがティキに呼びかける。

「ねえ、ティキいったいどういうことなの？」

「言っただろ？ この子は月のカケラから生まれた人間だって。さつき、上から泉に落ちたオームの腕が再生してただろ？ あれはオームの身体が月のカケラで出来ていたから。月のカケラの粒子が染みこんだ泉に落ち再生したんだ。ディアナの傷が治ったのも同じさ」

「そう。私はここで生まれた。自分が何者かもわかってる」

ディアナが自分から口を開く。

「私は、月のカケラの粒子が集まって出来た生命体。だからこの泉があれば生きることができ、この泉が無ければ生きることができない。けど、それももう限界。私の身体はもう長くは生きることが出来ない。だから歌うの」

「歌うって、じゃあ……」

「ああ、歌の正体はこの子だったんだ。この子の歌がサガルマータまで聞こえていたんだ」

「歌が頭の中に流れてくるの。私は、それを口ずさむ。この歌は星からのメッセージ」

ディアナは、穴の開いた天井を見つめる。

Act 17：奇蹟という名の必然

天井には穴が開いていた。それはオームがあけた穴。月のカケラの粒子の合間から微かに見える空は少し青かった。それは、星がディアナに見せた星の姿の一部だったのだろうか。

「星のメッセージ？」

リディアがディアナの言った言葉に疑問を投げかける。

「この星は、死への道を歩んでる」

ディアナが答えたのでない。答えたのはティキだった。

「八百年前の大戦争。そして、月の破壊と星の重力の崩壊。全部人間が招いたことだ。人間は自らが住むはずの星を痛めつけ、破壊しようとしている。だから、きつとオームも月斑症候群も人間への罰なんだ。けど人間はそれすら逃れ、地上を捨て天空へと避難した」

「星は……、知ろうとしているの。人間というものの存在を。人間の心を。だからオームに知能を与え、私を創った」

ディアナがティキに続いて言葉を述べる。

「私は知らせる必要がある。この星の想いを、この星の願いを。だから歌うの」

その言葉を聞いていたティキはなにかを思い出したかのように、ポケットを探る。そこにはサガルマータで預かった手のひらサイズの人形があつた。

「ディアナ。コレを」

そう言つてディアナの手を取ると、ティキはその人形をディアナに手渡した。

「これは？」

「それ、俺達がここにくる前に預かってきたんだ。ディアナに渡して欲しいって」

ディアナはその人形を見つめる。

「ちゃんと届いてるぜ。ディアナの声は。俺達はその歌を聴いてここに来たんだ。星からのメッセージはちゃんと伝わってる。いつもディアナの歌う歌を楽しみにしてるんだってさ。ファン第一号だ」

「……ファン？」

「ディアナの歌が好きだってことだ」

「じゃあ、あたし二番！」

突然リディアが飛び出してくる。

「あー。おい、俺が二番のはずだったのに。じゃあ仕方ないか俺三番……」

ディアナは手に持っていた人形を、そっと胸のところに持つてくる。

「私、歌うよ。ちゃんと、きいてくれてる人がいたんだね」

ディアナの不安。星からのメッセージを乗せた歌。でも、それはこの場所からしか歌えない。人がいるサガルマータははるか上。天井に穴のない空洞はとても暗く狭かった。自分の声が届いてないのではないかと言う不安。でも今は天井を見ると穴が開いている。いままでもっとも多くの人に歌を届けることが出来る。

——そして、ディアナは歌う。

その歌は風に乗る、遙か上空まで届く。そこに住まうは多くの人々。

「あら、なにこの子。今日はすぐに泣き止んだわ」

それは、赤ん坊を抱える母親の姿。そっと、静かな歌声が母親の耳にも入る。

「綺麗な歌声。どこから聞こえてくるのかしら？」

母親は青い空を見つめる。

「あ、歌だ」

サガルマータに住む少年の耳に聞こえてきた穏やかな声。

「あのお兄ちゃん達。ちゃんと渡してくれたかな？」

街の人達が家から外へと出てくる。いつも聴こえてくる歌よりも遙かに澄んだ声。いつもの不安はない。悪魔の歌だと言っていた人達も、その声に心を奪われていた。街は歌を聴く人達で溢れかえった。

その歌は、風に乗って遥か彼方の国にまで聞こえていった。

その日、世界は一つとなった。

誰もが聞き入る歌。世界中の人が耳を澄ましてその歌を星からのメッセージを受け取る。

ティキ達はアンクレストを後にしサガルマータへと飛び立っていた。
た。

「ねえティキ、なんで嘘ついたの？」

リバティーに乗りながらリディアがティキに聞く。

「嘘？」

「確かにあの子の歌が好きだと言ってた人もいたけど、悪魔の歌だと言ってた人も同じくらいいたのに」

「ああ、別に嘘なんかいつてないぜ。いままではディアナの不安が入り混じった歌だったから、人にも不安を与えていただけなんだと思う。でも今は違うだろ？ みんながディアナの歌を聞いている。だ

から嘘じゃない」

歌の後、起きていた地震も音の振動が土台に伝わり、地震を起こしていたと科学的に説明することが出来る。けど、地震ももしかしたら星が人間に歌を聴いてもらうために、印象付けるために起こしていたのかも知れない。それともディアナの心の不安が地震を起こしていたのだろうか。ただ言える事は、今日は歌の後地震が起きることはなかった。

「……ねえ、ディアナが生まれたのは奇蹟だったのかな？」

「さあな。俺にはわからねえ。けど、必然だったと信じたいじゃないか」

「そっか。……そうだね」

そう言つと、リディアはそつと後ろを向く。

「さよなら、ディアナちゃん。ありがとう」

「ん？　なんか言ったか？」

「え？　ううん、内緒。さ、早く帰って今回のこと報告しなきゃ」

リディアは、そう言つとティキを追い抜いていった。

「あ、待てよ。おい」

ティキも、その後を追いかける。

この星ルーファは悲しき運命を背負っている。月が破壊されたことにより重力のバランスが崩れ、はじまった星の崩壊。それはゆっくりと確実にこの星の命を蝕んでいく。それらは全てこの星に住む人間が引き起こしたこと。人は罰を受けなければならない。しかし、人はそれを逃れ天空での生活を開始した。

だが、人間もただ逃れているだけではない。破壊してしまった月を再び復活させるために動いているのだ。けど、まだ星は人間を許してはいないのだろう。だから、人は意味のある生き方をしなければならぬ。

人が誰もが持つ【大切なもの】それを見出し生きる。

星がそれを認め人間を許してくれる時まできつと、人間の永遠とも思える闘いは続くのだろう。けど、今回のことは星がほんの少しでも人間を許した証拠といえるのかも知れない。

A c t 1 7 : 奇蹟という名の必然（後書き）

月のカケラ設定資料集は以下のサイトにて公開！

<http://www.w13.atwiki.jp/riku-u/>

Act 18：追憶のヒトカケラ

そこは、多くの木々に囲まれた小さな湖だった。木々の間からは、幻想的な太陽の光りがまるでカーテンが揺らめくように差し込んでいた。その光りは、湖に張る水にも反射して、水の揺らめきを演出していた。その湖のほとりには大きな木があった。木は根っこの一部が地面から露出し、地面と根っこの間には小さな隙間が出来ていた。小さな子なら入れるくらいの隙間だ。

「あつたー！」

木の隙間に見える穴の奥から元気で幼い声が聞こえてきた。その声のすぐ後に隙間の穴から小さな少年が這いずるように出てきた。その手にはなにやら美しくやさしい輝きを放つ石が握られていた。石は小さな少年の手に納まるほどの大きさだが、石が放つその輝きは、その手からもれているほど力強かった。

——小さな少年の名前は”ティキ”という。

ティキは、嬉しそうにその光り輝く石を眺めていた。ティキは眺めているとまるでその光りに吸い込まれるようだと感じた。そしてティキはその輝く石を服のポケットに入れようとした……が、それは出来なかった。ティキの小さな身体は浮遊感を感じた。いや、足は確かに浮き上がってはいるのだが、手は明らかに痛いくらいの強さで捕まれている感覚があった。ティキは浮いている足に目線をやっていたが、手の感触を確かめるために目線をその手の先にやった。

手は、確かに捕まっていた。ティキの手首を遥かに覆いつくすほどの大きな手が掴んでいたのだ。つまりその手の主がティキの身体を空中へと浮かせていたのだ。ティキは、その相手が誰かを見るために、目線を手に沿って移動させた。それを見たティキは愕然とす

る。

それはティキよりも、いや普通の大人の男より遥かに大きな身体をした大男だった。肩からは黒いマントを羽織り、頭には変な角のようなものが左右から2つ生えた帽子のようなものを被っていて、顔を見ると、ヒゲを生やしていた。しかもかなり伸ばしている。ヒゲの先端は喉の下鎖骨あたりまで達している。ティキはそれを誰かを知っていた。ティキだけではない。この辺りに住む人間なら誰もが知っている男だった。

「ドン！」

”ドン”それが大男の名前だった。ドンは、この近くにあるステイラの村を中心として、動いている山賊で、この辺りでは有名な悪党だった。大人たちは誰もがドンを恐れ、手を出せないでいた。それはドンの身体の大さに圧倒されるばかりではなく、ドンがいつも背中に担いでいる大型の斧だった。まさに『鬼に金棒』だ。身体の大さに巨大な武器、この二つを持ってドンはこの辺りを完全に支配していたのだ。ティキも幼いながらにそれを知っていた。ドンはティキの持っている輝く石を、手を無理やり開いて奪いとった。

「おお！ 間違いねえ、”月のカケラ”だ！」

ドンは、大男に抱いているイメージ通りのものすごく低い声で、しかしとても大きな声で言い、その”月のカケラ”という光り輝く石を天に向けて見ている。石の光りは太陽の光りを受けてより一層強く光り輝いているようだった。ドンはティキの手を突然離れたため、空中に浮いていたティキの身体はなんの防衛反応を取ることもしないうちに地面へと落ちていった。そのため、ティキはしりもちをついてしまった。ティキは思わず”痛っ！”と声を上げたが、次の瞬間には、ティキは遥か頭上にあるドンの顔を見ていた。

「返してよ！ その月のカケラは僕が見つけたんだ！」

ドンはその声に気が付いたのか天の掲げていた手を降ろし、ティキのほうを見て、睨みを効かせた。その顔に恐怖を感じたティキは

目線を逸らし、俯いてしまった。それを見たドンは、”フンッ！”と鼻で息を吐き、力強い大きな足でその場から去って行った。

ティキは、その場で座り込んだまま力なく泣いている。目からは大粒の涙を零している。しばらくして、ティキは泣きながら立ち上がり、トボトボと肩を落として下を向いたまま歩き始めた。歩きながら、ティキは昔のことを思い出していた。二年前のことを。

「ティキ！ また泣いてるのか！」

ティキの前には大人の男が立っている。その力強い声は、怒りを含んでいるようだ。

「だって、みんながイジめるんだもん」

ティキは肩を落とし、下を向いたまま泣いている。顔には叩かれた後だろうが、少し腫れている。

「どうして、やり返さないんだ？ そんなだからいつもイジメられるんだ！」

「だって、痛いのは嫌だけど、僕は弱いからすぐにやられちゃうよ」

男は、しばらく黙り込んだ後、軽いため息を吐き、ゆっくりしゃがみながらティキの両肩に両手を置いた。そして”ティキ”と一言名前を呼んで、ティキを自分に振り向かせた。ティキと男は目がバツチリと合った。

「ティキ、お前は弱くないぞ。おまえは強い子だ」

先ほどの怒りを込めた声とは違い、とてもやさしい、しかしさつきよりも力強い言葉で男はティキに語りかける。

「もっと勇気を出せ、おまえは強い子なんだから」

男は微笑んでティキの眼をしっかりと見ている。ティキはそれを見て、元気が出てきた。そして、力強く頷き言った。

「ありがとう！ お父さん！」

ティキは、まだ泣きべそを書いて木々に囲まれた道を歩いていた。
「お父さんの嘘つき、僕はちつとも強くない」

ティキが泣きながら独り事を言っていると、ティキの前から深くフードを被った男が歩いてきていた。しかし下を向いているティキはそれに気が付いていない。

「どうした？ ボウズ」

その男の発した言葉により、ティキはようやくその男の存在に気が付いた。男と眼が合うと、涙を流していることに気が付き袖で涙を拭う。涙を拭い終わったティキはもう一度男の顔を見る。よく見るとその男は深くフードを被っている赤髪の男だった。深くフードを被っているため顔は確認できない。背中には立派な剣を背負っている。

ティキは、なぜかこのフードを被った男には話していいような気がして、その場で立ったままこの内容を話した。フードを被った男も同様に立ったままティキの話を聞いていた。

「なるほどな、酷いやつだな」

話を聞き終わった男は軽く呟いた。フードの男はドンのことを知らないようだった。ということはこの近くの者ではないということだ。ティキは、また俯いている。

「ボウズ、月のカケラを取り戻しに行くぞ！」

男はいきなりティキに向かって言った。ティキはその言葉に驚いて顔を上げて男のほうを見た。

「え？ 取り返しに行くって？」

「もともとはボウズが見つけたやつだろ？ それを奪われたんだ取り返しに行くのは当然だろ？」

「で、でもドンにかなうわけないし……」

それを聞いた男は、一度息を吐きティキに向かって言った。

「ボウズ、自分の力を信じる！ 大丈夫だ。おまえは強い子だ」

その言葉にティキはハツとした。昔、姿を消した父親が言っていた言葉『おまえは強い子だ』。ティキはかつての父親の姿を思い出していた。ティキは決心したように、大きく頷き男のほうを見た。

「それでこそ男だ！ 俺はアカガミと呼んでくれ。ボウズ、名前は？」

ティキはその言葉に、大きく息を吸いその酸素を全て言葉に変えて吐き出すかのように大きな声で答えた。

「ティキ！」

ティキはアカガミを連れて、ドンのアジトの前まで来ていた。

「ここがドンってやつのアジトか？」

ティキはその言葉に頷く。

「よし！ じゃあ乗り込むぞ！」

ティキは大きく頷いたが、内心怯えていた。ドンから月のカケラを取り戻すと決めたもののやはり怖い。そんな感情がティキを支配していた。そのため、アカガミがアジトに向かって歩きだしているのに気が付くのが遅れて、走ってアカガミの後ろについた。

ドンのアジトに入ったアカガミは、背中にあつた剣を手にとった。奥へと進むと、広い部屋が見えてきた。そこには、金銀財宝と豪華な装飾品が置いてあつた。山賊行為や民家から奪ったものだろう。

「だれだ？ 貴様等？」

部屋に突然、低い声が流れた。部屋の奥からドンが出てきたのだ。ドンは2人の姿を見つけ威嚇するかのように睨んできた。

「お前がドンか？ お前に奪われた月のカケラを取り返しにきたんだ」

ドンはその言葉を発したアカガミを横目にティキを見た。

「さっきの泣き虫のガキか」

ティキはその言葉に反応し、ドンを見た。ドンはティキと目が合うと鋭い眼光で睨んできた。その睨みに怯えていてティキは身体に

寒気を感じていた。そんなティキを見てアカガミはドンに対して睨みをきかせた。

「こんな子供から奪うとは情けないやつめ……デカイ図体して精神年齢はガキ以下か？」

アカガミはドンを挑発した。ドンはその挑発にまんまと乗せられ、背中に背負っていた巨大な斧を手にしてアカガミに襲い掛かった。アカガミは鼻で笑うと剣を使って、ドンの先制攻撃を防いだ。

先制攻撃を防がれたドンは巨大な斧を再び振りかざし、第二撃目をアカガミに向けて振り下ろす。アカガミは剣で斧をいなすとそのままだの右側から回転して背後についた。そして間髪いれずに、ドンの背中に衝撃を加え、ドンはその勢いで部屋の隅まで吹き飛んだ。

壁に激突したドンは、一度倒れこんだがすぐに起き上がって唸りながらアカガミに向かってくる。アカガミはそんなドンに対して軽く笑みを見せると、自らドンの元へ走っていった。そして、走りながら剣を構え、ドンの懐に一撃を加えようとした。しかしドンは、その攻撃を見抜いて、その一撃をその巨体からは想像できない動きで横に紙一重でかわし、そのまま剣に向けて斧を振り下ろした。

アカガミは、そのドンの攻撃に予測が出来ず、剣を落とされてしまった。そのことに焦りを感じたアカガミは剣を拾うために手を地面に伸ばした。その時、ドンのひざ蹴りがアカガミの下あごに命中し、アカガミはその衝撃で吹き飛び、金銀財宝の中へと突っ込んだ。その衝撃で金銀財宝は崩れた。

アカガミに致命傷を与えたドンは視線をティキのほうへとやった。アカガミは何とか身体を起き上がらせようとするが、下あごと言えば人体急所の1つ、脳への衝撃と急所攻撃でしばらく身体が言うことをきかなかった。

ティキに睨みをきかせているドンはゆっくり身体をティキに向けてティキのほうへと歩いてくる。ティキはその光景に恐ろしくなり、その場に力なく座り込んでしまった。そして目からは大粒の涙を流し始めた。

「ティキ……ティキ……逃げろ」

アカガミは動かない身体を必死に震わせながら、立ち上がるようにしている。しかし、まだダメージがありうまく立つことが出来ないでいる。しかし、ティキの姿を見て、ティキに逃げるように促している。

ドンは、ティキの前にやってくると、斧を高く振り上げた。

「ティキ！！ 逃げろ！！」

アカガミは力一杯ティキに叫んだ。ティキはそのアカガミを見て、なにかを決めたかのようにキリつとした顔になった。そして、袖で涙を拭き、震える足ではあったが立ち上がり、遙か上のドンの顔を見て自らに気合を入れるかのように言った。

「お……、お前なんか怖くないぞ！！ 僕がやつつけてやる！」

ティキのその行動を見て、アカガミは驚いていた。先ほどまで泣いていたティキが立ち上がり、ドンに向かって睨みつけている。ドンもまた驚いていたが、すぐに睨み顔に戻し

「やれるもんならやってみろ！ 泣き虫が！！」

言って、巨大な斧をティキ目掛けて振り降ろした。その光景にティキは目を瞑るしかなかった。いくら勇気を出して言ったとはいえ、ティキとドンでは実力に差がありすぎるためかなうわけがなかった。そして金属音が鳴り響く。

しかしそれは、アカガミが腕にしていた鉄鋼と斧の接触音だった。その光景に驚いたドンは

「ば、馬鹿な！？ 動けるはずがない……」

斧に力をいれながら、言ったドンはその驚きからアカガミの次の

攻撃に対応できなかった。アカガミの拳がドンの懐にめり込み、ドンは斧を離し、腹を押さえてその場にうずくまった。

「な、なぜ？」

ドンは悔しそうな顔をしながら、アカガミを見上げた。

「ティキが勇気を出しているのに……寝ていられるかよ!!」

アカガミは言い終わると、ティキのほうを見て、微笑み言った。

「ティキ……、やっぱりお前は強い子だよ」

ティキはアカガミからその言葉を言われると嬉しそうな笑みを浮かべた。その間にドンは立ち上がり。再び斧を手にしていた。そして、隙あらばと斧を片手に大きく振りかざしアカガミに向かっていった。アカガミはドンのその攻撃に気が付き剣を構えて、ドンの攻撃に備えた。

ドンは叫びながら突進してくる。

「俺が弱虫に負けるかあ!!」

「負けてるよ、ドン……」

アカガミはそっぴいながら、足を一步前へ踏み出し、走る体制を整える。

「お前は精神面で、すでにティキに大きく負けているんだよ!!」

その言葉と共に、アカガミの剣はドンの身体を捕らえ、ドンは身体ごと部屋の隅まで吹き飛ばされ気絶した。

アカガミは笑みを浮かべティキを見ている。そして、ゆっくりとティキに近づき頭を撫でながら言った。

「ティキ！ 大きくなったな」

その言葉に、ティキは満面の笑みを見せて言った。

「うん！ お父さん！」

ティキはガッツポーズをしてみせた。

突然、ティキの頭を激痛が襲った。

「つつてー！」

ティキは頭を抱え込む。そして目をあける。そこには天井があった。

「おーいて。いつのまにか寝てたのか」

そう言いながらティキは立ち上がる。ティキは座っていた椅子ごと後ろに倒れたようで、その椅子も立てる。

「夢なんて久しぶりに見たなー」

ティキはあくびをしながらルティーの入り口へとむかつていき扉をあける。

「おー。いい天気」

ティキは再びあくびをし、手を口のところに持ってきて隠す。そして手を頭の上で組み背伸びをする。ハァーと肺の中の空気をすべて吐き出し、新たに新鮮な空気を肺に吸い込む。

「さーで、もいっちょ寝るか」

そう言ってティキは再びルティーの中へと入っていった。

Act 19：共同討伐依頼

男は椅子に座り一息つく。その時その部屋の扉を叩く音が鳴る。

「連れて来ました。入りますよプレゼシデント」

そう言って入ってきたのはリディアだった。リディアの後ろにはティキがいる。

「まったく、最近ここに来ることが増えたな。せつかく寝てたのにティキが愚痴を言いながら部屋へと入ってくる。

「寝てたってあんた寝る以外にすることないの？」

「仕方ねえだろ。依頼なかったら暇なんだし寝るくらいしかやるとねえし」

「だったら、今回の話はちょうどいいかもよ」

「だから、その話ってなんだよ」

ティキとリディアのやりとりを見てたプレゼシデントが立ち上がる。

「その話は私からしよう」

その言葉にティキもリディアもプレゼシデントのほうを見る。

「ティキ。君がそうであるように我々の目的である月の復活。それを行うために国では様々な研究、調査を行ってきた。だが正直なところまだほとんど分かってはいない……というのが本当のところだ」
プレゼシデントは再び椅子へと座る。

「だが、とりあえずとしか言いようがないのだが分かってきたこともある。それは、月の復活にはどうやってもやはり大量の月のカケラが必要だと言う事だ」

ティキがプレゼシデントの話に割って入る。

「ちょっと待てよ。あんたも分かってるだろ？ 月のカケラはそのほとんどが長い年月で粒子化し地上を覆っている。純粋な月のカケラの原石なんか広いアンクレストを探し回っても三つか四つ見つかるばいいほうだ」

「そう。月のカケラの原石などもうほとんど存在しない。だが、月

のカケラを得る方法は他にもある」

今度はリディアが話しの間に割って入る。

「それが、オームよ。オームはティキも知つての通り月のカケラの粒子が集まって出来る生命体。ある程度ダメージを与えればその収束が維持できなくなつて再び粒子化する。でも極稀に粒子化せずに集まつた月のカケラがそのまま月のカケラの原因となるときがあるの」

「そうなのか、それは知らなかったな。けど、どちらにしる確立的には低いんだろ？」

「けど、アंकレストでただ月のカケラを探すよりもよっぽど現実的な確率よ」

今度はプレシデントが話に入ってくる。

「さらに我々の調査でここ最近になつてアंकレストでのオームの出現率が、格段に上がつてることが分かつてきたのだ。つまりその分オームから月のカケラが得られる可能性も高くなつてゐる。そこで我々は、同盟国と共にある作戦の実行を決めた」

「ある作戦？」

「それは共同討伐依頼だ」

再びリディアが話に加わる。

「いままであたし達はアंकレストに行つて偶然オームに遭遇でもない限り極力オームとの戦闘は避けてきたでしょ？ それとまったく逆のことをするつてこと」

「つまり、積極的にアंकレストに行つて積極的にオームを倒すつてことか」

「そういうこと」

「でもそんなの誰がいくんだ？ アंकレストはすげえ危険だぞ。少なくとも月の産物を持つてなきゃ厳しいだろ？」

「だから同盟国と共につて言つたじゃない」

再びプレシデントが入ってくる。

「同盟国にゐる月の産物の所持者全てに対する依頼だ。ただしティ

キの言うとおり命がけの危険な任務だ。それなりの見返りも用意するつもりだ。依頼を受ける者には今後の生活保障に加え、得られた月のカケラは高額での買い取りをするつもりだ。もうすでに何人もの者がこの依頼を受け動いている」

「なるほどな」

ティキは少し沈黙する。そして一人でつぶやく。

「じゃあ、アंकレストに行く機会が必然的に増えることになるわけか」

再び沈黙する。

「プレシデント。ちょっと聞きたいことがあるんだが……その、出来たらリディアは席をはずしてくれないか」

そう言ってリディアのほうを見る。ティキのいつもと違う声の雰囲気を感じ取ったのか、リディアは返事をして素直に部屋を出て行った。ティキはリディアが部屋から出るのをしっかり確認していた。リディアが部屋を出たのを確認すると再びプレシデントのほうを見る。

「さて、この間のことリディアから報告は受けてるよな？」

「アंकレストにいた少女と知能を持つオームのことか？ 受けているよ」

「俺たちがアंकレストに行くことが増えれば、今後同じような状況に遭遇しないとは言い切れない。もし、同じような感じで遭遇したらどうするんだ？」

「知能を持つオームに関しては普通に討伐してくれればいい。知能を持つとはいえオームには変わりない。月のカケラより出来た少女については、お前も知ってるだろう？ 前例はある」

「ああ、知ってるさ。月のカケラより出来た人間。つまり”月よりの使者”。けど俺が知ってるのは人工的に出来た月よりの使者だけ。まさか自然にも出来るとは思いもしなかった」

「それは我々も同じだ。君には悪いが、月よりの使者は神の冒瀆。」

ただの真似事に過ぎない大きな過ちだ。もう二度としないと誓ったことだからな。自然にとは言え二人目が出来たことは予想外だった」

プレシデントは立ち上がり、窓のほうへと歩いていく。ここはかなり高い場所なので外の景色がよく見える。街を一望できるのだ。

「確かに今後もそのようなことがないと言い切れない。だが、その時の対処は遭遇した本人に任せようと思う。自然の英知。我々が干渉してよいことではない」

「その子が言ってた。星が人間を知ろうとしてるって。大きな罪を犯した人間の心を知ろうと」

プレシデントはなにも答えない。ティキもしばらく沈黙していたが再び口を開く。

「……分かった。依頼は受けてやる。ただし、生活保障はいらない。それじゃあ俺がここから出て行った意味がないからな。月のカケラが手に入った時だけ買い取ってくれればいいさ」

そういい残すとティキは部屋を出て行った。プレシデントはそんなティキの姿を見ていた。ティキが出て行った後再び外を見る。

「月よりの使者……か」

「確かになかなか面白そうですね」

どこからともなく声が聞こえる。

「盗み聞きとはあまりいい趣味とは言えんな」

声はプレシデントの背後から聞こえるようだが、プレシデントは外を見ながら言う。

「そう言わないでくださいよ。だって気になるじゃないですか。どんな人なのか」

「ふ、心配しなくても大丈夫だよ。彼なら君の”相棒”にちょうどいい。まあ好きにすればいいさ。きつと気に入るよ」

「ええ、もちろんそうさせてもらいます」

その言葉の余韻が消えると共に、その部屋にあった声の気配も消えた。

Act 20：試す者と根性

「はあー。シャワーは気持ちいいなあ」

ティキはトイレと一体になっているシャワールームから出てきた。下には黒いズボンを穿いているが、上半身は裸だ。肩からタオルをかけて濡れた銀色の髪を拭く。

「ん？」

シャワールームから出てきたティキは、机の上に白い紙が折りたたまれて置かれているのを見つけた。机の上に置かれた白い紙を手にとるとそれを広げる。そこには”深夜一時。リームベルト国公立公園に来たれ”とだけ記されていた。

その時ティキは紙の下にお金が置かれていることに気がついた。

「金？ 依頼か？」

たいした疑問を抱かなかったティキだが、何者かも分からず、どうしてかも分からずお金が置かれていることを気持ち悪く感じたのか、とりあえず紙に書かれている時間に記された場所に行って見る事にした。

——深夜一時、リームベルト国公立公園。

指定された時間にやってきたティキは、一通り公園を見渡せる高台にやってきた。深夜であり人気はない。しかしよく見ると二十四時間明かりが点いている照明の下に一人の人物がいることに気がついた。その人物が紙を置いていった人物だと思い、その人物のいるところへ歩いていった。

「おい。あんたか？ この紙と金を置いてったのは」

自分の声が聞こえるであろう距離まで来たティキは、その人物に話しかける。しかしその人物はなにも答えずしばらく沈黙しティキ

を見る。

「すいません」

その人物の声が聞こえたか聴こえなかったという最中、その人物は爆発のような砂煙と共にティキに迫ってきた。あまりの咄嗟の出来事に、ティキは避けることが出来ず腕で相手が繰り出してきた拳を受け止めるので精一杯だった。しかしその衝撃は、それだけでは押さえ込むことが出来ずティキは身体ごと吹き飛ばされた。

土ぼこりを上げ地面を陥没させながら、地面との摩擦によりティキの身体はようやく止まった。ティキは身体を走る痛みを堪え身体を起こしながら言う。

「ぐっ……いつてえな。いきなりなにしゃがるっ！」

「なかなかやりますね。不意打ちであつたはずのパンチを受けるとは」

そこにいた男は薄く笑みを浮かべながら言う。近くまできてやつとその男の姿をはつきり確認できた。男は自分の黒い長めの髪を後ろで縛っている。額を開け、見た目は感じが良さそうで気の優しいような風貌だ。だが、そんな見た目は人を見極めるのに何の役にも立たないとティキは思った。

「パンチ？ なに言つてやがる。いまの攻撃、お前は拳を突き出していただけだろ。実際に攻撃の要となつたのは、お前のその左足につけてるそれ。俺の月の産物が共鳴してるってことは、それも月の産物か？」

「なるほど。今の動きだけでそこまで見破るとは。なかなか良い洞察力をお持ちのようで。しかしそれだけです。あなたは、僕の攻撃を理解しても避けることは出来ない。なぜなら身体がついていかなから。受けることは出来ても避けるのは不可能です」

そう言つと男は、ティキの元へとその脚を使って急激に間合いをつめる。ティキはそのあまりに早い動きに対応しきることが出来ず、再び男の拳を喰らつてしまう。だがともに喰らつた訳ではなくす

ぐに起き上がる。だが、すでにそこに男の姿はなくティキの死角から再び拳が飛んでくる。目の端でそれを捕らえたティキは、その攻撃を受けることが精一杯で、避けることもましてや反撃など不可能だった。

「無駄です。それが今のあなたの限界です」

「く、うるせえ。勝手に限界なんて決めるんじゃないよ」

男はティキの言葉を聞き終わると、同時に再びティキの元へと脚を使い詰め寄っていく。だが、ティキもいつまでもやられっぱなしではなかった。月の産物を使い剣を地面へと突き刺すと、伸ばして空中に回避したのだ。

「まるで子供ですね。上空に逃げれば余計に動くことは出来なくなりますよ。なぜなら、あなたは上から下に落ちるしかありませんから」

ティキは突き刺していた剣を元に戻すと、重力に引かれ地面に落ちていく。男はティキが空中で動けない隙を突き、ティキを追う形で攻撃体勢に移る。

「確かに俺はただ落ちるだけだ。だが落ちるだけの俺を追ってくるお前は、ただ上に向かってくるだけだ。攻撃の軌道さえ限定してしまえば迎え撃つのは簡単だ」

ティキは笑みを浮かべながら、剣を大きく振りかぶる。ティキの狙いに気がついた男は、すでに上空へと飛び上がっていたため、咄嗟に攻撃体勢から防御の体勢へと変えようとしていた。だが、それは間に合うことなくティキの剣がその男を捕らえた。

振り下ろされた剣は凄まじい衝撃音と共に、そのまま地面をも切り裂き大きく土ぼこりを上げる。よく見ると少し地面にも亀裂が入っている。ティキがどれだけの力を込めて振り下ろしたのかが伺える光景だった。だが、ティキ自身には手ごたえはなく、行方の消えた男の気配を追って辺りを見回した。

土ぼこりが晴れ、男の姿が見え始める。男は左の二の腕に少し傷を負っている様だ。

「驚きました。あなたは僕が思っていたよりもずっとやるようです。洞察力もさることながら、状況を瞬時に読み取り、その情報から適切な道を導き出す状況適応力も高いようです。それだけに残念です。今のあなたの実力が……」

「へっ。俺の攻撃を喰らっというてよく言うぜ」

ティキは虚勢を張りはしたものの男の傷から、ダメージなどまったくないということは分かっていた。だが、それでも気持ちで負けるわけにはいかないと思っていた。その瞬間、再び男は凄まじい速度でティキに迫る。さきほどの応用でティキが再び上空に飛び上がるうとした時、ティキの背後から声が聞こえティキの身体は止まった。

「無駄です」

ティキがその声に導かれ振り向こうとした瞬間、ティキの頭に衝撃が走り身体ごと吹き飛ばされる。ティキは遙か先にあった木のところまで飛ばされ、木にぶつかったことでその身体は止まった。ぶつかった木からは木の葉が舞い散る。舞い散る木の葉の隙間から見える男は、ゆっくりとティキに迫ってきている。

「今度は、月の産物を利用したただのパンチではありませんよ」

ティキは気を失いそうな痛みに耐え、男のほうを見る。

「月の産物を利用した月の産物による蹴りです。威力は段違い。スピードも上がります。今のあなたでは捉えようのない攻撃です。ですが、あなたの闘いに関する潜在力センスは素晴らしい。僕よりも遙かに上です。あなたはまだまだ強くなる」

そう言う男は、ティキに背を向けてティキから離れていく。だが男は脚を止めた。背後に気配を感じたからだ。男はその気配に振り向く。そこには、相当なダメージを受けてるはずのティキが立ち上がっていた。

「待てよ。今の攻撃でまさか俺を倒したつもりか？ あんな攻撃、

蚊がとまったのかわらねえぜ」

「そんな挑発には乗りませんよ。今は無理に動かないほうがいい。命に関わりますよ」

「うるせえ。お前のほうが強いっていうなら俺を負かせてみるよ。

俺はまだノーダメージだぜ」

男は、身体ごとティキのほうに向けるとティキの元へと歩み寄ってきた。

「いいでしょう」

男は、月の産物で地面を蹴りティキに一瞬で詰め寄る。目にも止まらぬそのスピードのよる攻撃は、ティキの顔面を捉えるそれと同時に後ろにあつた木ごと吹き飛ばした。木は折れ、ティキはその遙か先まで飛ばされる。土けむりが晴れると再びそこにはティキが立っていた。

「き……きかねえな。そんな甘い攻撃じゃ、俺にダメージは与えられねえぜ」

ティキの顔からは血が出ている。そして目の辺りも腫れている。口の中も切り、土が入り口の中は血と土が混ざって泥のようになっていた。もうはつきり言ってボロボロだ。

男は再びティキに迫ると、ティキの頭に月の産物による攻撃を与えた。ティキは再び吹き飛ばされるが、すぐに起き上がる。そして再び男の攻撃がティキを襲う。何度も何度も……。

時間にしてもう三時間は越えているのだろつ。空が少し明るんできた。それでもティキは、何度も蹴られ何度も起き上がる。もう顔の腫れは相当ひどい。立っているのが奇蹟的なほどにティキはダメージを受けていた。脚がよろつきうまく立てない。もはや闘争心だけで立っているようなもの。

「く……、どう……した？　もう……終わりか？　俺は……全然ダメージを喰らってないぞ」

ティキは笑みを見せてるようだが、顔の腫れが酷すぎてよく見て

取れない。男は、そんなティキの姿を無言で見ていた。すると、男はいままでとは違う構え方をした。

「……どうやら僕は勘違いをしていたようです。前言は撤回しましょう。あなたは強い。もう手加減はしません。次は本気でいきます。ただし、その結果あなたが死ぬことになっても僕を恨まないでくださいね」

「フンッ。やつと、本気が……」

男は、いつも以上に脚に集中し脚に力を入れた。そしていつもよりも遥かに踏み込んだ。そのあまりの力強い踏み込みに地面に足の形が残るほどだった。その威力をそのままティキの頭に叩きつけるように猛スピードで男の蹴りがティキに迫る。いままで避けることすらできなかった攻撃の何倍ものスピードで迫ってくる。もはや目の端ですら捕らえることは不可能だ。男はそのスピードのままティキの頭に蹴りを入れる。

しかし、その蹴りは手ごたえを得ることなく空を切る。それはティキの頭のすぐ上をかすめていた。男が蹴りを当て損なったのではない。男は避けられたことに驚き、そして悪寒を感じる。これほどの本気の攻撃、当然避けられるとは思っていなかった。避けられれば攻撃の威力に比例して隙が大きくなる。男は自分の攻撃の最大の弱点を熟知していた。

男はティキの髪の間から鋭い視線を感じた。ティキの金色に輝く目が、男の身体をまるで金縛りにでも合ったかのように硬直させる。男はこの時本気で殺られると感じただろう。

しかし、結果として男はなにも反撃されることなく地面へと降り立った。男はそのことに驚き咄嗟に身体を引いてティキのほうを見る。そこに立っていたはずのティキの姿はなく、視線を下にやるとティキがうつ伏せに倒れていた。

「……気絶？」

男はしばらく沈黙し考える。男の額からは汗が流れ出ていた。

「違う。彼は、気絶したことで攻撃を避けたんじゃない。攻撃を避けた後に気絶したんだ」

そのように考えなければ、先ほど感じた激しい悪寒と殺気に満ちた視線の説明がつかなかった。男は、額から流れる汗をふき取る。

「未恐ろしい男ですね。確かにあなたなら僕の相棒に合ってるかもしれない」

男は、気絶しているティキを抱きかかえると木を背もたれとして座らせた。そして、ズボンのポケットから携帯を取り出しどこにかける。

「あ、もしもし。僕です。あー。すいません。遅くなっちゃって、想像してたより彼が強くて手こずってしまいました。今、木の前に座らせてありますから早く迎えに来てあげて下さい。はい。では」

男は携帯を再びポケットへとしまうと、再びティキのほうを見る。「お疲れ様です。あなたは合格です。今は、ゆっくり休んでください。それでは」

男は笑みを浮かべそう言うと、乗ってきていたリバティーに乗り公園から去っていった。

見ると、朝日が差し込んできている。その陽の光が、ボロボロになり気絶しているティキの身体を癒すかのごとく照らしていた。

Act 21：闘いに備えて

ティキは気がつくと一気に目を開け、身体を起こそうとする。しかし身体は思ったように動かずティキは痛みを感じて思わず声に出してしまった。

「痛っ」

ティキは目覚めた身体を、今度はゆっくりと起こし辺りを見渡す。白が抽象的な壁が見える。機械類が静かに音を奏でている。ティキは自分の身体を探る。いたる所に包帯が巻かれている。特に頭は、幾重にも巻かれていて傷の大きさを物語っている。

「ここは、病院か？」

ティキが今の状況を理解しようと考え込もうとした時、ドアが開く音がしてその方向を見る。

「あ、ティキ。目が覚めたんだ」

「リディア？」

入ってきたのはリディアだった。ティキはリディアに今の状況を説明してもらおうと聞こうとした。その時リディアの後ろにもう一人、人がいることに気がついた。ティキはその人物に見覚えがあったので驚く。

「あつ！ お、お前は！」

「やあ、ティキさん。気が付かれたんですね。よかったです」

それは、公園でティキと闘いティキに大怪我を負わせた男だった。「てめえ、俺の命を狙いに来たのか？」

「嫌だなあ。そんな敵意満々に警戒しないでくださいよ。リディアさんに連絡してあなたを迎えにきてもらったのは僕なんですから」

ティキと男の話に割って入るようにリディアが話に入ってくる。

「ちよつと待ってティキ。あたしから説明するから」

その言葉に、男もティキもリディアのほうを見る。

「この人の名前はルクスさん。この間話した共同討伐依頼を受けてディールス国からやってきたのよ。あなたの相棒としてね」

「相棒？」

ティキは顔をしかめる。

「うん、共同討伐以来は危険な任務でしょ？ だから、出来る限りなら二人一組で動くように言われてるの」

「……ってことはプレシデントが絡んでるってことか」

ティキの不満そうな顔つきを見てルクスはフォローも踏まえてなのか話に割って入る。

「そこは僕が説明します。確かにこの件に彼は絡んでいます。しかし、あなたを試したのは僕の意味です。任務を共にする相棒ですから。どんな人なのか実力を含めて知っておきたかったので。その結果ですが……ティキさん。あなたは合格です」

その言葉にティキが話に割って入ろうとした。しかし、ルクスがまだ続きを言おうとしている気配を感じティキは話すのを辞めた。

「けど、僕はあなたの相棒を辞退します。確かにあなたは実力的にも人間的にも合格です。だからこそ分かりました。ティキさん、あなたの相棒に相応しいのは僕じゃない。それが、辞退する理由です」
「それでいいぜ。プレシデントの言いなりになんてなりたくねえし、相棒なんて俺の柄じゃねえしな」

「あなたならそう言うと思いました。とにかくあなたの相棒は辞退します。ですが、代わりとて言ってはなんです、他の役をやらせてもらいます」

「他の役？」

ルクスはそう言うと言った紙袋を机の上に乘せた。

「一つ言わせてもらいます。ティキさん確かにあなたは強い。それは認めます。しかしそれはあくまで潜在能力ポテンシャルの話です。残念ながらあなたの今の実力は大したことはありません」

「あ？」

その言葉にティキは少し機嫌を損ねたようだ。

「あなたは非常に運がいいのですよ。今回僕は、あなたを試すつもりだけで殺すつもりはなかった。だからこそ大怪我こそすれ命を落とすはしなかった」

その言葉にティキもリディアも沈黙する。

「でも、今もし僕と同等かそれ以上の実力を持った敵に出会ってしまつたらあなたは確実に殺されます」

ティキは、その言葉に返すことができなかった。確かに、もしルクスが敵で殺すつもりで襲ってきたいたら確実に死んでいた。そう思うほかにいほど実力に確かな差があつたのだ。

「ですが、あなたの潜在能力は僕も認めています。その実力は僕なんか足元にも及ばないほどなはずです。だからこそあなたを強くしたい」

「それはどういう意味だ？」

ティキは感じた疑問を素直にぶつけた。

「僕があなたを鍛え上げます。あなたの潜在能力を引き出しあなたを今よりも遥かに強くして見せます。そこで一つ聞きます。強くになりたいですか？」

その質問にティキは一瞬黙り込む。当然、ティキも強くなれるなら強くなりたいと思つてゐるだろう。だが、目の前にいる男に強くなりたいと答えるということは、自ら自分が強くないということを示すことになる。それを躊躇わすのはティキのプライドだった。

だが、それと同じくらいの気持ちでティキを動かすもの。それは、今のままの実力では命を失うことになりかねないということ。死ねば自らの目的も果たせなくなってしまう。生きるためには中途半端な力では駄目だということ。目的を果たすためにはより強い力がある。

「強くなりたい」

たった一言しか発していないこの言葉にはどれほどの覚悟があるのか。それは、すぐそばで聞いていたリディアもルクスも理解していた。そして、ルクスは笑みを見せる。

「良い答えです」

そういつとルクスは、先ほど机に置いた紙袋の中から箱を取り出した。それは二つの箱だった。そのうちの一つをリディアに渡す。もう一方はティキに渡す。

「これは？」

「開けてみてください」

ティキもリディアもその箱を開ける。中には、一つの絵を分解したピースがいくつも入っていた。

「これは、ジクソウパズル？」

「そうです。それは500ピースのジクソウパズルです。ティキさんあなたは全治一ヶ月の怪我らしいです。この一ヶ月はこの病院で入院してなければなりません。その間にもしないのは実にもったいない。ですから、一ヶ月間でそのパズルを完成させてください」

ティキは、パズルのほうを一瞬見ると再び視線をルクスに移した。
「いくらなんでも500ピースくらいのパズルの完成に一ヶ月もかからねえだろ」

「そうですか？　ただ条件があります」

「条件？」

「ええ、開始から完成まで3分で完成させてください」

「はあっ！？」

ティキもリディアも予想を超えたルクスの言葉に驚きの声を上げる。
「3分ってことは、1秒で約3つずつ置いてかなきゃいけないってことよね？」

「そういうことになりますね」

ルクスは当たり前前のごとくに答える。

「もし、一ヶ月でこれが出来なければあなたはそこまでの男ということですよ。頑張ってくださいね。また一ヶ月後に来ます」

ルクスはそう言つと、笑顔で部屋から出て行った。

部屋に取り残されたティキとリディアはパズルを眺める。

「3分……。ってかりディアにも渡していったってことはリディアも一緒にやれってことか？」

「うん、たぶん」

ティキはルクスとの闘いとさっき言われた言葉を思い出していた。

確かに、自分は弱い。どれだけ虚勢を張ろうがそれは変わらない。目的を達成するためには今よりも遥かに強い力がある。その力に一步でも近づくために出来ること。それが目の前にあるのならそれを全力で成し遂げよう。

「よし、やってやるか」

ティキは自身の胸に確かな覚悟と、懐かしさを秘めパズルのピースに手を伸ばした。

Act 22：復讐者は眠らない

——そこはとある国のストラム。

洞窟を改造し入り組んだ地形を持つ奥に居るのは、黒い服に身を包んだサングラスをかけた男だった。手には強固そうなアタッシュケースを持ってタバコを吸っている。そんな男の前に一人の男が現れた。

「少し遅刻ですよ。私も命があぶないんですから時間は守ってください。……リクさん」

「許容範囲だ」

そこに現れたのは、以前星の導きのアジトを爆破しようとしたデイキの昔からの旧友のリクだった。

「これが星の導きの情報です」

そう言う男は、アタッシュケースをリクに渡した。それと引き換えにリクは持っていたケースを男に渡す。リクの持っていたケースはお金のようなものだ。

「まいど。ところでリクさん、本当に闘るつもりですか？ 相手は星の導きの狂戦士と言われた七曜ですよ。いくらリクさんとはいえ

……」

「……関係ない」

リクの表情は怒りに燃えていた。それは以前とは変わった髪形にも起因してるのだろうか。リクの覚悟が以前にも増したことを意味していた。その髪は怒りの炎のように少し逆立ち、赤みを帯びている。それはまさに鬼の形相。怒りと復讐の化身。近くにいた男はそのあまりもの気迫に鳥肌が立っていた。真に恐怖を感じるとはこのことだろうか。男は、腰を抜かしてしまった。

リクは男から渡されたケースを持ってその場を後にする。しばらく

く入り組んだ道を歩いていくとリクの前に数人の男が立ちふさがる。
「よう、にいちゃん。ここを通りたかったら通行料を置いてきな」

それはこの辺りを縄張りとしている不良達だった。元々ストラムはサガルマータに住めなかった者達が住む奈落の底。そこには法を無視した輩が多く住んでいる。入り組んだ地形もその助けとなっているのかストラムのほとんどはまさに無法地帯である。

「おー。なんか金の詰まってそうなカバン持ってんな。おい、にいちゃんそれ置いてきな」

不良の男の言葉にリクはケースを放す。地面に落ちたケースを取ろうと男がケースに近づいた瞬間。額に冷たいものを感じた。男が自分の額にあるものを見ようと視線を上に向ける。そこには銃の銃口が額についていた。男は驚き身体を後ろに引こうとした。その瞬間、その銃を持っていたリクの引き金が引かれた。

銃声と共に男は後ろに飛ばされえる。額に撃たれたはずだが、弾の跡もなく男は死んではいなかった。しかし、男は身体をまったく動かすことはできなかった。それを見ていた他の男が言う。

「な、なんだよ。あんたその……紅い銃は？」

その言葉が合図のように、リクの持つ銃の銃声が空に響いた。

そこは、サガルマータにあるとある国。リクのいたストラムからはそう遠く離れてはいない場所。そこにある割と大きな豪邸のような建物。その正面玄関の前にいる一人の男。短髪で青色に染まった髪を持つ男は左目には不思議な模様のタトゥーを施している。大柄な身体に筋肉質で見た目からして力がありそうだ。

「この場所間違いなさそうだな」

男は手に持っていた紙を見て確認する。そして、その紙をクシヤクシヤに丸めると地面へと捨てた。よく見ると男は拳になにやら武器のようなものを付けている。男はその拳を振り上げると、正面の玄関に向けて放った。

その衝撃で玄関は凄まじい音と共に破壊された。そのことで警報が鳴り複数の男が銃を持って現れた。

「何者だっ！？　ここがどこか分かっているのかっ！？」

中から出てきた男達は全員が玄関を破壊した男に銃を向けている。銃を向けられた男は、少しばかりの笑みを浮かべて問いに答える。

「ああ、国のお偉いさんの家だろ？」

男は一步前へと歩み寄る。その行動を見ていた銃を持つ人間が言う。

「動くな！　動くと発砲するぞ！」

だが、男は歩みを止めることなく進んでいく。それを見た銃を持つ男が玄関より歩んでくる男に発砲する。銃声と共に、弾は発射され男目掛けて飛んでいく。

だが、その弾が男に当たることはなかった。男は目にも止まらぬはずのその弾を素手で受け止めたのだ。親指と人差し指の二本だけで。その光景に驚いた銃を持った男達は一斉に発砲する。凄まじいまでの発砲音と硝煙で辺りは埋め尽くされた。

銃を構えていた者達全員が弾を撃ちつくし呆然とする中、硝煙の隙間からそのありえない光景を目の当たりにして男達は身体を動かすことさえ出来なかった。

「どうした？　もう終わりか？」

銃を向けられ弾を何発も撃たれたはずの男は、その弾を全て素手で捕り自身の身体には一発もかすり傷さえ作らず平然と立ち尽くしていた。銃を構えていた男達はそのあまりの光景に銃を捨て逃げ出すとする。唯一の武器である銃が効かなければどうしようもない

のだから逃げるしかない。

「へっ！ 一人も逃がすかよ」

逃げ惑う人達の背後から男はものすごいスピードで迫り、次から次へと逃げる人々を惨殺していく。

男がその場にいた人間全てを冥府へ送るのに3分とかかりはしなかった。男の周りには無残にも引き裂かれた男達が散らばっていた。男は目の前の家に火を放つと、その場所から出てくる。炎は男を始末しようと銃を持って出てきた男達と豪邸を焼いていった。まるで地獄に咲く大きな花のような業火を醸し出して。男はポケットから携帯電話を取り出すと、電話をかけ始めた。

「よう、俺だ。任務達成だ」

「ごくろう、次の依頼はまたこちらから追って連絡する。それと、妙な垂れ込みが入っているから気をつける」

「妙な垂れ込み？」

「我々”七曜”を始末しようと狙ってる奴がいるらしい。まだ不確かな情報だが一応警戒してくれ」

「わかった。だが、本当にもしそんな奴が目の前に現れたらどうするんだ？」

「その場合は各々の判断で始末してくれたまえ」

「へっ、じゃあ警戒もなにもねえじゃねえか。邪魔する奴はぶつ殺せ。任務を完璧に全うする為には多少の犠牲は仕方ない……だろ？」

「……その通りだ。では」

電話を終えると男は携帯を再びポケットにしまいその場から離れていった。

暗い空間にモニターが円形状に複数映し出されていた。そこはどこかは定かではないがあらゆる技術が集められている感はない。モニターには、年齢を重ねていそうな老人達が各モニターに一人ずつ映っている。中央にはプレシデントが一人立ちモニターに映っている老人を眺めていた。

『最近星の導きの活動が活発化してきたな。この二週間だけで同盟各国の主要人物の家や施設が破壊されている。ここ数十年、極力お互いに大きな争いは避けてきたのにどうということだ？』

短い髪に黒髪の老人が言う。

『決まっている。これは星の導きによる”宣戦布告”だよ』

その横のモニターに映っている眼鏡をかけた老人が続く。

『再び戦争を始めようと言うのか？』

『それはないでしょう。戦争をしてもなんのメリットもない。星の導きの目的は戦争ではなく、月を復活させる活動を辞めさせることでは？』

全ての老人達の中でも1番若い感じのする男が言う。

『いずれにしてもこちらも手を打たなくては』

最初に話を始めた老人が、他の者に聞く。

『だがどうする？ 月のカケラを手に入れるために共同討伐依頼を発動してしまい、月の産物を持つ者はほとんどが動けない状態だ』

『例の兵器の様子はどうか？』

それを聞いていたプレシデントがモニターを見ながら言う。

『今は使えません。他を頼るしかないですな』

プレシデントは、直立の姿勢で答える。どうやらここに映っている老人達は相当な権限を持っているらしい。

『タイミングがあまりに悪すぎる。誰かいないのか？ 星の導きの活動を止められる者は？』

「……」悲劇の第九候補生”での生き残りがもう一人います。彼なら星の導きに強い恨みを持っているはずです。ただ、恨みが強すぎてやりすぎてしまう可能性も。そうなれば逆にこちらからの宣戦布

告となりかねない。今は、星の導きとの抗争は極力控えるべきでは？」

プレシデントが老人達に提案する。

『いや、その者を使おう。一時的に囷にでもなれば良い。後はこちらでなんとかしよう。とにかくこちらの準備が整うまではその者を利用し星の導きの動きを止めてもらうのだ』

「そう仰ると思いますでに手は打ってあります」

プレシデントが一礼する。

『してその者の名は何と言う？』

プレシデントは一瞬沈黙すると、唾を飲み込む。そしてその者の名前を挙げる。

「……”リク”という者です」

今夜は晴天。月のないこの世界の夜はあまりにも……暗い――。

Act 23：復讐者の信念

そこはとある国の主要人物の家。成り上がりの金で手に入れた豪邸で多くの財産が詰まっている。その家の前に現れたのは、短髪で青色に染まった髪を持つ大柄な男。彼の目的はこの家を破壊すること。家の持ち主がこの場にしようといなかろうと関係ない。ただ破壊するのみ。それが与えられた任務を確実に遂行する”七曜”のやり方。

「ここが次のターゲットか。まったくどういつもこいつも権力に授かった金でだけ家を建てるんだな」

男はそう言うと言面にあるドアを蹴破った。蹴破られたドアは地面をエグリながら飛んでいく。それだけでどれだけの勢いで蹴られたのかは容易に想像できる。そのドアの行方を目で追っていた男は蹴破られ地面へと落ちたドアの先にある足を見つけた。

男は足から頭に沿ってゆっくりと視線を上げる。視線を上げていくとそこにいるのは逆立った赤い髪一人の男だということに気がつく。男は目の前にいる男の顔を確認すると言う。

「なんだてめえは？ この家の人間か？」

目の前にいた男は答える。

「違う。この家にはすでに誰もいない。重要な資料等もすでに持ち出された後だ」

「……へえ、俺がここに来るってことが分かっていたのか？ だとしたら妙な垂れ込みつてのは正解だったのか。それじゃあお前が俺達を狙ってるって奴か？」

「そうだ」

「わからねえな。一体どんな理由があって俺達を狙ってる？ 俺がなにかしたか？」

「分からないだと？ よくそんなことが言えたものだ。散々人を殺

しておいて」

「それは任務の邪魔になるんだから仕方ねえことだろ」

目の前にいる男は青髪の男を鋭い視線で睨みつける。

「貴様らの勝手な任務でどれだけの人間を殺したんだっ！」

青髪の男は笑みを浮かべて言う。

「そんなの覚えてるわけねえだろ。お前は自分が殺した虫けらの数を覚えてるのか？」

「……。悲劇の第九候補生のことを知っているか？」

「第九候補生？ ああ知ってるぜ」

「その事件に関わった二人組の男女の行方を知ってるか？」

「そいつあしらねえな。残念だが俺に関わったのは作戦実行の許可だけだ。ってつまり復讐か？　ありゃー惨劇だったらしいからな。なんせ施設の人間を皆殺しだ」

「……あそこには俺の大切な仲間がいた。それを貴様ら星の導きが全てを奪ったんだ」

「そいつは気の毒だったな。まあ人生、生きてりゃそういうこともあるさ」

その言葉に男は目をギラギラさせる。

「俺はお前達を許さない。心に刻め俺の名前は”リク”。お前を冥府に送る者の名だ。あの世で仲間達に土下座しろっ！」

その言葉が合図のようにリクは青髪の男に突進していく。そして右拳を握り締めると青髪の男の顔面目掛けて放った。だが、その拳が当たる事は無く空を切る。拳を横に避けた男は今度はリクの顎に右拳を繰り出す。だが、それもまた空を切る。それを隙と判断したリクは開いていた左手で男の顔に殴りかかる。だがそれは男の左手で止められた。その瞬間二人は再び距離を取る。

「へっ！」

青髪の男は笑みを浮かべると、一瞬で間合いをつめる。それに対応してリクは後ろへと下がる。だが逃がすまいと男はさらに距離をつめる。後ろへと下がり続けたリクは後ろにあった豪邸の壁に阻まれる。それを確認するために一瞬目を離れた刹那、男の拳がリクの身体を捕らえる。

リクは凄まじい音と共に家の壁を破って家の中まで吹き飛ばされる。相当な威力で殴られたのは言うまでもない。崩された瓦礫が軋み音を立てる。

自らが破壊した穴から青髪の男が中に入ってくる。

「どうした？ 威勢がいいわりにはたいしたことねえな」

男は穴のところから中を見渡すが、どこにもリクの姿を見つけないことができなかった。だが戦闘経験の豊富さが幸いしたのかそれとも本能的に殺気を感じ取ったのか上を見る。そこには上から両の拳を握り迫ってくるリクの姿があった。間一髪でそれに気がついた男はそれを見事に避けると、今度はリクの身体目掛けて蹴りを繰り返した。だがリクは驚異的な反射神経で後ろに下がり避ける。

「ちっ。すばしっこさにはだけは自信があるようだな。だが逃げてるだけじゃ俺は倒せねえぜ」

男の言葉にリクは何も返さない。

「ふん、シカトかよ。まあそれならそれでいいけどよ。そっちがそのつもりなら俺はお前を逃がさねえようにするだけだ」

そう言う男は左腕に付けているブレスレットを右手で握り締めた。握り締めた手からは水がだんだんとあふれ出ている。

「そっかいや俺の自己紹介がまだだったな。俺の名前はウォルス。七曜の一人。属性は”水”」

それを言い終わると同時にウォルスは握り締めていたほうの手をリクのほうに放った。その手からは水が飛ばされリク目掛けて飛んでいく。咄嗟の出来事にリクは動き出すのが遅れてしまいその水を身体に浴びてしまった。

その瞬間リクは身体に重みを感じた。まるで重しを身体に付けら

れたかのように。

「……これは？」

「驚いてくれたか？　これが俺の月の産物”マルエ”だ」

「月の産物？　これが？」

「どうやら知らねえようだな。月のカケラはただの石ころじゃねえ。人の意志に反応する特異な性質を持っている。人の意志に反応し月のカケラは姿を変える。昔は月のカケラで願い事が叶うと思われていたらしいが、願いは叶うんじゃない。月のカケラが人の意志に反応し叶えるんだ」

リクはウォルスを睨みながら話を聞いている。

「俺は月のカケラを使い水を自由に操れる力を手に入れたいと願った。俺の意志の強さに月のカケラが反応し、そして月のカケラはこの月の産物を創り上げた。俺はこれを使い水を自由自在に操ることが出来る。今てめえに放った水は重水と呼ばれる通常の水よりもはるかに重い水。お前の衣類は水を吸い込みお前は身体が重くなったように感じるはずだ」

「七曜は全員がそういう特殊な属性使いなのか？」

リクは身動きがうまく取れない身体でウォルスに聞く。

「ああ、まあお前にはもう関係ないがな。中途半端な力は己を早く滅ぼすだけだと痛感して死ぬがいい」

ウォルスは再び間合いをつめる。リクは動きを取りづらい身体で応戦する。

「動きが鈍ってるぞっ！　そんな身体でどうしようってんだっ！？」
ウォルスの拳がリクの顔面を捕らえる。殴られたリクはバランスを崩し倒れる。倒れたリクを見てウォルスはまるでボールを蹴るかのようにリクの身体目掛けて蹴りを入れた。その衝撃でリクの身体はさらに先まで飛ばされる。家の中を突き抜けなんとか止まった身体をリクは必死に起こす。

「ちっ」

口の中を切ったリクは血反吐を地面へと飛ばす。

「俺の攻撃を何発も喰らってまだ生きてられるなんてタフな野郎だ。俺は少しばかりお前を甘くみていたようだ。だが、お前はここまで。大人しく死ね」

リクはダメージを負った身体でウォルスを睨みつける。

「俺もお前の力を見くびっていた。だからこんな下らん攻撃を喰らってしまった。だがその言葉をそっくりそのまま返すぜ。お前はここで終わりだ」

「へっ。そんなボロボロの身体で何が出来るってんだ？」

「出来るさ。いや、お前らを始末するためなんだからさ」

そう言うときリクは右手を突き出す。その姿を見ていたウォルスをリクのその動きに疑問を持つ。

「アルタイルっ！」

叫びにも似たその言葉と共にリクの右手を布のようなものが覆っていく。そしてそれはやがて形となり姿を現した。それは、拳に巻かれた紅い銃だった。ウォルスはそれを見て咄嗟に感じた。それが月の産物だということを。

「ザリっ！」

リクは再び叫ぶ。その瞬間その紅い銃の銃口から目にも止まらぬスピードで弾が飛び出した。それは、ウォルスの肩を撃ち抜いた。ウォルスはそれが月の産物だとは気がついてはいたものの、リクの予想を超えた攻撃スピードについていけなかったのだ。

肩を撃ち抜かれたはずのウォルスだったが肩には傷跡がなかった。ウォルスはそれを疑問に感じたが、その瞬間身体の自由が利かなくなったのを感じた。まるで自分の身体ではなくなったかのように完全に脳の伝達回路と身体が切断されたのだ。

「ぐっ、これは……」

「これが俺の月の産物”アルタイル”。……お前はもう動けない」
リクの持つ月の産物アルタイル。その銃の色はリクの怒りそのものの色のように、鮮やかにその鈍い輝きを放っていた。

Act 24：新たな敵

リクの右手に巻かれた布と共に握られている紅い銃が、目の前にいるウォルスという青髪の男に向けられている。ウォルスはリクの持つ月の産物アルタイルの攻撃を受け、身体がまったく言う事をきかなくなっていた。それは動きにくいとかそういうことではなく、完全に脳と神経が切り離されているからに他ならない。

リクは銃をウォルスに向けたまま話す。

「お前はさつき月のカケラの特異な性質について説明していたな。無論俺もそんなことは知っている。この月の産物アルタイルもそうやって産まれた。俺の意志…… お前達星の導きへの”恨み”の意志だ」

ウォルスはなんとか身体を動かそうとしているがまったく動かない。まるで見えない鎖で身体を固定されているかのように金縛りにもあっているかのようにまったく動かないのだ。それでも立っていられるのは身体が硬直している所為であろう。

「俺の持つ月の産物アルタイルは六つの能力と装填数六発の弾丸を有する飛び道具だ。六発打ち尽くすと二十四時間はリロードに必要だが、六発の弾にどの能力を付加するかは撃つ直前に俺の意志で決めることが出来る。今お前に撃ち込んだ弾の能力は”ザリチュ”という能力。俺はザリと呼んでいるが……。その能力は”拘束”。お前の身体を自由を奪う能力だ」

「それだ。俺の身体がまったく動かせないのは」

リクはウォルスをその眼光で睨みつける。

「あの事件についてお前の知っていることを全て話せ。あの二人はいまどこにいる？ どうしてあの施設が襲われなければならなかった？ なぜ全員殺す必要があった？ 答えろっ！」

ウォルスは睨みつけてくるリクの目から視線を離さず笑顔を見せる。

「ふん、俺から話せることはなにもねえよ」

「……そうか。ならばこれを見る」

そう言つとリクは銃をなにもない壁のほうへと向けた。ウォルスも言われるがままその方向を見る。

「アエシユマッ！」

その言葉と共に放たれたのは激しい閃光と計り知れない巨大なエネルギーだった。それは目の前の壁をことごとく破壊していき、目の前にあつた壁は外の景色が完全に見渡せるまでに破壊されていた。「これも能力の一つだ。破壊のみを目的とした能力アエシユマ。次はこれをお前に喰らわせる。俺の質問に答えれば命だけは助けてやる。あの日のことでお前の知つてることがあれば全て話せ」

その破壊力と光景を見ていたウォルスは突然大声で笑い飛ばした。「はーはっはっはっは。おもしれえ、おもしれえよお前。久しぶりに見たぜこれほどまでに月の力ケラの力を引き出してる奴は」突然のウォルスの笑い声をリクは変わらずの眼光で冷静に見ている。

「気でも触れたか……」

「いいぜ。それで俺を殺せるなら撃てよ」

笑つのを止めたウォルスはリクのほうを見ると言い放つ。その言葉にリクは反応する。

「さあどうした？ 怖いのか？」

身体を動かすことが出来ないウォルスは顔だけでその表情を創る。その表情はとも追いつめられている人間の表情ではない。まだ勝機を持っているのか自信に満ち溢れた表情をしている。

リクは再び銃をウォルスのほうへと向ける。

「……いいだろう。ならば望みどおり楽にしてやる」

そう言つとリクは腕に力を込める。それはリクの覚悟が銃を握り締める手に力となって現れたのかもしれない。リクはゆっくりと口を開き能力の名前を口にする。

「アエシユマッ！」

その瞬間銃口から凄まじいまでエネルギーがウォルスに向け放たれる。

その刹那、目にも止まらぬ速さで地面が盛り上がる。銃より放たれた弾はその地面より盛り上がった土によって阻まれた。その厚みと硬さによりアエシユマというリクの最大レベルの攻撃力を誇る攻撃でさえ、貫通するに至ることなく途中で完全に停止した。そのため弾がウォルスにまで届くことはなかった。

「な……に？」

リクは予想していなかった光景に驚き状況を読み込むことに必死だった。

やがて土は再び元の場所へと戻っていく。それに伴い土の壁に隠れて一時的に見えなかったウォルスの姿が現れてきた。ウォルスはその顔に笑みを浮かべていた。

「くくく……はーはっはっはっ！ ほんともしれえなお前は。自ら自分の力についてベラベラ喋りやがって。この闘いで決着がつくと思ってたのか？」

「どういうことだ？」

リクは睨みつけてウォルスを見る。

「おーい、姿見せろよ。”ソイル”」

その言葉にリクはウォルス以外の人間の気配を感じその方向を見る。

そこには不気味な白い仮面で顔を隠す細身の人間が闇より微かに姿を現していた。リクはその人間がそこにいることにまったく気がついてなかったため、驚きの表情を浮かべていた。

「いつのまに？」

「残念だったな。リクさんよ。お前の月の産物に能力ちからそしてその

弱点いろいろな情報教えてくれてありがとな。まあこっちからすれば作戦通りだよ」

「なに？」

ウォルスは不敵な笑みを浮かべたままリクに説明を始めた。

「俺達七曜は与えられた任務を完璧にこなすために組織された特殊部隊。最初に言っただろう俺達を狙ってる者がいるという垂れ込みがあると。任務を完璧にこなすためには僅かな付加要因であつてもあつてはならない。だからこそお前をおびき出すためにわざわざ俺達が出向いてやったのさ。お前の存在の確認。目的。そしてその能力。勝手にベラベラ話してくれたおかげでこっちから聞き出す手間が省けたぜ。まあそういうことで今回は引き分けてことにしといてやるよ」

リクはそのまま睨みつけウォルスに言う。

「引き分けたと？ ふざけんなよ。お前はどのみち動けはしない。

俺がこのまま逃がすと思うか？」

「なんだ気がついてなかったのか？ 俺はお前の攻撃なんか喰らってないぜ」

その言葉の後、ウォルスの身体全身が水の塊となった。まるでウォルスの身体全体を水の膜が覆っていたかのように。

「分かったか？ 攻撃を喰らったのは俺じゃない。俺の創った水の膜だ。これが月の産物全体の最大の利点であり最大の弱点。月の産物つまり月のカケラの効果は万物に効く。それが例えば水だろうが火だろうが関係ない。お前の攻撃は俺の創りだした水の鎧で止まっていたのさ」

ウォルスはあえて説明を省いたが、攻撃を喰らっていないはずのウォルスがなぜリクの攻撃が身体の内を奪うことだと気がつくことが出来たかと言うと、攻撃を受けた流動体であるはずの水が完全に静止したためだった。それを肌で感じ取ったウォルスはこの攻撃は貫通技でもなければ直接的な攻撃手段ではないと判断。その上、水の動きから少なくとも動きを止めるなにかであることを悟った。

それ故にウォルスはまるで自分がリクの攻撃を喰らい身体の自由が奪われているかのように見せていたのだ。

ウォルスはそれを誇示するように肩をグルグル回す。

「ふう、よく動くぜ。爪が甘かったようだな。まあ安心しな。今日の所はお前の情報を知ることが目的だったからな。殺しはしない。だが、今後は月よりの使者よりもお前を優先して狙ってやるよ覚悟しとけよ。じゃあな」

そう言つとウォルスは家に開いた穴から出て行くとすばやい動きで夜の闇へと消えていった。その場にいたソイルという名前の仮面の男もウォルスの後を追って出て行った。

そこにはただ空しく無力なまま立ち尽くすリクだけが残されていた。

リクは穴からゆっくりと出てくる。そして月のない静寂な夜の空を眺める。その空はリクの瞳に漆黒の闇を映し出す。まるで、リクの心をそのまま反映したかのような暗く深い漆黒の闇夜を――。

Act24：新たなる敵（後書き）

月のカケラ設定資料集wiki

<http://www.w13.atwiki.jp/riku-u/>

A c t 2 5 : パズルの意味

ルクスによつて大怪我を負つたティキは、病院での入院を余儀なくされた。だがルクスの提案で、入院している一ヶ月の間ルクスの持ってきたジクソウパズルでの謎の特訓を開始することとなった。ルクスが要求したのは500ピースのパズルを3分以内に完成させること。

それは僅か1秒の間に、3つもピースを正確に置いていかなければ完成しないほどの難関だった。ティキとリディアは共にルクスの出した謎の特訓を開始した。

ティキとリディアは互いに悩み、試行錯誤し少しずつではあるがその目標に達するためのコツを掴んできていた。そしてついにルクスが出した期限である一ヶ月が経とうとしていた。

「やあ、お久しぶりです。ティキさんリディアさん。元気にしてましたか？」

にこやかな笑顔で病室に入ってきたのは、ルクスだった。相変わらずの笑顔で、気の優しいような風貌は変わっていない。ルクスがここに来たのは実に一ヶ月ぶり。以前ティキ達にジクソウパズルの特訓を開始させたあの日以来である。

ルクスが入るなりティキの怪我の具合を尋ねる。

「どうですか怪我のほうは？」

ティキはベッドから起き上がり、身体を捻りストレッチを始める。「ご覧の通りもう完璧に治ったぜ。ほんと一ヶ月も入院しなきゃならないほどの怪我を負わせやがって」

「あはは、まだ言ってるんですか？ 結構ねちっこいんですね」

その言葉にティキは怒りを表す。ルクスはその見た目とは裏腹にたまに言葉に毒がつく。しかも本人はその気がまったくくないのだからはつきり言つて性質が悪い。それもルクスの特徴の一つだと思え

は仕方がないことなのだが。

二人の言い争いを見ていたりディアが二人の間に割って入る。

「ちよつと、二人共ここは病院なんだから暴れないでよね。それにルクスさんは他の用事があつてきたんでしょ？」

「あ、すいません。忘れるところでした」

そう言うところルクスはティキによつて倒されていた身体を起こす手で身体から埃を払う。

「それでどうになりました？ 僕が与えた特訓の成果は？」

その言葉にティキは一瞬リディアのほうを見る。リディアもティキのほうを見ていたようで二人の目が合う。その次に二人の視線はルクスのほうに行く。

「ばつちしつ！」

ティキは腕を伸ばして、親指を立ててオツケーのポーズを取る。

ティキの顔もまた自信に満ち溢れていた。ルクスはその回答に相変わらずの笑顔で言う。

「そうですか。では見せていただきましょうか？」

「ああ、いいぜ」

ティキはジクソウパズルを目の前の机に置くと準備を整えた。

「さあ、いつでもいいぜ」

ルクスは手にストップウォッチを持っている。そして親指で押す準備を整えるとスタートの合図をした。それと同時にストップウォッチの時計が動き出す。そしてルクスの目の前ではティキがいままでに見せたことがないスピードで次から次へとピースを所定の位置へと置いていく。その早さはまさに”技”の域に達していた。そして、ティキは最後のピースを置きパズルを完成させる。

「タイムは？」

ルクスはストップウォッチで完成までのタイムを確認する。

「2分23秒……。これは驚きました。僕が指定した時間を30秒以上も縮めるなんて」

「あー俺のベストタイムより10秒くらい遅いな。まあちつとミスったかな？」

ティキは勝ち誇ったような表情でルクスに言い放つ。横で見えていたりディアが咳をし、自分に注目させる。そしてリディアもティキに負けず劣らずの早さでジクソウパズルを完成させていく。

「リディアさんのタイムは2分31秒。これまた凄い」

「嘘。ティキに負けたのか。悔しい……」

リディアは悔しそうな表情でティキを見る。それに気がついたティキはリディアのほうを見て腕を組み、勝ち誇った態度を取る。

「いやいや、お二人共素晴らしい。まさか本当にこの一ヶ月でこの特訓をクリアするなんて。さすがに僕が見込んだだけのことはあります。それじゃあ肩慣らしはこのくらいにして本番に入りましょうか？」

「は？」

ティキもリディアもルクスの言葉の真意が掴めない、というような顔でルクスを見る。ルクスはその二人を尻目に持ってきたジクソウパズルを出す。そのジクソウパズルは同じ500ピースであるものの一ヶ月間二人が取り組んできたパズルとはまったく絵柄が違った。

「それじゃあティキさん、リディアさん。どうぞ始めてください」
ルクスは笑顔で言い放つ。

「え？　ちよつと待てよ。これが本番？　絵が違っただけど」

ティキは恐る恐るルクスに訪ねる。

「え？　絵なんか違って当然でしょ？　さあどうぞ」

ティキとリディアはそのパズルを見て思わず息を呑む。絵が違っまったく始めて触るパズル。それを3分以内に完成させる。いままですやってきたパズルは最初完成させるのに何十分もかったのにだ。その二人の表情を見てルクスが言う。

「なにを恐れてるんですか？」

「だって……なあ？」

ティキはリディアのほうを見て同意を求める。

「僕が言った課題をクリアしたんです。絶対出来ますよ。自分を信じてください。自分で自分の力を疑ったら、誰が信じてくれるんですか？」

その言葉にハツと気がついたかのように、ティキはルクスが新たに持ってきたパズルを手取る。

「そうだな。俺が自分の力を信じねえでどうすんだ。やってやる」
そう言うティキは箱を開け準備を整える。

「よし、いつでもいいぜ。はじめてくれ」

「じゃあ、いきますよ。はじめっ！」

ルクスのスタートの合図と共にティキはパズルを手にとり、パズルを完成させるために動く。

開始してすぐにティキは直感的に違和感に気がついた。今始めて見る絵柄。はじめて触るパズル。どこになにがあつてどの位置に置けばいいかなんて知るはずも無い。だがティキは、直感的にいや直感すら凌駕する感覚でそれを成し遂げていく。ティキ自身自らの身体の一部であるはずの手を腕を脳を疑うほどの動き。まるでいままで何十回も何百回もこのパズルを完成させたかのように、手は自然とパズルを完成へと導く。

そして遂にティキは最後の1ピースを置き、パズルを完成させた。完成した後、目の前に広がる光景に驚いたティキは一瞬沈黙するが、すぐに我に返りルクスに聞く。

「タ、タイムは？」

ルクスは顔に笑みを浮かべるとストップウォッチをティキに見せる。

「に……2分32秒……」

「えっ！？ ちょっと見せてよ」

リディアはティキの口から零れるように出たタイムに驚き、ティ

キの持つストップウォッチを取ってそのタイムを見る。そしてそのタイムが嘘偽りないティキが出した真正正銘の記録であることを痛感した。

「分かりましたか？ 僕がこの課題を出した本当の意味が。はつきり言って普通にやればどんなに早くても500ピースを3分でこなすことなんて出来ません。例え絵柄を全て完璧に覚えていたとしてもです」

ルクスはピースを一つ手に取る。

「このパズルの本質はそんなところにありはしない。このパズルによって鍛えられたのは空間認識能力と瞬間判断力、洞察力。総じて言えば”臨機状況応用力”。これはこと戦闘に置いては非常に重要です。未知数である敵の力にどれだけ早く対策を立て、それに順応出来るかそれがこの課題の最大の目的です。あなた達は僕の言う課題を見事にクリアした。それは、総じて僕の言う応用力が高くなっただけということです。だから今のあなた達にとっては絵柄の違うだけのパズルなんてなんら問題ではありません」

ティキはルクスの説明を聞いて妙な納得感を持っていた。自身が体験したことと合わせても余りあるルクスの説明。それはティキがピースを手にとった瞬間感じた違和感。最初にルクスから預かったパズル。3分を切るのに何千回も完成させた。その経験と感覚がティキに確かな手ごたえを与えていた。

これこそが強さの基礎となり、最も大事な要素である”経験”。それをティキは身体全体で身に染みて、決して消えないほどに痛感した。それと同時にティキはこのルクスという男が、想像以上に只者ではないということを感じていた。

——これもまたティキの経験からくる答えの一つ。

Act 26：新たな試練

ルクスから出された課題を見事にクリアしたティキは、怪我もほぼ治り病院から退院した。だがティキはルティーには戻らずに、退院した足でルクスに呼び出された場所へと向かっていた。一方リディアもまたティキとは別の場所へルクスから呼び出され、その場所へと向かっていた。

リディアが向かったのはとある施設。そこはドーム型で中はかなり広そうだ。どうやら昔はなにかの演習に使われていたようだ。だが今は誰も使用していない無人の建物だ。リディアはルクスに言われた時間にその場所へとやってきていた。リディアが到着するとすでにルクスは到着していた。

「やあ、リディアさんお待ちしましたよ」

「こんな所に呼び出して一体なんなの？」

ルクスは顔に笑みを浮かべる。

「やだなあ、決まってるじゃないですか。あなたを強くするための特訓ですよ」

リディアは無言にルクスをしばらく見ると口を開いた。

「ねえ、ルクスさんちよつと聞きたいんだけど、どうしてあたしまで鍛える必要があるの？」

「え？ はは……まさかそんな質問されるとは思わなかったなあ」

ルクスは少し苦笑いを浮かべている。

「もちろん、これからあなたの力も必要だからですよ。それに……あなたの目的のためにも、強さは必要なはずですが……」

リディアはその言葉に反応する。

「僕は自分が関わることに關しては、なんでも知っておかないと気が済まない性質たちでして、ティキさんのこともあなたのことも失礼だと思いながらも、勝手に調べさせてもらいました。あ、とは言つて

も僕は口が堅いですから、誰にも言ったりはしませんから安心してください」

「……あまりいい趣味とは言えないね」

「よく言われます。まあそれではさすがに不公平なので、少し僕のこともお話しましょうか？」

リディアはなにも言わずにルクスのほうを見ている。

「僕は今は亡きある国の傭兵でした。そして今は、リシュレシア国の隠密部隊……つまりスパイです。僕の持つ月の産物”リーゼ”は傭兵時代に受け取った物です。僕の目的はお金。それは、弟を探し出すためです。僕の弟とはまだ幼い時に生き別れました。探すにしても資金もなかったなので、お金のいい傭兵をやっていました」

「それがどうしてスパイに？」

「さつきも言ったように、傭兵をやっていた国は滅びました。今のルーファは一見すると平和に見えるが、100を越えるサガルマータは小国から大国まで様々、発展途上の国や廃れる国、そして滅びる国もあります。僕がいた国は弱かった。だから戦争に負けて滅びました。傭兵とは言え極刑は免れない状況からこの月の産物のおかげで助かりました。このリーゼは、高速移動用の装備の片割れなんです。そしてそれを買われ、この国のスパイとなりました」

リディアは少し複雑な気分となった。なぜなら過程こそ違えど、その経緯はまるで自分にそっくりだからである。この男ルクスも大きな過去を持っている。そしてそれが彼を強くしている理由なのだとリディアは思った。だがその一方でリディアは疑問を感じていた。嘘についてはいない、だがまだなにか本当の肝心な部分を隠している。そんなただの勘にも似た程度の疑問。

「それじゃあ、そろそろ本題に入りましょうか？ ついて来てください」

ルクスはそう言うつと施設の中へと足を踏み込んだ。リディアも言われるがままルクスに続く。

施設に入ると、中は予想通りとても広かった。だが、その広場にはなにやら見慣れぬ物がたくさん置いてある。リディアはそれがなんなのかまったく予想できなかった。

「ねえ、これは一体……」

「リディアさん、あなたには今からここで次の試練を受けてもらいます」

そのドームの中には、鋭い鎌やら、高低差の大きな坂、抜けるのが難しそうな難解な罠とも取れるようなものがたくさん置いてあった。一言でいうならアスレチックのようなものとも言っべきか。しかし、子供の遊ぶようなものではない。もし、一瞬でも気を抜けば怪我では済まない様な仕掛けばかりだ。

「このスタート地点からゴールまで約200mあります。目の前にあるこれらの仕掛けを全てクリアしてください。制限時間は30秒です。もちろん30秒を越えられるまで何度でも挑戦してもらってかまいませんが、見てもらったら分かるように、一瞬でも気を抜けば死んでしまってもおかしくないほどの仕掛けばかりです」

リディアはそれらの仕掛けと、ルクスの提示した条件を聞いて冷や汗をかいていた。これだけ張り巡らされた仕掛けの中を掻い潜り、30秒以内にゴールに着かなければならないのだ。しかも目に見える仕掛けだけとは限らない。見えないところにどんな仕掛けがあるのかも分からない。

「それじゃあ、僕はティキさんのところに行くので死なないように頑張ってくださいね。見事クリアできたら僕の携帯に連絡ください。あ、それとリディアさんの月の産物をしばらく僕に預けてもらえませんか？」

「え？」

「心配しないでください。ちゃんとお返ししますよ。この試練が終わるまで間お預かりするだけです」

リディアは少し納得していなかったが、ルクスを信じ月の産物を

渡すことにした。

「それじゃあ、がんばってくださいね」

ルクスは相変わらぬ笑顔でそう言うと、リディアを一人にしてその場から去っていった。一人残されたリディアは再びその仕掛けに目をやる。

「強くなるため……か」

一方、ティキはルクスに呼び出された場所まで来てルクスを待っていた。ルクスがリディアのところへ寄ってからティキの元に向かっていることなど知らないティキはいつまで経ってもこないルクスに対して少し苛立ちを覚えていた。

そんなティキの前によくルクスがやってきた。顔は相変わらぬ笑顔だ。ティキはルクスのその表情を見て、怒りが爆発した。

「てめえ、人をさんざ待たせといてなんだその笑顔は？」

「あはは。僕のこの顔は生まれつきですよ。ティキさんこそ怒ってばかりいると、怖い顔になりますよ」

ティキにとってルクスは、なにかと癪に障る男のようだ。男同士互いの縄張り内にいると警戒しあうのだから。そんなティキの気持ちを見無視してルクスはさっそく話を始める。

「さて、ティキさんにわざわざここまで来てもらったのは他でもありません。次の試練です」

ティキが呼び出された場所。それは、サガルマータの先端。そう島の一番端つこである。もうティキの立つすぐ後ろは、遙か下まで続くアンクレスト。落ちればもちろん命はない。本来この場所は立ち入り禁止区域。サガルマータの端から50メートルは安全の為、

全面的に立ち入り禁止区域となっている。

「試練？　こんなところですか？　てか俺退院したばかりだぞ」

「ふふ、ティキさんほどの体力と根性の持ち主なら問題ないはずですよ。どうぞ、これを着用してください」

そう言つてルクスが渡したのは、ベストと腕と足につけるバングルのようなもの。ティキはそれを受け取った瞬間、あまりの唐突な出来事にそれを落としてしまった。そう、その予想外のアマリの重さにだ。ティキが落としたベストとバングルは土の地面にめり込んでいる。

「これは？」

「ご覧の通り重いです。ベストは50キロ。手足のバングルはそれぞれ10キロあります。合計で90キロの重いですね。まあとりあえず付けてみてください」

ティキは疑問に思いつつも、ベストとバングルを身に着ける。

「あ、着用するのに首から提げてる月の産物は邪魔でしょう。ちょっと預かっておきますよ」

そう言つて手を差し出すルクスにティキは思わず月の産物を渡す。そしてベストとバングルの着用が終わったティキは立ち上がる。さすがに慣れていない重さのため、立ち上がるのに一瞬よろけてしまった。ティキが立ち上がるのを待っていたかのようにルクスが再び話し始める。

「ところでティキさんは、こういう言葉をご存知ですか？」

ティキは突然の質問に疑問を抱きながら、ルクスのほうに耳を集中させる。

「獅子は我が子を谷底へ突き落とし、自力で登ってきた強い子獅子だけを育てるという言葉があります」

「あー、なんか聞いたことあるな」

「そうですか。それなら話は早いんです。じゃ、がんばってくださいね」

ルクスは笑顔でそう言つとティキの肩をポンツと押す。不意をつ

かれたティキは、そのままよろけて後ろへ下がる。次の瞬間にティキは自身の足が地面を捉えていないことを認識した。

「なっ……」

ティキの視界には笑顔でティキを見ているルクスから、やがて空へと移り、ついには遥か下に見える月のカケラの粒子が形成する雲を捉えていた。

「なにいいいいいいいいっ！！ルクステめええええええええええ、ぶっ殺すぞおおおおおお……」

ものすごいスピードで落ちていくティキの声は、やがてルクスの耳から遠ざかっていった。ルクスはそれを確認すると笑顔で二回頷いた。

「ティキさん、がんばってくださいね。さて僕は僕でやらなければいけないことをやりますかね」

そう言つとルクスはその場から去っていった。

Act 27：登頂への挑戦

地上より遙か上空まで伸びる土台。その土台の横をひたすら落ちていく一人の男がいた。

「あああああああああああああああああああ！」

落ちている男はティキだ。ティキは真つ逆さまに、アンクレストへと向かって落ちていた。

「くうっ！」

ティキは空中で無理やり体勢を変えると、腕を伸ばしサガルマータの土台に手を引っ掛けた。その流れで身体を反転させ、上にあった足を下へと持ってきて今度は、足をも引っ掛けて摩擦を利用して止めようとした。

ティキの作戦は見事に成功し、無事に落下は止まった。だが、無理な方法で止めたのでティキの手や足はボロボロになってしまった。それでも、このまま落ちて死んでしまうよりはマシといえばマシなのだが。

「痛つてえええ！ くそつ。ルクスのヤロウ、上に戻ったらぜつてえぶつ殺すっ！」

ティキは目に涙を貯めながら言う。そして、自分が落ちてきた遙か上空を眺める。そこには気持ちのいいくらいに綺麗な青空が広がっていた。

「くそ、絶対登りきつてやる。その後は、ルクスを殺して晴れて自由の身に……」

ティキは一瞬沈黙する。なぜなら、青空を見たティキは自分がこれから登らなければならない土台をも見たからだ。あまりの高さに1番先が見えない。これからティキは先の見えない土台を登り、遙か上空のサガルマータまで着かなければならないのだ。

ティキは知る由も無いが（というか興味がない）、地上アンクレストから伸びる土台は中層のストラムを経てサガルマータに至る。その土台の高さには最低となる規定があり、どのサガルマータも一定以上の高さを保っている。その高さは、地上から15キロ以上である。それには理由がある。

月のカケラの粒子は、地上より約8キロの地点にまで及んでいて、そこまではまさに死の世界なのだ。さらに、そこから3キロほど上がった10～11キロ地点にストラムがある。このストラムまではアンクレストには遠く及ばないものの、月のカケラの粒子が少し漂っている。さらにそこから5キロほど上がった地点にあるのがサガルマータである。サガルマータは言うまでもなく澄んだ空気を保持しており、月のカケラの粒子はまったく存在しない。

よって、サガルマータは最低地上より15キロ以上の場所にある。だがそれは国によっては多少変わる。国によって大きさが違うように、高さも国によって違うのだ。ほとんどの国は規定の15キロよりも、さらに2～3キロ上空にサガルマータを造っている。つまり平均18キロほどということになる。高いものでは20キロ以上のものもあるが、それが特に国の強さと関わっているわけではない。（土台が造られてかなりの年数が経っているため）

今ティキがいる場所は、月のカケラの粒子が少し漂う場所、恐らく地上8～9キロ地点である。ティキのいるリシュレシア国の土台の高さは約17キロであるため、ゴールであるサガルマータまで後9キロほどはあることになる。

「ちつ、くそ。ルクスのヤロウにルナフォースを盗られてなけりや、もう少し楽に登れるんだけど……。おまけにこの重しもやたら重いしな」

ティキはルクスに対する愚痴を言いながらも、少しずつ確実に登っていた。先の見えない登頂に試されるのはその”精神力”。ティキの月の産物を取り上げたのも、重しをティキに着けさせたのも、ストラムへの入り口がない場所からティキを落としたのも、全てティキを強くするための布石。過酷な条件下でも、挫けない精神力と、諦めない根性。

そして、なにより一瞬でも気の抜けない状況下での……死と直面した状態での、力の引き出し方を身体で覚えるため。ティキのようなタイプに口で説明しても理解など出来ない。こういうことは身体で覚えたほうが、確実になおかつ忘れることも無い。

そして、トラブルがあればあるほどティキは強くなる。つまり今ティキに起こるうとしてしていることは、ルクスにとっては予想外の幸運であり、ティキにとっては予想外の不運である。

ティキの前に現れたのは、鳥系の姿をした巨大なオームだった。体長はゆうに5メートルはあるうか。それは月のカケラの粒子が漂う場所を優雅に泳いでいた。オームはティキの存在に気がつく、ティキの周りを飛び始めた。

「オーム？ くそ、なんだってこんな時に……」

オームは加速をつけると、ティキに襲い掛かる。ティキはそれを間一髪で避けることに成功した。

「あつぶねえー。くそつ、こんなとこでやられてたまるか」

ティキは辺りを見渡す。そして必死に土台をよじ登る。ティキを追ってオームも上昇する。だが、ティキはそれを狙っていたかのように、土台から手を離すとオームの頭目掛けて落ちていった。

オームが上昇するスピードと、ティキが落ちる落下速度、それにティキが身に着けている90キロもの重りが重なり、オームに与え

た一撃は想像を絶するものだった。その一撃を喰らったオームはうなり声を上げながら落ちていく。

「あ……」

オームの頭にいたティキはオームが落ちると同時に落ちていく。当然といえば当然なのだが。ティキはそのまま落ちていった。

「いつてええ……」

結果としてオームの上にいたためオームがクッション代わりとなりティキは怪我を負うことなく、落ちることが出来た。これを不幸中の幸いというのだろう。落ちたのは地上アंकレスト。ティキは結局、土台の一番下。土台の立つアंकレストまで落ちてしまった。これで登らなければならないのは、約17キロということになる。ティキはそこから上空を見上げる。もはや空すら見えない。そこから見えるのは月のカケラの粒子のみ。

なんども来たことがあるアंकレスト。だが、今ティキは月の産物もなく体力も削られている。それはティキにとって言いようの無い不安を与えていた。だからこそ、ティキは少しでも早くその場から離れたかったのかも知れない。そのため、ティキは周りになにも見ることなく、愚痴の一つも零すことなく、すぐに再び土台を登り始めた。

——だから、ティキがソレに気がつかなくても不思議はない。

再び登り始めたティキは、今度はまたオームに襲われることがないよう、せめて月のカケラの粒子がなくなるところまでは休まず登ろうと決めていた。そしてティキはそれを実行し、なんとかストラムがあるであろう付近まで登ってきていた。辺りはすっかり暗くなっている。

ティキは、寝てしまってもその場から落ちないように、土台を少

し削り窪みを作るとその場で器用に目を瞑って眠り始めた。よほど眠かったのだろうか、ティキは今の状況では考えられないほどにあっさりと眠ってしまった。

そして、目が覚めると再び土台をサガルマータ目指して登り始めた。

ティキのこれほどの検討を誰が予想しただろうか。それはきっとルクスですら予想していなかったはずだ。ティキは想像を超える体力と根性で土台を見事に登りきろうとしていた。所要時間僅か2日、病院を退院したばかり、途中オームに襲われたにしてはかなり出来だろう。

ティキは遂にサガルマータの地表に手を伸ばした。

「や……やったぞ。遂に登りきった……」

ティキが登りきり這い上がったとしたその時、ティキのとりえがないことが起きた。

「ワッ！！！！！」

それはルクスの声だった。ティキが登りきる瞬間を狙っていたかのように、大声を出した。そのあまりもの大声に驚いたティキはせっかく掴んだサガルマータの地表から手を離してしまった。こうなるともう止まらない。ティキは再び真つ逆さまにアンクレスト目指して落ちていった。

「ルクスウウウウウ！！ 必ずてめえをブチのめえええええすうううう……」

ルクスはティキが落ちていったアンクレストを見つめていた。

「ティキさんは元気ですねー。それにしてもたった二日で登ってく

るとは、やはり僕の見込みに間違いはないようですね。再び戻ってくる時が楽しみです」

そう言っていると、ルクスはその場を後にした。

Act 28：謎の残骸

土台に登りきった瞬間に再びルクスによって落とされたティキは、土台に手を伸ばし落下を防ごうとしていた。だが、腕の疲労と手がボロボロになっていいるのも含め、ティキには土台を掴むだけの力が残っておらず、減速しただけで再び月のカケラの粒子が漂う場所を通り1番下……地上アンクレストまで落ちていった。

激しい衝撃に少しの間意識を失っていたティキは、しばらくして意識を取り戻す。

「ぐ……いて。くそっ……」

ティキが起き上がろうと手で自分の体を支えようとした時、ティキは手になにかが当たった感覚に襲われた。ティキはその場所に視線をやる。

そこには、黒こげになった謎の金属片が落ちていた。ティキはそれを手に取ると金属片をよく見渡した。

「なんだコレ？　どつかで見たことあるような、ないような……」

ティキはソレがなにかまでは分からなかったが、どこかで見た事があるモノだという認識を持ったようだ。ティキはそれがなんなのか調べたいと思い、それをポケットにしまった。そして、再び土台に手をやる。

「なんにしても、またコレを登らないとなんにもならないな」

ティキはルクスに落とされたことを思い出していた。

「あー！　思い出したらム力ついてきた。絶対また登りきってやる」

ティキは土台に手で掴まり、足を引っ掛けると、再び土台に登り始めた。

ティキが再び土台に登り始めて18時間――。

ティキは、ルクスへの恨みかそれとも自身の根性か。早くも登頂を成功させようとしていた。

「お、もうゴールが見えてきた。まだ一日経ってねえのに。一回目の時よりも遥かに早く登ってこれたな。……これが修行の成果つてやつか。けど、それとルクスに対しての怒りとは別の話だけだ」

登りきった瞬間にまた落とされないように、今度はサガルマータの地表にゆっくりと手をかけ、ゆっくりと顔を上げ、辺りを伺う。左を見て、右を見て念のため上を見て気配を探って人が周りにいないことをしつかり確認すると、ティキはサガルマータの地面に這い上がる。そして、早足で立ち入り禁止区域から離れる。

「ふう。ここまで来れば安心だ。さあて、じゃあルクスに恨みをぶつけにいくか……ふふふ」

そう言い、ティキは胸の前で手を鳴らしていた。

その瞬間ティキのお腹がまるで緊張の糸が解けたように鳴った。当然と言えば当然である。ティキはこの三日なにひとつ食べていないのだから。ルクスへ恨みをぶつける前にまずは腹ごしらえと判断したティキは、一度ルティーに戻ることにした。

一ヶ月以上開けてしまったルティー。しかもなんの告知もせず、突然である。当然その間は営業もしていない。その間一体何人の客が訪れたのかティキは当然知るよりも無いが、ただ激しく収入減が減ったということだけは直感で感じとっていた。

そんな中、久々にルティーに着いたティキはおもむろにドアを開ける。

「いらつしゃいませー！」

その声にティキは驚き、啞然として口をぽっかりと開ける。それもそのはずである。そこにはいるはずのない人物がいたのだから。

「あれ？　なんだティキさんですか、てっきりお客さんかと思っちゃいましたよ」

「いや、なにしてんのルクス」

そこにいたのは、ルクスであった。ルクスはきつちりとした身なりで立っていた。

「ははっ……見て分かりませんか？　ティキさんがいない間、僕がこのルティーを経営してたんですよ。ティキさんは突然入院して、お客さんはそんなこと知りませんからね。ほっておいたらお客さんに迷惑がかかると思いますよ、僕がティキさんの代わりにここでお客さんの相手をしてたんですよ」

「ははっ……笑い事じゃねえよ。なに勝手に人の店で働いてんだ」
その時、ティキのお腹が再び鳴り出した。住んでいる場所に戻ってきて余計緊張が解けた所為だと思われる。

「あーダメだ。腹が減りすぎて、怒る気にもならねえ。とにかくなにか食おう」

とりあえずティキは冷蔵庫の中から適当に物色して口の中に放り込んでいった。それを傍で見ていたルクスの感想は……。

「まるで犬ですね」
だった。

ティキの食事（食事？）も終わり、腹が大きく膨れたティキは一言。

「あー食った食った。ひっさびさの飯だったからなあ」

ティキの食事の一部始終を見ていたルクスは、それが食事終了の合図と察するとティキに話しかけた。

「ティキさん、無事帰還おめでとんです」

その言葉にお腹が膨れて満足感で満たされていたティキの、忘れていた感情が蘇った。

「あー！　そうだ。てめえ、よくも落としゃがったな！　死ぬところだったんだぞ」

「生きてるじゃないですか。それにお腹が一杯になって忘れられるほどのことなら、たいしたことありません」

「おー。よくまあそんなぬけぬけと、そういう言葉が出てくるもんだ」

ティキは再び胸の前で手を組み骨を鳴らした。

「無事帰還したんだから問題ないはずです。それよりもティキさんがいない間、さすがに僕が依頼をこなすことまではやるわけにはいかなかったので、すぐじゃなくても大丈夫な依頼だけ預かっておきました。まずはそれらをこなしたほうがいいですね」

そういうとルクスは封筒をティキに見せた。どうやらティキに依頼してきた依頼内容の資料が入っているようだ。

「てめえ、こっちは途中オームに襲われたりして大変だったんだぞ。月の産物はお前に預けたままだし……ってそうだ。月の産物返せよ」

「あー、月の産物は今ここにありません。ある方に預けてあります」「はあ!？」

ティキは驚き、ルクスの両肩に手を置きゆする。

「どういうことだよ!？」

「お……落ち着いてください。大丈夫です。心配しないでください」ティキはとりあえず、ルクスの肩から手を離す。

「誰に預けてあるんだよ？」

「まあいいからいいから。心配しなくても大丈夫です。そっちなほうはとにかく任せてください」

ティキはふと手がなにかに当たったことに気がつく。ポケットになにか入っている。それはアンクレストで拾った謎の黒こげの金属片だった。ティキはそれをポケットから取り出す。

「そうだ。ルクス、アンクレストでこんなもの見つけたんだけど、なんだと思う？」

ティキはその金属片をルクスに手渡す。ルクスはその金属片を手にとると、よく見回す。

「なんですかコレ？」

「よく、わからねえんだ。でもどつかで見たことあるような気はするんだけどな」

「んー。確かに僕も見ただことあるような……。これ、もしかしてリバイターの部品じゃないですか？」

ティキはルクスから金属片を受け取る。

「リバイターの？　そう言われるとそう見えなくはないな。でもリバイターの部品でこんな大きさのつてあったけな？」

「じゃあ、ヴィマーナの部品じゃないですか？」

ヴィマーナ……リバイターと同じく島間（国間）を移動するための大型の飛空船である。かなりの大人数を収容でき、主に物資の運搬、旅行などに使われる。大きさこそ違えど、飛行システム等はりバイターと同じであるが故、部品の形状もほぼ同じである。

「ヴィマーナの……あり得るかもな。でもなんでそんなもんが黒こげになってアンクレストに落ちてんだ？」

「ちよつと待つてください」

そう言つてルクスは机に置いてあるカバンから、携帯電話よりも少しばかり大きな機械を出した。

「なんだそれ？」

「あれ？　知らないんですか？」　モバイルネットデバイス”の最新型です」

「モバイル……なんだつて？」

「モバイルネットデバイスです。エムエヌティー通称MND。タッチパネル式の、通信モバイルですよ。携帯よりも多くの情報を、より早く得るために開発されたデバイスです。携帯は基本的に自国内でしか使えませんが、これは対応国は80国以上で対応しているすべての国で使えますし、他国の情報も一般公開されてるのなら見れます」

ティキはルクスの持つその端末を物珍しそうに見ている。

「今は情報社会ですからね。いろんな情報を集めるなら必須ですよ。ほしいならお安く手に入れてあげますよ」

「うーん、そうだな。まあそれについてはまた連絡するよ。それで、そのデバイスにはこの黒こげの部品の情報は載ってるのか？」

「ちよつと待ってください」

ルクスはそのデバイスを手早く操作していった。相当使い慣れているようだ。

「おつ、もしかしてこれじゃないですかね？」

そう言うと、ルクスはデバイスをティキに手渡した。そこには、確かにこの部品のことであろうことが書かれていた。

”イルマシア国でヴィマーナが墜落。原因は不明。死傷者は20人以上。”

「イルマシア国って言ったら東側の隣の隣の国だな。日にち的にも俺がお前にアंकレストに落とされた少し前、場所もここならほぼ一致。ってことはこの部品はここに書かれているヴィマーナの可能性が高いな」

ティキはルクスにデバイスを返しながら言う。

「まあ、そのことは私が独自に調べておきましょう。それよりもティキさんは、その依頼をすることが先決でしょう」

「まあ、確かに」

「それじゃあ、私は帰りますね。後は任せました。ヴィマーナのことが分かったらまた連絡します」

そう言うと、ルクスはルティーから出て行った。

Act 29：消えた男

「ティキさん、見えてきましたよ。あそこがイルマシア国です」

ティキとルクスは依頼をこなす為、リバティーに乗ってイルマシア国へと向かっていた。

「ホラ、見てください。上空からだと良く分かるでしょう？ イルマシア国のすぐ隣にあるあの国がデイスエルパス国です。世界でも珍しいサガルマータ同士で橋が架かっている国です。イルマシア国とデイスエルパス国は姉妹国と呼ばれていて、デイスエルパス国はリゾート地なんですよ。今日は平日なのでそんなに人はいませんが、休日には人で賑わう場所です。依頼が終わったら帰りにでも寄りましょーよ」

ルクスがティキに説明しているデイスエルパス国とイルマシア国はサガルマータ同士の距離が非常に近く、世界でも珍しいサガルマータ同士で橋が架かっている国である。デイスエルパス国は国土が小さく自国だけでは、経済発展が不可能に近いのだが、幸い隣に比較的大きめのイルマシア国があるおかげで、リゾート地として潤っている。この星ルーファでサガルマータが橋同士で繋がっているのは五つだけである。

「それで、依頼者はなんて？」

「ん？ ああ……」

ティキはルクスに聞かれて、今回の依頼者のことを思い出しながら、ルクスへと説明しはじめた。

それは今から数時間前、ティキは手紙に書かれている住所へとやってきていた。

「ここだな。すいませーん！」

ティキは門の前から、中にいるであろう人に向かって呼ぶ。家の

中にいた人はその声に気がつき、出てくる。

「はい？」

「あ、えっとヘレイムさんの家ですよ。」

「……はい」

「俺は、依頼を受けて来たルティーをやってるティキと言うものです」

「あー、わざわざ来てくださったんですね。どうぞ中へお入りください」

ティキは依頼者に家の中へと招きいれられると、それに従い中へと入っていった。家の中へと通されたティキは、椅子へ座るように言われ椅子へと座る。そして依頼の内容について話を聞き始めた。

「えっと、依頼の内容は息子さんを探して出してほしいってことですよね」

「ええ、息子はジャーナリストをしていまして、仕事でイルマシア国へと行ったんですが、仕事を終え乗ると言っていたヴィマーナが墜落してしまい、息子の消息が分からなくなってしまってます……」

ティキは依頼主であるヘレイムの言葉を聞きながら、あることを思い出していた。それは、ルクスの特訓の最中にアंकレストで見つけたヴィマーナの部品と思われる残骸。あれは後の調査でイルマシア国を出国したヴィマーナの部品であったことが判明している。死者200名以上を出した大事故だが、原因は現在調査中だということ。このヘレイムの息子もそのヴィマーナに乗っていたということだ。

しかし、ティキはヘレイムの話を聞きながらも少し違和感を感じていた。それはヘレイムが息子を失ったにしてはあまりにも冷静すぎるからだ。まだ事故から数日しか経っていない。普通ならもっと取り乱してもいいくらいのはずだが……。

「回収された遺体の中に息子さんの遺体はなかったんですか？」

その言葉にヘレイムは少し言葉を濁す。

「……ありませんでした。それに実は事故のことを聞いたその日の

夜、息子から電話があつたんです」

「え？　なんて？」

「『俺は生きているから安心しろ。けど今は事情があつて帰れない』と。ただそれだけを言つて電話は切れました」

「……搭乗者リストには息子さんの名前は？」

「ありました。でも電話をしてきたということは……生きているはずですよ」

ヘレイムの話聞いたティキは頭の中で今得た情報を整理していた。

「分かりました。とりあえずイルマシア国へと行つて、手がかりを探してきます。なにか分かればまた連絡します」

そう言つと、ティキはヘレイムの家を出て行つた。

そして、時は再び戻りティキはイルマシア国へと降り立ったところだ。ティキとルクスはリバティーを降りると、一番近くにあつた街へと入る。

「つまり、搭乗リストには載つていたはずの息子さんは、離陸時にはヴィマーナには乗つておらず、そのヴィマーナはイルマシア国を出国した後、原因不明の出来事により墜落し、死んだと思つていた息子さんから電話があつたが、消息は不明……というわけですね」

「ああ、そうだけなんでルクスがついて来るんだ？」

すると、ルクスは突然立ち止まりカバンから資料を出し、ティキに見せる。

「……ヴィマーナ墜落事件調査書？」

ティキはその資料に書かれている一番上の部分を読んで見せた。

「そうです。先日墜落したヴィマーナの調査を任されたんですよ。

イルマシア国発のヴィマーナなので、イルマシア国が調査するんですが、リシュアレス国の者も搭乗していたのでリシュアレス国に住んでいた被害者の調査と原因究明のお手伝いが仕事です。つまりティキさんと同じような仕事です。同じ仕事だったら別々にするより、

二人でやったほうがはかどりますからね」

「なるほど、まあ俺は別にいいけどな」

「あー、そうそう。仕事の前にせっかくこの街に寄ったんだからテイキさんに会ってほしい人がいるんです。というか、その人に会ってもらうためにわざわざこの街で降りてもらったんですが」

「会ってほしい人？」

「そうです。今、テイキさんの月の産物を預かってもらってる人です」

その言葉にテイキは驚いた。無理も無い。月の産物はそれ一個で兵器にも匹敵するほどの威力を発揮する。本来なら簡単に他の国の人に渡してもいいものではない。下手をすればそれが原因で戦争が起きる可能性もある。

「おまつ！ 預けてるって他の国の人に渡したのか！？」

ルクスはテイキの焦り様を見て笑っている。

「はははっ……、大丈夫ですよ。テイキさんの月の産物を預けている人は、『産物の師』です」

「え？」

産物の師……月の産物を製造可能な技術を持つ者のことである。

月の産物の製造方法は国家機密で一般には一切知られていない。そんな中、月のカケラより月の産物を製造可能な技術を持つ者が、公式には世界で10人ほどいると言われている。（ただし、月のカケラの性質である、人の意思に反応するということは広く知られているため、一般でも比較的正確に近い仮説は立てられている。国が製造技術を隠している理由はくどいようだが、月の産物はそれ一個で兵器にも匹敵するためである）

「テイキさんの持っていた月の産物は、彼女が作ったやつのはずです。国で資料を見せて貰ったので間違いないと思います」

テイキは、月の産物をリシュアレス国から貰っていて、テイキ自身は月の産物の製造者にあつたことはなかった。

「なんのために預けてあるんだよ？」

その言葉にルクスは口の両端を上げる。

「もちろん、月の産物のパワーアップです。ティキさんは、僕の特訓でかなり基礎的な強さはあがったはずです。それに合わせて月の産物もグレードアップが必要だと思います」

その言葉をルクスが言い終わるかどうかという瀬戸際、突如ルクスの頭を軽い衝撃が襲った。それはティキがルクスの頭を軽く殴ったからであった。

「ちよつと……いきなり何するんですか？」

「あはは、ごめんごめん。なんか特訓のこと思い出したらムカツイきて……」

どうやらティキにとってあの特訓はトラウマ以外の何者でもないようだ。

「じゃあ、さつそく行きましょうか」

そう言って、ルクスはティキを産物の師の元へと案内を始めた。ティキも月の産物の製造者には少し興味があったので、大人しく連れて行かれることにしたようだ。

——同時刻……ここは、遙か階下アンクレスト。

月のカケラの粒子が、自ら光り輝き渦巻く。それはこの世のものとは思えないくらい的美しさを秘め、そして静かに鼓動する。

ティキ達がサガルマータで動いている頃、アンクレストにて歴史上かつてないほどの大きな力が動いていた。そして、これから起こるこの出来事はティキ達の今後の運命を、大きく変える出来事となる。

Act 30：今、明かされる月の産物の秘密

「なんだよ、ここ。裏路地か？」

「彼女は、賑やかなのが嫌いなんですよ。でも本人はある意味結構賑やかな人間なんですけどね」

ティキはルクスに案内されるがまっついて行くと、少しばかり薄暗い裏路地へと着いた。少し表を見れば人通りがあるような場所ではあるのだが、ここから見える建物の入り口は全て陽の光が当たっていない。夜一人で歩くと、少し不安に襲われるような雰囲気だ。

「さあ、ここです」

ルクスがある家の前で止まる。そこは少し朽ちた感じの平屋の前だった。扉も一枚しかなく、窓もない。日当たりは最悪だろう。こんな所で本当に人なんか生活してるんだろうか。ティキは少しそう思った。そこにはタトウーシヨップ『アイシス』と書かれている。

「タトウーシヨップ？」

「さあ、行きますよ」

ルクスは強引にティキの手を引っ張り中へと入っていく。ティキは少しばかり抵抗したが、そのまま中へと入っていく。

中は思ったより物が置いてあり、ごちゃごちゃしている。というかティキのルティーが何もないだけでこれが普通なのかも知れない見渡すと、タトウーシヨップらしい彫ったタトウーの写真が飾ってあったり、彫るための道具と思われるものが置いてある。

「男二人で仲良く手を繋いでご来店とは、貴様ら少し気持ち悪いのお」

ティキとルクスはその声のほうを見る。店内は少し薄暗いため影は確認できるが、顔はまだはつきりと分らない。

「あ、アイシスさん。例の人連れてきましたよ」

「なんじゃ、ルクスカ。予定の時間より少し遅いではないか。貴様俺を待たすとは、偉くなったもんじゃのお」

その言葉を聞いていたティキがルクスに耳打ちをする。

「おい、ルクス。女じゃねえのか？ お前、『彼女』っていうからてつきり女だと思ってたじゃねえか」

アイシスと呼ばれた人は、少しずつ明るい場所へと出てきた。

「え？ はははっ。やだなあ、どこからどう見ても女性ですよ。そんなこと彼女に聞かれると殺されますよ」

「聞こえておるわ。貴様もナメた小僧じゃな」

アイシスは顔がはつきり見えるところまで出てくる。ティキはその姿をしつかり確認した。髪は黒色で髪の長さは、肩に少し掛かるくらい。シヨートというべきだろうか。顔は少し小麦色をした容姿端麗で、なかなかの美人だ。体系もモデルのようなスラッとした体系で、どこからどう見ても女だった。

「小僧、貴様がティキか」

「あ、ああ」

「ふん、なかなか良い顔付きをしておるわ」

そう言いながらアイシスはティキの目を真っ直ぐと見てくる。そして、しばらく見た後に軽く両方の口の端を上げると、ルクスの方を見る。

「ところでルクスよ。俺のここに来るのになにも用意してないってことはないじゃろなあ」

「ああ、大丈夫です。今日はちょっとした価値のあるものを持ってきましたよ」

「ほっ」

そう言うところルクスはリシュレシアを出る頃から持っていたカバンの中から、ある物を取り出す。アイシスはその全貌が徐々に明らかになるに連れて、顔が明るくなっていく。

「おおっ！ こ、これは！ 超レアもんじゃないか！」

ルクスがカバンから取り出したもの、それは……。リシュレシア国で生産され、限定僅か10体しかない。ブタのぬいぐるみであった。

「え？」

ルクスが取り出したものを見て、ティキは言葉を失った。あまりにも予想外のものが出てきたからだ。

「こ、これほんとにもらつていいのか!？」

「ええ、アイシスさんにあげるために持ってきたものですから」

人形を受け取ったアイシスは、嬉しそうに飛び跳ねている。まるで、子供だ。ものすごく無邪気に飛び跳ねている。

「ティキさん、驚きました？ 彼女、言葉遣いはあんな感じですが、実はものすごく少女趣味というか、可愛いものが好きなんです。前に彼女の部屋を見せて貰った時は驚きましたよ。なんせ、動物の人形とか、小さな子が持つてるような小物が一杯置いてあったんですよ。部屋の模様もファンシーですし……笑っちゃうでしょ？ 笑っちゃいましょう。はははっ」

ルクスの笑いにつられて、ティキも鼻で笑う。

「そこっ！ 笑うな！」

突然のアイシスの、大声にティキとルクスは笑うのをやめた。

「別に貴様らに俺の趣味を理解してもらおうとは思っておらん。貴様らがどう思おうが俺は可愛いものが好きじゃ」

ここに入る前にルクスが言っていたように本人はある意味結構賑やかな人間と言う言葉は、本当だったとティキは思つて、再び分からないように少し笑った。

「さあて、と。じゃあ本題に入ろうかの。小僧……いや、ティキ」

突然の名指しにティキは少し驚く。

「貴様の月の産物じゃが、まだ完成には少し時間がかかる。とは言つても今日中には出来るじやろう。良く聞け、完成した月の産物は今まで貴様が使っていた月の産物とは比べ物にならないほどの力を秘めている。それを扱うには、扱う者も相当な精神力がいる。なぜか分かるか？」

ティキは、沈黙したままアイシスのほうを見ている。

「では、俺が簡単に説明してやろう。月の産物は、二種類あるのじや。貴様らが持っている月の産物は『銀の月の産物』と呼ばれるモノじゃ。そして、もう一つが『紅の月の産物』……」

「紅の？」

ティキにはそれは初耳であつた。ティキは月の産物を持つてはいるが実の所、月の産物についてはあまりよく知らないのである。

「そう。それは月の産物の製造方法に起因する。なぜ月の産物の製造方法が国家機密扱いされるのか、それもここに理由がある。月の産物は月のカケラの、特性を利用して創られている。つまり、創るものの精神力が、心がそのまま反映されるのじゃ」

ティキも大方の予想はもちろんついていた。月の産物が人の心に反応するのは一般的にも知られていることだからである。ましてや、ティキは月の産物を扱うもの。今までも月の産物を自分の意思一つで、大きくしたり小さくしたりしていたのである。

さらに、アイシスは続ける。

「俺は正義だ悪だと言う気はないが、あえて使うとすれば悪の心を持ったものが月の産物を創れば相当なものを創れるはずじゃ。少なくとも俺達からすれば気分最悪なものな。だからこそ、月の産物を創るものは限られ、選ばれる。強靱な確かな精神力と心、さらに類まれな想像力を持つものだけが国に選ばれ月の産物を創ることを許される」

アイシスの説明は、ティキにとつても分かり易く、そして的を得ていた。あれほどの力を持つ月の産物が、仮に人を滅ぼすことだけに使われれば、人間なんて一瞬で消し飛んでしまつたろう。いや、元々月の産物は戦争を抑止するために、各国に一つずつ振り分けられている。それ以前にすでにそういうことも含め大きな力が働いている可能性すらある。

「そして、月の産物はその純度を高めることにより、パワーアップさせることが出来るのじゃ。純度を高めれば高めるほど月の産物は強くなる。そして、ある一定の基準値を超える純度を保つことによ

り紅の月の産物が出来る」

「それじゃあ、紅の月の産物のほうがいいんじゃないか？」

「……やはり小僧じゃの。考えが単純じゃ。先ほだから言っておるじゃろう。月の産物を扱うためには相当な精神力がいると。本来、月の産物は人間が扱うにはあまりにも不安定なモノなんじゃ。なぜなら、人間には雑念が多すぎる。月の産物の純度を高めると言う事は、それだけ人の心に反応しやすくなると言う事、雑念があるのがデIFOルトな人間には本来は扱えん代物なんじゃ」

「それじゃあ、雑念を抱かないように特訓するとか……なんて」

その言葉にアイシスは説明を止め、ルクスのほうを見る。

「おい、ルクス。この小僧、本当に大丈夫か？」

「あはは、ティキさんは気分屋ですからね。雑念を消すなんて無理ですよ。でもティキさんの力は僕が証明します」

アイシスは再びティキの顔を見ると、はぁーとため息をつく。そして再び話し始める。

「では聞くが貴様、人形になると言うのか？」

「え？」

アイシスの予想外の問いにティキは戸惑いを見せた。

Act 31：ディセルパス国……消滅！

ティキとルクスは月の産物の師と呼ばれる月の産物の製造者であるアイシスの所へと来ていた。そして、アイシスから月の産物についての説明を受けていた。

「どういうことだよ？」

ティキはアイシスの放った言葉を理解出来ず、困惑していた。

「先ほども言ったじやろう。雑念があるのが人間にとっての普通だと。雑念のない人間など人形と同じ、なんの面白みもない。人間は常にいろんなことを考え、悩み、決断し生きている。例えば戦闘中であろつと、常に戦いのことだけを考えている人間などおらん。それではただの戦闘人形じゃ」

ティキはアイシスの言葉が胸に突き刺さった。確かにそうだ。ティキ自身も今までの戦いの中で戦うことだけを考えてきたのではない。時には自分の目的のため、時には仲間のため、時には大切なもののため。何かしらの理由があり戦ってきたのだ。それらは常に頭の中にあり、忘れることはない。

「人間に雑念を消せと言っても無理な話じゃ。だからこそ俺等、産物の師がいるのじゃ。月の力ケラの純度を人の雑念には反応せず、意思だけに反応するギリギリ限界を見極め月の産物を創る。それが俺等、産物の師の仕事じゃ」

ティキは沈黙している。アイシスの言葉の全てが耳を通り抜けることなく、頭の中に留まっているのだ。

「俺が、最初に言ったことが理解できたじやろ。新しい月の産物は今まで以上に貴様の心に反応するぞ。それを扱うには貴様自身の心も強くなってはならん。貴様にはその意思があるか？」

ティキは顔を俯く。その行動を、ルクスもアイシスもジッと眺める。そして、ティキは身体一杯に空気を吸い込むと、それを大きく吐き出しながら言った。

「あるっ！！」

「ふん、威勢だけは一人前か。いいじゃろう。俺を信じる、今に貴様に世界最高の月の産物をプレゼントしてやろう。完成を楽しみにしている」

それを言い終わると、アイシスはティキ達に背を向け再び奥に入っ
ていこうとしたが、途中で止まりティキのほうを見る。

「そうそう、ひとつ言い忘れておった。これはルクスにも言えることだが、貴様等月の産物の意志に飲み込まれるんじゃないぞ」

その一言だけ言うと、アイシスは奥へと入っていった。ティキも、そしてルクスもアイシスのその言葉の意味はよく理解できていなかった。

「それで、ルクスはこれからどうするんだ？」

「ティキさんに合わせますよ。どうせまだ月の産物が出来るのに少し時間がかかるようですし、ティキさんは仕事が残ってるでしょう」
ティキはとりあえず外に出る。ルクスもそれに続いて外に出る。

「とりあえず、ルクスも俺の仕事手伝ってくれるんだろ？」

「はい」

「じゃあ、この写真で聞き込みしてくれよ。これがその行方不明の息子さんの写真なんだ」

そう言って、ティキはルクスに写真を渡す。

「じゃあ、俺はこっちで聞き込みするからルクスはそっちを頼む。1時間後にまたここに集合な」

ティキはそう言い終わると、裏路地から表へと出る。その瞬間、街の人々の叫び声が聞こえた。街の人々は口々に似たようなことを言っている。ルクスも異変に気がつき、表へと出てくる。

「バケモノだあ！！」

街の人間が発したその言葉が一番適当だろう。街の人々は、みな我先へとその場から逃げ出す。街は一瞬にして混乱する。そんな中、ティキとルクスは、人々が見ている方向を見る。それを見たティキ

とルクスは驚き、言葉を失う。そこには、絶対にあってはならない光景が広がっていた。

ティキ達のいる遙か先、リゾート地ディセルパス国……その上空にいるのは、巨大な体に灰色に少し紅色を帯び、翼の生えたまるで神話に登場するドラゴンのような姿をしたオームだった。

「オ、オーム……馬鹿な。なんで、こんな所に」

初めてオームが確認されてから数百年。今まで一度も、サガルマータにてオームの出現が確認された事例はない。サガルマータは月のカケラの粒子がなく、またオームは月のカケラの粒子がなければ現れることはない。だが今、数百年に及ぶその常識を覆し、オームはサガルマータに出現した。

当然、ティキ達もその光景には驚くばかりではあったが、アंकレストで何度もオームとの戦闘経験のあるティキはすぐに我を取り戻す。

「……！ ルクスっ！　すぐにアイシスに月の産物の完成を急ぐように言って来い！」

「え！？　でも、ティキさんはどうするんですか？」

「俺はなんとか奴を食い止めてみせる！」

「食い止める！？　食い止めるってどうするんですか？」

「このままだとディセルパス国が破壊されちまう。なんとか気を逸らしてみる」

「なんとかって、ティキさんは今、月の産物もないんですよ！」

「だから早くアイシスに言って来いってよ！！」

ルクスはティキの目を見ると、すぐにアイシスの元へと走った。ティキは自分のリバティーが置いてある場所まで走る。

その時、ティキやルクス、そして街の人々の耳に奇怪な音が入る。それは超音波のように聞こえるわけではないが、耳を押さえなければ立っていることすらままならないほどの奇怪な音。リバティーの元へと走っていたティキだが、その音に耐え切れず思わず足が崩れ

る。ルクスもまた同じ目にあっていた。

「くそ……なにをやがる」

ティキは耳を押さえながら、オームのほうを見る。

オームは口を大きく開けている。そして、口の周りにはまるで放物線を描くように赤い光が集中している。オームの顔が小刻みに揺れ、奇怪な音もだんだんと大きくなる。

——瞬間。

眩いほどの赤い閃光に包まれ、ティキはオームの姿を見失う。次にティキや街の人を襲ったのは、激しい爆風と衝撃であった。ティキはその突然の衝撃と爆風に耐えることが出来ず、身体ごと民家へと吹き飛ばされる。街の人々も同じように吹き飛ばされ、木も飛ばされ、家は破壊されていく。

凄まじい衝撃の後に残ったのは、大きく黒い噴煙であった。青い空にミスマツチに映し出される黒煙は、人々に何が起こったのか理解させるには十分だった。

ティキは崩れた家の瓦礫の中から這い出てくる。いろんな所を打ったように血も出ている。

「くそ、一体なにを……しやがった」

ティキはそれを確認するために閃光によって見失う前にオームがいた所に目をやる。そこにはオームが平然と空に翼を羽ばたかせながら飛んでいた。だが、ティキはすぐに黒煙に目が行く。そして、その黒煙の出所に目をやる。

「な……」

言葉に出来ない衝撃だった。ティキもこんなことを見るのははじめてだった。

——そこに確かに先ほどまであったはずのディセルパス国が、サガルマータの土台のみを残し、跡形もなく消し飛んでいたのだ。

Act 32：天空の戦い

突如、サガルマータに現れた巨大オーム。そして、突如放たれた閃光。その直後に訪れた凄まじい衝撃。それら全てがこの世界の誰にとつてもはじめてのことであり、今後歴史に残る出来事であることは否めなかった。

ティキは吹き飛ばされたものの幸い、家の瓦礫がクッションの役目を果たしたため大事に至ることは無かった。

「くそ、くそ……」

ティキは再びリバティーの元へと走る。

「おい、なんだ今の衝撃は……!」

突然店から飛び出してきたのはアイシスだった。アイシスは目の前に倒れているルクスに気がつく。どうやら先ほどの衝撃で吹き飛ばされたようだ。

「おい、大丈夫か!？」

「よかった、アイシスさん無事だったんですね。大変です。オームがサガルマータに……」

「オームが？」

アイシスは、すぐにソレに気がついた。そのオームはあまりにも巨大であり空に浮いている為、裏路地に位置するこの場所からでも容易に確認出来たのだ。

「小僧……ティキは!？」

「ティキさんは、あのオームを食い止めに行きました。僕もすぐに向かいます」

「馬鹿な、奴は月の産物を持っておらんではないか」

アイシスは一瞬、考え込んだがすぐに思い立つ。

「月の産物を早急に完成させる! ルクス、貴様は急いでティキの援護に行け!」

そう言うと、アイシスはすぐに店の中へと入っていった。ルクス

は体制を立て直すと、すぐにリバティーのある場所まで走って行った。

一方で、ティキはリバティーを置いてある場所にたどり着いていた。先ほどの攻撃で、リバティーもやられている可能性はあったが、幸い横転しているだけで動かすことはできた。横転しているリバティーを立て直すとすぐにリバティーにまたがり、エンジンをかけ、すぐにスロットルを全開にした。二つの噴出口から凄まじい勢いで煙が噴出し、その推力でリバティーは一気に空へと駆け上がった。

オームは破壊したディセルパス国の上空で翼を羽ばたかせ静止している。どうやら先ほどの攻撃はオームにとっても多少なりと負担となるようだ。それもそのはず、あれほどの威力の攻撃を放ちなんの負担もなければ、反則技に近い。

ティキはリバティーを全速力で走らせ、オームに近づいていく。ティキは今までそんな余裕もなかったので、気が付かなかったが、近くで見るとそのオームの巨大さがよく分かる。いつもティキがアングレストで相手をしていたオームの軽く5、6倍はあろうと言う大きさだ。ティキ自身もここまで巨大なオームを見るのは始めてだった。加えて今、ティキは月の産物を持っていない。そんなティキに出来ることは最初から決まっていた。ティキに出来る唯一のことそれは、オームの意識を自分に向けさせ、一刻も早くアングレストへと引き込むほかなかった。

なんらかの方法でオームの気を引くことが出来れば、オームは自分を追ってアングレストへと向かうかも知れない。そして、ティキのリバティーには幸いにも5つほど発火弾が積んであった。こんな小さな発火弾、しかも元来、人に危害を加える用でもない。人に使った所で、多少驚く程度だ。それをこんな巨大なオームに使った所で気が付きもしない可能性もある。

だが、今のティキにはコレを使う以外の方法はなかった。ティキは発火弾を片手に持ち用意すると、片手で起用にリバティーを操作して、オームに出来るだけ近づこうとする。オームは巨大さ故に、

リーチが長い、加えてさつき放った攻撃もある。下手に懷に潜り込めば、危険だ。

リバティーの旋回性能をフルに使い、オームの足元付近から背中
の横スレスレを通り、顔の近くで発火弾を投げる。これが一番、確
実にオームに近づける方法かも知れない。そう思ったティキはリバ
ティーを操作し、オームの足元を目指す。

オームの足元にうまく潜り込んだティキはそのままリバティーを
上空に向け、オームの背中スレスレを飛んでいく。さすがにこれだ
け巨大だと足元から顔までも少し距離があるが、あと少しで顔に着
く。ティキが発火弾を投げる準備をし腕を上げた瞬間、オームがテ
ィキの方に身体ごと向く。背中スレスレを飛んでいたティキは、そ
のオームの行動を回避することが出来ず、リバティーとオームの翼
が接触した。接触したリバティーは接触部から火花を放つと、ティ
キを乗せたまま反転する。

ティキは、仰向けになりながらもオームの位置からは目は放さな
かったが、発火弾を投げる準備をしていたことに気が付き、瞬時に
発火弾を投げる。だが、発火弾を投げるのが少し遅れたため、発火
弾はティキの目の前でクルミが割れたような音を発しながら全てが
弾け飛び、小さな炎を灯しながら粉々に砕け散る。ティキは、とつ
さに両腕で顔を守ったが、オームと接触したリバティーはティキご
とそのまま地上に落ちていく。

「く……そ」

ティキは体勢を立て直すと、リバティーのハンドルを握りリバテ
ィーの体勢をも立て直す。リバティーと共に体勢を立て直したティ
キは上空にいるオームを見る。オームは平然と優雅に上空を飛行し
ている。すると、小さなオレンジ色の光がオームの口元に集まって
いく。さっきの時のように奇怪な音はないが、ティキは不安を感じ
ていた。

オームは、突如口からその小さな光を破壊したディセルパス国へ
と向けて放ち始めた。何発も何発も……それは放たれる。威力はそ

れほど大きくはないが、破壊された建物がさらに破壊され、このままではいずれ土台ごと破壊されてしまうだろう。

そして、その内の一発がたまたまオームの下にいたティキ目掛けて放たれる。ティキは、急いでリバティーを操作して離れようとするが、オームと接触した時に受けた傷の影響なのか、リバティーは言うことを聞かず、動くことはなかった。

だが、オームの放った一撃は確実にティキの元へと向かってくる。ティキは一瞬迷ったが、リバティーを乗り捨て遙か上空から空中へと回避することにより、オームの一撃を避けることが出来た。リバティーはオームの放った光と共に、サガルマータまで落とされ爆発した。空中でそれを見ていたティキだが、このままでは自分もサガルマータに叩き付けられてしまう。なにも出来ずに終わることにティキは悔しがった。目の前にいるオームにたった一発もダメージを与えることも出来ず、ディセルパス国は破壊され、リバティーも破壊され、自分も地面に落ちて死ぬ。

ティキは、決してオームから目を離すことなく地面へと落ちていく。

すると、ティキの目の前をなにかが通り過ぎた。その瞬間ティキの身体は浮遊感に満たさせる。

「え？」

「ふう、セーフ。大丈夫？ ティキ」

それはリバティーに乗ったリディアだった。リディアはティキを助けるとそのまま、オームの周りを旋回しながら飛ぶ。

「リディア？　なんでこんな所に？」

「ティキに緊急の用事があったんだけど、プレシデントさんに聞いたらルクスと一緒にイルマシア国に行っちゃって聞いたからすぐに追ってきたの」

「用事？」

「うん、でもどうやら今はそれどころじゃないみたいね。どういった状況でこんなことになってるのか分かんないけど、普通じゃない

事態が起きてることは分かるよ。どうやら周りを見渡す限り、さっきの凄い音も噴煙もアイツの仕業みたいね」

ティキとリディアはオームの姿を確認する。

「リディア、なんとかアイツを引き付けてくれ」

「え？」

「ディセルパス国を破壊したあのオームが次に破壊するとすれば、隣国のイルマシア国だ。奴の気がイルマシア国へと向かないうちにこっちに注意を引き、そのままアンクレストまで逃げる。そしてアンクレストで奴を仕留める」

「仕留めるってなにか方法はあるの？」

ティキは何も答えない。月の産物を持たないティキが、現状あのオームに勝つ術などありはしない。それは先の戦闘でも十分実証済みだ。だが、このまま放っておけばイルマシア国が破壊されるのも時間の問題だ。

「ティキさーん！」

その時、遥か後方からティキを呼ぶ声がした。それはルクスだった。ルクスも自分のリバティーに乗り、ティキ達の援護にやってきたのだ。

「あれ？ リディアさん？　なんでこんな所に？」

「ルクス、説明は後だ。それより聞いてくれ。あのオームをなんとかアンクレストに引っ張りたい、ルクスはオームの後方から、リディアには正面から近づいてもらう」

「正面から？」

「ああ、俺のリバティーはオームに破壊された。だからリディアのリバティーを俺が操縦するから、リディアとルクスは二人でなんとか奴の気を引いてくれ。とにかく攻撃するしかない。奴がこっちに気を取られるまで」

「今は、それしかないみたいですね。行きましょう」

ルクスは先陣を切ってオームの後方に飛び出した。

「ティキ、あなたの月の産物は？」

「今はまだない。今は完成を急いでもらってるはずだ」

ティキとリディアは目が合う。

「じゃあ、操縦は頼んだわよ。あたしの命アンタに預けるからね」

「ああ」

ティキはリバティを吹かすと、オームの方へと飛ぶ。

オームは、後方から来るルクスと正面から来るティキ達との間を優雅に飛翔している。

A c t 3 3 : 進化した月の産物

ティキとリディア、ルクス。そして巨大なオーム。彼らの空を舞台とした戦いが今まさに激戦を繰り広げようとしていた。

先陣を切って飛び出したルクスはティキ達よりも先にオームの元へとたどり着く。オームを攻撃の射程へと捕らえたルクスは、オームへ月の産物である”リーゼ”の攻撃を浴びせる。リーゼは、ルクスの片足に着けている月の産物で、全力で蹴ればその破壊力は小型ミサイルの一発にも相当する。

ルクスの蹴りはリバティーの速度と重なり、相当重くなっていた。それは、オームの後頭部を直撃した。ルクスはそのままオームの正面に出る。オームの方を見ると、まるで効いていないようだった。単に鈍いだけの可能性もあるが、それはすぐに否定された。ルクスは、オームと目が合う。

そう、ルクスの攻撃はオームに多少なりとダメージを与えたのだ。そして、オームはルクスを標的と捕らえた。ルクスはオームと目が合った瞬間、それを察知した。

その瞬間、ルクスはリバティーを方向転換し、アンクレストへと一直線に降下する。オームもルクスの後を追いつ、アンクレストへと向かう。

正面からその光景を見ていたティキ達はルクスが作戦を成功し、アンクレストに向かっていると見て、自分達もオーム後を追うような形で、アンクレストへと向かう。

その時、オームの口元に再び光が集中する。今度の光は青い光だった。それに気が付いたティキはルクスに向かって精一杯叫ぶ。

「ルクス！！ オームの攻撃だ！ 避けるーっ！！」

その声が届いたのかルクスは後ろを振り向く。オームはルクスの方へと飛びながら、口に集中していた青い光を放った。それは、今まで見たどの攻撃よりもスピードが速かった。それは明らかにリバ

ティーよりも早いスピードだった。

ルクスはその光を避けるために、リバティーを旋回させる。旋回したりバティーは青い光の横を飛んでいく。青い光はそのままアンクレストへと飛んでいくかと思われたが、そうではなかった。青い光は方向を変え、再びルクスの方へと飛んでいく。それに気が付いたルクスは旋回を繰り返しながら、なんとか回避をしようとするが、青い光はどこまでも追跡する。

ルクスは青い光に気を取られ気が付くのが遅れた。ルクスの目の前にはオームによって破壊された建物の残骸が立ちはだかる。紙一重でそれをなんとか避けたルクスは、建物の横をスレスレで飛ぶ。ルクスを追いかけていた青い光は、建物の残骸を避けることは叶わず、ぶつかると爆発を起こして消滅した。

一方、間一髪で建物の残骸を避けたルクスだが、急激な旋回に耐え切れなかったのか、その後リバティーは操縦を受け付けず、地面へと吸い込まれるように墜落した。

「ルクスっ!!」

それをオームの後方から見ていたティキは叫ぶ。

「くそっ。アイツ一体何種類の攻撃を持ってやがる」

ルクスを追うのをやめたオームは再び破壊したディセルパス国の上空へと舞い戻る。

だが、ルクスはまだやられてはいなかった。怪我をしてはいるものの、瓦礫の中から這い上がると、リバティーを建て直し再び飛び立とうとする。その時ルクスと呼ぶ声が聞こえて、ルクスはその方向を見る。そこは、ディセルパス国とイルマシア国を繋ぐ橋の先端そこに立っていたのは、アイシスだった。

一方、空を舞っていたオームだが、偶然にもティキ達の存在に気が付き、ティキ達のほうを見る。幸か不幸かティキ達は動かずに、ティキ達がやるうとした作戦を達成できる準備を整えた。だが、ひとつ言うなら先手を取ったのは間違いなくオームであったことに疑いようはない。

ティキ達の存在を確認したオームは大きな翼を広げ、上空から滑空するようにもの凄いスピードでティキ達の元へと迫る。それに気が付いていたティキ達はすぐにアンクレストへとリバティーを進めようとしたが、先手を取られた痛手からか一步間に合わず、このままでは確実にオームに捕らえられてしまう確信があった。

そのためティキはアンクレストへと向かわず、リバティーの操縦をリディアに託すと、リバティーの上に立った。

「ティキっ！ なにを……」

「ふん、殺れるもんなら殺ってみやがれオーム！！ 俺は引かねえぞ！」

オームは、ティキの言葉など理解していないだろう。ただ邪魔者を排除する、ただそれだけのためにティキに襲い掛かる。そして、オームの攻撃がティキを捕らえる射程内に入った瞬間、オームとティキの間を何かが通る。だが、オームは攻撃を止めない。そのままの勢いでティキに鋭い爪を立て襲い掛かる。

——その瞬間。この場合は銀色の光に包まれた。

そして、次の瞬間オームは自身が破壊したディセルパス国へと叩きつけられていた。オームが叩きつけられた後からは砂埃が舞い上がる。その砂埃の先端に広がる青い空、白い機体リバティー、そして眩い銀色の光を放つティキの持つ——月の産物。

「……っ」

ティキは驚きのあまり声が出ない。今オームの攻撃の瞬間、ティキとオームの間を通ったのはルクスが投げたティキの新しい月の産物だったのだ。その月の産物は眩いまでの銀色の光を放っている。それは静かだが、力強さを内に秘め、そして圧倒的な威圧感を持っていた。月の産物を手にしているティキにはそれがはっきりと分かった。

「これが、新しい月の産物……」

ティキは月の産物の美しい銀色の光に目を奪われていた。月の産物はティキの眩きに反応するように呼応し、その輝きを増す。そし

て、ティキは心の中になにかを確信する。

「リディア、俺を信じれるか？」

「え？」

「オームを倒す。少し無茶するけど協力してほしい」

「……無茶するのはいつものことでしょ。それに、あたしは言っただけよ。あたしの命はアンタに預けるからアンタがしっかりあたしを守っててね。それは信頼の証にならない？」

「そうだな。じゃあ、今から俺が言うことをしっかり聞いてくれ」

ティキに月の産物を投げたルクスは、近くまで来ていたアイシスを守るためにアイシスの近くで待機していた。

「あれが、ティキさんの新しい月の産物ですか」

「ああ、持ち主が手にすることでより輝きを増したようだな」

ルクス達がいるのは橋の近くなのだが、そこからでも十分に月の産物の輝きを確認できる。アイシスはその月の産物の輝きを見ながら、少し疑問を抱える。アイシスの顔を見たルクスはアイシスに尋ねる。

「どうしたんですか？」

「……いや、なんでもない」

アイシスは、心の中に疑問を閉まった。今、その疑問を投げかけたところでどうにもならない。それよりも大事なのは、月の産物の力をティキが十二分に引き出し、オームを倒すことが出来るかどうかである。

ルクスとアイシスはティキ達に注目する。

一方、ティキの月の産物に弾かれたオームは、瓦礫の中から這い出てくると、再び大きな翼を羽ばたかせると、宙に浮く。そして、ティキ達の姿を確認すると、大きな雄たけびを上げる。それは、隣国であるイルマシア国はもとより、それ以外の近隣の国々にまで聞こえるのではないかと思うほどの雄たけびであった。

「ちっ、うるせーな。リディア準備はいいか？」

「オツケーよ。それにしてもほんつとに無茶させるわね。分かっているの？ チャンスは一度きり、失敗したらあたし達は死ぬんだからね」

「死なねえよ。俺はこいつを信じてる。手にすると分かるんだ。こいつの物凄い力が……」

「だったら、全開で行くわよ」

「おしっ！ 行くか！」

ティキとりディアはオームの方へと向き直し、体勢を整える。またオームも攻撃の態勢を整える。

Act 34：戦士の雄叫び

ルクスとアイシスは、橋よりも少しイルマシア国側へと移動する。
「おい、ルクス。アイツ等何をする気だ？ 何か作戦でもあるのか？」

「分かりません。でもティキさんが作戦なんて似合わないことするとも思えませんし、何か危険な気がするんです。だからもう少し離れていたほうがいいと思います」

ルクス達の場所からは、オームの姿もティキ達の姿も良く確認出来る。ルクス達はティキとリディアが何やら話し合ってるのを見て、この場を少し離れることにしたのだ。

一方ティキは新しい月の産物を手に持ち、オームの方に構える。

ティキ達の遙か前方、真正面にオームはいる。

「リディア、いつでもいいぞ。全開で飛ばせ」

「オツケー、じゃあ行くわよ」

そう言うとりディアはリバティーのスロットルを思いっきり回す。スロットルが全開となったりリバティーの出力は瞬時に最大となり、その出力より生み出されるエネルギーは推進力となってエンジンのタービンを回す。廃棄された熱は排気道を伝い、リバティーの両脇に付けられたマフラーより排出される。それら一連の動作を持ってリバティーは人間には到達不可能な速度まで急加速する。

加速したりリバティーは、風を切り、空気を避け一直線にオームのいる場所へと突進する。それを見ていたアイシスは驚いた。

「アイツ等、ただ単に正面から突っ込んでるだけじゃないか！ 馬鹿にも程があるぞ！」

「僕は、たぶんそんなことだろうと思ってましたけどね」

ルクスが横からポツリと言う。

ティキ達の正面にいるオームもただ黙ってティキ達が突っ込んで

くるのを見てはいない。口元に青い光を集中し始めると、それを向かってくるティキ達に向かつて放つ。青い光は二つに分裂し、ティキ達の方へと向かう。

「リディア、来たぞ」

「分かつてるわよ。アンタは黙って集中してなさい」

リディアは向かつてくる青い光を視界で捉えると、青い光の軌道を読みきり、リバティーを器用に回転させ、旋回させながら避ける。元々の加速に旋回の重力が加わり、ティキにもリディアにも負担が掛かるがそれでもリディアは止まらない。

だが、リディアに避けられた青い光は方向を変えると再びリディア達の元へと向かつてくる。リディアは青い光に背後を取られたのだ。ルクスの時に証明されていたが、青い光は追尾する能力を有している。リディアもそれは承知済みのはずであった。

青い光に追いつかれまいとリディアはリバティーの加速を緩めないう。オームはそれを見て再び口元に光を集中する。今度のはティキのリバティーを破壊したオレンジ色の光だ。オレンジ色の光は追尾能力こそないが、青い光よりも威力が大きくまた直線の加速は早い。オームはオレンジ色の光を放つ。それは正面にいるリディア達の元へと一直線に向かう。リディアは後ろから来る青い光と前から来るオレンジ色の光に挟まれた。だが、それでもリディアは加速を緩めない。リバティーの加速とオレンジ色の光の加速、二つの距離が縮まる距離は相対的に加速される。

オレンジ色の光を目の前にした瞬間、紙一重という距離でリディアはリバティーを急激に上昇させる。上昇され目標を失ったオレンジ色の光は必然的に、リディア達を追ってきていた青い光とぶつかり激しい爆発を引き起こした。

なんとか二つの攻撃を避けきったリディアは、ある位置まで上昇すると今度はリバティーを逆さに向け、落ちるように加速しオームの方へと向かう。その加速は重力の助けもありリバティーの限界速度を遥かに超えていた。この速度では方向転換などではしない。

全ては目の前にいるオームを倒すため、リディアは恐れることなく全てをティキに託す。

二つの攻撃を避けられたオームは、翼を一度大きく羽ばたかせる。そして、翼の方向を一定に固定すると、リディア達の方を向く。そして、口を大きく開け光を集中する。オームが口に集中している光は赤い光だった。デyselパス国を一撃で破壊した最大威力の攻撃。人間なんかがまともに食らえば影も残ることはないだろう。だが、ティキ達は臆することなく向かう。

オームは、口元に赤く大きな光を集中し続ける。ティキ達がついにオームを射程内に捕らえる。しかし目の前には赤い光が集中され今にも解き放たれようとしていた。

ティキは加速したリバティーの上で剣を構えると、力いっぱい握り締めた。

「オーム！ これで終わりだっ！！」

銀色の光を放ちながら大きく肥大した月の産物は、オームの放とうとした赤い光を捉える。その瞬間、辺りに衝撃波が起こる。ティキの持つ月の産物とオームの赤い光のエネルギーが巻き起こした凄まじい威力。

「ぐ……う……んんんっ！」

リバティーの加速と、星の重力そして新しい月の産物の力が加わった攻撃をオームは耐えしのいだ。だがティキも負けてはいない。まだオームは赤い光を口元に集中したままだ。

「しっけえええ！」

その光景を見ていたルクスは思わず口から言葉がこぼれる。

「まずい、あのままでは……」

「ああ、あそこであの光が開放されればティキは粉々だろうな。ここにいる俺達もな」

「……！ ティキさん」

まだティキ達の攻撃を耐え忍んでるオームは底力を見せ始める。

それは人間とオームの元々の地力の違いだろうか。そのパワーでティキを押しつけ始める。ティキは少し押されながらも決して攻撃を止めようと思わない。歯を食いしばり、必死になって踏ん張る。

ティキは赤い光を目の前にし、死ぬかも知れない状況の中で無意識に感じる事が出来た。それは月の産物の意志とでも言うのだろうか。それとも人の心と呼応する月の力ケラの性質がそうさせたのだろうか。ティキはその耳にやさしい声を聞いた。

その瞬間ティキに力が戻る。そして、ティキはオームの背丈ほどある巨大な月の産物を一点に集中し始める。銀色の光はより強く強く輝く。

「うおおおおおおおおお！！」

ティキの雄たけびにも似た叫びが、きつかけとなったのかその瞬間、オームの赤い光を突きぬけ、その先にいるオームの頭部にティキの一撃が放たれる。

激しい衝撃と爆音を放ちながらティキ達はオームを突き抜けオームの背後に出る。オームが放とうとした赤い光はその輝きを失い消滅し、オーム自身も頭ごと吹き飛ばされ、司令塔を失った身体は大きな翼を羽ばたかせることなく、そのまま地面へと落ちていく。

リディアはリバティーを制御しようとしていたが、その凄まじい威力に耐えられなかったのか制御を失い二人は地面へと激突した。だが、幸いにも瓦礫がクッションとなり大事には至らなかった。オームの身体もサガルマータへと激突し、完全にその動きを停止した。「ティキさん！！」

離れた位置でその光景を見ていたルクスとアイシスがすぐにティキの元へと駆け寄っていく。ルクス達の遙か先で瓦礫の一部が動く。瓦礫の中から出てきたのはリディアを肩に抱えたティキだった。

ティキは地面へと激突したオームの方を見る。完全に息は上がっていて、すでにフラフラだ。それでもオームの方を凝視し、ティキは大きく息を吸い込む。

「……っ！！　っつ勝ったぞおおおお！！」

ティキはガッツポーズと共に再び倒れて、意識を失った。
「ティキさん。大丈夫ですか！ ティキさん！」

一方、頭部を破壊されサガルマータに激突したオームの身体は、小さな月のカケラの粒子へと変化していき風に流されて方々に散っていった。太陽の光に当てられて月のカケラの粒子はキラキラと輝いていた。

Act 35：仕組まれた事

——そこは黒い世界。

周りには何もなくて、ただ闇が支配する世界。そこに立つ一人の男、
ティキ。

「ここは、なんだ？」

ティキは辺りを見渡すが、無いも見えない。しかし、ティキは背後になにか温かいものを感じ、後ろを振り返る。そこには、銀色の光があつた。ティキはまるでその光に誘われるかのように手を伸ばす。ティキの手が光に触れたときティキの耳に声が届いた。

その声はやさしく、そして温かい。まるで母親のような存在だった。ティキはその声を頭ではなく身体で心で感じていた。光は徐々に大きくなりティキを包み込む。すると、今度はティキの耳にティキを呼ぶ声が聞こえた。ティキはその声に従い、意識を覚醒する。
「ティキさん！ 良かった。アイシスさん、ティキさんが目を覚ましたよ」

ティキは、まだ少し頭がボーっとしていた。そして、頭の中で状況を整理する。そして、何かに気が付いたのか急に身体を起こす。その瞬間ティキの身体に痛みと言う名の電気が走り、ティキは思わず身体をうずめる。

「ぐっ……、ルクス。オームは！？」

「ティキさん、水です。飲んで落ち着いてください。オームは倒しましたよ。ティキさんが倒したんです」

そう言つてルクスはティキに水を渡す。

「俺が？」

ティキは辺りを見渡す。辺りを見回して今自分がいる状況がようやく理解できた。ティキは身体の怪我をしている所を治療されていて、包帯等が巻かれている。そして、見覚えの無いベッドで寝かされていたのだ。周りにはルクスにアイシスがいる。そして、見知ら

ぬ男が一人いる。

そして、ティキはオームを倒した時のことを頭の中で必死に思い出そうとしていた。頭の中でうつすらだがその記憶が蘇ってきたティキはルクスに尋ねる。

「ルクス、リディアは？」

「彼女なら無事です、よ、たぶん……トイレです」

「……街は……ディセルパス国はどうなった？」

「今、ディセルパス国にて生存者の救出作業が行われています。今の状況は分かりませんが、昨日の話では生存者は数百人はいるそうです」

「…… たった、数百人」

ティキはその被害の大きさをその言葉だけで認識することが出来た。ディセルパス国の人口数などティキは知る由もないが、各サガルマータにて国と認識されるためには最低人数というものがある。

ティキはその人数がどれくらいかは知っていた。生存者の数はその人数を遥かに下回る。単純な計算だ。

「くそっ！ また守れなかったっ！」

ティキは歯を食いしばる。その様子を見ていたルクスがティキに言う。

「ティキさん、確かに被害は尋常じゃありません。でもティキさんに責任はない。むしろティキさんは勇敢に戦い、そしてオームを倒した。ティキさんが倒せなければ被害はもっと酷かったかも知れません。冷たいようですが、これだけで済んで良かったと思うべきです。それだけあのオームの力は巨大だった」

ティキは何も言わずに俯いている。手に持った水は少しも減ってはいない。

「ティキさん目が覚めたばかりで悪いですが、ティキさんに会ってほしい人がいます」

ティキは顔を上げルクスの方を見る。その時、部屋に誰かが入ってきた。それはリディアだった。リディアは部屋に入るなり起き上

がつているティキを発見し、ティキの元に駆け寄る。

「ティキ！ 良かった、目が覚めたんだ」

リディアはティキの手を握りながら言う。突然のリディアの行動にティキは驚き少し顔は赤くする。

「……ああ、リディアも無事でよかった」

「本当に心配したんだよ。ティキ一日半も眠ったままだったから、このまま起きないんじゃないかって」

「一日半……そんなに眠ってたのか」

「そうだ。ティキに会いたって人が……」

「リディアさん、今からその話をしようとしていたところです」

ルクスがタイミングを見計らって話しに入ってくる。

「ティキさん、彼がそうです」

ルクスが手を向けた先には、先ほどから部屋にいた見知らぬ男が立っていた。黒い帽子をかぶり、サングラスをかけている。服装はスーツで、パツと見ると少し怪しい感じた。

「ティキさん。はじめましてマイク・ヘレイムと言います」

ティキは男の名前に少し聞き覚えがあった。ヘレイムという名前が気になっていたのだ。どこかで聞いたようなそんな微かな記憶。ティキは必死に頭を回転させ、思い出そうとするが思い出せない。そこにルクスが割り込む。

「ティキさん、彼がティキさんの依頼の目的です」

その言葉にティキはハツとした。

「そうだ！ ヘレイムさんの依頼。ヴィマーナ墜落事故で行方不明になった息子の搜索。アンタがその息子か」

「ええ、そうです」

男は笑顔で答える。

「ん？ でもなんで依頼の目的が自らここに？」

そのティキの問いに後ろでやり取りを見ていたアイシスが答える。

「その男、今回の件のことについて知っているそうだ」

「今回の件？」

「ええ、ティキさん。驚かないで聞いてください。僕は、ヴィマーナ墜落事件の真相、そして、今回の巨大オーム出現の真相を知っています」

その言葉にティキは驚く。周りのみんなは既に話を聞いているように特に反応はしていない。

「どういう……ことだ？」

「僕はある調査でこの国に来ていました。それを調べられると言う事は彼等にとっては都合の悪いものです。ですが、それは人類に脅威をもたらすもの。誰かが真実を追究しなければなりません。僕はその脅威を知ったが為に彼等に殺されかけました。だから僕が乗っているはずのヴィマーナを墜落させて、全てを無に返そうとしたんです」

ティキはようやく、手に持っている水を口へと運ぶ。マイクは話を続ける。

「ティキさんは今から一月ほど前に、各国の主要施設が潰された件を知っていますか？」

ティキはそんな事件のことなどまったく知りもせず、ルクスのほうを見る。ルクスはティキの目線に気が付き話始める。

「一ヶ月ほど前、リシユアレス国の同盟国の内のいくつかの国で、政府主要施設及び高官の自宅が何者かに襲撃され破壊されるという事件がありました。各国の代表者である総師は会合を開き、それを阻止するためにある男を送り込みました」

「ある男？」

ルクスはティキを見ながら話を続ける。

「ティキさん、あなたなら良くご存知のはずです。あなたのかつての”戦友”である。リクさんです」

ルクスの口から出た名前にティキは驚く。それもそのはずである。ティキにとってリクは今でも親友であり、大切な仲間である。そのリクが国に利用された。それだけでも驚き、思考が回らなくなる。だが、リクの名前を聞いたティキはマイクやルクスから話を聞かず

とも真相に近づくことができた。

「……星の導き」

ティキの言葉にマイクは驚く。こちらから話さずとも真相を見抜いたからである。ティキはリクの性格を良く知っている。もちろん星の導きに対する恨みの深さも。それ故にリクが絡んでいる、それはイコール星の導きが絡んでいるということに繋がる。リクは自分の目的の為なら、利用されることも厭わないだろう。

「今回のオームも星の導きが絡んでるのか？」

「ええ、今回の事件は彼等の実験です。僕はそれを突き止めた為に殺されかけたんです」

「……実験？」

ティキはマイクを見る。

「彼等の実験は今から、12年前に始まりました。全ての始まりは、あなたが経験した”悲劇の第九候補生事件”。あの事件で国の施設を襲撃した二人は実験の成果を見るモルモットだった。そしてあなた達は実験の良いデーターを取るための力モだった」

その言葉にティキは水を放り投げ、開いた手でマイクのスーツの胸元に掴み掛かる。

「カモだと！ お前はあの事件でなにがあつたかしらねえからそんなことが言えるんだ！」

「知っています。調べました。あの事件での生存者は二人だけ、ティキさんあなたと、そしてリクさんだけです」

「俺が言ってるのはそんなことじゃねえ！ あの事件でどれだけの悲しみが、どれだけの憎しみがどれだけの血が流れたかお前はしらねえって言うてんだ！」

ティキはベッドから起き上がると、マイクをそのまま壁まで押しのける。マイクの帽子はその衝撃で転げ落ちる。それを見ていたりディアとルクスがティキを止めに入る。

「ティキやめて！ あなたはまだ安静にしとかないと」

ティキは息が上がっている。そしてゆっくりとマイクの胸元から

手を離す。

「……すまねえ。悪かった。つい……」

「いえ、僕も言い方が悪かったです」

マイクは落ちた帽子を拾い上げると再び被り話を続ける。

Act 36：謎の生物誕生

ティキ達は、ジャーナリストであるマイクという男から話を聞いていた。マイクは今回の事件の真相を知っているようだった。

「とにかく、星の導きは実験を行っていました。おそらく今回のオームはその実験の副産物です」

「実験ってなんなんだ？」

ティキがマイクに聞く。マイクは唾を飲み込みそして話す。

「……人間と月のカケラの融合です」

「人間と月のカケラの……融合だと？」

ティキはその言葉に驚く。当然だ。ティキはそんなことは今まで一度も想像すらしたことがなかったのだから。

「そもそも、そんなことが可能なのか？」

「それは専門家に聞いたほうが分かりやすいと思いますよ」

そう言うと、マイクはアイシスのほうを見る。ティキもマイクにつられアイシスの方を見る。アイシスは二人の視線に気が付くと話を始める。

「理論上は……可能だ。事実、融合とは言わんと思うが、月のカケラをタトゥーとして体内に埋め込むことは出来る。俺はその技術があるし、それをやっている奴もいる。だが、貴様の言う融合とはそういうことではないだろう」

マイクは頷くとティキの方を見る。

「ええ、僕が言う融合とは”細胞レベルでの融合”。それはすなわち人と月のカケラが一個となると言うこと」

「そんなことを星の導きはやろうとしてるのか」

ティキは俯きながら言う。

「そうです。第九候補生を襲った二人は、その実験のプロトタイプです。そして、長い年月を経て彼等はそれを実戦のものとして扱えるレベルにまで達した。そして、遂に彼等の襲撃は始まった」

「それが、主要施設への攻撃か」
ティキがつぶやく。

「おそらく今回のオームも、彼等の実験の一部。僕はこの国の階下のアंकレストにオームの研究をしている星の導きのアジトがあることを突き止めています。ですから、アंकレストで発生したオームが彼等に操られ、サガルマータまでやってきたという推測が成り立ちます」

ティキはマイクのほうを見る。

「星の導きの目的はなんなんだ？」

「確実な証拠はありませんが……状況的に判断して戦争を起こそうとしているとしか思えません。あくまで憶測に過ぎませんが……」
「戦争を……か」

ティキは今度はルクスの方を見る。

「ルクス、悪いけどこの人を家まで護衛してやってくれねえか。今なら、ルクス一人でも大丈夫だろ」

「分かりました。僕も報告でリシュレシア国へと帰還しなければなりませんし」

「じゃあ、悪いけどさっそく行ってくれ。早いほうが都合がいいからな」

ティキは、マイクを送り届けるなら今しかないという判断をしていた。それは、マイクが死んでいるという判断を星の導きがしている可能性が最も高いと言えるからである。時間が経ち、偽装工作が知れば再び狙われる可能性もあるのだから。

ルクスとマイクは、準備のために部屋を出て行った。

「さて、リディア。緊急の用事ってなんなんだ？」

オームとの交戦中に、リディアが言っていた緊急の用事というのを覚えていたティキは、リディアに話を切り替えて話を聞く。

「うん、でもティキは今怪我で動けない状態だしなあ」

リディアはティキの状態を見て悩んでいるようだ。

「こんな程度の怪我はなんともないさ。後一日も寝てれば治る」

そう言つと、ティキは腕をブンブンと回して自分が元気であることを印象付ける。

「まあ、話すくらいならいいかな」

それを見たリディアは話することを決めた。

「ティキは”ソーマ”って聞いたことある？」

「ソーマ？」

それを後ろから見ていたアイシスが話に入ってくる。

「聞いたことあるぞ。確か”麻薬”だな」

リディアは頷き、続きを話す。

「うん、ソーマは月のカケラの粒子を含んだ麻薬なの」

「月のカケラの粒子を？ おい、それって」

「そう、つまり第二の月の裁きである月班症候群を引き起こす原因を作っている薬。国の調べでソーマを密売している組織のアジトを割り出せたの。それで、乗り込もうと思ったんだけど、一人よりは二人のほうが確実でしょ。だから……」

「それで、俺のところにか」

リディアは頷く。

「いいぜ。一緒に行つてやる。俺も、月班症候群の患者を見てるんだ。放つておけない」

そう言い、ティキは行動を開始しようとする。それを見たリディアが言う。

「でもティキは傷がまだ……」

「こんな程度の傷なんでもないさ。それよりもアジトの場所を知られたことを奴等が気が付けば、手遅れになるかも知れない。出来るだけ早く行つた方がいい」

リディアは、ティキの様子に違和感を感じていた。なにか焦っているようなそんな感じが。

ティキの様子を心配そうに見るリディアの肩を、後ろから見ていたアイシスが叩く。それに気が付いたリディアはアイシスのほうを

見る。

「心配するな。奴はただ自分の中の苛立ちをなんとかしたいのさ」

「苛立ち？」

「デイスルパス国を守れなかったのは自分の所為だと思っている」

「そんな、だつてアレは……」

「誰もが分かつておるよ。小僧はよく戦った。誰も小僧が悪いなんて思つておらん。それでも奴は全部を守りたかつたんじゃろ。月の産物も持たずオームに立ち向かうのはただの馬鹿じゃが……俺はそんな馬鹿は嫌いじゃない」

その時、アイシスの立つ場所よりさらに奥の所が銀色に光だした。それにティキとリディア、アイシスも気が付く。

「なんだ？」

リディアを先頭にティキ達は光のする方へと向かう。

そこには、銀色の光を放ち輝く30センチほどの大きさの石が置いてあつた。ティキはその石を見て目を奪われる。

「これは……もしかして月のカケラか？」

「ああ、そうだ。貴様が倒したオームのほとんどは粒子となつて消えたが、一部は集合し月のカケラとなつた。持ち帰るべきだと判断して持ち帰つておつたのじゃ。しかしこの反応……なにかに共鳴しておるな」

月のカケラはさらに強く輝く、そしてその輝きにより全員の視界が奪われるほどとなつた瞬間、辺りに強烈な風が通り抜けた。その風により巻き上げられた埃が、辺りの視界を一時的に悪くするが、それはすぐに晴れて月のカケラが置いてあつたところも見えてくる。

「なんだ？ 一体なにが……」

全員が月のカケラに注目するが、そこにあるはずの月のカケラはなくなつていた。

「え？ 月のカケラは？」

と、その瞬間突然リディアの視界が真っ暗になった。何者かによ

って視界を遮られたようだ。

「え？　ちょ……なに？」

リディアの声にティキとアイシスは視線をリディアのほうに向ける。そして、リディアも視界を遮っているなにかを両腕を伸ばし必死に取り払った。そして、全員がその姿を確認した。

そこにいたのは、真っ白なウサギのような耳をし、ウサギのようなシッポをし、正面を向いた胴体は丸く胴体から短い手と足が生えたウサギのような少し違うような奇妙な生物だった。

Act 37: フェンリア

突如ティキ達の前に現れた謎の生物。透き通るように真っ白で体毛のひとつひとつが羽のような質感を持ち、ウサギのような耳とウサギのような尻尾を持つ。しかし全身は丸々としていてボールのような雰囲気も併せ持ついままで見ただけでもない奇妙な容姿だが、どこか愛らしさも併せ持つ生物。

「なんだ？ コイツは？ 月のカケラから変化したってことはオームか？」

ティキはその謎の生物を見て思った言葉を放った。確かに、本来オームは月のカケラの粒子の集合体。すなわち月のカケラが変化してオームとなる。今回も月のカケラから突如現れた生命体、これは本来オームと呼ばれるものである。しかし、その雰囲気はともオームのものではないことはこの場にいる全員が感じていた。

「オームじゃないような気がするけど……」

リディアがそう言いかけた時、リディアが手で持つ謎の生物の口から鳴き声のようなものがこぼれた。

「タッタタタ」

謎の生物が発したこの鳴き声の意味はなんなのかはもちろん分からない。しかしリディアには気持ちを通じたのかリディアがその鳴き声に反応した。

「なんか喜んでるみたい」

「ハハッ、なんか可愛いな。どれどれ」

そう言っただけでティキが謎の生物の頭を撫でる為に手を伸ばす。その瞬間、謎の生物は突如変貌し、ティキに対して威嚇をはじめた。それに驚いたティキは伸ばそうとしていた手を戻した。

「なんだよ。コイツ、リディアにしかなくなつかねえんじゃないのか？」

ティキがそう言い放った瞬間、横からアイシスが手を伸ばしていた。そして、謎の生物の頭を撫ではじめた。

「どうやら小僧、貴様のことが嫌いなだけのようにゃの」

「ふーん、この野郎。生意気なやつだ」

ティキは少し泣きそうな声で言った。

「さてと、行くか」

「ティキ、ほんとに大丈夫なの？」

「こんくらい傷、大丈夫だって」

リディアの心配をよそに、ティキは平気そうな姿を見せる。だが、リディアはティキが無理していることを見抜いていた。一日半も目を覚まさず、その間は熱もあつた。今起きたばかりのティキにとって、現在の体調は決して万全とは言えるものではないはずだ。だが、リディアはティキの気持ちを汲み、それ以上のことは言わないようにした。

「……ティキ」

「ん？」

ティキの名前を呼んだのはアイシスだった。

「貴様の月の産物は……」

アイシスはそこまで言つて突然沈黙する。ティキはアイシスの言葉が途中で切れたことに疑問を感じた。

「なに？」

アイシスはティキの目を見ながらしばらく沈黙を保っていたが、少し笑みを浮かべると口を開いた。

「いや……貴様のその月の産物の名前は決めたのかと思つてな」

アイシスが本当に言いたかったのはそのことではなかった。いずれティキが知ることになる月の産物の秘密と、その隠された本当の力。アイシスはそれを伝えようとしたが、今はそれを知る必要がないと判断し、沈黙した。

いずれ時が来れば知ることになる。あまりにも巨大すぎる力は、やがて自らの身を滅ぼすということを……。時がくればティキは必ず欲する、そして、必ずその局面に立つことになる。その時までア

イシスは、それを伝えないことを決めた。なぜならば今それを教えた所でティキは理解できない。人の心に反応し呼応する月の力ケラを扱う者に、混乱を与えることは迷いを与え、月の力ケラの力を十二分に引き出すことが出来なくなる。

「ああ、もう決めた」

ティキはそんなアイシスの心を知ってか知らずか、アイシスの質問に答える。

「こいつの新しい名前、それは……」フェンリア」

何者にも捕らわれず、何者にも属さない。何よりも輝き、決して屈しない。孤高の狼。その銀色に輝く光は何よりも強く。そして、温かい。狼は群れで暮らし、そのリーダーは仲間を守るために、仲間リーダーを守る戦う。古代の神話に登場した最強の狼フェンリルは時を超え、姿を変え、今まさに現代に蘇る。

その名は”フェンリア”。

——自らを守るための、仲間を守るための、一つの輝き。

「フェンリアか、いい名前じゃないか。いいか、フェンリアは俺が今まで創った月の産物の中でも最高傑作のものだ。これだけは肝に銘じておけ。貴様がこの月の産物を使うに値しない奴だと俺が判断すれば、俺は貴様を殺してでもファンリアを奪いにいくぞ」

アイシスの真剣な眼に、ティキも真剣に答える。

「ああ、覚悟しておくよ」

ティキとリディアは外に出る。そして、リディアの乗ってきたリバティーに二人で跨る。謎の白い生物もリディアの肩にぶら下がったままだ。

「そんじゃ、世話になったな、アイシス。次に来るときはなにか可愛い人形でも持ってくるよ」

「そうしろ。今俺が集めてるのはライオンのぬいぐるみだ」

リディアはリバティーのエンジンをかけると、リバティーを噴か

せる。そして、スロットルを回して勢いよく飛び出した。ティキは、空から下を眺めながら、アイシスのほうを見て手を振る。

「じゃーなー！」

アイシスは腰に手を当て、ティキ達を見送っていた。

「ティキか、面白い奴じゃ……。だが、月の産物のあの反応……。十数年前のあの赤ん坊が奴なら……。いや、あの赤ん坊が生きているわけではない。俺のたった一度の誤り……。神への冒瀆」

そう呟いて、アイシスは店の中へと入っていった。

一方、ここはとある国のストラム……。

「ボス、そろそろ移動しないと足がつくんじゃないですか？」

ボスと呼ばれた大柄の男はソファアから立ち上がると、奥へと向かった。そして、箱に詰められてあるものを見ながら言う。

「そうだな。よし今夜の取引が終わり次第、また別の国のストラムへと移動する」

「ヘイ、じゃあ準備しておきます」

「それと、今夜のお客さんは特別だからな。丁重に扱えよ」

「どこかの国のお偉いさんですかい？」

ボスと呼ばれた男は箱から袋を取り出す。

「ああ、今夜はこの麻薬……”ソーマ”の販売祭りだ。一稼ぎしたらまた盛大に酒でも飲み交わそう」

ボスと呼ばれた男は、不適な笑みを浮かべる。

そしてティキ達はリディアの情報の元、ソーマの密売組織のアジトがあるストラムへと向かっていた。

Act 38：敵のアジト

「リディア、詳しい場所も分かってるのか？」

「ええ」

ティキとリディアは、麻薬である”ソーマ”の密売をしている組織の、アジトがある国のストラムへと来ていた。目的は密売組織の壊滅とソーマの回収である。

この国のストラムもやはり、入り組んだ迷路のようになっている。一人きりで迷ってしまえば、脱出するのは容易ではないだろう。ましてやストラムは無法地帯。危険な人間の集まりの場でもある。それは、この複雑に入り組んだ洞窟のような地形が起因しているのだが……。

「それで？ なにか作戦はあるのか？」

「んー、それなんだけど……」

リディアがそこまで言いかけた瞬間、リディアの身体に衝撃が走り、リディアは思わず後ろに仰け反る。それに弾かれるように白い生物も、飛ばされる。その生物はそのままゴロゴロと転がり、入り組んだストラム中に消えていった。

「痛ったーい。なんなの？」

リディアとティキはそんなことに気が付かず、前を見る。そこには、ここにいるはずのない者がいた。

「いてて……」

そこには、頭を手で押さえる金色の髪をした少年が倒れていた。

「あ、ごめん。大丈夫？」

リディアは、少年に手を差し出す。少年は、差し出された手を掴むと起き上がった。

「キミ、こんな所でなにしてるの？」

「……、冒険」

「え？」

「冒険だよ。ボク、見たことも無いもの見るのが好きだから、いろんなところを冒険してるの。それよりねーちゃん達こそ、こんなところになしてるの?」

「あたし達は……仕事だよ。こんなとこにいちゃ危ないからお家に帰りなさい」

リディアの言葉に、少年は真っ直ぐリディアの瞳を見ている。そして、次にティキの瞳を見る。すると、少年は雰囲気が変わったかのように、笑みを浮かべる。

「うん、わかった。お家に帰るね」

そう言うと、少年はティキ達の視界から消えていった。

ティキもリディアも不思議を感じていた。なぜ子供がこんな無法地帯にいるのか。ストラムに元々いたとは考えられない風貌と性格サガルマータからここまで来たのか。しかし、移動手段はリバティーしかない。しかし、あの年齢の子供ではリバティーに乗ることは出来ない。つまり、あの少年はここにいるはずがない少年であった。周りの暗闇がそういう悪寒を感じさせるのか、ティキ達は嫌な寒気に襲われた。

その寒気を振り払うかのように、ティキはリディアに話しかける。「そ、それで作戦つてのはなんなんだ?」

「う、うん」

リディアは、腰にかけていた袋の中からあるモノを取り出した。

「それは?」

ティキにとつては、今まで一度も見たことがない物体をリディアは手に持っていた。

「コンポジ4と起爆装置」

リディアが手に持っているモノは爆弾である。

コンポジ4……通称『CP4』。主成分であるRDXにポリソを化合させた粘土型爆弾である。その主な特徴は、粘土型のため従来では不可能だった扉の隙間などに押し込み、爆破させることができることである。また衝撃や、火の中に放り込んでも決して爆発し

ないのも特徴である。爆破させるためには起爆装置を用いるか、雷管による方法だけである。そして、今回リディアが用意したのは前者。起爆装置による爆破方法である。

「このアジトは出入り口が二つあるの。だからティキはこの爆弾を使つて今、あたし達がいる側の出入り口を塞いでほしいの」

「つまり、逃げられる通路を限定するのか？」

「そう、あたしが向こう側に回つたら携帯で連絡するから、そしてらティキはこっちの出入り口を爆破、奴等は当然もう片方側の出入り口から逃げようとするはずだから、そこを出入り口の近くに潜んでいるあたしが月の産物を使つて一人ずつ確実に仕留める。どう完璧な作戦でしょ？」

完璧……とまでは言えないが、この狭いストラムでは最上位の作戦であることはティキも認めた。元より作戦なんて小難しいことは苦手。全て正面突破で片付けようとするティキから言えば、完璧な作戦だった。

「じゃあ、こっちの出入り口は頼んだわよ。ティキ」

そう言つてリディアはティキに、コンポジ4と起爆装置を手渡す。リディアの最大の誤算があるとすればここだった。なぜなら、ティキは目覚めてまだ数時間。とても体力は回復していない。故に、リディアから渡された起爆装置を手で掴んだ瞬間、落としてしまったことも必然と言えるだろう。

そして落ちた起爆装置が、運悪く地面との接触において作動したことは偶然であろう。

「ちよっ！ ティキ早く爆弾放り投げてっ！」

そう言われたティキは手に持っていたコンポジ4を精一杯の力で放り投げる。

「伏せて！！」

ティキの手から離れて1秒と立たないうちにそれは起こった。粘土は一気に膨張し、激しい爆風と熱を放ちオレンジ色の閃光を放ちながら、凄まじい爆音を上げて爆弾は爆発した。

あまりに近くで爆発したため、ティキとリディアは伏せることに間に合わず、爆風で押し倒されたと言ったほうが正しいだろう。だが、伏せる体勢にはなっていたため、それによる怪我は擦り傷程度で済んだ。

「痛ったーい。ティキ大丈夫？」

「ああ、なんとか、リディアこそ大丈夫か？」

まだ爆音で耳が少しイカれている状態だったが、言葉を理解する程度には十分だった。

「なんとかね。まったく起爆装置を落とすなんてどういうこと？」

「ははは……悪い、悪い。うまく力が入らなくて……、それより今ので確実に気が付かれたな」

「そうね。こうなったら……」

「こうなったら？」

「正面突破あるのみ！」

リディアはそう言いながら、立ち上がると奥の通路に走っていった。ティキもそれに続く。

「ボス大変です！ 侵入者です！」

アジトの出入り口から入ってきた小柄な男が、ボスに伝える。

「なんだと？ さっきの大きな音と関係あるのか？」

「さっきの音は爆弾です。どうやら、このアジトの場所がばれていたようでして、今、女と男がこっちに一直線に向かっています」

小柄な男は相当の慌て様だ。

「ふん、たった二人か。なにもビビることねえ、だが、今夜は大切な客人が来る。ここは一旦身を潜めるのが得策だな」

そう言つと、ボスはもう一つの出入り口から出ようとする。その瞬間、小柄な男が入ってきた方の扉が勢い良く開く。

「動くな！ あたしはリシュレシア国の特別仕官！ 麻薬ソーマの密売容疑であなた達を拘束する！」

リディアのその声にその場にいた人間が皆止まる。

「ちい……」

リディアに遅れてティキもその部屋に到着する。そして、ティキは全体を見渡す。

「おいおい、俺達が麻薬の密売？　ねえーちゃんよ。見た目で判断するんじゃないぜ。確かに見た目は悪ぶっちゃいるが、俺達は善良な市民なんだからよ」

ボスがリディアに対して話しかける。

「証拠ならあるぜ。おい、お前そのカバンの中から、アレをだしな」

ボスは、小柄な男に近くにあるカバンの中身を出すように言う。言われるがままに小柄な男は、カバンの中に入ってるモノを出す……と同時に、発砲音が聞こえた。

リディアとティキは咄嗟に扉の影に隠れて、何とか難を逃れた。男がカバンの中から出したのは機関銃。その機関銃をティキとリディアのいるほうへとひたすら撃ち続ける。その隙に、ボスは出入り口から出ようとする。

「はははっ、ねえーちゃん。もつと人の言葉は疑うもんだぜ」

「くっ……。逃がすもんか。月の産物”ルナスペリア”発動！」

その言葉にリディアの月の産物は銀色に輝く。

だが……しかし、その輝きは一瞬で消え去った。

「え？」

リディアの持つ月の産物の不発。そう発動しなかったのだ。リディアは突然のことに驚きを隠せない。

「ふん、なにもおこらねえじゃねえか。じゃあ俺はとんずらさせてもらっぜ。あばよ！」

「待て！」

リディアの叫びがアジト内で響いた瞬間、激しい爆発にも似た轟音が鳴り響いた。それは機関銃を撃っていた男の手さえも止めさせることだった。無理もない。その爆音の元になったであろうものを

しっかりと視界に捕らえていたのだから。

犠牲となったのは、一目散に逃げようとしていたボス。そして…

…この光景を作ったのは、人間の背丈ほどもあるうかと思っほどの
拳こぶしだった。

Act 39：少年の正体

突然の出来事に、この辺りの空気は一瞬で凍りついた。突如洞窟の壁を突き破って出てきた人間の背丈ほどもある拳。そして、それによって吹き飛ばされ、気を失ったソーマの密売組織のボス。

「オーム？」

その言葉を発したのは、ティキだった。今まで何体ものオームを見てきて、オームの巨大な腕をも見たことがあるティキ。ましてや、つい先日超巨大なオームと闘ったばかり。ティキが巨大な拳を見て、そう判断するのに違和感はない。ただ、違うのはオームの拳にしては、色も、そして形もオームというよりは人のソレに近いことである。ティキもそれには気が付いていた。だから、オームと言いつけるのではなく、半信半疑でオームと発言したのである。

しかし、ティキ達はその拳の正体をすぐに知ることとなる。

「俺から逃げられるとでも？」

崩れた瓦礫によって巻き起こされた砂埃の中から出てきたのは、さきほどティキ達が会った少年であった。少年は、気絶している組織のボスのほうを見ながら続ける。

「俺の任務はお前達の壊滅。与えられた任務は確実にこなす。それが俺達だと知っているだろう？」

ティキ達は目の前にある光景に驚いていた。先ほど会った少年。その少年の背中から生えている一本の巨大な腕。そして少年の言動。「どうということだ？」

ティキが思わずそう口にしてしまったのも納得できる。

「ひ、ひえ」

ボスがやられたことに臆し、小柄な男が逃げようとする。だが、

少年の巨大な腕はそれを見逃さなかった。逃げようとする男をその巨大な腕が伸び、捕らえる。小柄な男は壁に叩きつけられ、気絶する。そして、もう一人の男をもその腕は捕らえると地面へと叩き付けた。叩きつけられた男は当然気絶した。

僅かな攻防。いや、一方的な攻撃によってこの場にいた組織の間は全員が意識を失った。

息はあるものの意識を失い、まったく動かない組織の人間をジッと見ている少年は、おもむろに巨大な腕を振り上げる。その行動を見ていたティキは思わず叫ぶ。

「やめろ！」

ティキの叫びにもその少年は、まったく反応せず拳を振り下ろす。だが、瞬間鈍い音と衝撃音が走り、その場は静止する。それはティキの月の産物であるフェンリアだった。フェンリアは長さを伸ばし、少年の巨大な腕から組織の人間を守ったのだ。

攻撃を阻まれた少年はティキのほうを見る。

「どういっつもりだ？」

「それは、こっちの台詞だ。そいつらはすでに気絶している。止めを刺す必要はないだろ？　そもそもお前は何者だ？　ただの子供とは言わせねえぞ」

少年は、ゆっくりとティキのほうに向き直す。

「俺の名前は、ソル。星の導き”狂部隊”七曜の副リーダーだ。任務の邪魔をするならお前等も消す」

そう言うと、ソルは両腕を構える。そして全身に力を入れる。その瞬間巨大な腕が背中からもう一本生え、巨大な腕が二本、元々の腕が二本と計四本の腕となった。ティキはそれを見てゾッとする。

ソルは四本の腕を持って、ティキのほうへと迫り来る。ティキは

月の産物であるフェンリアでなぎ払う体勢を取る。ソルはティキの近くまで来ると、腕の一本を高く振り上げる。ティキはその攻撃を防ぐために、フェンリアを目上に構えるが、その瞬間、横腹からもう一本の巨大な腕の洗礼を受ける。

横腹からまともに攻撃を食らったティキは、そのまま壁まで吹き飛ばされた。

「ティキ!!」

吹き飛ばされたティキを見てリディアは思わず叫んだ。

壁まで吹き飛ばされたティキは、崩れた壁の土ぼこりに隠れて見えない。リディアは少しの間ティキのほうを見ていたが、起き上がってくる気配もない。当然といえば当然だ。ティキは今、万全の状態ではない。巨大オームとの戦闘を終え、体力も完全に回復はしていない。

そんな状態なのに、自分のことなど気にも留めず、何よりも優先して自分についてきてくれた。リディアはティキの気持ちを汲んだ。

——そして、リディアはソルと対峙する。

「お前も、邪魔をするか」

「今度はあたしが、ティキを守る!」

リディアの月の産物は発動しなかったが、それでもリディアは腕を前に突き出し、構える。その構えはまるで拳法の構えのようだが、リディアは拳法を使うわけではない。正直言つと見よう見真似とはこのことだ。例えばハツタリだろうと、敵との実力差がはつきりしていようと、リディアの頭にはティキを守ることしかなかった。

「いいだろう。お前も地獄に送つてやろう」

そう言つと、ソルは二本の巨大な腕を振り上げる。そして、リディアに向かってその巨大な拳を振り落とそうとした時、突然この場に音楽が流れた。その音楽が流れた瞬間、ソルの動きが止まる。

ソルは少し身を引くと、懐から携帯電話を取り出した。そして、巨大な腕はいつでもリディアを捕らえられる間合いを保ったまま、携帯電話を耳に当てる。

「なんだ？」

『緊急集合です。戻りなさい』

「今はまだ任務中だ」

『必要ありません。その任務は破棄することに決まりました』

ソルは少し沈黙し、再び話し始める。

「……ここにあるデータの回収は、どうするんだ？」

『くれてやりなさい。どうせ、そのデータの情報を知ったところでどうしようも出来ないのですから』

「わかった。アンタがそういうなら従う」

そう言うつと、ソルは携帯電話の通話を切る。切った瞬間の機械音はリディアの耳にも届いた。

ソルは、二本の巨大な腕を背中へ戻した。

「命拾いしたな。お前達は始末しなくていいそうだ」

ソルはそういつと、リディアに対して背中を向けた。

——瞬間、リディアは動いた。ソルにとってこの戦いは終了のもりだった。リディアはそうではない。敵が自分に背中を向けた。これはリディアにとって最高の好機。リディアは自分の中で生まれた罪悪感を、胸の奥底にしまい、敵を討とうとした。

だが、リディアの動きは止まる。

「どうした？ 最大のチャンスを逃すのか？」

ソルは、リディアに背中を向けたまま言い放つ。リディアはそれに対して、何も答えられずにいた。リディアの中の良心がそうさせたのか。それとも子供の姿の敵を前にして、躊躇ったのか。いや、

違う。戦いの中にあって良心というものは必要ない。むしろ敵を背後から視界に触れることもなく倒すことさえ、卑怯だと言う方がどうかしている。リディアもそれは分かっている。

だが、リディアのプライドがそれを許しはしなかった。敵を後ろから攻撃して、それで戦いに勝って、それで何を得ることが出来る。仲間と肩を抱き合って、よくやったと言えるのか。

——リディアは敵を後ろから攻撃するのを躊躇った。

「逃すのなら、俺は去らせて貰う」

ソルはそう言つと、歩き出し、ストラムの通路の奥へと消えていった。

リディアは結局、背後からの攻撃はしなかった。だが、もし仮にリディアが敵を攻撃していたとしても、それによつてリディアに勝利がもたらされたかという点、それはまた別の話である。

「ティキ！ 大丈夫？」

「……ああ、なんとかな」

ティキは意識があつた。体力をもともと消耗していたため、一時的に身体が言うことを効かなかつただけのようだ。リディアはティキに手を差し伸べると、ティキを起こした。

「それにしても、あいつが噂の”七曜”のメンバーだったとはな。驚いたよ。あれも月の産物の力なのか？」

「分からない。でも、月の産物が共鳴してたから、恐らく……」

「七曜か……。恐ろしい連中だな」

ティキとリディアは、アジトの中を散策した。散策している最中に、謎の白い生物がどこからともなくやってきて、リディアに再びくつついた。どうやら、自力でこの場所までたどり着いたらしい。

アジトの奥深くにはソーマと見られる錠剤が大量に発見された。

リディアは、すぐに国に連絡を取り、応援を要請した。

「これだけ大量のソーマが密売されようと思っていたと思うと、ゾツとするな」

「ええ、ソーマはこの世にあつてはならない薬。あたしは必ずこのソーマを駆逐する」

リディアの決意はティキにも伝わった。

そして、応援が来るのを待つて、ティキとリディアは家路に着いた。

Act 40：狙われた男

「なんか懐かしいなあ」

リディアに送ってもらったティキは、久々にルティーに戻ってきた。久々とはいっても1週間も離れていたわけではないが。それでも、ティキはこのルティーに、どこか懐かしさを感じずには入られなかった。

ティキは、見た目にも変わらない外観から目を離し、ドアに目を向ける。そして、ドアを開け中に入る。と、そこでティキの動きは止まる。

「な、なんだ。コレ……」

ティキが驚くのも無理はない。なぜなら、一見なにもない外観に比べ、その中は実に、ボロボロに荒らされていたのだから。まるで廃墟のごとく。

「一体、なにがあったんだ？」

ティキはボロボロになったルティーを見渡す。すると、倒れた机の上に黒髪で短髪、そして左目の位置に奇妙な刺青をした一人の男が座っていた。

「よーやく、帰ってきやがったのか」

男は、リンゴを齧りながらティキに話かける。

「お前が、コレをやったのか？」

「ああ、暇だったんで。それに、もう必要ないと思ってよ」

男の言葉に、ティキは耳を傾ける。

「ティキってのはアンタだろ？ 一緒に来いよ」

男は、手を差し伸べる。

「いきなり何、言ってやがる。人ん家をこんなんにしといて、一緒に来いだあ？ だいたいお前は誰なんだ？」

「……俺の言葉は難しかったか？ 俺は、お前に提案してるんじゃない。」 命令”してるんだ”

座っていた男は机から降りて、立ち上がる。

「断るなら、無理やりにも連れて行くだけだぜ」

「やれるもんなら、やってみる」

ティキの言葉に間髪入れず、男は走りだす。そして手に持っていたリングの芯を、ティキに向けて投げる。ティキはリングの芯を弾くと、そのすぐ後ろから迫ってきている男の拳をも交わす。ティキはそのまま、反転し、ルティの壁に足をつける。そして、足に力を入れると男に向かって、拳を突き立てる。男はその拳を、弾き、身体を捻り、肘鉄をティキに食らわす。

肘鉄を食らったティキは、そのまま床に叩きつけられるが、すぐに立ち上がると構える。その時すでに男は迫ってきていた。そして、フェイントも絡ましながらティキに拳を繰り出す。ティキはその拳を全て受け止めると、腰を低くし、相手の足目掛けて、蹴りを繰り出す。

ティキに足蹴りされた男は、身体を斜めにさせながらも、床に転がっていた木の破片を掴むと、そのまま側転し、体勢を立て直す。そして、足に力を入れ、再びティキに迫る。そして、そのままティキを飛び越し、ティキの背後に回ると、手に取った木の破片で、ティキを刺そうとする。

だが、ティキは伏せ、その体勢のまま足を後ろに出し、男の胸に蹴りを入れる。ティキは、床を転がり体勢を立て直すと、男に迫っていく。男はティキの蹴りの衝撃で、ふら付いている。ティキは男の顔面目掛けて、拳を繰り出すが、男はそれを後ろに倒れる体勢で避ける。そして、そのまま両手を床に着き、ティキに両足で蹴り吹き飛ばす。ティキは回転しながらも、すぐに反撃できる体勢で、着

地した。

「はっ、こんなもんかい。聞いた話では、もっと強いって聞いてたんだがなあ」

「一体誰から聞いた話だよ？ 噂は当てにはなんねえぜ」

お互いに、不適な笑みを浮かべる。

そして、再び男がティキの元へと迫る。だが、ティキの元へと到達する前に男は吹き飛ばされる。吹き飛ばされた男は、机にぶち当たって、机をバラバラにした。

そして、ティキの前には拳を構える男が一人。

「ル、ルクス」

ティキはその男の名前を呼んだ。

「ティキさん、無事ですか」

「どうして、ここに？」

「僕だけじゃありません」

そう言うのと、ルクスは後ろを指差す。そこには、リディアも来ていた。

「ティキ、一緒に来てほしいの」

「ティキさん、ここは僕に任せて行ってください」

「けど……」

「ティキさん、あなたは狙われているんです。詳細を知りたければリディアさんと一緒に行ってください」

ティキとルクスが話している間に、吹き飛ばされた男が起き上がってくる。

「早く！」

ティキは、ルクスの声に促されてリディアの元へと行く。リディアはすぐにリバティーを用意すると、ティキは、それにまたがった。そして、振り向きルクスのほうを見る。

「ルクス、大丈夫なんだろうな？」

「当たり前です。少なくとも体力が戻っていない、へなちょこテキsanよりは確率が高いです」

「言ってくれるじゃねえか、じゃあ頼んだぜ」

リディアは、リバティーのスロットルを回し、急加速でその場から離脱した。

「まったく、逃がしてくれちゃって……」

男は立ちあがると、服に着いた汚れを手で払いのける。

「アンタ、見たことある顔だなあ。同じ穴のムジナじゃないのか？」

「ええ、そうですね。似たようなものかも知れませんか」

「で……アンタが俺の相手をするって訳？俺に勝てるっても？」

ルクスはうつすらと笑みを浮かべる。

「そんなことはやってみないと分かりませんよ。……と言いたいのですが、今の僕ではあなたに勝つことは無理でしょうね」

「それが、分かってて残るってのは利口とは言えないんじゃないか？」

「いいえ、確かに戦闘に置いて勝ち目はないでしょうけど、逃げるだけなら絶対に僕に利があると思ってますから。それに……」

「それに？」

「彼といて分かりましたが、時には馬鹿が、利口を上回るときもあります」

「なるほど。なら……やってみる！」

男は、ルクスに向かって走り出した。

「おい、リディア。どこに向かつてるんだ？」

リバティーを運転するリディアに、ティキが問いかける。

「着いたら分かるわよ」

リディアは、リバティーを街中の裏路地に沿って、走らせる。明

らかに人気の無い方向に向かっているのが分かる。ティキは、この街に長く住んでいる。そのため、リディアの向かう先に何かがあるのか知っていた。そこは、町の中にある小高い丘のある公園。リームベルト国公立公園。かつて、ティキとルクスが出会い、戦った場所でもある。

リディアは公園に着くと、その中でも人気の無い木に囲まれた広場というには、少し狭い小高い丘に出る。そして、そこにリバティを着地させた。

「ティキ、着いたわよ」

「こんな、とこに連れて来て何があるってんだ？」

ティキは、リバティーから降りると、辺りを見渡す。そして、リディアがここに連れて来た意味を知った。

「久しぶりだな。ティキ」

ティキはその声に聞き覚えがあった。それは、ティキがもっとも嫌っている人物で、現在この国リシュレシア国大統領であるプレシデントであった。

Act 41：新たな旅立ち

リームベルト国公立公園。この場所にある木に囲まれている為に、あまり目立たない小高い丘の上に、ティキとリディアそして、プレシデントがいた。

「プレシデント？ なぜアンタがここに？」

「お前をここに連れて来てほしいと、リディアとルクスに頼んだのは私だからだ」

「どういうことだ？ まさか、今回のこともまたアンタが関係しているのか？」

プレシデントは、ティキに対して背を向け、空を眺める。

「……関係していると言えばしている」

「てめえ、どういうつもりだ？ 俺の家だぞ！」

ティキはプレシデントのほうに詰め寄る。それを見ていたリディアがティキを静止する。プレシデントは身体を半分後ろを向けたままで、ティキのほうを向く。

「聞け。ことの始まりは今からおよそ、ひと月前……。星の導きが各国の主要施設を攻撃、破壊したことは知っているか？」

ティキはそれを以前聞いたことがあった。そう、巨大オームを倒した後にルクスから聞いた。星の導きによる攻撃の足止めとして、リクが国に利用された出来事だ。

「その顔は知っていると判断するぞ。そのこともあつて各国の代表である総師は、星の導きの目的を推測。そして、報復することを決定した。だが、その為には準備がいる。そこで、総師は時間を稼ぐために、星の導きに恨みを持つ者を探していた」

「つまり、リクは当て馬にされたってことか？ アンタはそれを知つて、リクが利用されるのを黙って見てたのか？」

「リクを使ったことも知っているか。だが、少し誤解があるようだな。私はリクが利用されるのを黙って見ていた訳ではない。リクの

ことは私自らが進言した」

その言葉にティキはついに、プレシデントに掴みかかった。そして、そのままプレシデントを押し倒した。

「アンタはやっぱり昔のままだ。俺達をただのコマとしか見ていねえ！　なぜ、リクを使った？　あいつの心の闇の深さは、アンタが一番知っているだろ！」

「……私はただ、お前を守っただけだ」

プレシデントの予想外の言葉に、ティキは一瞬動きが止まる。

「どういう……意味だ？」

「星の導きに恨みを持つ者を探していたと言ったな。その第一候補となっていたのが、お前だ……ティキ」

「え？」

「総師は、”月よりの使者”であるティキという名の兵器を使う気でいた。だからお前を守るためには、リクを犠牲にするしかなかったのだ」

ティキはその言葉に動きが止まる。そして、プレシデントは続けた。

「私は……ただ、自分の罪滅ぼしをしたかっただけなのかもしれん。私はお前の運命を知っている。だから、お前に少しでも長い間、普通の生活をさせてやりたかったのだ。だから総師にはお前は使いものにはならないと言い、そしてリクを使うことでお前を守ったのだ」

「ティキ、あなたの気持ちも分かるけど、プレシデントさんの気持ちも汲んであげて」

ずっと黙って聞いていたリディアが言う。

「だが、それももう限界だ。先日イルマシア国で発生した巨大オーム。あの歴史的大事件は、瞬時に世界に伝わった。歴史上はじめてサガルマータにオームが現れたことも、そのオームを倒したのがお前達であることも、そして、総師は知った。ティキが使えるということ……。そして、それが分かるや否やすぐに、自身の身辺警護

が任務であるはずの”月影”を使い、お前を生け捕りにしようとしたのだ」

「！……奴は、月影の一人だったのか」

プレシデントは驚いているティキの顔を見ている。そして、ツバを飲み込むとティキの名を呼ぶ。ティキはその言葉に反応する。

「ティキ。お前は、この国を出ろ」

ティキはその言葉に思わず、プレシデントを持つ手を緩めた。

「もはや、私ではお前を守りきれない。お前を国に、総師に利用させない為には、お前がこの国を出て再び姿を消すしか道はない」

「それは俺に……逃げろって言うてるのか？」

「そう、捉えられても仕方が無い」

ティキは再び、プレシデントを持つ手を強めた。

「冗談じゃねえ！ 尻尾を撒いて逃げるなんて出来るわけがねえ！」

「ティキ頼む。私からの一生のお願いだ。私はどうしても、お前に死なれたくないのだ」

「あんたは……ほんとに昔から何一つ変わってねえ！ 自分勝手なことばかりグダグダ言いやがって！」

ティキはプレシデントを持つ手を離すと、立ち上がり後ろを向く。それを見ていたリディアが、ポツリとティキの名を呼んだ。

「ティキ……」

「死なれたら困るのは俺も同じだ。アンタが守るのは俺だけか？ 違うだろ？」

ティキはプレシデントの方を向く。

「アンタにはこの国を……この星を守るって言う大事な仕事があるだろ！ 破壊された月を再生させる計画”紙碑”を発足させ、崩壊するこの星を守る役目が。俺は、今でもアンタのことが憎い。許せない。けど、この星を守るためには、アンタは絶対に必要だ。俺がいなくなったら……」

ティキは唾を飲み込む。そして口を大きく開けて叫んだ。

「俺がいなくなったら、誰がアンタを守るんだよっ!!」

ティキの声は空高く響き渡り、一瞬……場の空気が静かになった。その静寂を破ったのは、プレシデントだった。プレシデントは腰を起こし、言う。

「ずっと疑問だった。なぜお前がこの国を出ようとしなかったのか。12年前のあの時、国から去ったはずのお前がだ……私は、大きな勘違いをしていたようだ。私は、ずっとお前を守っているものだと思っていた。だが、実際に守られていたのは……私だったのか」

プレシデントは、少し笑う。

「ティキ……」

ティキとプレシデントは目が合う。そしてプレシデントは前のめりになり、両手を地面に付け、頭を地面にまで下げた。

「本当にすまない。ありがとう!」

ティキは、プレシデントの誠意を感じた。国のトップである男が、今、全身全霊を込めて土下座をしたのだ。ティキはこれまでの全ての恨みや憎しみが全て浄化したような気がした。プレシデントは頭を上げると続ける。

「ティキ。今から二ヶ月前、このリシユレシア国のほぼ真裏にあたる場所である、セイ・ユグレシア国にて大使館に派遣中の職員からある報告がなされた」

「……報告?」

「12年前、第九候補生の施設を襲った二人のうちの、一人を目撃したという報告だ」

ティキはその言葉に驚きを隠せない。

「俺が、探している奴の一人……」

「そうだ。ティキ、お前は自分の目的の為に生きる。私はもう十分に守ってもらった。それだけで十分だ」

ティキは沈黙した。リディアもプレシデントも沈黙している。そこへ、場の空気を知る由もなく、男がやってきた。

「ティキさん、話は聞きました？」

それはルクスだった。

「ルクス！ 無事だったのか、よく大丈夫だったな」

「当たり前です。僕を誰だと思ってるんですか？」

場面は変わり、ここはルティー。そこには、焦燥が見え隠れしている男が一人。

「ちっ。逃げられたか。ホントに逃げ足だけは早かったな。まあいいさ。いずれ、必ず捕まえてやる。例えば地の果てまで行こうがな」

そう言う男は、その場から姿を消した。

場面は再び、ティキ達。

「……プレシデント」

ティキがプレシデントを呼ぶ。

「何だ？」

「俺はこの国を出るよ。国を出て……そいつを探す」
プレシデントは再び笑みを浮かべる。

「そうか」

「それで、一つだけ頼みがある」

「なんだ？」

「俺は、目的を果たして必ずここへ帰ってくる。だから、それまでにボロボロになったルティーを直しといてくれねえか」

「分かった。……私からも、一つ頼んでいいか？」

「何だ？」

「帰ってきたら、一緒に酒でも飲み交わそう」

ティキは再び沈黙する。プレシデントは12年前の出来事の原因を作った人物。ティキはプレシデントのことがどうしようもなく嫌いだ。だが……。

「アンタが奢ってくれよ」

「ああ、最高の酒を用意しよう」

ティキは承認した。ティキのプレシデントに対する言葉遣いが少し変化したのも、その心の変化の表れだろうか。

——そして、ティキは決心した。目的を果たすまで、ここに戻ってこないことを。

「リディアとルクスも来るのか？」

「ええ、実はあたしの目的の場所も、ティキの行く場所のすぐ近くなの。この間壊滅させた組織のアジトから出てきたソーマの製造地域がね。ルクスも一緒に行くって」

リディアとティキはルクスの方を向く。

「ええ、もちろん行きますよ。だって、僕たちはいつも三人一緒にしょう」

「そうか」

ティキは笑みを浮かべる。

「じゃあ、行つて来るぜ。プレシデント」

ティキはそう言いながら、リディアのリバティーにまたがる。

「うむ。気をつけてな。セイ・ユグレスシア国へ着いたら大使館へ行け。私から連絡しておく」

「ああ、分かった」

ティキはプレシデントに笑顔で答える。ティキがプレシデントに笑顔を見せたのは、実に何年ぶりだろう。

リディアはリバティーのスロットルを回す。激しくマフラーから煙が噴出す。そして出力を上げ飛び上げる。ルクスもそれに、続い

て行く。

プレシデントはティキ達が見えなくなるまで、見送っていた。

——今日は、晴天。風はなし。雲海が広がるここは空の上、サガルマータ。

ティキ達の冒険の日々はここから始まる——。

Act 41：新たな旅立ち（後書き）

これにて、第一部終了です。

次回より第二部となります。更新を楽しみにしておいてください。
また、一言でもいいので感想等頂けると、泣いて喜びます。

より面白い話を書けるように、次回以降も頑張りますので応援よろしく願います。

Act 42:ひとときの…… (前書き)

この話より第二部がスタートします。応援よろしくお願いします。

Act 42：ひとときの……

——ここは、とある国のサガルマーターの一角にある街。

主に農業で養っている民家が多い、サガルマーターの中でも田舎の地区だ。夜も遅くなると、人影はほとんど見えなくなる。そんな場所に現れた一人の男。男は、右腕を押さえながら、おぼつかない足取りでゆっくりと歩いている。

その男の目には生氣はなく、今にも死にそうな虚ろな瞳をしている。髪の色は紅く、身体のおちらこちらに傷を負っている。

それは、変わり果てた”リク”の姿だった。

リクは、バランスを崩しその場に倒れる。一度、倒れてしまえばもう起き上がる力は残っていない。リクは最後の力を振り絞り必死に起き上がろうとするが、身体は言うことを聞かず、リクはそのまま気を失う。

ふと、リクは額に冷たいものを感じた。そして、ゆっくりと目を開ける。そこには、見たことも無い一人の女がいた。倒れているリクを見つけ、家までつれて帰り、リクを介抱していたのだ。リクが感じた額の冷たいものの正体は女が用意した濡れタオルだった。

「あ、気が付いた!？」

リクはまだ意識が朦朧としていて、女の言葉をうまく聞き取ることが出来なかった。さらに身体を動かそうとしても身体はまったく動かなかった。

「あなた、道端でボロボロで倒れていたんだよ。そこに偶然通りかかったあたしが、あなたを見つけて家まで背負って帰ってきたんだからね。感謝してよね。女のあたしには人一人は重くて大変だったんだからさあ」

女がリクに話かけていると、一匹のネコが女の足の上に乗ってくる。女はネコの頭を一撫でする。

「あたしの名前はレシカ。こっちの子はミロ。よろしくね」

女はリクのほうを見ながら命一杯の笑顔で言う。リクはその眩いほどの笑顔を、ただ見ていた。

「話せるようになったらあなたの名前も教えてね。あたしは、水を換えてくるから無理して動いちゃダメよ」

そう言いながら女は洗面器を持って台所に向かう。女がリクに対して背中を向けた時、耳に声が聞こえた気がしてリクのほうを振り向く。

リクは、少しだけ口を動かして答える。

「……リク」

女は、少しだけ驚いた表情を見せたが、すぐに切り替え笑顔で答える。

「そ！　よろしくねっ、リク」

受け答えると、レシカは再び水を換える作業に戻る。リクはそんなレシカの後姿を見ながら、朦朧としている意識が少しずつではあるが、戻ろうとしているのを感じた。レシカは水を換え終わると同時に、洗面器とコップに一杯の水を持ってきた。その水をリクに手渡すと、タオルを洗面器につけて冷やした。

「さっ！　その水飲んで、さっさと寝る。あなた動ける身体じゃないんだからさ。しっかりと休みなさい」

リクは手に水を持ったまま、レシカのほうを見る。

「なぜ……なぜ俺を、助けた？」

リクの突然の問いに、レシカはキョトンとしている。

「なぜって、そんなの決まってるじゃん」

リクはレシカの言葉に耳を集中する。

「人を助けるのなんて当たり前のことだもん」

「当たり前？」

「そ。人が人を助けるのに理由なんていらない。分かっただらさっさと寝なさい」

そう言いながらレシカはリクの肩を押して無理やりにリクを寝かせる。そして、水に浸したばかりタオルをよく絞ってからリクの額に乗せた。

リクにはレシカの言葉が理解出来なかった。自分は、ただひたすらに目の前のモノを否定して、否定して、全てを壊すために、復讐のために、全てを捨て、自分自身をも捨て、この世の全てに対して憎しみを抱いてきた。

——リクは覚えていた。

決して忘れたわけではない。あの気持ちを。大切な人を奪った全てのものに対して持っていた気持ち……憤怒・不安・恐怖・悲しみ・恨み、ありとあらゆる負の感情を携えて、リクという人物はようやく自分でいられる。それはリクが生きる為に必要なことだった。

怒りの炎は、少しずつ輝きを取り戻してきていた。

「おい、三口。ごはんだよー！」

レシカは、そんなリクの気持ちなど知る由もなく、猫にご飯をあげている。リクもその姿を、横目でチラッと見ていた。そして、リクはレシカの姿を見ながら、不思議な気持ちが自分に芽生えている

ことに気が付いた。それは、とてもふわふわとした気持ちで、自然に笑みがこぼれる様な気持ち。リクにはこの気持ちがなんなのか理解できずにいた。

その時、猫のミロがご飯を入れた容器をひっくり返してしまい、レシカは驚きミロを叱った。

「コラー、ミロ。何やってんの？」

それを見ていたリクは、こっそりと微笑む。リクは自分でも気が付かないままに微笑んでいたのだが、レシカはそれを見逃しはしなかった。

「あ、今……笑った」

リクはレシカに言われて、はじめて自分が笑っていたことに気が付いた。そして、それを隠すように咳き込むと、無表情に戻った。

「よかった」

リクはレシカの言葉の意味が分からなかった。

「笑い方……知らないんじゃないかと心配してたの。ちゃんと笑えるんだね。隠さなくてもいいよ。なにがあつたのか知らないけど、ここにいる間は思いつきり笑ってね」

リクはレシカの何気ない言葉に、重さを感じていた。

心が洗われた気がする。自分の中で抱え込んでいたものが、洗い流されて消え去ったような気がする。なんでもない日常。これが、本当の幸せなのだと、リクは心のどこかで確かに感じていた。

——数日が経ち、リクの傷はほぼ回復していた。

最初は、警戒していたミロもリクに心を許し自ら近づいてくるようになっていた。ヒザの上に乗ってくるミロをリクは撫でる。それを見て、レシカは微笑む。なにげない日常。

「買い出し？」

「うん、週に一回街に買い出しに行ってるんだ。ほら食料とか、生活に必要なものを買いにさ。だからリクは、ミロと一緒に家で留守番しててほしいの。身体、回復はしてきたと思うけど無茶しちゃダメだよ」

そう言うとき、レシカは出かける準備を始めた。レシカを見ているリクがレシカに言う。

「レシカ……」

「ん？」

リクに名前を呼ばれたレシカはリクの方を見る。

「その……俺も一緒に行つていいか？」

その言葉にレシカは微笑み言う。

「……うん。じゃ荷物持ちはお願いね」

リクとレシカは一緒に街に買い出しに行く。レシカの住んでいる所から街までは徒歩で行くと約一時間。その間、レシカとリクの会話は途切れることはなかった。街に着いた二人は、必要なものを買った。リクはレシカが買ったものを自らの意思で持ち、レシカと行動を共にした。

気が付くと時は満ち、夕方になっていた。

「あ、もうこんな時間。そろそろ帰ろっか。買い物だけの予定だったのに、誰かと一緒に買い物に来ると時間ってあつと言う間に過ぎちゃうね」

「そうだな」

「でも、楽しかった。また二人で来ようね」

「そうだな。今度来る時は、どつかでご飯でも食べて帰ろっか」

「わあ！ほんと？楽しみっ！」

そう言いながら、リクとレシカは帰路についた。帰り道もリクとレシカの会話が途切れることなく、リクも気が付けば笑顔が自然に出ていた。

「痛ッ」

リクは突然の右腕の痛みには耐え切れず、持っていた荷物を落とすしてしまう。それに気が付いたレシカはリクに駆け寄っていく。

「どうしたの？ リク、大丈夫？」

レシカの言葉も耳に入らないくらい右腕の痛み。リクは左手で右腕を無意識に抑える。リクにとってこの腕の痛みは理解できないものだった。しかし、その痛みは突然何事もなかったかのように、消え去った。痛みが消えたことにより我に返ったリクはレシカの表情に気が付く。

「なんでもない。ちょっと疲れただけだよ」

リクはレシカを心配させぬように、答えそして、再び歩き出した。

家に着いたリク達は疲れていたのかその日は早めに就寝した。

Act 43：絶望……そして、絶望

——そして、次の日。

「飲み物を買った？」

「うん、すっかりしてて食べ物しか買ってたみたい。だから、もう一回街に行ってくるね」

レシカの家は、人里離れた水も電気も通っていないような所だ。レシカが何故こんな場所に住んでいるのか、リクはそれが気になっていたが、あえて聞きもしなかった。レシカはすぐに帰るからとリクに言い、家を出る。

その時、レシカの身体を包み込むように、巨大な木がせり上がってくるのをリクの視界は捉えた。

「な……んだ？」

リクは突然目の前で起こった出来事を理解できずにいた。しかし、本能的に危険を感じ取ったのかリクは叫んだ。

「レ……レシカ……！」

レシカはその巨大な木に飲み込まれるかのように、捕らえられていた。身体のほとんどは侵食していて、木を破壊しない限り、救出は不可能なほどだった。レシカ自体はかろうじて意識があるようだ。

「リ……ク……」

擦れるようなレシカの弱々しい声に、レシカが弱っていることを瞬時に察したリクは、レシカの元へ走ろうとする。その時、レシカが包み込まれている辺りから聞いたことの無い声が聞こえた。

「ケケケケツ！ お前がリクか！ 探したぞー！」

「コレはお前の仕業か！？ すぐにレシカを離せ！」

「ケケケツ！ お前が大人しく殺されるんなら考えねえでもねえぜ

！ ケケケッ！」

「貴様……何者だ？」

「俺か？ ケケケッ！ 俺は、”七曜”の一人。ゼリスム。属性は木。お前を殺す者だあ！ ケケケッ！」

リクに衝撃が走った。目の前にいる男は星の導きの狂部隊七曜。

つまり、ゼリスムの目的はリクであり、レシカではない。レシカはリクと星の導きの戦いに巻き込まれたのだ。リクはそれを瞬時に理解し、絶望した。

自分といた為に、レシカは命の危険に晒される事になった。自分といた為に、レシカの幸せな生活を奪ってしまった。リクは、自らの怒りと憎悪で心がはち切れそうになっていた。

「レシカを……」

「あーん？ きこえねえな。ケケケッ！」

「レシカを……離せ！ アルタイル！」

リクは右腕をゼリスムの方へと向ける。すると、リクの腕を覆っていた紅い布が、姿を変え、銃の形態へと変化した。そして、間髪いれずにリクは発する。

「アエシユマー！」

刹那、銃からエネルギーの塊が発射された。ゼリスムは手を天高く上げた。すると、ゼリスムの前に巨大な木の塊がせり上がってくる。リクの放った攻撃は、その巨大な木に直撃した。

瞬間、激しい閃光と爆風が辺りを巻き込んだ。そして、巨大な木は一瞬にして跡形もなく消し飛んだ。激しい閃光により視界が狭くなったゼリスムは目を覆う。その隙をリクは見逃さず、一瞬にしてその距離を詰めた。ゼリスムがリクの接近に気が付いた時には既に時遅く。リクの拳は、ゼリスムの顔面を捉えた。

「あああああああッ！！」

リクの左手によるゼリスムへのラッシュが続く。リクの圧倒的攻

撃により、ゼリスムは巨大な木から地面へと叩きつけられた。しかしリクの攻撃が止むことは無い。ゼリスムの意識が遠のきかけた時、リクの耳に突如叫び声が聞こえた。その声にリクは手を止め、振り返る。

叫び声を上げているのはレシカだった。レシカの身体を侵食している木が、レシカの身体を締め上げているのだ。その痛みに耐え切れず、レシカは言葉では表現し難いような声を出していた。

そして、敵を目の前にしてレシカのほうを振り向いたリクの隙を、七曜であるゼリスムが見逃すはずもなかった。ゼリスムは、不適な笑みを浮かべる。

「ケケケツ 馬鹿が……」

そして、轟音が空に鳴り響いた。

「ケケケツ、馬鹿が……。敵を目の前にして視線を逸らしてんじゃねえよ」

頭からも口からも血を流しているゼリスムが、倒れているリクに向かって言う。リクは、地面に倒れ完全に気を失っているようだ。ゼリスムは、リクの元へと向かっていく。そして、リクの元へとたどり着くと、リクの頭を鷲掴みにし、上半身だけ持ち上げる。

「ケケケツ、さっきのお返しだ」

そう言っつて、ゼリスムは気絶しているリクの顔面を殴り始めた。何発も、何発も。

——リクにとっての大切なものが一つ増えた。

それは、リクが今まで求めていたものとは違い、何かを破壊するものではなく、守るべきもの。自分のなにを捨てても守りたいもの。それを守っている時だけ、その人の笑顔を見ている時だけ、そ

の他の全てを忘れることが出来る。

それが、何者かの手によって邪魔されるならリクは再び、その心に炎を灯すだろう。過去、リクの唯一の幸せを奪ったもの。それがこの世にいる限り、永遠に本当の幸せはやってこない。事実、リクはほんのひとときの幸せすらも、得ることができない。

『幸せ』ではなく、『死合わせ』。この世にある全ての因果を断ち切らない限り、それは永遠にリクから離れることはない。故に、リクは己を犠牲にしても、目的の為に障害となる何を排除しても、全てを破壊する。大切なものを守るために。例えそれが、自分の力を超えたモノであっても……。

過去も、今も、そしてこれから先も……。

月のカケラは人の心に呼応する。扱うものの心次第でそれは、様々な変化をもたらす。また紅い月の産物は、持ち主の意思を極限まで取り込む。そして、月の産物は”自ら”その役割を達成しようとする。

リクの顔面を、殴り続けているゼリスムの眉間に冷たいものが触れる。それに気が付いたゼリスムは咄嗟にリクを離し、その場から後退する。そして、ゼリスムは目撃することになる。

ゼリスムがリクの頭から手を離れたことにより、気絶しているリクの身体は再び地面に臥せる。しかし、リクの持つ月の産物アルタイルはそれを許さず、リクの右腕を上げ、紅い光を放っている。

「な、なんだ。アレは……」

その異様な光景にゼリスムは、本能的に身を一步引いた。

その瞬間、アルタイルは反応し、銃口をゼリスムの方へと向ける。そして、巨大なエネルギーの塊を放つ。咄嗟の出来事に、ゼリスムは木で自らの身体を防御しようとするが、その攻撃は、ゼリスムが出した木を軽々と突破し、ゼリスムの肩に傷を負わせた。

「がああああああ！！」

ゼリスムの肩からは血が吹き出している。ゼリスムは一瞬自分の肩に目をやったが、すぐにリクの方を見る。だが、そこにリクの姿はなかった。

「どこに行きやがった？」

背後に気配を感じたゼリスムは後ろを見る。そこには、明らかに気を失っているリクが、アルタイルを纏った右腕をゼリスムに突き出していた。その光景はさながらゾンビのごとく恐ろしい光景だった。

「こいつ、気を失ってやがるのに、どういうことだ。なぜだ。なんでそんな身体で立っていられるんだ？」

リクの持つ月の産物は、紅い月のカケラより創造された。そして、リクは月のカケラの暴走現象の一つダウンバーストを起こし、髪が赤くなっていた。これはつまり、リクの意味が月のカケラにそのまま伝わり、月のカケラの”意思”がリクにそのまま伝わることを意味する。よって引き金を引かなければ、発動できないはずのアルタイルではあるが、リクの肉体は月の産物の意志により操作され、リクの意思を忠実に実行する。

リクの目的は、星の導きへの復讐か、レシカの救出か。結果的に言うところの時、リクの復讐心がレシカを救出したいと思う心よりも勝っていた。故に、この結果はリクの意味とも言える。リクの意味が達成されなければ、月の産物は、止まることはない。

ゼリスムは叫びながら、月の産物を発動させ、巨大な木をいくつも出した。木は、一つに纏まり巨大な塊となる。

「ケケケツ、俺を本気にさせやがったな。俺にこの技を出させた時点で、てめえの死は決定した。あの世で後悔するんだな」

そう言うのと、ゼリスムはその巨大な塊をリク目掛けて放つ。それは凄まじい勢いでリクに接近する。だが……。

その塊は、一瞬で、この世から跡形もなく消え去った。リクの持つアルタイルからの一発により。ゼリスムにとつての予想外。己の持つ最高の技。それをあっけなく返された。月の産物は、人の心に呼応する。それはゼリスムの持つ月の産物も例外ではない。心の折れたゼリスムの月の産物は、もはや発動が不可能なほどに使い物にならなくなっていた。

そして、追い詰められたゼリスムがこの時とつた行動は、考える限り最も最悪な悪手であった。

「動くなー！ 動くとその女の命はねえぞー！」

ゼリスムのとつた行動。それは、レシカを人質に取るということ。そうすることで、リクの動きを止め、自らの逃走手段の確保。あわよくばリクを殺すチャンスを得ようとした。

もし、この時レシカが衰弱していなければ、レシカを人質にとつたまま逃走することも可能だったかも知れない。しかし、レシカはゼリスムの攻撃により衰弱していた。動けない人質などただの荷物としかなり得ない。

もし、この時リクに意識があれば、レシカを人質に取ることでもリクの動揺を誘い。一瞬でも隙を得ることが出来たかも知れない。しかし、今のリクは意識がなく、月の産物の意志により身体を強制的に動かされているだけである。

いずれにしても、ゼリスムのとった行動は悪手以外の何ものでもなかった。ただ、それはゼリスムにとってだけではなく、リクにとっても悪手であった。

アルタイルはリクの意思に従い動いている。リクの意味は、星の導きへの復讐。悪手により身動きが取れなくなったゼリスムを、月の産物が見逃すはずがなく、レシカを人質に取っているゼリスムの方へと、アルタイルの銃口は向く。

「お、おい。この女も一緒に殺る気かよ。分かってんのか？　こんな位置で、発動したらこの女もただじゃすまねえぞ。おい！！」

ゼリスムの言葉はただ虚しく響くだけである。そして、アルタイルの銃口にエネルギーが収束されていく。

「く……」

その時、レシカの意識が微かに覚醒した。

「リ……ク……」

レシカの目には、ゼリスムの攻撃を受け、血だらけになり、意識を失いながらも、立っているリクの姿が映った。

「ご……めんね。あな……たを……助け……て……あ……」

「くっそおおお！！」

ゼリスムの叫び声が、レシカの微かな声を掻き消した。そして、それが合図となり、ゼリスムとレシカをアルタイルに収束されたエネルギーが襲った。

激しい閃光と轟音が辺りを一瞬にして灰とし、一瞬で全てを掻き消した。そこに残るものは何もなく、レシカを捕らえていた巨大な木も跡形もなく、消え去った。

アルタイルの意思により立ち上がっていたリクも、目的を終えアルタイルの発動が解けると足を崩し、地面に伏せた。そして、辺り

は静けさを取り戻す。

——リクの闇はより一層深くなった。

Act 44：裏世界の試験

ここはとある場所のとある地下にある広場。この広場はゆうに500人は収容できようかと言う広場である。そこに集まった500人ほどの人達。みな各々が自らの武器を手にし、ガヤガヤとしている。その広場の一角には扉があり、その扉はゆっくりと開かれた。

「集まってるな」

扉から現れたのは、以前ティキ達が麻薬ソーマのアジトに行った時に現れた狂部隊”七曜”の一人であり、副リーダーであるソルだった。

突然現れた少年の姿に、その場にいた者達がざわめく。

「よく集まってくれたな。今日は集まってもらった理由については、最初に渡した資料を見てもらって分かるように、先日七曜の一人であるゼリスムがやられた。よってその代わりの人間の補充だ。今からお前達には試験を受けてもらう。合格したものだけが、次の最終試験に進める」

「試験？」

その場にいた筋肉質な男の一人が言った。

「質問は受け付けない。試験の内容も実に簡単だ。七曜はまず大前提として強い者が求められる。よって弱い人間は必要ない。そこでだ。これからこの場で殺し合いをしてもらう。生き残った一人が最終試験に進めることになる」

突然のことに集まった男達は、ざわめき出す。

「それじゃあ、俺がこのドアを閉めたら開始だ」

「ちよつと待てよ」

ソルがドアの取っ手を持つとした時、一人の男が言う。

「殺し合いだと？ 俺達は、そんなことでここに集まったんじゃない。それに……、てめえみたいなガキの言う通りにする義理もねえぞ」

結論から言うと、この場にいた者のほとんどが、この時の男の発言に同調したのは事実である。しかしすぐにそれが愚かな事だと、気が付かされることになる。

「そうか、ならどうする？」

「こんな場所にくるんなら、ガキとは言えそれなりの立場なんだろう？ だったら話は早え。お前をとっ捕まえて上に掛け合っただよ。俺を七曜のメンバーに入れろってな」

そう言いながら、男は両手の指を胸の前で鳴らす。

「そうか……、なるほどそれは名案だな。ただ……、お前程度にそれが出来るのか？」

「実践してやるよ！」

そう言いながら、男はソルに掴みかかろうとする。しかしそれはどこからともなく現れた巨大な腕によって阻止される。巨大な腕は、ソルの背中から生えている。

「なん……だ？」

男は何が起こっているのかさえ、理解できていない。巨大な腕は、男の腕を掴むと男の身体ごと持ち上げ、振り上げ前方に投げ飛ばした。投げ飛ばされた男は、後方の壁まで飛んでいき、壁にぶつかって気絶した。それを見た他の男達は、息を飲み、場は一瞬にして沈黙が支配した。

「他にあの男の案に乗ってくる奴は？」

ソルの言葉に対して誰も答えるものはいない。

「いないなら、開始だ」

そう言いながらソルは、ドアを閉めた。その瞬間、広場からは地響きが起こりそうなくらいの、大きな声が木霊する。それは、雄たけびであつたり、叫び声であつたり、断末魔であつたりと様々だ。しかし、ソルの予想とは裏腹に、そんな大声も数分も経たない内に

消えてなくなった。

ドアの反対側にいるソルには、中で起こっていることを確認はできない為、再びゆっくりとドアを開け確認する。そこにはソルの予想を遥かに上回る光景が広がっていた。

約500人もいる大の男達が、全員床に這いつくばって息絶えている。その光景はまさに地獄絵図。惨劇。そして、倒れている男達の遥か奥にいるのは、黒い髪に黒い剣を持った一人の少年だった。少年は、澄ました顔で、ソルの方を見ている。ソルは、その少年の方へと歩み寄っていく。

「キミがやったのか？」

ソルの問いかけに、少年は無言で首を縦に振った。

「そうか、フッフ……お前は合格だ。最終試験へと移行してもらおう」

ソルが最終試験について、説明しようとした時、二人の頭上から不気味な囁き笑いが聞こえてきた。その声に驚き二人は頭上を見る。「クスクス、私も仲間にいれてー」

そこには天井からぶら下っているまだ見た目幼い少女がいた。ソルは正直驚いていた。この少女の存在にまったく気が付かなかったことに。気配を完全に殺し、自分の頭上にいた少女。

「やるじゃないか。いいだろう。お前達二人共合格だ。最終試験について説明するぞ。最終試験は……」

ここは、ウォーターリファリンという国名を持つサガルマータ。別名”水の都”。遙か上空に存在し、雨雲よりも遙か上空に存在するサガルマータには珍しく、水を基調した国家である。

遙か昔、各地にてサガルマータを建設していた時の話である。生活用の水を貯め、使用するために貯水用のサガルマータが必要だった。このサガルマータの存在によって、長期間に及ぶサガルマータの建設効率が飛躍的に上がったのは言うまでもない。そしてサガルマータの建設が終わった頃、今度はこのサガルマータにて都市の建設が始まった。当時使用していた水と循環システムはそのままに、水の上に都市を作る形で。

そして、ウォーターリファリンは世界に誇る水の都として、景観都市として、世界中に名を馳せることになった。それ故に、ここには多くの人が集まる。その為、多くの情報が行きかう国でもある。ティキ達がまずここに降り立とうとしたことになんら不自然はない。

ウォーターリファリンに降り立ったティキ達は近くの喫茶店へと入る。とりあえず水分補給とこれからの動きを決める為だ。

「さてティキさん、これからどうしますか？」

「セイ・ユグレシア国へと行く前にやる必要があるな。まずは新しいリバティーの購入、そしてその為の資金集め。それにこれは俺個人の我侭だけど……リクに会いたい」

その言葉にリディアとルクスは黙り込む。リクが置かれている状況を考えれば、ティキが会いたいと思うのは当たり前のことである。国に利用され、ボロボロになっているであろうリク。星の導きという巨大な組織を一人で相手していると思うと、ティキはすぐにでもリクに会いたいと思っていた。

「ティキ……」

「でも今、リクは消息不明なんだよな？」

「ええ、リクさんは政府関連の施設での、七曜の一人との戦闘後に行方が分からなくなっています。動向も分からず、痕跡もない」

「そうか。……まあ、今出来ることはとりあえず金稼ぎだな」

ティキ達の席にそれぞれ頼んだ飲み物が、置かれた。

「でもどうします。有効な金策でもあるんですか？ 国の援助金は対象外ですよ？」

ルクスはティキの方を見る。

「ああ、悪いけど俺はそれだけは嫌なんだ。それを受けてしまったら、俺の今までの人生が意味を失くしてしまう」

「金策か。……あつ！」

リディアは突然なにかを思い出したような声を出す。

「どうしたリディア？」

「思い出したよ。あるじゃんあたし達にピッタリのお金を得る手段が」

「え？ どんなことだよ？」

「前にプレシデントさんから言われたでしょ？ ”共同討伐依頼”」

「あつ！ そうか、ゴタゴタしてて完全に忘れてたよ。そういえばそんなのがあったな。確か、オームを狩ってそれで出てきた月の力ケラを国に売る仕事だよな？」

「うん、この仕事なら同盟国のどこでも買取はしてくれるしね。幸いこの国も同盟国だし、月の産物を持つあたし達三人がいれば、案外簡単に月の力ケラも手に入るかも知れないしね」

「月の産物で思い出したけど……」

ティキが突然なにかを思い出したかのように言う。

「リディアの月の産物……発動しなかったんだよね？」

ティキの言葉にリディアは少し悲しそうな表情を見せた。

「うん、あれから何度か試して見たんだけど、一向に発動しないの。こんなこと初めてだから原因も分からなくて」

ティキとリディアの会話を聞いていたルクスが、横から会話に入ってくる。

「前にアイシスさんに聞いたんですが、月の産物が発動しないのは、いくつか理由があるみたいです。その中でも主な理由は、月の産物が持ち主の心に呼応出来ないことによって起こるそうです」
「呼応できない？」

「はい。例えば、戦いによって完全に負けを認め心が折れてしまった場合。月の産物は心に忠実に呼応しますから、戦意を失えば月の産物の発動は非常に困難です。後、なにかに心の呼応が邪魔されたり、分散されたりしても発動できません。だから、二つの月の産物を同時に扱うことは、相当訓練を積んだ人でも難しいんです」
「でも、それだと今も発動できないのはおかしいよね？」

リディアが最もな質問をした。

「ええ、確かに。後、ひとつ原因と考えられる可能性のあるのが、そのリディアさんの抱えている奇妙な生物です」
「え？」

ルクスの言葉にティキとリディアは反応する。

「リディアさんの話だと、確かその奇妙な生物は月の力ケラが変化してできたって言うてましたよね？　もしかしたら、その生物は月の産物と同等のモノで、その奇妙な生物の所為で、発動できないのかも知れませんよ？　リディアさんに懐いているのは、リディアさんと心の波動が合っているからかも」

「タッピーがあたしの月の産物の発動の邪魔になってるってこと？」
ティキとルクスは一瞬固まる。しかし、ティキがリディアに質問をした。

「……なんだよ。タッピーって？」
「ああ、この子の名前。ずっとタタタタタって『タ』の一言しか言わないから、タッピーって名前付けたの。可愛い名前でしょ？」
そう言いながらリディアはタッピーの頭を撫でる。

とその時、ルクスの携帯が鳴った。ルクスは携帯を手にとると、ティキとリディアに外に出て話してくると伝えて外に出て行った。

そして、ルクスが出て行ったのとはほぼ同時にティキはトイレに立った。そして、座席にはリディアとタツピーだけが残った。

リディアが、飲み物を飲みながら二人が戻るのを待っていると、一人の男が声をかけてきた。

「よー、お姉ちゃん。ひとりー？ 良かったら一緒にお茶でもどう？」

「え？」

リディアは、突然見知らぬ男に声をかけられ戸惑った。

Act 45：その男、危険につき……

リディアに声をかけてきた男は、派手な金髪で髪を逆立て、耳にはピアス。黒のタンクトップを着ている男だった。見た目には、どこぞの不良という感じだが、その目にはしっかりとした意思が宿っているような面持ちをしていた。

「俺様の名前は”ヴィート”。世界一のトレジャーハンターさ」

リディアが特に聞いたわけでもないのにヴィートという男は、勝手に自己紹介を始めた。

「年齢は、19歳。身長は182cm、体重は77kg。血液型はB型。夢はトレジャーハンティングで、世界の誰もが認める大秘宝を探し当てること。そんな俺様は幼い時から、失われた古武術を学んで、月の産物とかいう武器なんか使わずに、この腕一本で世の中を渡ってきたんだ。そんな俺様は生まれてから一度も負けたことがない。ケンカでも人生でも、女でも。あ、だからって別に負けず嫌いなわけじゃないぜ。ただなんて言うか、世間が俺様の實力よりも遥かに格下だから、どうしても勝ってしまうってことだぜ。まあだからと言って俺様はただ怠けてるわけじゃない。ちゃんと見えない所で努力はしてるんだ。見てくれよこの筋肉。毎日のしつかりとしたトレーニングのたまものって奴さ。どうだい。触ってみるかい。あ、でも何も人生とかケンカで勝つことが全てじゃないぜ。俺様が大事にしてるのは、女の子を守ることだから。やっぱ世の中可愛い子って多いじゃん。それら全ての女の子を自分の手で守れば最高だとおもわねえか。俺様は女を泣かせる奴は絶対許さない。そんな奴は人間のクズだ。例えどんな理由があろうとも、女の子だけは絶対泣かしちゃダメだ。だってそうだろ。それじゃあ、女の子の笑顔は見れない。それじゃあ、面白くないしな。あ、でも俺様が今一番見たい笑顔はどんな女の子のよりも、キミの笑顔なんだけだな。俺

といたら楽しいぜ。いろんなところに連れてってやるよ。どこ行きたいかな。夕日が綺麗なことか。夜景が綺麗なことかどうかな。まあ、でもどんな綺麗な場所でもキミの笑顔に比べれば霞んで見える虚しい風景だけだな。あ、ところでキミの名前なんて言うの？」

まさにマシಂಗントーク。リディアは相槌すら打つ暇もなく話が勝手に進んでいくことに啞然としていた。ヴィートという男の長話の間に、ティキはトイレを済ませ戻ってきた。そして、リディアの方を向いて言う。

「おい、リディアそろそろいくぞー」

ティキの言葉にヴィートは反応する。

「あ、うん」

返事をしたリディアは席を立ちティキと一緒に店を出て行く。リディアからしてみればヴィートから逃れる良いきっかけが出来たという思いがあつた。しかし、状況をまったく知らないヴィートは、ティキが呼んでそれにリディアが反応するという図式からまったく別の答えを出していた。

「へへへ、野郎が彼氏か。二人で喫茶店にお茶でも飲みに来たってか。ゆるさん。この世の女は全て俺のもの。だが、名前は分かったリディア……リディアちゃんか。いい名前だ。あんな優男のどこがいいのか知らねえが、必ず俺の女にしてみせる」

ヴィートの中で、密かな闘志が芽生えた瞬間だった。

「何を一人でブツブツ言ってるんですか？」

ヴィートの背後から声をかけて来たのは、茶髪に帽子を被り、眼鏡をかけた男だった。

「よお！ レティン。やっと来たか」

「私はずっとこの喫茶店にいましたよ。あなたが遅刻してきたのによく言いますね。まあいいでしょう。それよりさっさと仕事に取り掛かりますよ。そして、必ずアレを手に入れるのです」

「分かってるよ。その為に俺は雇われたんだからなっ！」

ヴィートはそう言いながら胸の前で握り拳を作る。レティンと呼

ばれた男は、ティキ達が出て行ったドアのほうを見ながらそつと呟いた。

「それにしてもさっきの男。どこかで見たような」

レティンは、そんな気を微かに抱きながら、ヴィートと共に同じ席に座った。ヴィートは席に座るや否やすぐにパフェを頼んだ。

一方、外に出たティキとリディアは外で携帯電話を使って話しているルクスを見つけた。話の内容をこっそりと聞いていると、どうやら国からの電話らしいことは分かった。ただ、雰囲気的にはティキ達には直接関係はなくルクスの仕事の話のようだった。

話を終えたルクスは、携帯電話を鞆にしまうとティキ達に気が付いた。

「あ、ティキさん。さっそくアンクレストに行きますか？」

「そうだな、けどアンクレストに行った所で簡単にオームが現れるとも限らないし、月のカケラが手に入るとも限らない。もう少しなにか情報があればいいんだけどな」

「あー！」

リディアが何かに気が付いたような声を上げた。

「どうした？」

ティキがリディアに尋ねる。

「あるじゃん。簡単に情報を得られる所。アンクレストに行つてオームを倒して月のカケラが出たとして、そしたらどこに持つて行く？」

ティキとルクスは一瞬考え込むが、すぐに答えが分かったかのような顔をした。

「分かった？ そう、月のカケラの引換所。そこに行けば、月のカケラを持ってきた人の情報が分かるし、持ってきた人が分かれば、月のカケラを手に入れる為のヒントが見つかるかも知れないじゃない

い」

「今日はいつも以上に冴えてるなりディア。じゃあ、さっそく引換所に行ってみようぜ」

ティキ達は、ウォーターリファリンの中心街へと向かった。

ウォーターリファリンの中心街は、水を基調とした建物で溢れている。主に噴水や滝など景観都市の名に恥じない美しい造りとなっている。引換所の場所は一律して国が管理する場所にあると規定で定められている。それを知っていたリディアは、国が管理している場所を地図で調べてすぐにその場所を割り出した。

頭の冴えているリディアの活躍により、すぐに引換所に着いたティキ達はさっそく中に入ってみた。

中に入ると、引き換えカウンターと思しき場所に一人の女性が座っていた。ティキはさっそくその女性に話しかけた。

「すいません。ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「はい？　なんででしょう？」

女性はティキの顔を見ながら笑顔で答える。

「最近月のカケラを持ってきた人っていますか？」

「……ええ、いますよ」

「何か……その人のことで分かることありますか？　名前とか、どこに住んでるとか」

「すいません。個人情報をお話すわけには……ただ、今も来てますよ。向こうの部屋で鑑定を受けてます」

そう言うと、女性はカウンターから見えるドアを指さした。女性とティキの会話を聞いていたルクスが、女性に話かける。

「ちよつとすいません。今、あなた『今も来てるって』って言いましてよね。ってことはその人はよくココに来るんですか？」

「ええ、以前は月に一回くらいだったんですが、最近は毎日来ます」

「毎日って……毎日、月のカケラを持って現れるってことですか？」
「いえ、月のカケラは大体週に一回ペースで持ってきてくれるんですが、それ以外の理由で来ることが多くてですね」

女性の言葉にティキ達は、疑問を抱いていた。女性との話がちょうど途切れたとき、女性が先ほど指さしたドアが開き中から男が出たきた。

「エミリアちゃん、おまたせー！ 今、終わったぜー！」

扉から男が大きな声を張り上げながら出てきた。男はそのままカウターに座っている女性に近づき女性の手を握った。

「今日の報酬は少なかったけど、エミリアちゃんとデートに行く為の資金に使っぜ。だから、今夜時間空けといってくれよな！」

「あ、ごめんなさい。今日は仕事終わってから大事な用事があった……」

「えー！ そつか、残念。分かったよ。じゃあ、また明日誘っよ」

男は残念さを全身に醸し出して言う。男と女性の会話を見ていたリディアは何かを思い出すように声を上げた。

「あー！」

リディアの声に全員が反応し、リディアの方を見る。そして、リディアの方を見た男はリディアと同じように声を上げた。

「あー！ リディアちゃん！ なんでこんなところにいるんだ？」

「やっぱりアンタさつき喫茶店で会った……確か、ヴィート？」

「おおっ！ 俺様の名前覚えていてくれるなんて、やっぱりリディアちゃん俺様に興味があるんだろ？」

「いやいや、ないから。ってかなんでアンタあたしの名前知ってるの？」

「さつき喫茶店で銀髪野郎がリディアちゃんの名前呼んでるの聞いたんだよ。なあリディアちゃん、今夜暇？ 良かったら俺様とデートしない。この街にさいい店知ってた。金の心配してんなら俺様がおこつてやるから安心しなよ」

「あのさ。さつきも思っただけど勝手に話進めないでくれる？ あた

し強引な男って嫌いな」

「またまたー！ そっか、ここに来たのも俺様に会いに来たんだな？俺の名前覚えてたし、喫茶店からここまで俺をつけて来たんだろ？」

リディアは内心ウザイと本気で思っていた。人の話は聞かずに自分の話ばかりするこの男に、嫌気が差してきていた。そんな会話に半ば強引に入っていったのはティキだった。

「なあちよつと、リディアが嫌がってんだろ？ いい加減にしるよ」

「ああ！？」

しかし、ティキが会話に入ったのは月のカケラに関する内容の話ではなかった。

「てめえさっきの銀髪か。リディアちゃんと付き合ってるからっていい気になんなよ？」

その言葉にリディアが反応する。

「付き合っていない！ それより、ヴィートあなたに聞きたいことがあるんだけど」

「おう。なんでも聞いてくれ。俺様の年齢か？ 血液型か？ 誕生日か？ それとも好きな女のタイプか？」

「全然違う。あなた月のカケラを良く持つてくるそうね。今もそうだったんでしょ？」

「ああ、そうだぜ。オームをぶっ倒して出てきた月のカケラを持つてきてんだ。なんだ？ 凶暴なオームを倒せる俺様がカッコよく見えるのか？」

「それよ。あたし達が聞いた話では、オームから月のカケラが出現する確率ってかなり低いって聞いたのに、あなたは週に一回は持つてきてるそうじゃない」

「……正確に言うと、月のカケラを持つてきてるのは週に一回だが、月のカケラ自体は週に3〜4個は持つてきてるぜ。なんだ？ 俺様に聞きたいことってのはそういうことかい？」

「うん。あたし達どうしてもこれからの活動にお金がいるから、月

のカケラを売りたいんだけど、肝心の月のカケラの出現方法ってのが分からなくて、それであなたにその方法を教えてほしいの」

「なるほど……ねえ」

グイートは腕を組みながら周囲の様子を観察する。そして視線を再びリディアに戻した。

「いいぜ。教えてやるよ」

「ほんとっ！？」

「ただし、条件がある」

「え？ 条件？」

「そう。明日一日、俺様とデートすること。その条件を守れるなら教えてやる」

その言葉にその場にいた全員が驚きの声を上げた。

Act 46: ヴィートとリディア

「おーす！ リディアちゃんお待ちせ！」

ここは、ウォーターリファリンの中心部にある広場の中にある噴水の前。そこでヴィートを待っていたのは、リディアだった。いつもの服装とは違い、薄化粧をし、服装も雰囲気もいつもと少し違うリディアの姿があった。

「女の子を待たせるなんて第一印象は最低ね」

「悪い悪い。お詫びにコレを」

そう言ってヴィートが差し出したのはバラの花束だった。今までそんなことをされたことがなかったリディアはその光景に少し驚いた。

「馬鹿じゃないの？ そんなもん持って歩けっの？」

「とか言って嬉しい癖に。まあ、でも確かにそうだな、じゃあデートが終わるまでは俺が持つててやるよ」

「リディアのやつ、うまく聞きだせるかな？」

リディアとヴィートを少し離れた所から監視しているのはティキとルクスだった。リディアのことを心配している二人は二人には内緒でこっそりと後をつけていたのだ。

「それにしてもまさかりディアがデートに応じるなんてビックリしたよ」

「そうですね。でもティキさんは月のカケラの手がかりを得るために誘いに乗ったって思ってるんでしょ？」

「思ってるんじゃないくてそれが事実なんだよ」

ティキは昨日のことを思い出していた。

『そう。明日一日、俺様とデートすること。その条件を守れるなら教えてやる』

『はあ？』

リディアはヴィートの誘いに心底驚いている。

『別に困ることでもないだろ？ 俺様は、リディアちゃんとデートしたい。そして俺様とデートすることでリディアちゃん達は月のカケラの情報を得ることが出来る。お互いにとって不利益なことはなにもないはずだぜ？ しかも、一日デートしてリフレッシュして楽しんでまさに一石二鳥じゃねえか』

リディアはヴィートの言葉に考え込む。

『……分かった。でも月のカケラの情報を絶対に教えることが条件だよ』

『俺様を信じろって。俺様は女の子には絶対嘘はつかない。その変わりこつちもひとつ条件というか提案がある。明日のデートにはちゃんとしたデートの格好で来ること、適当な格好はやめてくれよね』
こうして、月のカケラの情報を得る為にリディアはヴィートの誘いに乗ったのである。

ティキが昨日のことを思い出していると、ルクスが声をかけて来た。

「あ、ティキさん。二人が移動しますよ。どこに行くんでしょうかね？ ワクワクですね」

「なんかルクス嫌に活気づいてないか？ まるで水を得た魚のように」

「ティキさんでもそんな言葉知ってるんですね。僕は、尾行とかスパイ活動のこつちが本業ですからね。こういうのは得意ですよ。任

せてください」

「おお、頼もしいな」

そうこういつてる間にリディアとヴィートは移動し、その後ろからこっそりティキ達はつけていった。

リディアとヴィートが行った先はなんのこともない普通の場所。ショッピングをし、食事をし、映画を見て、観光をする。本当にただのデート以外の何ものでもなかった。ずっとリディアにも内緒で後をつけてきたティキとルクスは、時間が経つにつれてだんだん虚しくなってくるのを感じていた。

「なんか俺虚しくなってきた。一体何やってんだ俺……」

「あれ？ どこ行くんですかティキさん？」

「ホテルに帰るんだよ。よく考えたら俺達が尾行する理由なんてねえじゃん。リディアが帰ってきたらゆっくり話を聞こうぜ」

ティキとルクスがその場を去ろうとしたとき、ティキ達の横を一人の女性が走っていった。その女性はそのまま前を歩いていったヴィートにぶつかるのと衝撃に負けて尻餅をついた。

「いたた……」

それに気がついたヴィートは女性に声をかける。

「おおー、大丈夫か？ 綺麗な人だな。名前教えてよ。後、連絡先も教えて。あ、俺様の名前はヴィートってんだ。こんなに慌ててどつしたの？ 今夜開いてる？ おいしいお店があるんだけど今夜どう？」

ヴィートのマシンガントークが始まるうとした時、リディアの拳骨がヴィートの頭に直撃した。

「いつてー。何すんだよ。リディアちゃん」

「何すんだよじゃないわよ。あたしという時に他の女の子をナンパするってどういうこと？」

「あ、いや……決してそういうことではなく」

ヴィートとリディアがやり取りをしていると女性は立ち上がりヴ

イートを見て言う。

「すいません。急いでるんです。ごめんなさい」

そう言う女性再び走り出した。ヴィートはその女性が走り去ったのを確認するとリディアに謝った。

ふとヴィートは気がついた。道に何か落ちている。それは先ほどの女性が落としたものだろうか、ヴィートはそれを拾い上げる。それはなにやら錠剤のようだった。

「これは……麻薬？」

「え？」

リディアはヴィートの持つそれを見て、ヴィートの言葉を聞いて思わず口に出た。

「まさか……ソーマ？」

「ソーマ？　なんだそりゃ？　聞いたことねえな」

「ソーマは月のカケラの粒子を利用した麻薬よ」

「ふーん」

ヴィートは錠剤をジッと見る。

「でもこれはソーマじゃねえと思うぜ。今、巷で流行している飲む

麻薬”ダブルエックス” X X ”」

「ダブルエックス？」

「ああ、比較的安価で手に入るからガキ共に人気があるんだ」
ヴィートは一瞬沈黙する。

「リディアちゃん……」

「ん？」

「今度デートの続きしてくれるとありがてえ。俺様は、あの子ほっとけねえから行くわ」

そう言うヴィートは、さきほどの女性を追いかけるように走り出した。しばらく走ると丁字路に差し掛かる。

「あれ？　右だっけか？　左だっけか？」

「何やってんの？　右でしょ」

ヴィートが右か左かを迷っていると後ろから声が聞こえた。

「リディアちゃん!？」

「あたしも一緒に行くわ。あんただけじゃあの女の子に何するか分からないし」

「ひでえ。俺様は女の子が嫌がることはしないぜ」

「よく言うわね。……でも、少し見直した」

リディアはヴィートを笑顔で見る。それに答えヴィートもリディアに笑顔で返した。

「ホラ行くわよ。早くしないと見失うわよ」

リディアとヴィートは女性を追いかける。

「おい、ルクス。俺達も行くぞ」

「ええ、ていうかこういう状態ならもう堂々と出て行けばいいのに」

「いいんだよ。俺達はギリギリまで様子見だ」

そう言つと、ティキ達もリディア達の後を追いかける。

Act 46: ヴェイトとリディア（後書き）

半年振りです。すいません。ゆっくり更新していきたいと思っています

Act 47: ヴィートとリディア2

ここは人通りの少ない裏路地。そこに立ち群れているのは町の不良グループだった。

「おい、きたぜ」

その内の一人が、路地の表のほうを見ながら言う。そこに走ってきたのは先ほどヴィートにぶつかった女性だった。

「ちゃんと持ってきたんだろうな？」

女性は息切れしながらカバンの中を探る。

「おい、早くしろよ」

催促する不良達だが、女性はカバンの中を必死な形相で探す。女性の顔から徐々に血の気が引くのが分かる。女性がいつまでもカバンの中を探っている様子を見て、不良の一人が言う。

「おい、まさか失くしたんじゃないんだろな？」

「そんな、確かにこのカバンに入ってたのに」

「ちっ」

不良が女性の顔を殴る。女性はその衝撃で尻餅をついてしまった。

「つたく、運び屋程度も使えねえのか。この役立たずが！」

「おい、どうするよこの女」

不良グループの一人が言う。

「こいつが落としたヤクで足が着いたら面倒だな。仕方ねえ始末するか」

「え、ちょっと待って。すぐに見つけてくるから助けて」

「うるせえよ。自業自得だろ。てめえのミスだ。てめえの責任で死にな」

不良グループの男はそう言いながらナイフをポケットから取り出す。それを見た女性は腰を抜かしてへたり込む。

「おいおい。ガキ共が物騒なモン持つてんなよ」

どこからともなく聞こえてきたその声に驚き不良グループは辺りをキョロキョロする。すると、裏路地の影の部分から一人の男がゆつくりと歩いてきた。それはヴィートだった。遅れてリディアもやってくる。

「なんだ。てめえ等は？」

「ただの通りすがりさ。おめえ達に名乗るような名は持ち合わせてねえぜ」

そう言いながら、ヴィートは両手を胸の前で構える。

「ふんつ。何者でもカンケーねえ。この現場を見られたからにはてめえ等も生かして帰すわけにはいかねえな」

男はナイフをヴィートに向けて構える。それを見たリディアは自身の月の産物が使えないことも忘れて月の産物の準備をしようとす。しかしそれはヴィートによって止められた。

「いいよ。リディアちゃんはそこで見てくれ。俺一人でヨユーだからさ」

ヴィートはそう言うと、一步前へ出る。

「こいよ。全員まとめて相手してやる」

それが合図となったのかナイフを振りかざし男は、ヴィートに迫る。だが、男の動きはそこで止まる。男は腕を振り上げたまま動くことが出来ない。それもそのはずである。ヴィートが背後に回り、男の腕を掴んでいたのだから。

「な……。てめえいつの間に？」

男はヴィートがいつの間にか後ろにいたことに驚いていた。だが、驚いていたのは傍で見えていたリディアも同じだった。客観的に状況を見ることが出来るリディアですらヴィートが移動したのは見えなかった。気がつくまでヴィートは男の後ろにいて腕を取っていたのだ。「ふん、お前が目を離した瞬間にだよ」

そう言いながらヴィートは男の首に打撃を与えた。男はその衝撃で脳を揺さぶられ気を失い、地面に伏した。それを見ていた他の男

はヴィートの動きに驚き、背を向けて走り去ろうとした。しかしヴィートはそれを地面に落ちていた石を頭に投げつけ阻止する。

「おい、逃げるんならこの男も一緒に連れて行けよ。それで二度と俺様等の前に姿を現すんじゃねえぞ。分かったな！」

「はいっつー！」

男達は瞬時に返事すると、気絶した男を引っ張ってその場から逃げて行った。

男達がその場から消えたのを確認したヴィートはへたり込んでいた女性に近づく。それを見ていたリディアはまたいつもの女口説きが始まると思ったので、ヴィートを止めに行こうとした。しかし、ヴィートの行動はリディアの予想を裏切った。

ヴィートは掌で女性のほっぺを叩いたのだ。弾けた音が辺りを静寂に導く。

「馬鹿ヤロウっー！」

叩かれた女性は、放心状態だったがその声に驚きヴィートを見る。「てめえのやったことは犯罪だぞ！ てめえがどういう風に生きてきたかはしらねえが、クスリなんかに出すんじゃねえ！！ 逃げたクソヤロウ共が一番悪いがてめえはその次に悪い！」

ヴィートの恫喝が静寂に木霊する。女性はヴィートの言葉を聞き、その瞳から大粒の涙を流し始めた。

「うつ……ごめ……ごめんなさい」

その後女性は自ら警察に出頭した。

ヴィートとリディアは静かな公園に来ていた。この公園の中心にも小さな噴水があった。

「はあ……」

「どうしたの？ 大きなため息なんかついて」

「いや、また女の子を殴っちまったと思ってさ。もう二度と女の子には手をあげないつもりだったんだけど難しいな」

「……でもちよつと見直した」

「え？」

「ただのプレイボーイじゃないってのは分かった」

「リディアちゃん？」

「これで喧嘩早い性格とマシンガントクさえなんとかなったらなあ」

「リディアちゃん」

「ヴィートは肩を落とす。」

「でも、また今度こそちゃんとしたデートしよう」

「リ、リディアちゃん!!」

「ヴィートは笑顔になった。」

「よし、じゃあ俺様はその時までさらに男を磨いてやるぜ！ はっはっはっ!!」

「ヴィートは腰に手を当て高笑いする。」

「まったくすぐ調子に乗るんだから……まあいつか」

リディアとヴィートの仲が少しだけ深まった時、物陰に隠れて見ていた人が二人。

「どうやら悪い人ではなさそうですねティキさん」

「まあな」

「でもリディアさん取られそうですよ」

「まあな。……って別に俺はリディアのこと」

「そこまで言ってティキはリディアの方を見た。」

夕暮れの公園に陽は少しずつ影を落としていった。

A c t 4 8 : オームの弱点

翌朝、ティキとリディアはアンクレストに来ていた。ヴィートにオームから月のカケラを得る方法を聞くためだ。正直ティキは半信半疑ではあるが、実際に月のカケラを多く手にしていることと、昨日の出来事から虚偽をするような奴ではないと判断し、リディアと共にアンクレストに来ているのである。

「リディア。マジであいつは来るのか？」

「うん、方法だけ教えてくれればいいって言ったんだけど、実戦で見たほうが弱点も含めて月のカケラを得る方法も良く分かって聞かないから仕方なく。それに彼もアンクレストに用事があるみたいで…… ついでだつて」

「アンクレストに用事？ なんだまたオーム狩りか？」

「それが、そのことに関しては詳しく教えてくれなくて」

ティキとリディアが雑談しているとヴィートがやってきた。

「おーすつ！ おはつよー！」

ヴィートは持ち前の明るさをフルに発揮してあいさつをした。

「ほんとに来たよ。うるさい奴が……」

「やあやあやあ！ お待たせつ！ じゃあさつそく行こうぜ！」

ヴィートは朝一からテンションマックスで、元気が良い。

ヴィートはティキ達とは違い、口に呼吸器系の機器と眼前マスクをしていた。これは月の産物を持たない人間がアンクレストへと来る時の標準装備である。月の産物を持つものは生身でアンクレストへと来ても、月班症候群を発症しないが、持っていない人間は、呼吸により月のカケラの粒子を吸ってしまい月班症候群を発症してしまう。

専用の機器を使うことで極力、発症を抑える事は出来るが、10

0%ではなく稀に発症してしまう。つまり月の産物を持たない人間がアंकレストに来るということは、オーム以上に月班症候群のリスクを背負ってくることになるのである。故に、通常アंकレストに用事がある場合、月の産物を持つ者へ依頼することがほとんどである。（ただし、民間人で月の産物を持つ者は少なく、ほとんどが国の官僚クラスの仕官であるために、一般人が依頼することは困難を極める）

「およ？ もう一人の長髪君は？」

「あールクスなら別行動だよ。後で合流するってさ」

「ふーん、まあおめーには聞いてねえけどな」

ヴィートのその言葉にティキは力チンと来た。

「おめえなー……」

ティキがヴィートに掴みかかろうとした時、リディアが仲介に入る。

「はいはい、ケンカは止めてよね。それよりもヴィート昨日言ってた事は本当なんでしょうね？」

「安心しなよりディアちゃん。俺様は女の子に対しては嘘はつかないからさ。まあすぐに実戦で見せてあげるよ」

「ふん、実戦で見せるも何もそんな都合よくオームがほいほい出現したら苦労しねーよ」

「おめーは何も分かってねえな。そんな都合よくオームは出現するんだよ。ホラ見てみな」

そう言いながらヴィートは自分の背後を指差す。ティキとリディアがヴィートの背後を見ると、光が収束していく、そしてそれは徐々に形を成して行き、四足歩行の巨大な銀色の怪物になった。

「なっ……」

何度もオームを見ている為に見慣れているティキやリディアもこのオームの出現には驚く。無理も無い。オームは出現すると予言されて出てきたのだ。

「ちっ！ 俺様の苦手な四足歩行か。ってことはこいつは俺に反応

したってことだな」

「え？」

「はっ！ 意味が分からないって表情だな。いいぜ特別に説明してやるぜ」

ヴィートはそう言いながらオームのほうを見て構える。オームは大きな口を開け吼えたとヴィートの方へと突進してきた。そして間合いに入ったと見るや飛び跳ねて大きな爪でヴィートに襲い掛かる。ヴィートはそれを紙一重で避けると、その反動でオームの懷に拳をえぐり込んだ。その衝撃を受けオームは後ろに後退する。

「いいかオームってのは月のカケラの粒子で出来ている。そして月のカケラは人の心に呼応する。つまり、オームは人間が持つ負の感情に反応して出来た月の産物ってわけだ」

「負の感情？」

「そう、嫉妬、妬み、憎悪、悲愴、渴望、苦痛、狂気そして、恐怖。これらの感情を源にオームは創られる。故にオームは生まれた瞬間から好戦的であり、凶暴なんだ」

後ろに後退したオームは体制を整え再びヴィートに襲い掛かる。

ヴィートはそれを交わすとオームの後ろに回り込む。そして背後から背中に拳を付き降ろす。オームはその衝撃に耐え切れず、地面に叩きつけられる。

「そして、月のカケラの粒子が一つの所に集まるためには、結晶化した月のカケラが必要だ。故にオームの中には結晶化した月のカケラが必ず存在する。俺様達はそれを”コア”と呼んでいる」

ヴィートは地面に叩きつけられたまま悶絶しているオームの背中目掛けて拳を突き刺した。ヴィートの拳はオームの身体を貫き、銀色に輝く結晶体を取り出した。そしてそれをティキ達に見えるように持つ。

「コアを取り出されたオームは、収束力を失い再び粒子化する。これで月のカケラを手に入れ、尚且つオームを倒すことが出来る」

ヴィートの説明の通り、コアを取り出されたオームは再び粒子化

していった。ヴィートはリディアの元までやってくると月のカケラを手渡す。手渡された月のカケラは小さいが銀色の光を放っている。紛れもなくこの輝きは月のカケラのものである。

「よく分かったわ。でもならなせ必ずあるはずの月のカケラを取り出すのを失敗することがあるの？」

「オームを形作るコアの位置はオームによって違うんだ。場所を探ってる間にダメージを与えすぎて、倒してしまうことがある。そうなれば月のカケラは手に入らない。なかなか難しいんだぜ。常に動いている相手のどの場所に急所があるのか探るのは」

「でもあなたの使う技ならそれが可能ってことでしょ？」

「さすがリディアちゃん察しがいい。そう、俺様の使う古武術は相手の動きを見て相手の隙を見つけ攻撃すること得意とした武術。つまり、オームが自分の身体のどこを守っているかを探り当てるのは俺様にとっちゃ十八番ってわけさ」

「なるほど」

「言いたくはねえが、今回は俺様の心の恐怖に月のカケラの粒子が反応したんだな。俺様は四足歩行型は急所を読みにくいから苦手なんだ。……おっと、それから一つ言っておくが、負の感情が元になってるからと言って、なら恐怖を感じなくすればいいんじゃないかって考えるのはよせよ。俺様達は人形じゃあねえ。月のカケラは元来人間の心の深層心理を読み取る。負の感情を失くすってことは人間じゃなくなるのと同じだからな」

ティキはヴィートの言葉を聞いて思い出していた。かつて月の産物の秘密をアイシスから聞いた時にアイシスも同じようなことを言っていた。そしてそれは月の産物もオームも同じものだということを意味していた。

「まあ、オームから月のカケラを取り出す方法もといオームの弱点についてはこんなもんだな。後は月の産物を持ってるリディアちゃん達ならなんとでもなるだろ」

「ええ、ありがとう」

「いってことよ。またデートしてくれよなりディアちゃん。じゃあ、俺様は俺様の用事があるからそろそろいくぜ」

そう言つとヴィートは、走つてその場を後にした。ティキとリディアはヴィートの姿が見えなくなるまで見ていた。

「ったく、勝手な奴だぜ。それにしてもアंकレストでの奴の用事つてなんだ？」

「……もしかして彼の仕事に関連してるのかも」

「仕事？」

「うん、彼トレジャーハンターらしいの」

「トレジャーハンター？」

「うん、ほらアंकレストつて過去の文明の遺産つて結構多いじゃない？ ヴィマーナの技術も過去の遺産から得た技術をヒントに造られたつて聞いたことあるし、そういうのを発見するのが彼の仕事なんだと思う」

「そうか、まあオームから月の産物を得る方法つてのも分かったし、俺等は一旦戻るとするか？」

その時、ティキの背後から巨大な足音が聞こえた。それは確実にティキ達のほうへと向かつていた。それに気が付いたティキは後ろを振り返る。

「……どうやら、俺等の心にも反応したみたいだな。月のカケラの粒子が」

ティキとリディアは戦闘態勢を取る。

一方、ティキ達の元を離れたヴィートは、一人過去の遺物である建物の内部へと来ていた。そして、辺りをキョロキョロとしはじめた。すると奥の影から一人の男が現れた。

「フッフ……相変わらずの遅刻ですか？ ヴィートさん」

「おう！ 悪いいな。ちよつと用事があつてよ。まあ今からの働きでその分取り戻すから勘弁してくれよな。レティン」

「まああなたの遅刻はいつもですから。それよりもお願いしますね。あなたの働きには期待しているんですから……ね」

レティンと呼ばれた男は不適な笑みを浮かべていた。そして、二人は建物のさらに奥へと進んでいく。

Act 49：新しい月の産物

迫る足音に臨戦体勢を取るティキとリディア。

「ちようどいい。さつき教わったことを試すチャンスだ。リディア、手を出すなよ。ってもリディアは今、月の産物使えねえもんな」

月のカケラの粒子にオームの影が映り始める。その時ティキはある異変に気がついた。足音の数が通常よりも多い。そして徐々に見える影も多い。

「まさか……」

近くまで迫ってきたオームを見てティキとリディアは驚愕した。

オームは一体ではなかった。複数。その数、実に八体。二足歩行型。ゴリラタイプ。大きさ約2メートル50センチ。そんなオームが八体。

「おいおい……なんだこりや。こんなの初だぜ」

当然ティキとリディアにとっても、同時に複数のオームに遭遇するのは初めての経験である。そしてなにより致命的なのはティキにとって”複数”の敵を相手にするということ自体圧倒的に苦手ということであった。ティキは今までほとんど複数の敵を相手に戦うということをしたことがない。それはティキの戦闘スタイルつまり月の産物に起因する。ティキの月の産物フェンリアは大型の剣である。対一での戦闘に置いて一撃の破壊力が高い大型の剣は有利である。その耐久力ゆえに防御に転じることも出来、なおかつ隙を伺い強力な一撃を与えることが出来る。

大剣での唯一の弱点とも言えるその大きさ故の動きにくさは、通常の剣ではない月の産物という特性が解決している。ファンリアはその大きさを自由に変えることが可能である。故に敵の懷に飛び込んでから大剣に変え、ダメージを与えることも可能なのである。

しかしこれが複数の場合勝手が違ってくる。一撃の威力が大きいということは隙も大きくなるということ。対一の場合倒せば隙もないにも関係ないが、複数の場合、一体を倒しても他の敵がいるのですぐに体勢を整えなければいけない。しかしこれが実に困難である。例えば月の産物の大きさを変えたところで、初動が遅れるのは否めない。敵との戦闘に置いてコンマ一秒の遅れが命に関わる重大な結果に変わることもあるのだ。そしてそれが今まさに起こった。

オームの攻撃がティキとリディアを襲う。二人は攻撃を避ける為にそれぞれが別の方向へと飛ぶ。武器のないリディアの近くに移動しようとしたティキだが、その瞬間上からの新たな攻撃にさらに離れるしかなかった。そしてそれが致命的。オームにティキとリディアの間に入るだけのスペースをあけてしまったのだ。さらに状況は最悪。この時オームはティキの元に二体。リディアの元に六体と別れたのだ。武器を持たないリディアの元により多くのオームが向かったのだ。

「リディア。くそ」

ティキは自身の失態を悔いた。だが、悔いている暇はなかった。早急にオーム二体を倒しリディアの元へと向かわなければリディアが危ないのだ。

一方、六体のオームに囲まれたリディアは困惑していた。リディア自身も初であるオームが複数いる状況での戦闘。しかも月の産物が使えない状態である。正直、月の産物が使えない状況での戦闘ではリディアにはオームを倒す術などないだろう。つまりリディアに今、出来ることはオームの攻撃をひたすら避け続けることだけとなる。

だが、複数の戦闘に慣れていないリディアにとってオームの攻撃を完全に読みきることなど出来ず、さらにオームに一瞬の隙を突かれるのが現状である。オームの攻撃は容赦なくリディアに襲い掛か

る。リディアはダメージを喰らう覚悟を決めた。だが、聞こえてきたのはリディアの悲鳴ではなく、オームの悲鳴であった。リディアが声のするほうを見るとそこには驚くべき光景が広がっていた。

タツピーがオームの腕に噛み付いていたのだ。オームはタツピーを振り払うために腕を振る。

「タツピーー!!」

リディアは思わず声を上げた。タツピーはオームの腕から振り落とされ地面に叩き付けられる。だがそれでもタツピーは立ち上がり再びオームに噛み付く。何度も何度もそれを繰り返す。タツピーは見る見るボロボロになっていった。

「タツピーー逃げて!」

リディアがそう叫ぶのも無理はない。オームとタツピーの体格差を見てもタツピーがオームに適う道理などありはしない。このままではいずれ殺されるのは火を見るより明らかである。リディアはこの時、自分の無力さを感じていた。自分のことを必死に守ってくれるものが目の前にいながら自身は何も出来ない。その悔しさからリディアは手に持つ月の産物を必死に握りこみ、そして手からは出血をしている。

「お願い。逃げて……」

リディアは呟く。だがそんなリディアの願いは空しく届かずタツピーはひたすらオームへと向かっていく。もはやタツピーは瀕死の状態である。

「お願い。あたしの月の産物。発動して。……今、発動しなかったらまた大切なものを失う」

リディアの脳裏に過去の出来事が蘇る。

「もう二度と……もう二度と大切なものを失いたくない」

リディアはよりいっそう強く拳を握りこむ。

「発動しなさい!! ルナスペリア!!」

その瞬間、月の産物は強烈な銀色の光を放った。同時にタツピーも銀色の光を放ち始める。タツピーは光となって一瞬でリディアの

左腕に移動する。そして身体を変形させ始める。リディアはその光景を目に涙を浮かべながら、驚きの表情で見ている。タツピーの身体が変化を終了すると、銀色の光は落ち着きを取り戻す。そしてリディアは目にすることになる、タツピーと融合し新しい武器となった月の産物を。

「これは……」

それはリディアの左腕に巻きつく、矛のような武器。始めてみるその形状にリディアは戸惑いはしたが、すぐにその使い方を理解することになる。それはどこからともなく聞こえてくる声。やさしい声。新しい武器。その使い方をリディアの意識を通して伝える声。

リディアは涙を拭き、構えるとオームのほうに向きなおす。そして左腕を大きく振りかぶると、オームのほうに向けて振り下ろす。その瞬間、矛が延び始める。矛とリディアの腕とは鎖で繋がれている。矛は一直線にオームのほうへと向かう。そしてそのままオームの頭部を破壊する。破壊されたオームは月のカケラの粒子に変化する。一体のオームが破壊されたのを見て他のオームがリディアに襲い掛かる。リディアはオームの攻撃をかわしながら腕を捻る。

すると、リディアの意思に従うかのように矛は方向を変化させ背後からオームの頭を破壊した。さらに腕を捻ることなく矛は方向を変え、勢いも増し横に並んでいたオームの頭を貫き一気に三体を破壊した。破壊されたオームが月のカケラの粒子へと変化し、銀色の小さな光を放つ。それはさながら地上を煌く星のようだった。残る一体は動かないでいる。リディアは矛を一度腕へと戻した。

そして腕に戻った矛を見つめると右手で矛を撫でる。

「これがあたしの新しい武器。タツピーありがとう」

リディアは腕から再び矛を伸ばし、残り一体のオームを破壊した。

リディアが全てのオームを破壊し終わると、ほぼ同時にティキがリディアの元へとやってきた。

「よかった無事だったかりディア」

「うん、タツピーが助けてくれたの」

「タツピーが？」

そう言うとりディアはティキに新しい月の産物を見せる。

「これがタツピーなのか？」

「うん、タツピーはあたしの新しい月の産物だった。月の産物が発動しなかったのはルクスの言うとおり、あたしが二つの月の産物を持っていたからだだったみたいね」

「でもだったらなんで急に使えるようになったんだ？」

「それはたぶん……あたしの意味」

そこまで言っ तरीディアは言葉を止めた。あの時、リディアの脳裏をよぎったのは過去の出来事。つまりリディアの行動原理の源。その時の強い想いがタツピーと強く共鳴した結果が新しく変化した月の産物。それはリディアの意思一つで自由に攻撃方向、角度を変えられることができる。さらに矛盾の形状をした先端は一点集中の破壊力を秘め、脅威の貫通力を備えていた。ティキの持つ月の産物であるフェンリア。大型の剣に比べて中距離から長距離の攻撃が可能な変幻自在武器。

——それがリディアの新しい月の産物である。

ティキとリディアが全てのオームを破壊し終わった時、ティキ達の背後にある建物から大地を揺るがすほどの衝撃音が聞こえた。ティキとリディアはその音に驚き振り返る。そこはヴィートが入っていた建物。砂煙と月のカケラの粒子に混ざり、一遍の光が漏れる。聞いたことのない機械音を放ち、いくつかの光を放つ謎の物体それが徐々に姿を現す。ティキそしてリディアにとって、いや人類にとってその存在は、これからの未来に幾億もの災いをもたらすことに

なる。

Act 50：古代兵器

新しい武器を手にしたリディア達の眼前に現れたのは、謎の巨大な物体。それは黒く淡い光沢を放ち、所々剥げて銀色の素体を現している。眩しいほどの光体をいくつか身に着け、異様な機械音を発するそれはティキ達にとって初めての遭遇。

「なんだこれは？ オーム？」

「違うわ。これは、オームなんかじゃない。オームのように生物的じゃない。もつと機械的な……」

謎の物体は機械音だけを放ち、ティキ達との間合いをゆつくりと詰めてくる。ティキ達はその異様な姿に反射的に迎撃体勢を取る。謎の物体は、突如右腕をティキ達のほうへと向ける。その右腕は大砲のような形をしている。そして、その右腕から異様な音が発生する。ティキはその音に似た音を過去に聞いたことがある。それはあのデイスルパス国に現れた巨大オーム。あのオームが攻撃時に発する音に似ていた。そしてその過去の経験がティキに直感呼び起こす。

「まさか？ ……つ。リディア伏せる！！」

ティキは突然リディアに叫ぶと、自身も照準から外れるように地面へと伏せる。その瞬間右腕から放たれたのは、光り輝く巨大な弾。それはティキ達を越えはるか先で轟音と共に炸裂した。炸裂した光は一瞬にしてその場にあった月のカケラの粒子を吹き飛ばし、さらに地面に大きなクレーターを作り上げると、巨大なキノコ雲を作り出した。一瞬の的確な判断で難を逃れたティキは驚く。それはかつて戦った巨大オームの国を丸ごと破壊した攻撃に匹敵するほどの破壊力だったからだ。

それを少し離れた所で見ている者が一人。

「くくく……素晴らしい。これが古代兵器の力。なにもかもが想像以上。この力を使えば世界を手中に納めることなど造作もない」

一方でティキ達は立ち上がると、謎の物体のほうを向く。

「くそ、あれがなんだかわからねえが、このままほつとくのは良くねえってのは分かるぜ」

「うん、あんな破壊力を持つ武器なんて初めて見た。あれがなんであれ、人類に脅威をもたらすモノだってのは分かる」

ティキとリディアは月の産物を発動させると武器を構える。

「俺たちであれを食い止めるぞ。リディア」

「オッケー」

そう言うのと、ティキとリディアは事前に申し合わせていたかのようには左右に別れる。謎の物体の左右から同時に攻める算段だ。まずは左側に向かったリディアが新しい月の産物の攻撃で中距離から敵をかく乱し、翻弄する。矛を自在な距離まで伸ばし、さらに方向も自在に操れるリディアの武器は敵をかく乱するには最適だった。さらにティキが、敵の死角を攻め徐々に距離を詰めていく。この辺りの動きは、戦闘の基礎を叩き込まれているティキが適任である。二人の協力により敵はなすすべなくティキは敵との間合いにまで距離を詰めた。そして、飛び上がると月の産物を振り下ろし、敵の身体に一太刀を加えた。

火花と共に金属音が辺りに巻き散らかされる。ティキはその状況に驚き、地面に足がつくなりすぐに後ろに引き距離を離れた。ティキは沈黙した。あの巨大オームをも切り裂いたティキの月の産物フエンリア。それがあの謎の物体に与えたダメージは僅かな軋みと剥げ。ほとんど無傷に近い。

もちろんティキが巨大オームを倒した時のように、超巨大な剣で

攻撃していたならば結果は違っていただろう。しかし、先の戦いでも分かるようにあれほどのエネルギーを纏った攻撃はティキの精神と肉体に多大な負荷をかける。あの後ティキが数日に渡り目覚めなかったのは、それらが原因である。もちろん、その力を自在に操ることが出来るようになることが今後ティキがさらに強くなる為の課題でもあるのだが。

とにかく、ティキの攻撃は謎の物体には通じなかった。破壊力では明らかにリディアの月の産物に勝るティキの月の産物でダメージを与えられなかったのは、リディアの月の産物でもダメージを与えられないことを意味する。二人はなすすべなく沈黙したのだ。

だが二人の静止を敵が待つわけもなく、二人に謎の物体からの攻撃が開始される。両腕から放たれる散弾銃のようなマシンガンのようなもの。二人は攻撃を避けるのに精一杯で回避しながら作戦を得るのはなかなかの難関であった。だがそれでも行く。一度が駄目なら二度、三度攻撃を加えるティキ達。その度に放たれる火花は戦闘の激化を意味していた。しかしティキ達の攻撃は空しく、敵にダメージを与えることはできずにいた。

「くそ、なんて硬いやつだ。なんとかならねえのか？」

「そんな攻撃じゃ無駄ですよティキさん」

突如ティキの耳に入る聞き覚えのある声。上空から聞こえる切り裂き音。ティキがその姿を確認する為に声のする上空を見上げた瞬間。激しい衝撃音と共にルクスの月の産物による攻撃が敵の頭に炸裂した。ルクスの月の産物の超高高度からの攻撃、星の重力と自身の体重、落下の速度、月の産物の力。それらすべてが重なり合った通常攻撃の何倍もの威力がある攻撃。

これにはさすがに頑丈な敵も動きを止めざるを得なかった。動きを止めた謎の物体からは煙が上がっている。

「やるじゃねえかルクス」

「……」

ルクスは沈黙している。

「どうしたんだ？」

ジツと謎の物体を見つめるルクスにティキは聞く。

「いえ、まさか本当にコレが存在しているなんて思わなかったものでして」

「ルクス!!」

リディアもルクスの場所に寄って来る。

「ルクスこれ何なのか知っているのか？」

「ええ、僕が用事で忙しかったのはコイツの調査依頼が国からあったからなんですよ」

「なんなんだよコイツは」

ルクスは一瞬間を貯める。

「古代兵器。800年前の戦争で実践投入された”リビディング・ギア”と呼ばれる所謂戦闘マシンです」

「古代……兵器？」

ティキとリディアは同時に同じ言葉を発音した。

「ええ、現在で言うところの月の産物に匹敵するほどの力を持つとされた世界に五体存在する機体です。800年前の戦争では脅威とされ、このギアの奪い合いも国通しであつたようです」

「なんでそんなものがここにあるの？」

「ウオーターリファリンの下はかつて軍事施設ですからね。昔からここにこのギアがあることは資料に残ってます。それよりも……」

ルクスは静止しているギアを見つめる。

「それよりも、800年も前の物がどうして動いているのか……それにギアを動かすためには誰かが搭乗して操らなければならないんです」

「え？　ってことは」

「ええ、あのギアには誰かが乗っています」

ルクスの言葉にティキとリディアはギアを見る。ギアはルクスの攻撃の後、煙を出したまま停止している。

「ところで、ヴィートさんは一緒じゃないんですか？」

「ああ、あいつならなんか用事があるつつてあの建物の中へと入っていったよ」

そう言いながらティキはギアが出てきた建物を指差す。

「……あそこに行つたんですか？」

「なんだよ？　なんかあるのか？」

「あそこは軍事施設の中核。オペレーションセンターです。あの地下にギアは収納されていたはずなんです。ティキさん、リディアさん、ヴィートさんの用事って何か聞きました？」

「いや、聞いてないよ。なんの用事が言うことなく行っちゃったかな」

「でもあたしたちは彼の仕事に関係してるんじゃないかって」

「彼の仕事？」

「うん、彼トレジャーハンターなの」

「トレジャーハンター？　そうか、ならば辻褄が合いそうです」

「え？」

「おそらくあのギアを発見したのは彼でしょう。ギアの元にたどり着くにはいくつもの認証をクリアしなければ駄目なんです、トレジャーハンターならその抜け方もある程度理解しているはずですからね。彼の用事とはおそらくこのギアの発掘」

その時、煙を上げているギアの上部が突然、煙を激しく噴出した。音を発しながら気体を噴出した後、何かが開いた音がした。そして徐々に煙が晴れていき、ギアの中があらわとなる。

そしてティキ達が見たのは、力がなく焦点の合っていない目をしたヴィートだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9168h/>

-月のカケラ-

2011年11月27日21時45分発行